

# 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17

## 平成12年度発掘調査報告 (第1分冊)

平成13年3月

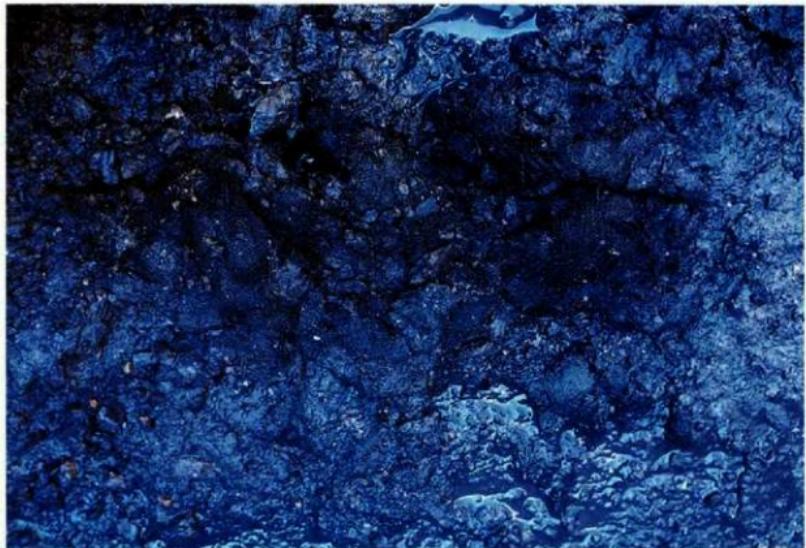
鎌倉市教育委員会

# 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17

平成12年度発掘調査報告  
(第1分冊)

平成13年3月

鎌倉市教育委員会



政所跡



米町遺跡

## ごあいさつ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ6割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成11年度から12年度にかけて国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅・店舗併用住宅等の建設に伴う発掘調査の記録として17ヶ所の調査成果を掲載しています。特に東勝寺跡（地点⑧）では葛西ヶ谷内の北側の谷戸内において礎石建物跡を発見することができました。また大倉幕府周辺遺跡群（地点⑯）では滑川の旧流路が発見されるなど大きな成果をあげることができ、鎌倉の往時の姿の解明を一步進めることができました。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申しあげます。

平成13年3月31日

鎌倉市教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は平成12年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係わる発掘調査報告書（第1分冊及び第2分冊）である。
- 2 本書所収の調査地点及び所収分冊は別表・図及び目次のとおりである。
- 3 現地調査及び出土資料の整理は鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
- 4 出土遺物及び写真・図面等の資料は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
- 5 各調査内容の詳細は、各々の報文を参照されたい。

# 総 目 次

## (第1分冊)

ごあいさつ	1
例 言	II
平成12年度調査の概観	VI
1 井ヶ谷遺跡 (No.249) 材木座四丁目336番7地点	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	4
第2章 調査経過とグリッド配置・基本土層	6
第3章 検出遺構と出土遺物	8
第4章 まとめ	24
2 長谷小路周辺遺跡 (No.236) 由比ガ浜三丁目254番15外地点	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	40
第2章 調査の経過	40
第3章 検出した遺構	42
第4章 出土した遺物	50
第5章 まとめ	50
3 若宮大路周辺遺跡群 (No.242) 小町二丁目402番5地点	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	102
第2章 調査の経緯と経過	107
第3章 発見された遺構と遺物	113
第4章 まとめ	121
4 政所跡 (No.247) 雪ノ下三丁目989番4地点	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	135
第2章 調査の経緯と成果の概要	137
第3章 発見された遺構と遺物	140
第4章 分析	169
第5章 調査成果のまとめ	179
5 下馬周辺遺跡 (No.200) 由比ガ浜二丁目110番5地点	
第1章 調査の概要	207
第2章 検出した遺構	209
第3章 出土遺物	216
第4章 まとめ	224
6 米町遺跡 (No.261) 大町二丁目2313番15地点	
第1章 遺跡概観	243
第2章 検出した遺構と遺物	248

第3章 まとめ	271
<b>7 理智光寺跡 (No.265) 二階堂字理智光寺750番1地点</b>	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	286
第2章 調査の経過	291
第3章 発見された遺構と遺物	292
第4章 まとめ	300
 (第2分冊)	
<b>8 東勝寺跡 (No.246) 小町三丁目523番14地点</b>	
第1章 環境と立地	4
第2章 調査の概要	8
第3章 発見した遺構	10
第4章 出土した遺物	14
第5章 調査成果	16
<b>9 玉縄城跡 (No.63) 城廻字中村473番8地点</b>	
第1章 玉縄城と調査地点	28
第2章 調査について	30
第3章 検出遺構	31
第4章 出土遺物	35
第5章 まとめ	36
<b>10 笹目遺跡 (No.207) 笹目町285番1外地点</b>	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	50
第2章 調査の概要	52
第3章 確認された遺構と遺物	55
第4章 まとめ	62
<b>11 笹目遺跡 (No.286) 笹目町286番1外地点</b>	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	77
第2章 調査の経緯と堆積土層	78
第3章 確認された遺構と遺物	80
第4章 まとめ	85
<b>12 米町遺跡 (No.245) 大町二丁目2308番1地点</b>	
第1章 遺跡外観	98
第2章 検出遺構と出土遺物	101
第3章 まとめ	110

<b>13 材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座六丁目760番1地点</b>	
第1章 歴史的環境.....	122
第2章 調査について.....	124
第3章 検出遺構.....	126
第4章 出土遺物.....	131
第5章 まとめ.....	138
付編.....	149
<b>14 大倉幕府周辺遺跡群 (No.49) 雪ノ下字大倉耕地562番16地点</b>	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境.....	165
第2章 調査の経過と層序.....	165
第3章 検出した遺構・遺物.....	170
第4章 まとめ.....	197
<b>15 大倉幕府周辺遺跡群 (No.49) 雪ノ下四丁目580番10地点</b>	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境.....	220
第2章 調査の概要.....	222
第3章 検出遺構と出土遺物.....	224
第4章 まとめ.....	266
<b>16 武藏大路周辺遺跡 (No.194) 扇ガ谷三丁目397番地点</b>	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境.....	280
第5章 調査の経緯.....	284
第6章 発見された遺構と遺物.....	286
第4章 調査成果のまとめ.....	303
<b>17 台山遺跡 (No.29) 台字西ノ台1718番3地点</b>	
第1章 遺跡の諸環境.....	317
第2章 調査の概要.....	320
第3章 調査成果.....	322
第4章 まとめ.....	328

## 平成12年度調査の概観

平成12年度の緊急調査実施件数は、前年度からの継続調査1件を含む25件であり、調査対象面積は1,588.62m<sup>2</sup>であった。これを前年度の20件、1,585.62m<sup>2</sup>と比較すると件数が前年度より5件増加して1.25倍となっているものの、面積のうえでは若干の増加にとどまっている。このことは、個々の発掘調査がいずれも小規模な調査である傾向を顕著に示しているものといえよう。

調査原因の内訳は、個人専用住宅の建設に関するものが23件、自己用店舗併用住宅の建設に関するものが2件となっている。例年以上に店舗併用住宅の建設に伴う調査が減少していることからも未だ景気が低迷状態にあることがうかがわれる。反面、低金利や住宅の取得にともなう税制上の優遇措置が実施されていることもあって、個人専用住宅の建設に伴う発掘調査は増加するところとなった。本年度も耐震性等を考慮した鋼管杭等の打設や地盤改良工事を採るものが20件みられた。少なくとも本市においては、ここ数年こうした杭打ち工法等が確実に発掘調査実施の主体的要因となった感があり、こうした傾向は今後もさらに増加していくものと予測される。また、本年度も地下室の建設に伴う発掘調査が1件みられた。

本年度は大倉幕府周辺遺跡群（地点2）において鎌倉時代初期の掘立柱建物跡等によって構成される遺構群が発見され、調査地点の西側に位置する大倉幕府との関係が色濃く想定されたことや、名越ヶ谷遺跡（地点9）において木組みの護岸施設をもつ逆川の旧河川跡が発見されたことなどが特記事項としてあげられる。以下、各地点の調査に至る経過と調査成果の概要を紹介する。

### 1 台山遺跡（No.29）

台山遺跡は北鎌倉駅の西側一帯に広がる丘陵上に位置し、いわゆる台峯とよばれる丘陵の北東側にあたる標高50m程の緩斜面に展開する弥生時代から奈良・平安時代にかけての集落遺跡である。平成12年1月に住宅の基礎構造を鋼管杭打ちの工法とする個人専用住宅の建設について事前相談があり、確認調査を実施したところ、地表下80cm以下に遺物包含層が確認され、現計画どおりの建設工事による遺構の損傷が避けられないものと判断された。これにより発掘調査の実施について協議を行い、文化財保護法に基づく届出手続き等を行い、調査の実施方法についての協議が整った後、平成12年3月27日から4月26日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、具体的な遺構は古墳時代後期の柱穴が2基確認されただけであったが現地表下80cm以下に厚く堆積する弥生時代から中世までの遺物包含層からは13世紀後半から14世紀前半のかわらけ、青磁、常滑、古墳時代中期の土師器高杯、弥生時代中期後半の壺型土器（宮ノ台式）等が発見され、台山遺跡の豊かな遺跡の一端をうかがうことができた。

### 2 大倉幕府周辺遺跡群（No.49）

市内東部の二階堂に位置するが、この一帯は地元で東御門と呼ばれており、調査地の南西側には鎌倉時代初期の幕府跡である大倉幕府跡が所在している。また、調査地の東側には北から南にのびる標高50mほどの丘陵があり、その先端部には荏柄天神社が鎮座している。平成11年11月に住宅の基礎構造を鋼管杭打ちの工法とする個人専用住宅の建設について事前相談があり、確認調査を実施したところ、地表下80cm以下に中世遺物包含層及び遺構面が確認され、現計画どおりの建設工事による遺構の損傷が避

けられないものと判断された。これにより発掘調査の実施について数回の協議を重ね、文化財保護法に基づく届出手続き等を行い、調査の実施方法についての協議が整った後、平成12年4月1日から9月2日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、鎌倉時代初期の掘立柱建物跡等によって構成される遺構群が発見され、調査地点の西側に位置する大倉幕府との関係が色濃く想定された。

### 3 大倉幕府跡（No.253）

市街地の中心部からやや東よりにあたる雪ノ下三丁目の県道金沢鎌倉線の北側に面した商業地域の一角に位置する。平成11年10月に建物の基礎構造を杭打ちの工法とする自己用店舗併用住宅の建設について事前相談があり、既存建物の解体作業に並行して確認調査を実施したところ、地表下50cm以下に中世遺物包含層及び遺構面が確認され、現計画どおりの建設工事による遺構の損傷が避けられないものと判断された。これにより発掘調査の実施について協議を重ね、文化財保護法に基づく届出手続き等を行い、調査の実施方法についての協議が整った後、平成12年4月19日から5月23日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、調査面積が30m<sup>2</sup>と狭小であったにもかかわらず、中世の時期の東西方向の道路状遺構等が発見され、当該地が鎌倉時代の早い時期から六浦道沿いに展開した場所であったことが明らかとなった。

### 4 下馬周辺遺跡（No.200）

若宮大路の下馬四ツ角の交差点から長谷觀音や大仏方面に向かう県道鎌倉葉山線の六地蔵交差点の南側に所在する。平成12年5月に当該地において鋼管杭打ち工事が実施されている状況が確認されたため、工事関係者に事情を確認したところ、建築確認申請の手続き後の工法変更により杭打ちの基礎構造が採られ施工に至ったとのことであった。当該地における同種の工事内容では埋蔵文化財への影響が不可避であると考えらることから、急速、神奈川県教育庁生涯学習文化財課の担当者による現地確認を得て今後の対応策について指導を求めたところ、早急に確認調査を実施し埋蔵文化財の存在する深度及び現に損壊を受けている埋蔵文化財の状況を確実に把握したうえでさらなる対応を検討すべきとの指示を得た。これにより5月24日と25日の両日、確認調査を実施し、現地表下130cm以下に埋蔵文化財の存在を確認するに至った。このため建築主と数回にわたる協議を行うとともに、文化財保護法に基づく届出手続き等を行い、調査の実施方法についての協議が整った後、平成12年6月14日から8月17日まで発掘調査を実施した。

調査は発掘調査による発生土を敷地内で処理する必要から、平面的に必ずしも十分な広さを確保しながら調査を実施することができなかったが、方形竪穴建築址等の遺構が発見され貴重な成果をあげるところとなった。

### 5 今小路西遺跡（No.201）

市立御成小学校の南側に所在する鎌倉市福祉センターの南西側に面した場所に位置する。平成12年4月に住宅の基礎構造を鋼管杭打ちの工法とする個人専用住宅の建設について事前相談があり、確認調査を実施したところ、現地表下120cm以下に中世遺物包含層及び遺構面が確認され、現計画どおりの建設工事による遺構の損傷が避けられないものと判断された。これにより発掘調査の実施を前提とした協議を経て、文化財保護法に基づく届出手続きをを行い、現地調査の実施方法に関する協議が整った後、

市内中心部から東側の逗子方面に向かう県道の北側、名越四ツ角から名越ヶ谷と呼ばれる谷戸の入口近くに位置する。平成12年4月に個人専用住宅建設の事前相談があり、住宅の基礎を杭構造とする計画であった。本調査地点の周辺では以前にも住宅の建設とともに寺院の一部と見られる礎石建物跡が発見されていることから、当該地においても具体的な埋蔵文化財の存在が充分異に予想されることから、確認調査を実施したところ地表下65cm以下に遺構面が確認された。このため、設計変更を含め、事業者と協議を行ったが設計変更等が不可能とのことであり、工事の実施により埋蔵文化財の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法に基づく手続きを行い、平成12年8月1日から9月21日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、調査区の東側部分において、現在も調査地の東側を流れる逆川の旧河川跡が発見された。この河川跡は上層では破碎した泥岩を積み上げた構造で護岸を形成していたことが明かになった。さらに時期の古くなる下層では木組の構造による護岸施設も発見された。なお調査区の西側や北側では部分的に中世以前の土器類がかなり摩滅した状態ながらもまとまって出土しており、かつて本調査地点を含む周辺一帯にも当該期の遺構が存在していた様子をうかがい知ることができた。これらの遺構の多くは中世に遺構が形成される際に消滅したものと推定された。

## 10 今小路西遺跡（No.201）

前出の調査地点4と県道鎌倉葉山線の六地蔵交差点を隔てて、ほぼ南北に向かい合う位置関係に所在する。当該地において平成12年6月に店舗併用住宅建設の事前相談があり、基礎の構造を深基礎として現地表下210cmまでとするものであった。このため工事の実施により埋蔵文化財への影響が避けられないものと判断されたため確認調査を実施したところ、現地表下50cm以下に遺構面が確認された。発掘調査の実施を前提とした事業者との協議では、建築が計画されている建物の用途が店舗併用住宅であることから、当初は延べ床面積（206.13m<sup>2</sup>）を事業用部分（31.10m<sup>2</sup>：15%）と個人専用住宅部分（175.03m<sup>2</sup>：85%）それぞれの面積の比率で区分し、前者については事業者の経費負担によって民間調査團によって発掘調査を実施し、後者については国庫補助事業の市内遺跡発掘調査として市教育委員会委員会が発掘調査を実施する方向で協議を開始した。ところが調査対象面積が40m<sup>2</sup>と確定した時点で、先の示した事業用部分の割合が6m<sup>2</sup>、個人専用住宅部分の割合が34m<sup>2</sup>となり、この比率を本地点の発掘調査に必要な日数に換算した場合でも、前者が3日、後者が12日となるため、本地点の発掘調査を民間調査團と市教育委員会の二者による発掘調査として実施することが必ずしも効率的ではないものと考えられた。このため本件建設工事が個人・零細事業者による事業と認められるものであつてから、県教育委員会生涯学習文化財課との協議を経て、発掘調査を市教育委員会の国庫補助事業市内遺跡発掘調査に一本化して実施し、建築主からは全調査経費の約15%を超えない範囲の経費負担に相当する作業員の労働力を現物提供のかたちで協力を得ることとした。これらの協議が合意に達するまでに一定の時間を要することとなったが、文化財保護法に基づく届出手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成12年8月17日から8月31日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、狭小な調査面積にもかかわらず、方形堅穴建築址等の遺構が発見された。

## 11 水道山遺跡（No.20）

市域の北部に位置し、標高が最も高い地点で50m程の台四丁目の丘陵部の西側裾にあたる。本調査地

平成12年6月27日から7月27日までの約1ヶ月間発掘調査を実施した。

調査は湧水に悩まされながら実施することを余儀なくされたが、おおむね13～14世紀代の井戸、建物跡などの遺構群が発見された。なお近隣の調査実施地点ではこれまでに中世以前に遡る遺構・遺物が比較的多く発見されているが、本調査地点では当該期の明確な遺構等を確認するには至っていない。

## 6 佐助ヶ谷遺跡（No.245）

市内中心部の西側にあたる佐助ヶ谷の谷戸内に位置する。平成12年7月に当該地において鋼管杭打ち工事の準備が行われている状況が確認されたため、工事関係者に事情を確認したところ、建築確認申請の手続き後の工法変更により杭打ちの基礎構造が採られ施工に至ったとのことであった。当該地における同種の工事内容では埋蔵文化財への影響が不可避であると考えらることから、急遽、7月13日に確認調査を実施し埋蔵文化財の存在する深度を把握し、対応を検討すべきとの指示を得た。確認調査の結果、現地表下60cm以下に埋蔵文化財の存在を確認するに至った。この後、文化財保護法の規定に基づく手続き等を経て、発掘調査の実施方法に関する協議が整った後、平成12年7月19日から7月31日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、調査区内の西側部分では14世紀後半頃の常滑窯産の大甕を据えた遺構等が発見された。

## 7 東勝寺跡（No.246）

小町三丁目の葛西ヶ谷にのうち、もっとも北側の谷戸の中に位置する。平成12年6月に地下室の築造を含む個人専用住宅の建設計画について事前相談がなされた。当該地は前年に宅地造成によって作られた住宅地であり、その宅地造成工事の際にも各種埋設管が敷設される道路部分を対象に発掘調査が実施されており、今回の住宅建設工事による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断された。このため工事の実施による埋蔵文化財の損傷が避けられないものと判断して、建築主と数回にわたって建設工事の実施にともなう発掘調査の実施に向けた協議を行い、文化財保護法に基づく手続きを行って、調査の実施方法等が合意に達した平成12年7月27日から8月19日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、破碎泥岩によって地形を行った良好な遺構面が数時期にわたりて確認され、部分的には礎石建物跡が発見されるなど東勝寺跡の全容解明を進めるための手がかりを得ることができた。

## 8 武藏大路周辺遺跡（No.194）

平成12年5月に個人専用住宅建設の事前相談があり、基礎工事の工法を鋼管杭の打設による計画であった。確認調査を実施したところ、現地表下40cm以下に中世の遺構面が確認された。これにより事業者と発掘調査の実施に向けた協議を重ね、文化財保護法の手続きを行うとともに、調査の実施方法等について合意に達した後、平成12年8月3日から11月30日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、調査区の東側では基壇状の建物跡が発見され、建物跡の床面上にあたる場所ではかわらけを集中的に廃棄した状況が確認され祭祀的な行為の痕跡が確認された。

本調査地点では中世の地山面が現地表下2m50cm程の深さの位置に存在しており、おおむね13世紀の前半とされる建物跡等の遺構群はこの中世地山面上で発見された。

## 9 名越ヶ谷遺跡（No.231）

点の南に隣接する敷地においては、かつて企業の独身寮建設の際、弥生時代を中心とする20数軒の竪穴住居跡が見されている。平成12年7月に個人専用住宅建設について事前相談があり、住宅の基礎を鋼管杭の構造とする計画が建築主から示されたため、確認調査を実施したところ、現地表下120cm以下に遺構面が確認された。このため事業者と協議したところ、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法に基づく手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成12年9月4日から10月19日まで発掘調査を実施した。

発掘調査では本調査地点北東角では掘削深度の範囲内で調査地点の北側から延びる岩盤が発見されたため、この岩盤が調査区内の北東側から南西側に向かって落ち込むことを予想しながら、遺物包含層の掘り下げを進め遺構の確認作業を行ったところ、竪穴住居跡等の具体的な遺構の発見には至らなかった。しかしながら、本調査地点の遺物包含層からは少量の縄文土器片をも含むものの、おおむね弥生時代後期から古墳時代中期にかけての時期に属すると考えられる土器類が多量に出土し、それらの時代に集落が営まれていた区域の縁辺にあたる窪地状の地点に土器類の集中的な廃棄がされていた様子が明らかになった。

## 12 長谷小路周辺遺跡（No.201）

市内中心部の南西にあたる長谷一丁目に所在し、県道の北側に位置する。平成12年8月に個人専用住宅建設の事前相談があり、建築計画において住宅の基礎を杭構造とする計画であったため、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断された。このため確認調査を実施したところ、地表下120cm以下に具体的な理蔵文化財が確認された。文化財保護法に基づく手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成12年10月10日から11月10日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、おおむね14世紀代に属すると考えられる数棟の方形竪穴建築址が発見された。

## 13 北条小町邸跡（No.282）

市内中心部の東側を南北方向にはしる小町大路の西側に位置し、調査地点のすぐ東側は小町大路から東勝寺跡へ通じる路地の曲がり角がある。平成12年9月に当該地において鋼管杭打ち工事が実施されている状況が確認されたため、工事関係者に事情を確認したところ、建築確認申請の手続き後の工法変更により杭打ちの基礎構造が採られ施工に至ったとのことであった。当該地における同種の工事内容では埋蔵文化財への影響が不可避であると考えることから、急遽、神奈川県教育庁生涯学習文化財課の担当者による現地確認を得て今後の対応策について指導を求めたところ、早急に確認調査を実施し埋蔵文化財の存在する深度及び現に損壊を受けている埋蔵文化財の状況を確実に把握したうえでさらなる対応を検討すべきとの指示を得た。これにより9月28日から10月2日にかけて、確認調査を実施し、現地表下120cm以下に小町大路の西側側溝跡と見られる具体的な遺構の存在を確認するに至った。このため建築主と数回にわたる協議を行うとともに、文化財保護法に基づく届出手続き等を行い、調査の実施方法についての協議が整った後、平成12年10月23日から11月30日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、調査区の東側、現在の小町大路に面する部分では数口の柱穴が確認されるような閑散とした遺構の状況であったが、調査区の西側では小町大路の西側側溝の東側の木組施設が発見された。さらに当調査地点の成果として特筆されることとして、層位的に見て中世以前の時期にまで遡る可能性のある溝ないしは堀状の遺構が調査区の北東から南西の方向に存在していることが確認されたことをあげ

ることができる。

#### 14 浄妙寺旧境内遺跡（No.408）

市内東部に所在する杉本寺のやや東よりに位置し、北側の丘陵は杉本城跡にある。平成12年7月に個人専用住宅建設の事前相談があり、基礎の構築にあたり表層の地盤改良を実施する計画であったため、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断された。このため確認調査を実施したところ、地表下60cm以下に具体的な埋蔵文化財が確認された。このため事業者との協議を経て、文化財保護法に基づく届出手続きをを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成12年10月31日から11月9日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、北側から南に向かって張り出す岩盤上にはほぼ東西方向の軸線を有する山裾の溝跡や井戸跡等が発見された。

#### 15 材木座町屋遺跡（No.261）

市内の南東部にあたる材木座四丁目に位置し、周辺には日蓮宗寺院の実相寺が存する。当該地は材木座の海岸線から約500m内陸に入った砂丘上にあたる。平成12年9月に個人専用住宅建設の事前相談があり、住宅の基礎を杭構造とする計画であったため、工事の実施による埋蔵文化財の損傷が避けられないものと判断された。このため確認調査を実施したところ地表下50cm以下に具体的な埋蔵文化財が確認された。このため事業者と協議を行ったところ、海岸地帯に近い立地で地盤が軟弱であると考えられることから、当初の計画どおりに鋼管杭打ち工事を実施したいという意向が示された。このため工事の実施による遺構の損傷は避けられないものと判断されたため、文化財保護法に基づく届出手続きをを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成12年11月9日から12月15日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀から14世紀代に構築された数棟の方形竪穴建築址が発見された。さらに注目される成果として、方形竪穴建築址の廃絶後にこの遺構が埋立てられる途中の段階で人頭大の石を $2 \times 3$ m程度の範囲に敷き詰め、その石の上から獸骨、イルカやクジラなどの大型哺乳類の骨、さらに貝類等が焼けた状態で発見された点を指摘することができる。当時の人の食生活に関する遺構であるのか、あるいはそれらの骨類を焼くことに食用以外の意図があったか推測する可能性をもつ特徴的な遺構であった。

#### 16 笹目遺跡（No.207）

市内中心部のやや西よりにあたる笹目町に所在し、県道鎌倉葉山線から北に約200m入った場所に位置する。平成12年8月に個人専用住宅建設の事前相談があり、住宅の基礎を杭構造とする計画であったため、工事の実施による埋蔵文化財の損傷が避けられないものと判断された。このため確認調査を実施したところ、地表下60cm以下に具体的な埋蔵文化財が確認された。このため事業者と協議を実施したが、当該地の地質が砂質であるため、予定どおり鋼管杭打ちの計画に変更の余地がないとの意向が示された。このため工事による遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法に基づく手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成12年11月9日から12月8日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、砂丘上に営まれたおむね13世紀後半の時期のものとみられる方形竪穴建築址や東西南向の溝跡等の遺構が発見された。

#### 17 龜谷山王堂跡（No.185）

市内中心部の北側にあたり国指定史跡仮社坂の尾根を一つ隔てた東側の谷戸のほぼ中央部に位置する。平成12年10月に個人専用住宅建設の事前相談があり、敷地の北側に接する現況の道路面よりも約2m高い地盤を道路と同じ高さにまで削平し、さらに住宅の基礎を鋼管杭の構造とする計画が事業者から示された。当該工事の実施による埋蔵文化財の損傷が避けられないものと判断されたため、確認調査を実施したところ、接道する道路面から200cm以下の深度に埋蔵文化財の存在が確認された。このことから工事着手前の発掘調査に実施に向けた協議を事業者との間で開始し、文化財保護法に基づく手続きを行い、調査の実施方法等の協議が整った後、平成12年12月11日から12月25日まで発掘調査を実施した。

調査は事業者の協力によって設置された山留めの範囲内で実施することとなったが、発掘調査によって発生する残土を敷地内で処理する必要から、残土の置き場所の確保とする関係上、12mの範囲に限定して実施することとなった。また当該地は谷戸の内部という立地から湧水が非常に多く、砂質土によって遺構面や遺物包含層が構成されていることから調査は難航を極め、面的に確認した遺構が掘削の途中で流失してしまったり、設置した山留めの下層にある砂質土が湧水によって崩壊する状況となつたため、調査の安全を勘案して層位的な遺構の把握を主眼において実施した。

## 18 華光院跡やぐら群（No.101）

市内中心部の扇ガ谷二丁目に位置している。本調査地点のすぐ西側には扇川が北から南に向かって流れている。平成12年11月に既存の個人専用住宅の東側に隣接する崖面崩落し、崖下の住宅が危険にさらされる事態となつたため、崖面の一部を削り、あわせて落石防止網を設置する防災工事について事前相談がなされた。崩落地点の直下にはやぐらが1基存在しており、当該工事の実施後はやぐらを埋め立ててしまう工事の計画であったため発掘調査の実施による記録保存の措置が事業者との協議で決定したため、文化財保護法に基づく届出手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成12年12月21日から年末年始の休止期間をはさんで平成13年1月18日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、やぐらは床面が比較的良好に遺存しており、床面の中央部には深さ10cmの円形の穴が掘られている状況等が確認された。だがしかし、この穴の中からは礫石経等の遺物を発見することはできなかった。

## 19 能藏寺跡（No.314）

市内の南東部にあたる材木座二丁目に位置し、調査地点の東側には日蓮宗寺院の長勝寺が存する。平成12年12月に個人専用住宅建設の事前相談があり、住宅の基礎を杭構造とする計画であったため、工事の実施による埋蔵文化財の損傷が避けられないものと判断された。このため確認調査を実施したところ地表下100cm以下に具体的な埋蔵文化財が確認された。このため事業者と協議を行つたところ、当初の計画どおりに鋼管杭打ち工事を実施したいという意向が示された。このため工事の実施による遺構の損傷は避けられないものと判断されたため、文化財保護法に基づく届出手続きをを行い、調査実施方法等の協議が整つた後、平成13年1月23日から3月9日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、近・現代の構築物によって中世の遺構が大きく破壊を受けている部分もあったが、おおむね13～14世紀代の建物遺構等が良好に遺存していることが確認された。本調査地点の周辺ではこれまでに長勝寺や五所神社の境内で発掘調査が実施されている程度で必ずしも調査事例が多くないため、今後の参考に資すべき成果の得られた調査であった。

## **20 北条小町邸跡（No.282）**

市内中心部の東側を南北方向にはしる小町大路の西側に位置し、前出の調査地点13からは住宅1軒を隔てたすぐ西側に所在している。平成12年11月に個人専用住宅建設の事前相談があり、住宅の基礎工事にともなって地盤の柱状改良を実施する計画であったため、工事の実施により埋蔵文化財の影響を及ぼすおそれのあることが予想された。このため確認調査を実施したところ地表下60cm以下に具体的な埋蔵文化財が確認された。このため事業者と協議を行ったところ、当初の計画どおりに工事を実施したいという意向が示された。このため工事の実施による遺構の損傷は避けられないものと判断されたため、文化財保護法に基づく届出手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成13年1月24日から3月30日までの予定で発掘調査を開始した。

## **21 多宝寺跡（No.187）**

市内中心部からやや北より扇ガ谷ニ丁目に位置している。平成12年11月に個人専用住宅建設の事前相談があり、住宅の建設にともなって敷地の一部を切り下げ車庫を設ける計画であったため、工事の実施により埋蔵文化財の影響を及ぼすおそれのあることが予想された。このため確認調査を実施したところ地表下90cm以下に具体的な埋蔵文化財が確認された。このため事業者と協議を行ったところ、車庫が住宅とともに必要不可欠なものであることから、当初の計画どおりに工事を実施したいという意向が示された。このため工事の実施による遺構の損傷は避けられないものと判断されたため、文化財保護法に基づく届出手手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成13年1月25日から2月5日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、炭層の広がりを発見することとなり、当該地一帯にかつて存在していた多宝寺跡との関係を考えるうえで重要な手がかりが得られることとなった。

## **22 名越ヶ谷遺跡（No.231）**

市内中心部から逗子方面に通じる県道鎌倉葉山線の名越四ツ角から北に入った名越ヶ谷の谷戸の入口部分に位置している。平成13年1月に当該地において鋼管杭打ち工事が実施されている状況が確認されたため、工事関係者に事情を確認したところ、建築確認申請の手続き後の工法変更により杭打ちの基礎構造が採られ施工に至ったとのことであった。当該地における同種の工事内容では埋蔵文化財への影響が不可避であると考えらることから、急速、確認調査を実施し埋蔵文化財の存在する深度及び現に損壊を受けている埋蔵文化財の状況を確実に把握したうえでさらなる対応を検討することとし、1月23日と24日の両日に確認調査を実施したところ、現地表下70cm以下に具体的な遺構の存在を確認することに至った。こうした確認調査の結果に基づき建築主と数回にわたる協議を行い、文化財保護法に基づく届出手続き等を経て、調査の実施方法についての協議が整った後、平成13年1月30日から2月23日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、敷地の調査区の東側部分は大半が近・現代の擾乱によって中世の遺構が失われているものの、西側部分においては破碎泥岩による地形面が確認されるとともに、河川に流路とみられる溝状の遺構が発見された。この遺構は本調査地点の東側に位置する逆川や前出の調査地点9で発見された河川跡等とあわせて検討を要するものと考えられるところとなった。

## 23 若宮大路周辺遺跡群（No.242）

市内中心部の商店街として賑わう小町通りの西側にあたる雪ノ下一丁目に位置している。平成12年10月に個人専用住宅建設の事前相談があり、住宅の基礎を杭構造とする計画であったため、工事の実施による埋蔵文化財の損傷が避けられないものと判断された。このため確認調査を実施したところ地表下60cm以下に具体的な埋蔵文化財が確認された。このため事業者と協議を行ったところ、当初の計画どおりに鋼管杭打ち工事を実施したいという意向が示された。このため工事の実施による遺構の損傷は避けられないものと判断されたため、文化財保護法に基づく届出手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、平成13年1月23日から5月19日までの予定で発掘調査に着手した。

## 24 横小路周辺遺跡（No.259）

市内東部の横浜市に通じる県道金沢鎌倉線の北側に所在し、荏柄天神社の参道が県道と交わる地点の東側に位置している。平成12年6月に個人専用住宅建設の事前相談があり、住宅の基礎を杭構造とする計画であったため、工事の実施により埋蔵文化財の影響を及ぼすおそれのあることが予想された。当該地の周辺ではこれまでにも東となりの敷地と荏柄天神社の参道を隔てた西隣の敷地において埋蔵文化財の発掘調査が実施され、おおむね遺構の埋没深度が想定できることから、確認調査を実施せずに本調査を開始することとした。この後、事業者と協議を行い文化財保護法に基づく届出手手続きを行い、調査実施方法等の協議が整え、当初は平成12年9月から現地での発掘調査を開始する予定であったが、既存住宅の解体・撤去作業に変更が生じたため、平成13年2月22日から4月20日までの予定で発掘調査を開始した。

## 25 史跡鶴岡八幡宮境内

国指定史跡鶴岡八幡宮境内の指定地内に所在し、御谷と呼ばれる鶴岡八幡宮寺供僧の僧坊跡が存在していた場所にある。平成12年10月23日に当該地において既存の住宅に付帯する擁壁の改修を内容とする史跡名勝天然記念物の現状変更許可申請が提出された。同申請は埋蔵文化財及び景観等に影響を及ぼすおそれのない「工作物の設置、改修若しくは除却」に該当する工事であることから、平成12年11月7日付けをもって市教育委員会から現状変更許可を通知した。その後現地での工事が開始されたところ、施工業者から掘削中にやぐらが1基発見されたとの連絡を受けた。このため急速、現地の状況を確認するとともに状況を県生涯学習文化財課の史跡担当及び埋蔵文化財担当に連絡し、今後の措置について指導を求めた。これに対して、従来の予想をこえて発見された埋蔵文化財であるため、発掘調査の実施による記録化の作業を行うとともに、史跡指定地内に存在する埋蔵文化財として、工事計画の変更による現状保存をはかるべきとの指導が得られた。この後、発掘調査の準備を整え、平成13年3月1日から3月7日にかけて現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、発見されたやぐらは奥壁に仏像等を埋めこんでいたと見られるレリーフ状の彫り込みが良好に遺存していることが確認された。玄室から羨道に通じる部分も良好に遺存していたが、羨道部は現況道路の下部にあたるため、発掘調査の実施によって道路の陥没をまねくおそれがあるため調査の対象から除外することとした。

## 本誌所収の平成11・12年度発掘調査地点一覧

No.	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
①	弁ヶ谷遺跡 (No.249)	材木座四丁目336番7	個人専用住宅 (地下室)	都市	28.00 m <sup>2</sup>	平成11年6月26日 ～平成11年7月21日
②	長谷小路周辺遺跡 (No.236)	由比ガ浜三丁目254番15外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	124.72 m <sup>2</sup>	平成11年6月26日 ～平成11年8月31日
③	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目402番5	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	182.47 m <sup>2</sup>	平成11年7月6日 ～平成11年9月4日
④	政所跡 (No.247)	雪ノ下三丁目989番4	個人専用住宅 (杭基礎構造)	官衙	53.82 m <sup>2</sup>	平成11年8月16日 ～平成11年9月30日
⑤	下馬周辺遺跡 (No.200)	由比ガ浜二丁目110番5	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	93.27 m <sup>2</sup>	平成11年8月17日 ～平成11年10月27日
⑥	米町遺跡 (No.245)	大町二丁目2313番15	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	42.43 m <sup>2</sup>	平成11年9月6日 ～平成11年10月23日
⑦	理智光寺跡 (No.265)	二階堂字理智光寺750番1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	61.43 m <sup>2</sup>	平成11年10月18日 ～平成11年12月11日
⑧	東勝寺跡 (No.246)	小町三丁目523番14	個人専用住宅 (地下室)	社寺	90.00 m <sup>2</sup>	平成11年10月25日 ～平成11年11月20日
⑨	玉繩城跡 (No.63)	城廻字中村473番8	個人専用住宅 (地下室)	城館	95.28 m <sup>2</sup>	平成11年11月2日 ～平成11年11月22日
⑩	笛目遺跡 (No.207)	笛目町285番1外	個人専用住宅 (地下室)	都市	87.46 m <sup>2</sup>	平成11年11月29日 ～平成11年12月25日
⑪	笛目遺跡 (No.207)	笛目町286番1外	個人専用住宅 (地下室)	都市	134.56 m <sup>2</sup>	平成11年11月29日 ～平成11年12月17日
⑫	米町遺跡 (No.245)	大町二丁目2308番1	個人専用住宅	都市	24.00 m <sup>2</sup>	平成11年12月6日 ～平成11年12月17日
⑬	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座六丁目760番1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	56.31 m <sup>2</sup>	平成12年1月6日 ～平成12年2月10日
⑭	大倉幕府周辺遺跡群 (No.49)	雪ノ下字大倉耕地562番16	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	51.00 m <sup>2</sup>	平成12年1月31日 ～平成12年3月21日
⑮	大倉幕府周辺遺跡群 (No.49)	雪ノ下四丁目580番10外	個人専用住宅 (地下室)	都市	129.08 m <sup>2</sup>	平成12年2月1日 ～平成12年3月20日
⑯	武藏大路周辺遺跡 (No.194)	扇ヶ谷三丁目397番	個人賃貸住宅	都市	67.02 m <sup>2</sup>	平成12年3月6日 ～平成12年4月8日
⑰	台山遺跡 (No.29)	台字西ノ台1718番3	個人専用住宅 (杭基礎構造)	集落	134.27 m <sup>2</sup>	平成12年3月27日 ～平成12年4月26日

## 平成12年度発掘調査地点一覧

No.	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
1 ※	台山遺跡 (No.29)	台字西ノ台1718番3	個人専用住宅 (杭基礎構造)	集落	134.27 m <sup>2</sup>	平成12年3月27日 ～平成12年4月26日
2	大倉幕府周辺遺跡群 (No.49)	二階堂字荏柄58番4外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	260.00 m <sup>2</sup>	平成12年4月1日 ～平成12年9月2日
3	大倉幕府跡 (No.253)	雪ノ下三丁目618番4	自己看護併用住宅 (杭基礎構造)	官衙	30.00 m <sup>2</sup>	平成12年4月19日 ～平成12年5月23日
4	下馬周辺遺跡 (No.200)	由比ガ浜二丁目106番6外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	48.00 m <sup>2</sup>	平成12年6月14日 ～平成12年8月17日
5	今小路西遺跡 (No.201)	由比ガ浜一丁目148番1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	28.50 m <sup>2</sup>	平成12年6月27日 ～平成12年7月27日
6	佐助ヶ谷遺跡 (No.245)	佐助一丁目476番1	個人専用住宅 (表層地盤改良)	都市	26.00 m <sup>2</sup>	平成12年7月19日 ～平成12年7月31日
7	東勝寺跡 (No.246)	小町三丁目468番10	個人専用住宅 (地下室)	社寺	27.00 m <sup>2</sup>	平成12年7月27日 ～平成12年8月19日
8	武藏大路周辺遺跡 (No.194)	扇ガ谷二丁目298番1イ	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	122.20 m <sup>2</sup>	平成12年8月3日 ～平成12年11月30日
9	名越ヶ谷遺跡 (No.231)	大町三丁目1826番9	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	64.65 m <sup>2</sup>	平成12年8月1日 ～平成12年9月21日
10	今小路西遺跡 (No.201)	由比ガ浜一丁目183番1	自己看護併用住宅	都市	35.50 m <sup>2</sup>	平成12年8月11日 ～平成12年8月31日
11	水道山遺跡 (No.20)	台四丁目1169番1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	163.90 m <sup>2</sup>	平成12年9月4日 ～平成12年10月19日
12	長谷小路周辺遺跡 (No.236)	長谷一丁目205番12	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	31.50 m <sup>2</sup>	平成12年10月10日 ～平成12年11月10日
13	北条小町邸跡 (No.282)	雪ノ下一丁目400番1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	城館	56.00 m <sup>2</sup>	平成12年10月23日 ～平成12年11月30日
14	淨妙寺旧境内遺跡 (No.408)	淨明寺三丁目16番1	個人専用住宅 (表層地盤改良)	社寺	25.00 m <sup>2</sup>	平成12年10月31日 ～平成12年11月9日
15	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座四丁目256番1 の一部	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	103.10 m <sup>2</sup>	平成12年11月9日 ～平成12年12月9日
16	笹目遺跡 (No.207)	笹目町302番11	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	30.00 m <sup>2</sup>	平成12年11月9日 ～平成12年12月27日
17	亀谷山王堂跡 (No.185)	扇ガ谷四丁目832番5	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	12.00 m <sup>2</sup>	平成12年12月11日 ～平成12年12月25日

※印は平成11年度からの継続調査

No.	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
18	華光院跡やぐら群 (No.101)	扇ガ谷ニ丁目238番2	個人専用住宅 (防災工事)	墳墓	36.00 m <sup>2</sup>	平成12年12月21日 ～平成13年1月18日
19	能蔵寺跡 (No.314)	材木座ニ丁目297番1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	75.00 m <sup>2</sup>	平成13年1月23日 ～平成13年3月9日
20	北条小町邸跡 (No.282)	雪ノ下一丁目401番5外	個人専用住宅 (地盤柱状改良)	都市	80.00 m <sup>2</sup>	平成13年1月24日 ～平成13年3月30日
21	多宝寺跡 (No.187)	扇ガ谷ニ丁目238番2	個人専用住宅 (車庫・擁壁)	社寺	15.00 m <sup>2</sup>	平成13年1月25日 ～平成13年2月5日
22	名越ヶ谷遺跡 (No.231)	大町三丁目2356番11	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	35.00 m <sup>2</sup>	平成13年1月30日 ～平成13年2月23日
23 ★	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	雪ノ下一丁目200番3外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	80.00 m <sup>2</sup>	平成13年2月19日 ～平成13年5月19日
24 ★	横小路周辺遺跡 (No.259)	二階堂字花柄10番1の一部	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	40.00 m <sup>2</sup>	平成13年2月22日 ～平成13年4月20日
25	史跡鶴岡八幡宮境内	雪ノ下ニ丁目39番9	個人専用住宅 (滑壁・道路混泥)	社寺	30.00 m <sup>2</sup>	平成13年3月1日 ～平成13年3月7日

★印は平成13年度への継続調査。

鎌倉市全図

1:50,000

平成12年度の緊急避難調査地点（—○—）  
本音報器の平成11・12年度調査地点（○—○—）  
※調査名は「調査参照」

べん が やつ い せき  
弁ヶ谷遺跡 (No.249)

材木座四丁目336番7地点

## 例　　言

1. 本報は、弁ヶ谷遺跡（神奈川県遺跡台帳No.249）内、鎌倉市材木座四丁目336番地7における埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、個人専用住宅における地下室部分28m<sup>2</sup>を対象に平成11年6月23日から同年7月23日にかけて鎌倉市教育委員会がこれを実施した。
3. 遺物等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
4. 調査体制は以下の通りである。

調査担当 宮田眞

調査員 滝澤晶子・諸星真澄

調査補助員 安達澄代・吉原真智子・堀川浩通

調査作業員 河原龍雄・内田太郎（鎌倉市シルバー人材センター）

5. 本報の遺構・遺物の尺度は次の通りである。

①遺構配置図・個別遺構図1／50（遺構図の水系高は海拔高を示す。）

②遺物実測図1／3・1／6

6. 遺物の実測図には次の記号を使用した。

軸の限界 —————— 使用痕 ○←————→○  
調整点の変化 —————— 加工痕 ○←————→○

7. 本報は第1章・第4章を宮田眞、第2章・第3章（遺構）を諸星真澄、第3章（遺物）を滝澤晶子が執筆した。

8. 本書の図版作成及び写真撮影は次のものが担当した。

①遺構図版 諸星真澄

②遺物図版 河内令子・安達澄代・吉原真智子・滝澤晶子

③遺構写真 滝澤晶子

④遺物写真 滝澤晶子

## 目 次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境.....	4
第2章 調査経過とグリッド配置 基本上層.....	6
第3章 検出遺構と出土遺物	
第1節 1面検出の遺構と遺物.....	8
第2節 2面検出の遺構と遺物.....	11
第3節 3面検出の遺構と遺物.....	18
第4節 4面検出の遺構と遺物.....	20
第5節 5面検出の遺構と遺物.....	21
第4章 まとめ.....	24

## 挿 図 目 次

図1 本調査地点と周辺遺構.....	5
図2 遺跡の位置及びグリッド配置図.....	6
図3 基本土層図.....	7
図4 1面遺構配置図.....	8
図5 表土層出土遺物.....	9
図6 1面出土遺物.....	10
図7 2面遺構配置図.....	11
図8 土壙1出土遺物.....	12
図9 井戸1.....	13
図10 井戸1出土遺物.....	14
図11 2面出土遺物(1).....	15
図11 2面出土遺物(2).....	16
図13 3面遺構配置図.....	18
図14 3面出土遺物.....	19
図15 4面遺構配置図.....	20
図16 4面出土遺物.....	21
図17 5面遺構配置図.....	22
図18 土壙5出土遺物.....	23
図19 5面出土遺物.....	23
図20 中世層出土の古代遺物.....	23

## 写 真 目 次

図版1 A. 遺跡地調査前(南より).....	27
B. 1面全景(北より).....	27
図版2 A. 2面全景(南より).....	28
B. 井戸1(北より).....	28
図版3 A. 井戸1(北より).....	29
B. 基壇状遺構(東より).....	29
図版4 A. 3面全景(南より).....	30
B. 石組み遺構(西より).....	30
図版5 A. 石組み遺構(東より).....	31
B. 4面全景(南より).....	31
図版6 A. Pit7・Pit5(西より).....	32
B. 5面全景(南より).....	32
図版7 出土遺物(1).....	33
図版8 出土遺物(2).....	34
図版9 出土遺物(3).....	35

# 第1章 遺跡の位置と歴史的背景

本調査地は、神奈川県鎌倉市材木座四丁目336番7に所在する。調査地の南方約250mには浄土宗大本山光明寺があり、100m西方には開山が文覚上人、開基は源賴朝と伝うる補陀洛寺がある。

また調査地は地勢的に見ると、鎌倉の市街地を形成する平野の南東端部、弁ヶ谷の開口部に位置する。弁ヶ谷は奥行きがおよそ450m・幅200m前後の比較的大きな谷戸で、南北方向に開口している。弁ヶ谷を囲む丘陵は複雑に入り組んでおり多くの小谷が形成される。現在、弁ヶ谷に寺院は一字も無いが中世には最宝寺、嵩寿寺、新善光寺があった。

最宝寺（図1-4）は、材木座高御藏にあったとされ、「風土記稿」には「五明山高御藏ト号ス、淨土真宗、京四六条本願寺末」とある。寺の創建時期についてはあいまいな点が多く確実な年号は不明であるが、享徳元年（1452）十一月九日付けで「鎌倉弁ヶ谷高御藏最宝寺寺領等事」云云という安堵状があることから、享徳頃まで最宝寺は弁ヶ谷高御藏にあったらしい。最宝寺は小田原北条氏の真宗弾圧のおり現在ある横須賀市野比に逃れ移った。

嵩寿寺（図1-3）は、金剛山嵩寿寺と号し元亨元年（1321）、開山南山士雲、開基北条高時によって創建された。元亨三年の貞時十三年忌供養には嵩寿寺僧衆13人が参加している。また「太平記」に、新田義貞が鎌倉に攻め入った際、幕府方の長崎次郎高重が当寺長老士雲のところに、その挙に対する処遇を問うに来たという話がある。嵩寿寺の所領は毛利荘厚木郷（現在の厚木市内）があり、その他駿河国葉梨莊上郷にもあったらしい。この毛利荘については、建武五年（1338）夢窓疎石は、足利尊氏の執事高師直に対し、毛利荘厚木郷の事について書を送り、当寺雜掌申し分をきかれんことを請願した（「夢窓疎石書状」瑞泉寺文書「資料編」三ノ二九七）。これに対しては、観応三年（1352）に厚木郷下方の地を嵩寿寺雜掌に渡付すべきを命じた打渡状（「白井行胤打渡状」伝宗庵文書「史料編」三ノ百十八）がある。嵩寿寺の廃絶年ははっきりしないが、応永三十一年（1424）の嵩寿寺土恩と伝宗庵心榮が連署して、毛利荘厚木郷における百姓逃散の処置について円覚寺正統院と契約した契状があるので、当寺が応永三十一年までは存続していたことが明らかである。

新善光寺（図1-2）は、弁ヶ谷の最奥部、松ヶ谷の長勝寺の裏手にあったと言われており、宗旨及び創建年は未詳だが、「北条九代記」仁治三年（1242）六月十五日条に「入道前武藏守四位下平朝臣泰時卒。六十。新善光寺知導上人為知識奉勸念佛。」とあることから、仁治三年には既にあったことは確かようだ。現在、三浦郡葉山町上山口には不捨山攝取院新善光寺があるが、この寺は弁ヶ谷にあった新善光寺が移ったものとされる。移転した年代もはっきりしないが、「新編相模風土記稿」は「中興の僧密道、天正十八年七月朔日に寂すとなれば其の世代なるべし」と言っている。

弁ヶ谷では、昭和62年に急傾斜地崩壊対策事業に伴う新善光寺内やぐらの発掘調査が実施され、大型やぐら2基と崖面に穿たれた方形区画墓域が検出され、多くの墓石類を始め藏骨器としての白磁四耳壺が完形品で見つかっている。また平成元年にも、急傾斜地崩壊対策事業に伴う弁ヶ谷遺跡内やぐら群（3基）の発掘調査が実施され、白磁・瀬戸・常滑の壺による藏骨器が出土している。同谷戸内では近年、かながわ考古学財団によるやぐらの調査が実施され多くの成果を上げている。

## 《参考文献》

- 新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書 昭和63年3月 新善光寺跡内やぐら発掘調査団  
平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書（35~46頁） 平成2年3月 弁ヶ谷遺跡内やぐら群発掘調査団  
鎌倉庵寺事典 昭和55年12月 貢達人・川副武胤著 有隣堂

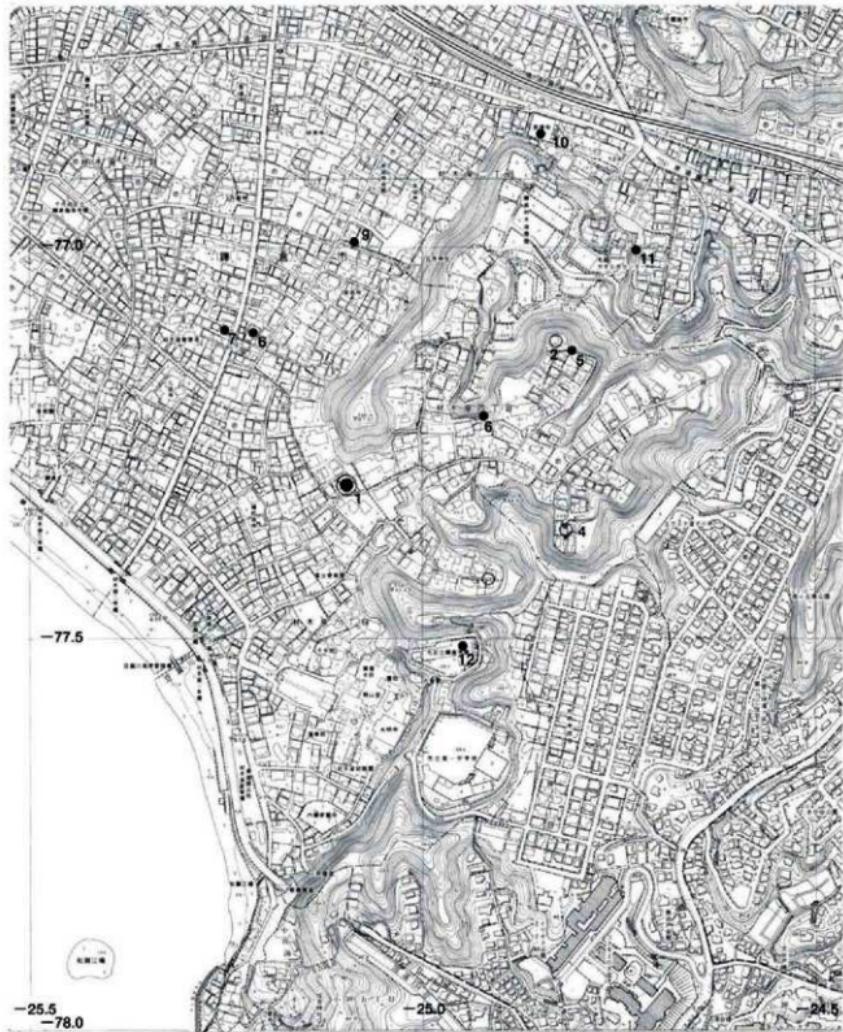


図1 本調査地点と周辺遺跡

1. 本調査地点
2. 新善光寺址
3. 崇寿寺址
4. 量宝寺址
5. 新善光寺址内やぐら
6. 井ヶ谷やぐら群
7. 材木座町屋遺跡（材木座三丁目364番1外地点）
8. 材木座町屋遺跡（材木座四丁目260番1外地点）
9. 能藏寺遺跡
10. 長勝寺遺跡
11. 長勝寺遺跡やぐら

## 第2章 調査経過とグリッド配置・基本土層

### 調査経過

鎌倉市材木座四丁目336番7における専用住宅の新築に伴い、平成11年4月26・27日に鎌倉市教育委員会によって確認調査が行なわれ、その調査結果を基に発掘調査が行なわれることになった。調査期間は平成11年6月23日から7月23日までである。

- 6月23日 機材搬入
- 6月26日 重機による表土掘削開始
- 7月 2日 1面全景
- 7月 3日 井戸1検出
- 7月 6日 2面全景
- 7月 9日 3面全景
- 7月16日 清泉小学校3年生、現場見学会
- 7月17日 4面全景
- 7月21日 5面全景
- 7月23日 機材撤収を行ない、現地調査を終了する

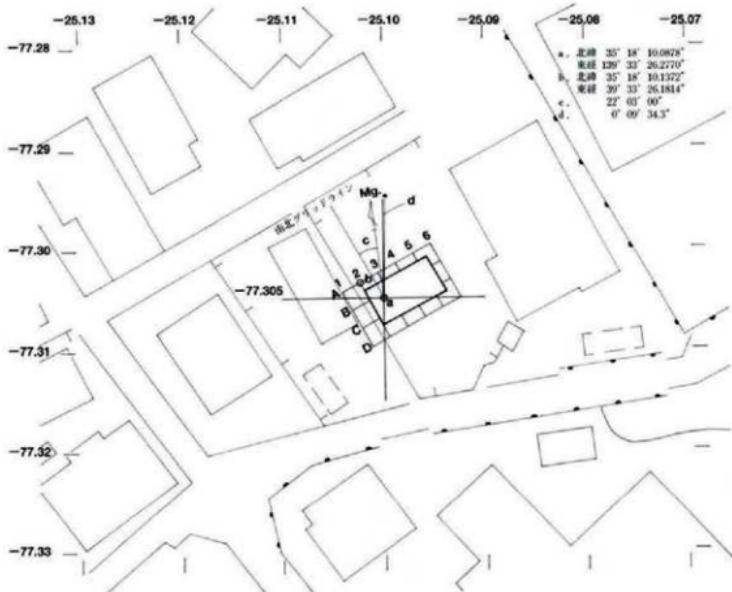


図2 進路の位置及びグリッド配置

## グリッド設定(図2)

測量の基準となるグリッドの設定は調査区の形状に合わせて任意に設定された。グリッドは2mの間隔をもち、南北軸にA～Dまでのアルファベット、東西軸に1～6までの算用数字を付した。各グリッドの名称は北西隅の軸線交点によって表わされる。調査地点と地図との合成には市4級基準点を使用し、グリッドとの位置関係は図2の通りである。なお、グリッドの南北軸は磁北に対して $22^{\circ} 03' 00''$ 西に傾くが、調査の便宜上北西方向を「北」と称し、本書の記述もそれに従う。

## 基本層序(図3)

本調査区内において、13世紀末から15世紀代にわたる計5面の生活面の調査を行なった。以下に堆積土層を八層に大別して概説する。

調査前現地表の海拔レベルは海拔7.8mではほぼ平坦である。

第Ⅰ層 [表土層]	現地表下100～120cmほどの厚さで堆積する。近世から現代に至る盛土である。
第Ⅱ層 [中世遺物包含層]	暗褐色粘質土 0.5～2.0cm大の土丹粒が多く含まれ、よく縮まる。
第Ⅲ層 [1面構成土]	茶褐色粘質土 1.0～3.0cm大の土丹、炭化物、玉砂利を含みよく縮まる。
第Ⅳ層 [2面構成土]	灰茶褐色粘質土 土丹粒および10.0cm大までの土丹ブロック、炭化物、玉砂利を含む。しまりはやや落ち、砂分がやや増す。
第Ⅴ層 [3面構成土]	1.0～20.0cm大の土丹層。
第Ⅵ層 [4面構成土]	暗黒茶褐色粘質土 土丹粒、炭化物、鉄分を含む。しまり良く地山に近い。
第Ⅶ層 [5面構成土]	暗黒茶褐色粘質土 土丹粒、炭化物、鉄分を含む。しまり良く地山に近い。上層と似るがより縮まりが増す。掘削深度の関係から当面を最終面とした。
第Ⅷ層 [6面構成土]	暗黒褐色粘質土 砂分をやや含む。混入物なく、ほぼ中世地山。

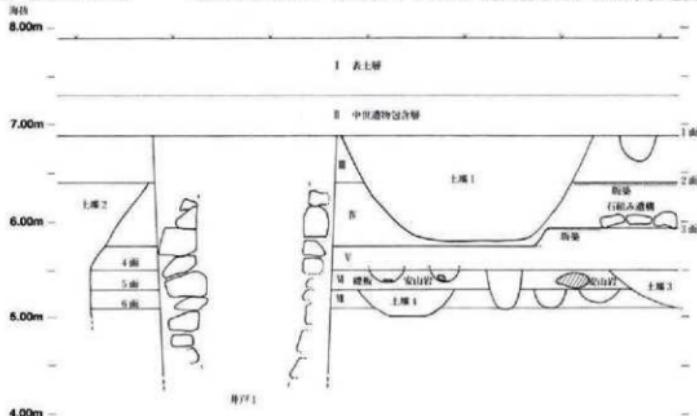


図3 基本土層

## 第3章 検出遺構と出土遺物

### 第1節 1面検出の遺構と遺物

本調査地内からは、13世紀末～15世紀後半に到る計6面の生活面を検出した。第6面に関しては掘削深度以下であることから、調査区北壁際に設けた排水溝において確認したに過ぎず、平面的な調査は行なっていない。そのため以下に第1面～第5面において検出した遺構及びその出土遺物の詳細を記す。

なお、各面においてプラン確認が不明瞭であった遺構に関しては、その下面まで掘り下げた後に確認作業を行なった。その結果、後述する井戸1に例するように、1面の遺構を2面において検出するといった状況になったが、各遺構及びその出土遺物は検出した面において報告するものとする。

#### 1面(図4)

海拔6.8mにて確認された、破碎土丹を用いた良好な地業面である。当面はその出土遺物の編年観から15世紀後半の年代が比定できる。

検出された遺構は径40～60cmほどのPitが4口である。なお、調査区南西部に20～30cm大ほどの土丹塊が疎らに検出され、井戸址の可能性が指摘されたが、明確なプランが確認できないため次面にて調査を行うこととした。

#### 表土層出土遺物(図5)

図5-1～14は糸切りかわらけである。1～3は大皿である。各々、復元で、口径は13.0cm・13.3cm・12.0cm、底径は7.2cm・7.3cm・6.8cm、器高は3.7cm・3.2cm・3.2cmを測る。4～14は小皿である。4～13は概ね口径が8.0cm前後、底径が5.0cm前後、器高が2.0cm前後を測る。14は法量が小さく、口径は5.8cm、底径は4.5cm、器高は1.6cmを測る。1の底部は糸切りの切り残しである。4は底径が広い。5

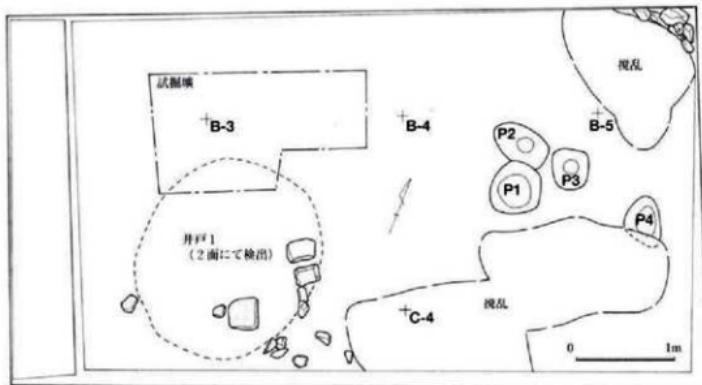


図4 1面遺構配置図

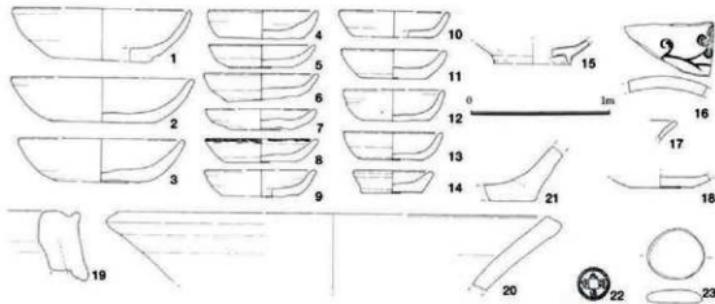


図5 耳土層出土遺物

~7は器壁中位で角度を変えて立ちあがる。8は器壁が外向きに立ちあがる。9~13は器高が深い。14は小型で、内高は浅い。8・12は灯明皿である。胎土は1・2・4~6・9・10が肌色、3・11・14が淡橙色、7・8・12・13が橙色を呈し、いずれも粉質である。

図5-15は青磁の蓮弁文の小鉢の底部片である。釉調は緑青色を呈し、光沢は良いが、微気泡のため失透する。素地は灰味白色を呈し、緻密である。

図5-16・17は瀬戸である。16は灰釉の水注もしくは瓶子の胴部片である。胎土は灰色を呈し、白色微石粒を多く含む。17は灰釉の碗もしくは鉢の口縁部片である。釉調は光沢・透明度共に良い。素地は灰白色を呈す。

図5-18は山茶碗である。底径は4.6cmを測る。内底面は磨滅している。胎土は濃灰色を呈し、白色石粒を含み硬質である。

図5-19~21は常滑である。19は甕の口縁部片である。縁帯の幅は広く、器壁と接している。20は捏鉢である。復元で、口径は33.0cmを測る。口縁端部から内面は器表が剥離している。21は甕を転用した捏鉢である。更に擦り常滑に転用している。内底面と外面が磨滅している。胎土は19・20が灰色を呈し、石粒を多く含み粗い。21は暗紫褐色を呈し、白色微石粒を多く含む。

図5-22は錢である。元符通寶である。

図5-23は石製品である。用途は不明。白褐色を呈す。

### 1面出土遺物(図6)

図6-1~6は糸切りのかわらけである。1~3は大皿である。各々、復元で、口径は13.7cm・11.9cm・11.0cm、底径は7.0cm・7.0cm・7.3cm、器高は3.3cm・3.4cm・3.5cmを測る。4~6は小皿である。4~6は復元で、口径は7.2cm・6.3cm・7.0cm、底径は4.3cm・4.9cm・3.7cm、器高は2.1cm・1.7cm・2.0cmを測る。2・3は法量が小さく、口縁端部が若干外反し、器高が高い。4~6は法量が小さく、器壁中位で角度を変えて立ちあがる。5・6は灯明皿である。いずれも胎土は淡橙色を呈し、微砂を含み、粉質である。

図6-7・8は磁器である。7は青磁の折縁鉢である。復元で口径は14.2cmを測る。釉調は緑味青色を呈し、微気泡多く失透する。素地は灰味白色を呈し、緻密。8は青白磁の梅瓶の胴部片である。釉調は淡水青色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰味白色を呈す。9・10は瀬戸である。9は灰釉の皿で

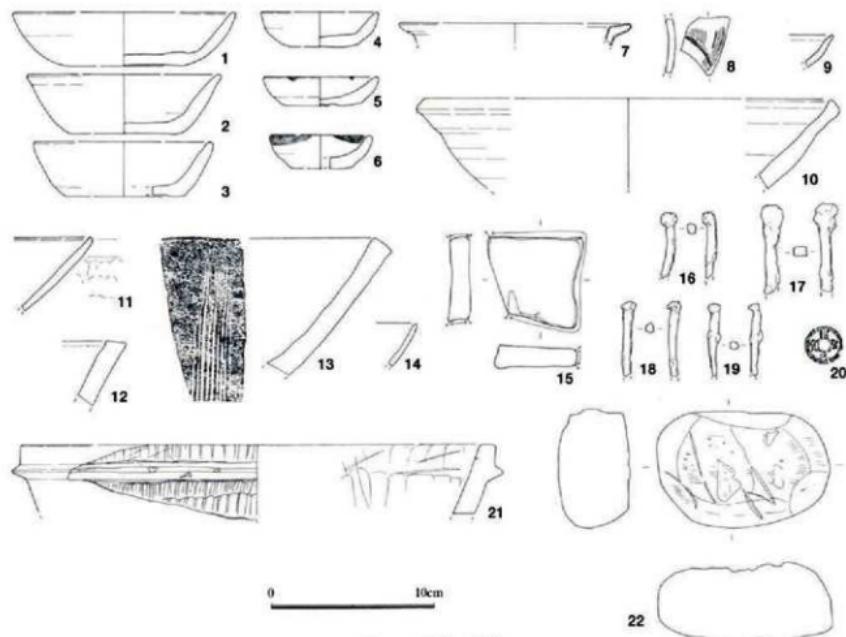


図 6 1面出土遺物

ある。釉調は光沢・透明度共に優れる。素地は灰白色を呈し、緻密である。10は灰釉の鉢である。釉調は光沢・透明度共に優れる。素地は灰色を呈し、微石粒を若干含む。

図 6-11は山茶碗である。焼成が悪い。胎土は白褐色を呈し、微石粒を多く含み、軟質である。口縁端は内外面ともに横位の指ナデがなされる。外面には指頭痕が残る。

図 6-12は常滑の捏鉢の口縁部片である。胎土は濃灰色を呈し、白色石粒を多く含み、硬質である。

図 6-13は備前の捕鉢である。胎土は灰白褐色を呈し、微石粒を多く含み粗い。八条1組の条線が施される。

図 6-14は手づくねの白かわらけの口縁部片である。胎土は白褐色呈し、キメ細かく、粉質である。

図 6-15は研磨痕のある常滑片である。

図 6-16~19は鉄製の釘である。

図 6-20は銭。紹聖元寶である。

図 6-21・22は石製品である。21は滑石の鍋である。復元で口径は29.0cm、鍔径は30.2cmを測る。22は軽石である。

## 第2節 2面検出の遺構と遺物

### 2面(図7)

1面下40~50cm、海拔6.4~6.3mにて確認された地業面である。当面はその出土遺物の編年観から15世紀中~前半の年代が比定できる。

調査区東側よりかなり固く叩き締められた土丹版築が南北方向に帯状に確認された。本址は通路的な遺構と考えられ、最大幅160cmを測り、土壤1に北西半を切られるものの、調査区外南北にその長さを増すようである。南北軸線方位はN-34.5°-Wである。

その他検出された遺構は先述した井戸1基、および土壤1基のみである。それぞれ以下に詳述する。

### 土壤1(図7)

土壤1は調査区北壁際に検出されたやや大型の土壤で、土層断面の観察により1面期に属する遺構と判断される。本址は調査区北外へ広がりをもつためその全容は不明であるが、確認し得た掘り方の規模は東西250cm、南北150cmを測る。深さは確認面(海拔6.4m)より60cmを測り、断面は逆台形を呈する。

### 土壤1出土遺物(図8)

図8-1~10は糸切りかわらけである。1~5は大皿である。復元で1~3の口径はいずれも14.0cm、底径は7.7cm・8.2cm・7.4cm、器高は3.9cm・3.9cm・3.5cmを測る。4・5はやや小振りで、口径は11.6cm・11.9cm、底径は5.7cm・7.1cm、器高は3.3cm・2.8cmを測る。いずれも体部器厚は薄手で、器壁は外向きに開いて立ちあがる。胎土は1~3が淡橙色、4が肌色、5が橙色を呈し、微砂を含み、粉質である。1の器表には煤が付着する。6~10は小皿である。口径は8.0cm・7.6cm・7.5cm・7.6cm・6.9cm、底径は4.4cm・4.6cm・4.8cm・4.1cm・4.1cm、器高は1.7cm・1.9cm・2.1cm・2.1cm・2.3cmを測る。8~10は底径が小さく、器高が深い。胎土は6が肌色、7・8が橙色、9・10が淡橙色を呈し、微砂を含み粉質

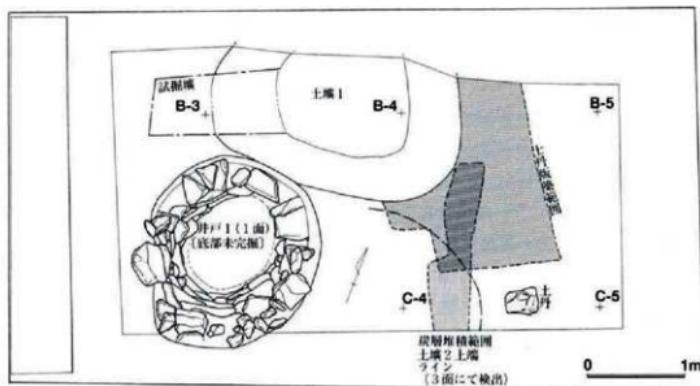


図7 2面遺構配置図

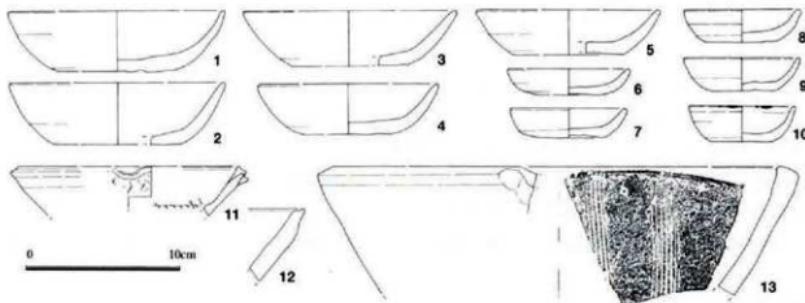


図8 土壌1出土遺物

である。10は灯明皿である。図8-11は瀬戸の灰釉の鉢し皿である。釉は白済し、極薄くかかる。胎土は白褐色を呈し、やや粗い。図8-12は常滑の捏鉢である。胎土は暗灰褐色を呈し白色石粒を多く含む。口縁端部は横ナデ調整が施される。図8-13は備前の描鉢である。六条1組の条線が施される。胎土は灰色を呈し、微石粒を含み、若干粘性がある。器表は粗く横ナデ調整がなされる。

#### 井戸1(図9)

井戸1は調査区南西部にて検出された土丹(泥岩)積みの井戸である。井戸の平面形はほぼ円形に近い梢円形を呈し、長軸(南北)200cm×短軸(東西)180cmを測る。また、その内径は約110cm×80cmである。確認面(海拔6.4m付近)より200cm(海拔4.4m)掘り込んだ時点で調査を終了したため、底面の確認には到っていない。南北軸線方位はN-10°-Eを示す。

土丹の形状および大きさはまちまちであるが、概ね40cm大前後のものを用い、上方に向けてやや口を広げるよう八段以上が積み上げられている。なお、井戸の内面を形成する土丹はどれも若干の整形が施されており、中には井戸の内径にあわせて弧状にカットされるものもある。

#### 井戸1出土遺物(図10)

図10-1~10は井戸1上層出土遺物である。但し裏込めの遺物も含んでいる。1~5は糸切りかわらけの小皿である。復元で、1の口径は9.0cm、底径は5.4cm、器高は2.6cmを測る。2~5の口径は6.8cm・5.7cm・5.8cm・5.8cm、底径は5.2cm・4.2cm・4.2cm・3.0cm、器高は1.9cm・1.8cm・1.5cm・2.1cmを測る。断面形は逆台形を呈し、口縁端は若干外反する。胎土は橙色を呈し、微砂を含み、粉質である。図10-6は瀬戸である。灰釉の直縁大皿の底部片。胎土は灰色を呈し、白色微細粒を含み、硬質である。図10-7は常滑の窯の口縁部片である。胎土は灰色を呈し、白色石粒を多く含む。図10-8は渥美の窯の胴部片である。器表は一部磨減している。図10-9は鬼板の描鉢の胴部片である。胎土は白褐色を呈し、白色石粒を含みやや粗い。器表には暗紫褐色の不透明の釉が薄くかかる。図10-10は手焼りである。瓦質で、器表は黒色処理される。肌荒れが著しく調整の詳細は不明だが、横ナデが見とめられる。

図10-11~25は井戸1上層出土遺物である。11~17は糸切りかわらけである。11は大皿である。口径が12.9cm、底径が7.7cm、器高が3.5cmを測る。断面形は逆台形を呈し、器壁は直線的で、外に大きく、開いて立ちあがる。器高は深い。12は中皿である。口径は10.1cm・7.4cm・2.6cmを測る。13~17は小

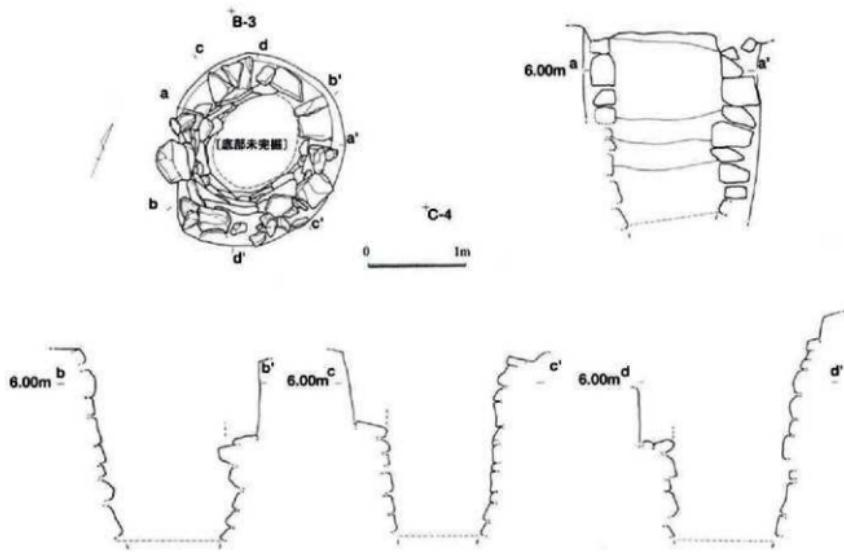


図9 井戸1

皿である。口径は7.7cm・6.3cm・6.8cm・6.2cm・5.9cm、底径は4.6cm・4.5cm・3.8cm・4.2cm・4.2cm、器高は2.1cm・1.8cm・2.0cm・2.0cm・1.5cmを測る。12~17の断面形は逆台形を呈し、器壁は直線的に立ちあがる。胎土は橙色を呈し、粉質である。図10-18~20は漁戸である。18は灰軸の鉢である。口径は復元で20.0cmを測る。口縁端は内側に若干張り出す。軸は口縁内側から外面中位にかかる。胎土は淡肌色を呈す。19は灰軸の碗である。復元で、口径は19.4cm、底径は6.0cm、器高は6.6cmを測る。軸は外面中位から内面にかかり、光沢はないが、透明度は良い。重ね焼きの痕が1ヶ所遺存する。胎土は淡肌色を呈す。20は天目茶碗である。軸調は光沢のある黒色を呈し、禾目が入る。胎土は灰色を呈し、若干粘性がある。図10-21~23は常滑である。21・22は甕の底部片。22は捏鉢に転用しているため内面が磨滅している。23は捏鉢である。復元で、口径は30.0cm、底径は13.0cm、器高は9.8cmを測る。外面は笠調整で、口縁部は内外面共に横ナデ調整。内面は上位まで磨滅している。図10-24・25は硯である。

図10-26~37は井戸1下層出土遺物である。26~32は糸切りかわらけである。26~28は中皿である。復元で、口径は10.0cm・10.0cm・9.0cm、底径は7.6cm・6.6cm・6.3cm、器高は2.6cm・2.9cm・2.9cmを測る。29~32は小皿である。口径は6.0cm、底径は4.0cm・4.1cm・4.4cm・4.2cm、器高は2.0cm・1.8cm・1.6cm・1.3cmを測る。断面形は逆台形を呈し、器壁は直線的に立ちあがり、口縁端は外反する。27・30の器表には煤が付着する。胎土は淡橙色を呈し、微砂を含み粉質である。図10-33は青磁の碗の底部片である。底径は復元で5.0cmを測る。軸調は灰味緑青色を呈し、光沢は良いが、微気泡多く失透する。素地は灰色を呈し、緻密。図10-34は漁戸の小皿である。口径は5.9cm、底径は2.7cm、器高は

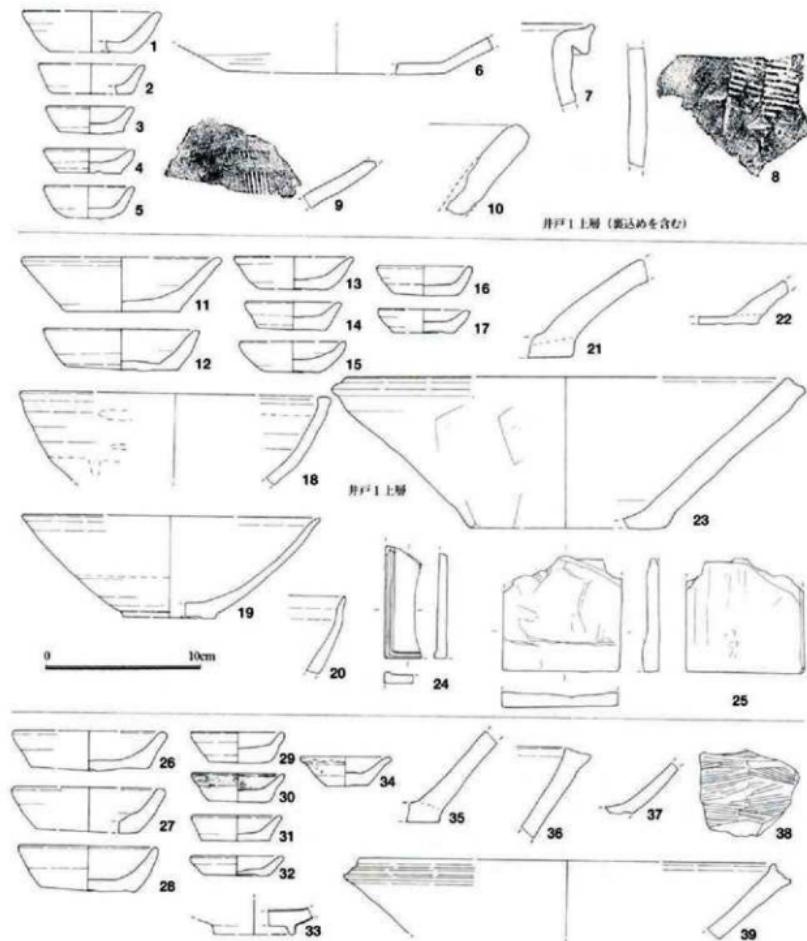


図10 井戸1出土遺物

1.9cmを測る。内面には掲釉がかかる。胎土は灰色を呈し、微石粒を若干含む。口縁端は外反する。図10-35-37は常滑である。35は壺の底部片である。36・37は捏鉢である。復元で、37の口径は28.8cmを測る。外面はヘラ調整で、口縁端は内外面共に横ナデ調整がなされる。内面は若干磨滅している。図10-38は瓦質の香炉の胴部片である。外面には横位の磨きがなされる。胎土は赤味白色を呈し、微砂を多く含み、焼成は良好である。

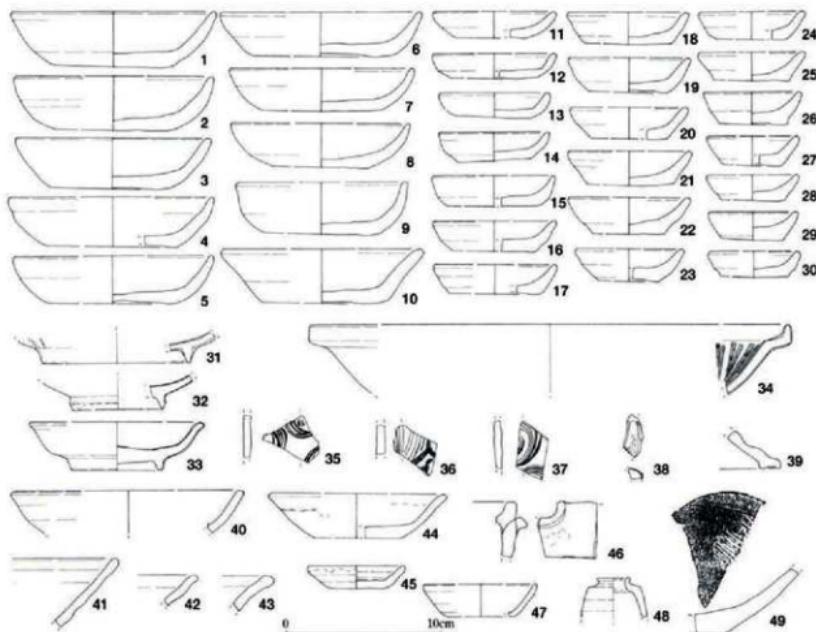


図11 2面出土遺物(1)

## 2面出土遺物（図11・12）

図11-1~30は糸切りかわらけである。1~10は大皿である。1~6の口径は13.0cm前後、底径は7.5cm~8.5cm、器高は2.8cm~3.5cmを測る。7~9の口径は11.1cm~12.0cm、底径は6.3cm~7.3cm、器高は3.0cm前後を測る。10の口径は13.1cm、底径は7.6cm、器高は3.5cmを測る。7~9は法量がやや小さい。10の器壁は外向きに立ちあがり、口縁端は外反する。胎土は1・7~10が橙色、2が淡橙色、3~6が肌色を呈し、いずれも微砂を含み、粉質である。3は灯明皿である。11~30は小皿である。11~14の口径は11・12が8.0cm、13・14が7.2cm、底径は5.0cm前後、器高は1.7cm前後を測る。15~22の口径は概ね8.0cm、底径は15・17・18・21が6.0cm前後、15・19・20・22が5.0cm前後、器高は1.8cm~2.3cmを測る。23~25の口径は7.0cm、底径は4.0cm~4.9cm、器高は1.8cm前後を測る。26~30の口径は6.0cm前後、底径は4.0cm前後、器高は1.8cm前後を測る。11~14は器高が低く、口径は比較的大きい。胎土は11・14が淡橙色、12・13が橙色を呈し、微砂を多く含み粉質である。14は再火を受けている。15~30は器高が高く、器壁は外向きに直線的に立ちあがる。26~30は更に法量が小さい。18・24・28は再火を受ける。胎土は微砂を含み、粉質である。

図11-31~38は磁器である。31・32は青磁である。31は蓮弁文鉢の底部片である。釉調は緑青色を呈し、微気泡多く失透する。素地は白色を呈し、緻密である。32は碗の口縁部片である。釉調は淡青味灰褐色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰色を呈し、緻密である。33~36は青白磁である。33~35は

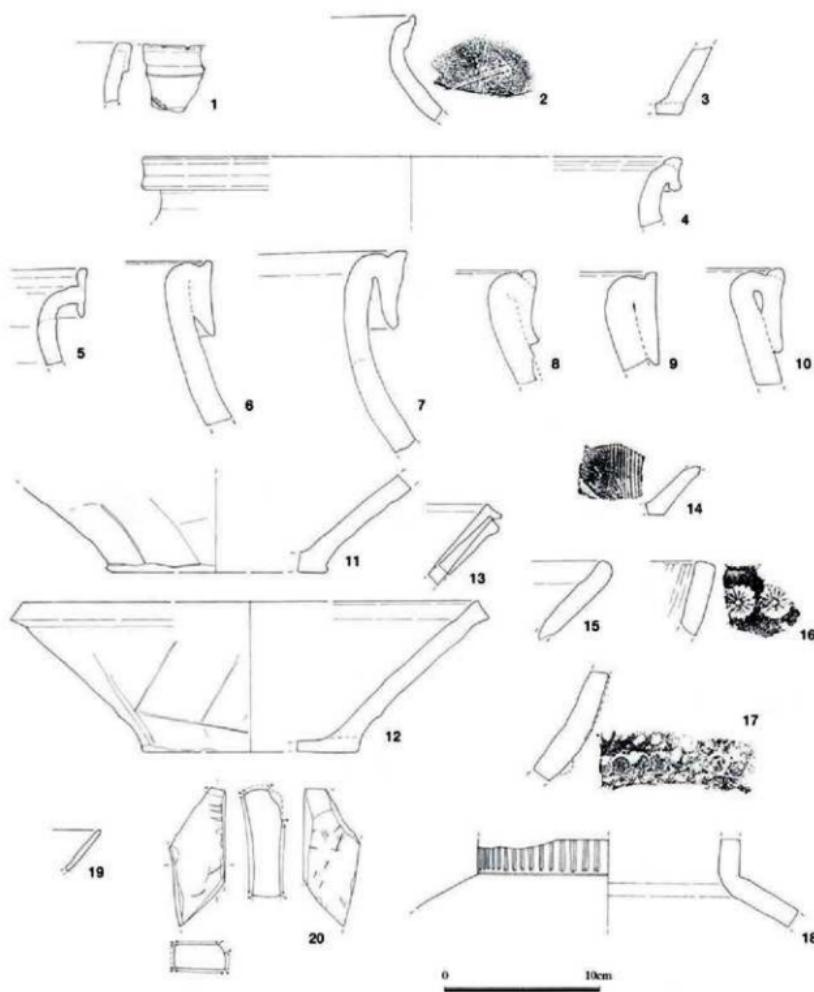


図12 2面出土遺物(2)

梅瓶の胴部片である。いずれも釉調は水青色を呈し、光沢・透明度共に優れる。素地は白色を呈し、緻密である。36は蓋である。釉調は水青色を呈し、光沢は良いが、白渕し、微気泡のため失透する。素地は白色を呈し、緻密。37・38は青磁である。おそらく明代の物であろう。37は折腰皿である。口径は復元で11.3cm、底径は5.8cm、器高は3.1cmを測る。釉調は灰味緑色を呈し、微気泡多く失透する。内底

見込みには釉がかからない。素地は灰白色を呈す。38は折縁鉢である。口径は復元で31.0cmを測る。内面に線彫りで蓮弁文が施される。釉調は緑青色を呈し、光沢は良いが、微気泡のため失透する。素地は灰味白色を呈し、緻密である。

図11-39は不明陶器である。蓋として実測したが、身の可能性もある。胎土は暗茶褐色を呈し、白色微石粒を多く含み、やや粗い。焼成は良好である。

図11-40～49は瀬戸である。40は灰釉の鉢皿である。口径は復元で15.0cmを測る。器表は再火を受け肌荒れする。41・42は灰釉の平鉢、43は灰釉の折縁鉢の口縁部片である。44は鉄釉の縁釉皿である。復元で、口径は11.5cm、底径は5.4cm、器高は2.9cmを測る。内底面は磨滅している。45は灰釉の小皿である。復元で口径は6.3cm、底径は3.6cm、器壁1.5cmを測る。46は灰釉の行平鍋である。小破片のため傾きは不詳。47は入子である。復元で、口径は7.3cm、4.2cm、2.0cmを測る。48は褐釉の茶入れである。復元で口径は2.2cmを測る。49は擂鉢である。胎土は40・41・46・47・49が灰色、48が濃灰色、42～45は白褐色を呈す。

図12-1～13は常滑である。1～3は壺である。2の肩部には窯印が施される。4～11は甕である。7～10は縁帯が広く、器壁に接している。11は底部片である。12・13は捏鉢である。復元で、12の口径は31.0cm、底径は16.0cm、器高は9.8cmを測る。外面はヘラ調整で、上位は横ナデ、内面上位は横ナデ、側面から底面にかけてはかなり磨滅している。13は口縁部片である。外面はヘラ調整で、上位は横ナデ、内面上位は横ナデ、磨滅している。

図12-14は鬼板の擂鉢である。胎土は白褐色を呈し、比較的精緻である。茶褐色の釉がかかる。

図12-15～17は手焙りである。15は土器質。胎土は灰色を呈し、微石粒を含む。外面は指頭痕が残り、内面から外面上位は横ナデがなされる。16は瓦質で、淡橙色を呈す。おそらく輪花型を呈するであろう。内面は継位の磨きがかかり、菊花文のスタンプが施される。17は胴部片である。瓦器質で、灰白色を呈す。沈線間に菊花文のスタンプを施し、連珠貼付け文は剥離している。器表は剥離が著しく、詳細は不明だが、内面は磨き、外面は横ナデ調整がなされる。

図12-18は土風炉である。瓦器質で、胎土は灰白色を呈し、微石粒を多く含む。器表は黒色処理され、内面は指頭痕の上に横ナデ、外面は横位に磨きがかかる。

図12-19は手づくねの白かわらけである。胎土は白褐色を呈し微石粒を多く含む。

図12-20は砥石である。中砥である。

### 第3節 3面検出の遺構と遺物

#### 3面(図13)

2面下60~70cm、海拔5.7~5.8mにて確認された破碎土丹地業面である。当面はその出土遺物の編年観から14世紀末の年代が比定できる。

調査区東北部からは、土丹をかなり堅緻に叩き締めた10~15cmほどの若干の高まりを検出した。後述するが、その東側に確認されたL字型の鎌倉石切石の石組み遺構との関連を考えるに基壇の可能性も指摘できる。検出し得た規模は東西170cm、南北65cmの範囲であり、調査区北へさらに広がりをもつ。

#### 石組み遺構(図13)

調査区北東隅において確認されたL字型に並べられた鎌倉石(砂質凝灰岩)切石である。調査範囲内において計5石が検出されたが、さらに調査区外北・東に連なる。先述したように石組みの西側には基壇状の高まりが認められることや、本遺跡の地域性から堂宇の存在が想定され、基壇南西部の地覆石としての機能が指摘される。なお、それぞれの切石は規格性に乏しく、やや不整形であることや、南西隅の切石のみ火熱を受け赤化していること等から、本址構築のために切り出された鎌倉石というよりも、處々の鎌倉石を集め並べたような印象を受ける。

#### 土壙2(図13)

土壙2は調査区中央南壁際に検出された。本址はその大半を調査区外に位置させるため平面形は確認

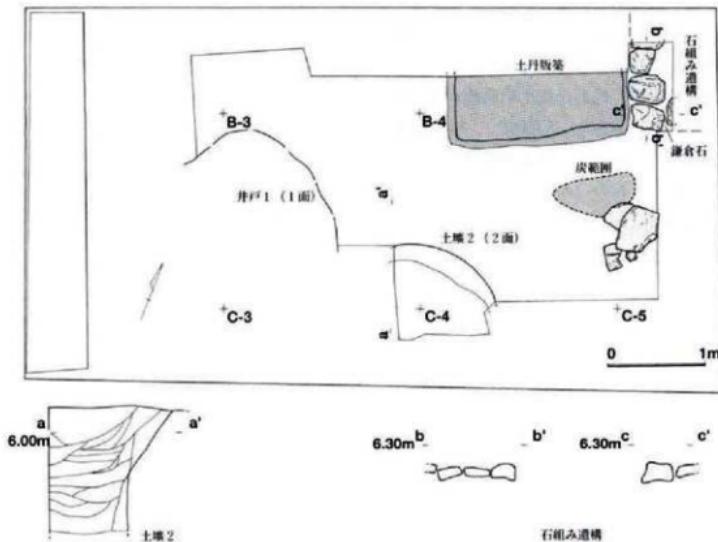


図13 3面遺構配置図

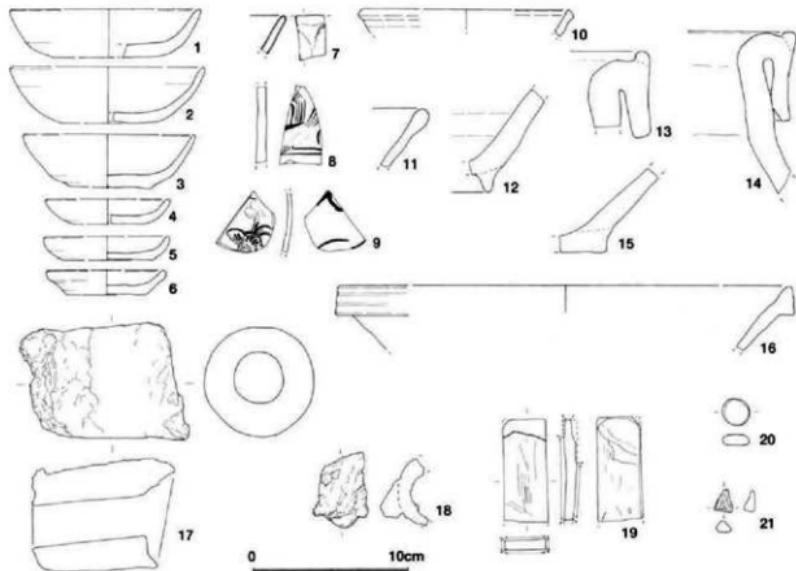


図14 3面出土遺物

し得ないが、直径200cmほどの円形を呈するものと思われる。確認面（海拔6.3m）より130cmを掘り下げる時点で調査壁崩落の危険性から調査を断念した。そのため、本址の性格については不明であるが、その断面形状や深さ等から井戸址の可能性が想定できる。

### 3面出土遺物(図14)

図14-1~6は糸切りかわらけである。1~3は大皿である。復元で、口径は12.4cm・12.6cm・11.1cm、底径は6.8cm・6.4cm・5.4cm、器高は3.1cm・3.6cm・3.3cmを測る。2・3は薄手で、底径が小さい。胎土は淡橙色を呈し、いずれも微砂を含み、粉質である。2・3は焼成が良好である。4~6は小皿である。復元で、口径は8.1cm・8.2cm・7.8cm、底径は4.8cm・5.8cm・5.2cm、器高は1.6cm・1.5cm・1.5cmを測る。胎土は淡橙色を呈し、微砂を含み粉質である。7の器壁は外向きに直線的に立ちあがる。5の器表には煤が付着する。

図14-7~9は磁器である。7は青磁の蓮弁文碗の口縁部片である。釉調は淡緑灰色を呈し、光沢は良いが、微気泡多く失透する。素地は灰色を呈す。8・9は青白磁である。8は梅瓶の胴部片である。釉調は水青色を呈し、光沢・透明度共に優れる。素地は灰白色を呈す。9は碗の胴部片である。内面は型捺しで草花文がなされ、外面は篦引きで文様が施される。釉調は水青色を呈し、光沢・透明度共に優れる。素地は灰味白色を呈す。

図14-10は瀬戸である。灰釉の卸し皿の口縁部片である。胎土は灰色を呈す。

図14-11・12は山茶碗窯系捏鉢である。11は口縁部片、12は底部片である。12の内底面は磨滅する。胎土は灰色を呈し、硬質で、微石粒を含む。12は比較的精緻である。

図14-13～15は常滑の甕である。13・14は口縁部片。いずれも縁帯の幅が広く、器壁に接している。15は甕の底部を捏鉢に転用しているため内面が磨滅している。胎土はいずれも黒灰色を呈し、白色微石粒を多く含み、粗い。

図14-16は魚住の捏鉢である。口径は復元で、29.4cmを測る。縁帯部に釉がかかる。胎土は暗灰色を呈し、微砂をとても多く含み、粗い。

図14-17・18は備の羽口である。溶融物が大量に付着している。

図14-19～21は石製品である。19は砥石。仕上げ砥である。20は碁石であろう。21は火打石である。

#### 第4節 4面検出の遺構と遺物

##### 4面(図15)

4面は3面下約20cm、海拔5.5～5.6mにて確認された。当面は若干の炭化物及び土丹粒を含んだ暗黒褐色粘質土によって構成されるが、生活面としてはやや弱く、第3面構築時にその上面の削平を受けていると想定される。そのため調査区全体に広がる柱穴群(約30口)を検出したものの、その深さは10cm前後と概ね浅い。なお、柱穴のうち5口からは礎板も検出されているが、調査範囲狭小のため建築物を想定できる柱穴の並びは確認し得なかった。

##### 4面出土遺物(図16)

図16-1～10はかわらけである。1は手づくねの小皿である。復元で口径は7.8cm、器高は1.7cmを測る。胎土は橙色を呈し、微砂を多く含み粉質である。2～10は糸切りの小皿である。復元で、口径は8.0cm前後、底径は2～8が6.2cm～6.6cm、9・10が各々、5.5cm・4.8cm、器高が1.4cm～1.7cmを測る。2～8は器高が低く、底径が広い。胎土は6・8が橙色、他は肌色を呈し、微砂を含み粉質である。8は灯明皿である。

図16-11は常滑の捏鉢である。胎土は濃灰色を呈し、白色微石粒を多く含む。

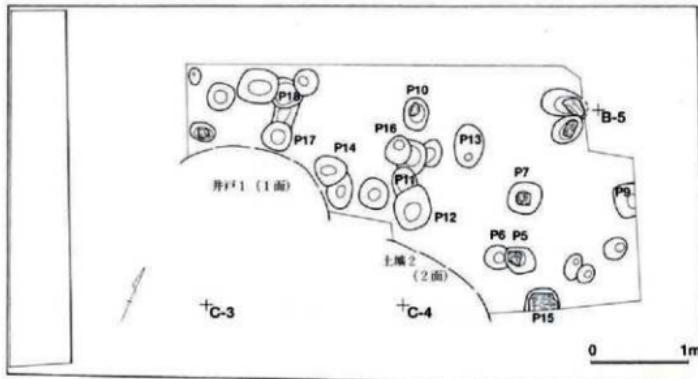


図15 4面遺構配置図

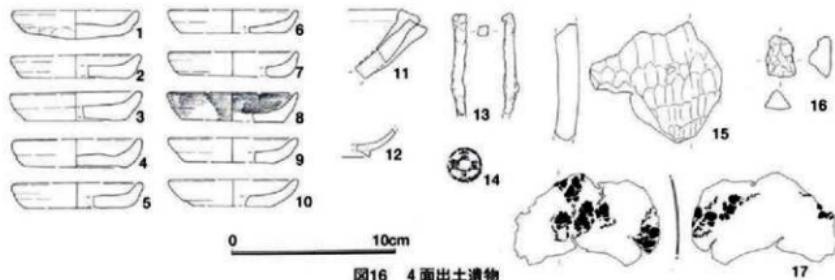


図16 4面出土遺物

図16-12は早島式土器である。胎土は白褐色を呈し、微石粒を含むが、精緻である。胎芯が黒く残る。図16-13は鉄製の釘である。

図16-14は銭。景祐元寶である。

図16-15・16は石製品である。15は滑石錫の胴部片である。16は火打石である。

図16-17は漆器の碗である。遺存状態が悪く、漆のみの検出である。黒地に朱で萬の文様が両面に施される。天地は不明である。

## 第5節 5面検出の遺構と遺物

### 5面（図17）

4面下20~30cm、海拔5.3m前後にて確認された暗黒褐色粘質土による生活面である。14世紀前半~13世紀末頃までの遺物が含まれる。検出された遺構は土壌3基、Pit 4口のみである。そのほかに調査区北壁際において30cm×20cm×厚さ16cmを測る安山岩1石が検出され、礎石と考えられる。

なお、先述したように5面下20~30cm(海拔5.0~5.1m)に第6面と考えられる地業面を一部確認したが、すでに掘削深度に達したためその平面的調査を行っていない。

### 土壤3（図17）

土壌3は調査区南東隅において検出され、その大半を調査区外に位置させる。そのため平面形は確認し得ないが、検出された規模は東西130cm、南北60cmを測る。調査区東壁の土層の観察により第4面からの掘り込みであることが確認され、その深さは50cm(海拔5.1m)を測る。

### 土壤4（図17）

土壌4は調査区中央北壁際において検出され、その北半部を調査区外に位置させる。そのため平面形は確認し得ない。深さは確認面(海拔5.28m)より28cmを測る。

### 土壤5（図17）

土壌5は第3面検出の土壌2によりその西部を失う。そのため平面形は確認し得ないが、直径70cmほど

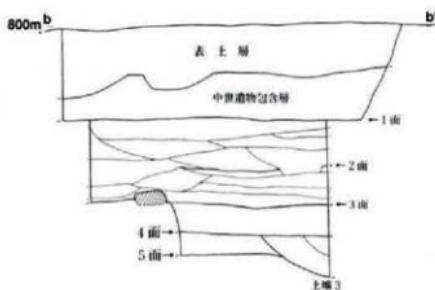
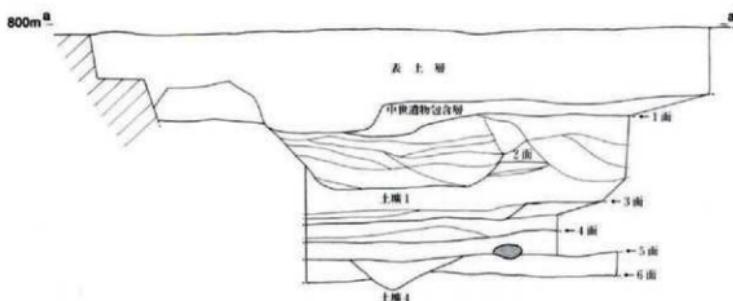
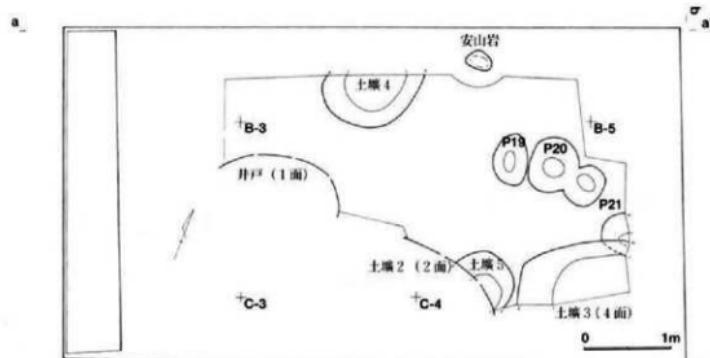


图17 5面造構配置図

### 土壤5出土遺物(図18)

図18-1はかわらけ転用円板である。直径は3.8cm、厚さは0.9cmを測る。

### 5面出土遺物(図19)

図19-1～5は糸切りかわらけである。1は大皿である。復元で、口径は11.8cm、底径は7.8cm、器高は3.5cmを測る。2～5は小皿である。いずれも胎土は淡橙色を呈し、微砂を多く含み粉質である。

図19-6は青白磁の水注もしくは壺の耳である。天地は不明。釉調は水青色を呈し、光沢・透明度共に優れる。素地は灰味白色を呈し、緻密である。

図19-7は軽石である。

### 中世層出土の古代遺物(図20)

図20-1は土師の壺である。口縁部の小破片である。胎土は橙色を呈し、微砂をとても多く含み粗い。焼成は良好である。

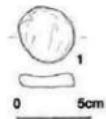


図18  
土壤5出土遺物

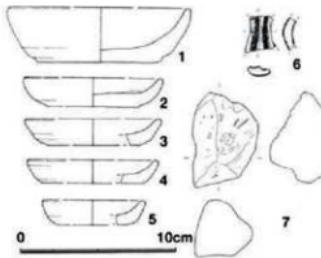


図19 5面出土遺物



図20 中世層  
出土の古代遺物

## 第4章 まとめ

第3章で報告した成果について若干の考察を加えたい。今回の調査は調査区が住宅の地下室建設予定部分（約20m<sup>2</sup>）に限られたため、遺構群の平面的な広がりを掴むことはできなかった。しかし、本調査地からは6期（1～6面）に亘る生活面が重層しており、部分トレンチによって確認した6面を除く1～5面からは建築遺構を始め井戸、土壙、石組み遺構等の多岐に及ぶ遺構が検出され、活発かつ長期的な人間の営みがあったことを確認した。

### 遺跡の年代観

出土かわらけから見た各面の年代観は、1面が15世紀代、2面が14世紀末～15世紀前半代、3面が14世紀中葉～後半代、4・5面が13世紀末～14世紀前半代に置けよう。また4面からは手づくねの小皿や器高が低く底径の比率が大きいタイプも出土しており、13世紀末葉より更に時代の上がる可能性を示している。さらに古代遺物の混入も見られ、周辺地域に古代遺跡の存在する可能性が十分に窺える。

### 遺跡の隆盛期

次に各面における遺構密度の変化をたどってみよう。今回、各面を比較して圧倒的に検出遺構の数に勝っていたのは、4面で30口ほどの柱穴が見つかっており、数次における建物の立て替えがあったことを物語っている。一方4面に続く3面からは、調査区の北東角から鎌倉石切石による基壇様の石列が、直角に曲がった形で検出され調査区外へ広がりを見せており、堂宇的な建築遺構の存在が推察される。今回の調査成果からは4面・3面期が本遺跡において最も隆盛した時期と判断できよう。

### 遺跡の性格

先にも述べたが今回の調査区は、極く狭小で遺跡の種類・性格を確実に掴むことはなし得なかったが、検出遺構の様相から3面期においては町屋的な要素は希薄で、むしろ寺院的な色合いが濃いように思われる。鎌倉が衰亡する15世紀段階においても、1・2面に見られる生活遺構の検出があることなども、谷戸内に存在した寺院（第1章参照）が姿を消して行く時期とちょうどオーバーラップしている。

### 結語

以上の理由で遺構群の展開あるいは性格等について、確実かつ多くを知ることはできなかった。しかし今回の調査で調査地には、少なくとも6時期以上の中世生活面が良好な状態で遺存していることが掴めた。またこうした遺存状況は、調査地のみならず周辺地域に確実に広がりを見せていると考えられ、弁ヶ谷内における今後の発掘調査に際してはこの成果を念頭に入れて、充分な注意をはらわなければならないであろう。また、良好な遺存状態を示す遺跡の発見が期待されよう。

# 写 真 図 版



▲A. 造跡地調査前(南より)



▲B. 1面全景(北より)

図版2



▲A. 2面全景(南より)



▲B. 井戸1(北より)



▲A. 井戸 1 (北より)



▲B. 基壇状造構(東より)

図版 4



▲A. 3面全景(南より)



▲B. 石組み造構(西より)



▲A. 石組み造構(東より)



▲B. 4面全景(南より)

图版 6



▲ A. Pit7・Pit5(西より)



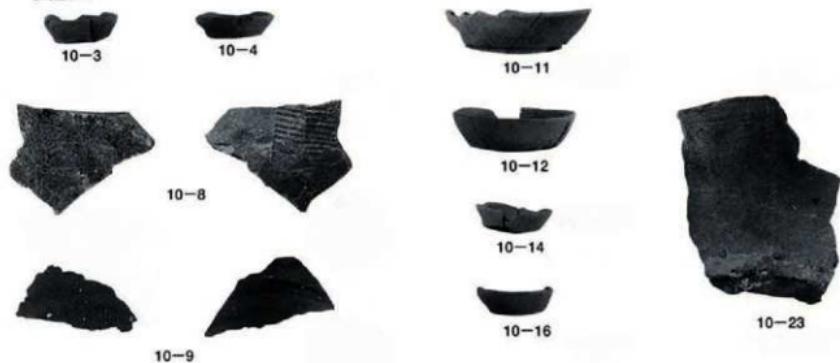
▲ B. 5面全景(南より)

図版 7

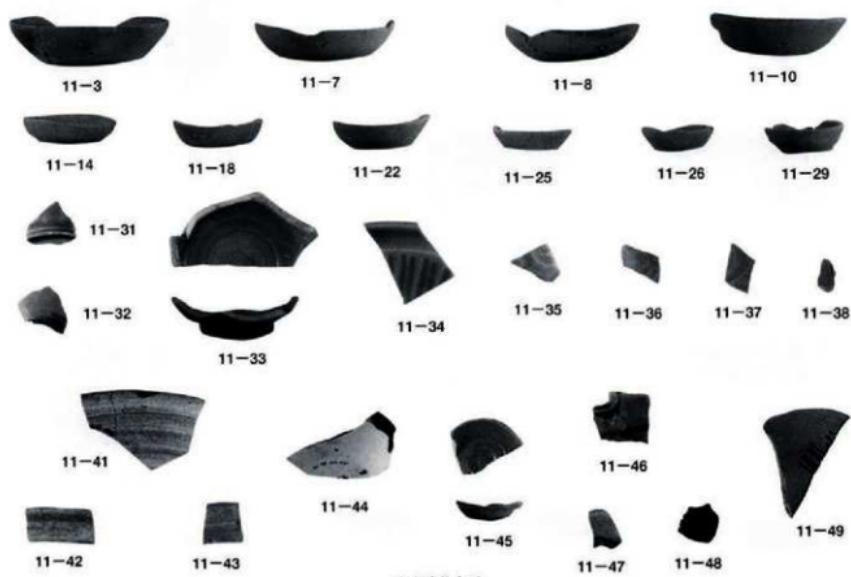


出土遺物(1)

図版 8

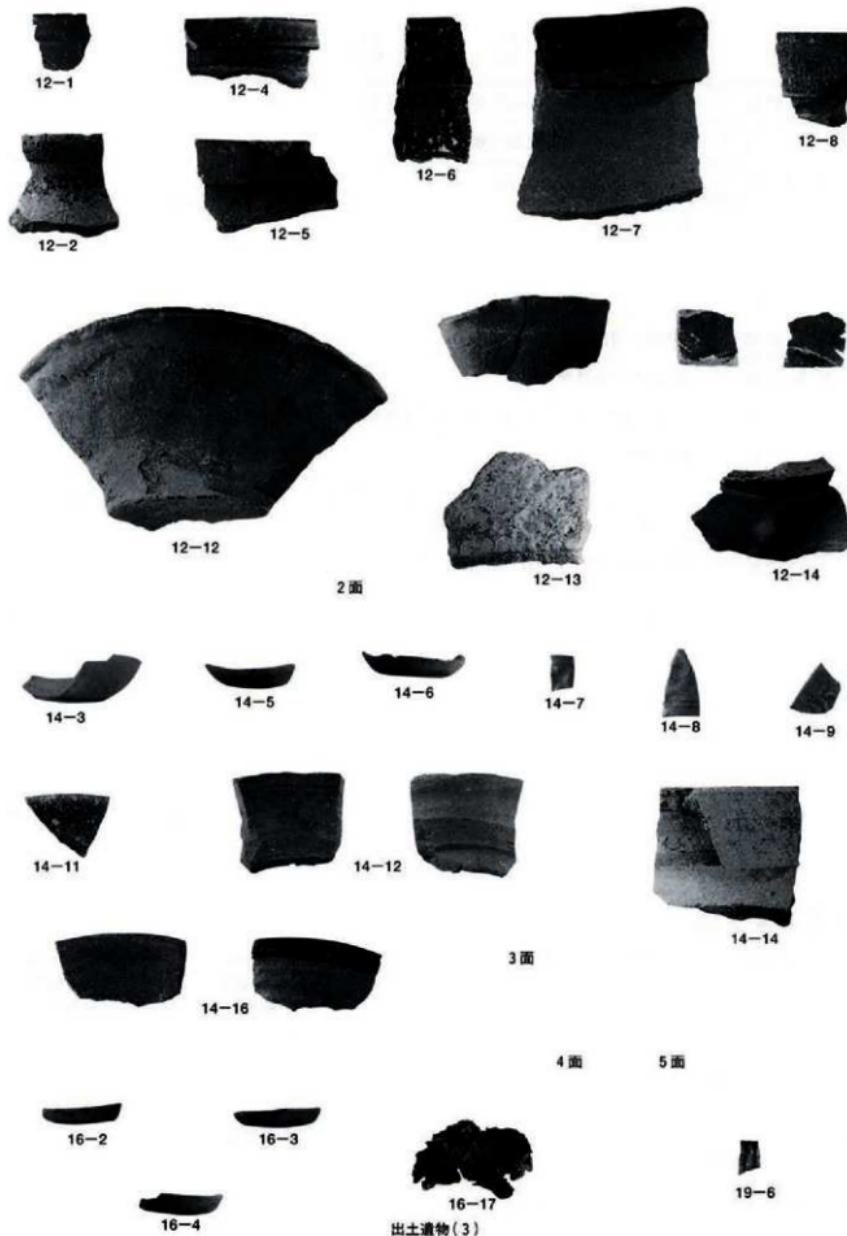


井戸 1 下層



出土遺物(2)

図版9



出土物(3)

# 報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成12年度発掘調査報告書							
卷次	17							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	宮田眞 滝澤晶子 諸星真澄							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 神奈川県鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2001年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因	
井ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 材木座四丁目 336番7	14204	327	35° 18' 10"	139° 33' 26"	19990623 + 19990723	28	専用住宅 の新築
取容遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
井ヶ谷遺跡	中世都市	中世 13世紀末 15世紀後半	井戸 土塁 柱穴 石組み遺構	かわらけ 船載陶磁器 瀬戸 常骨 その他国産陶磁器 漆器 石製品 金属製品 錢 土製品	13世紀末から15世紀 代にわたる6時期以上 の中世生活面を検出。			

はせこうじしゅうへんいせき  
長谷小路周辺遺跡(No.236)

由比が浜三丁目254番15外 2 筆地点

## 例　　言

1. 本報は鎌倉市由比ヶ浜三丁目254番15外2筆地点に所在する、個人専用住宅の新築に先立ち行われた、長谷小路周辺遺跡(県遺跡台帳No236)の発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は平成11年7月1日から同年8月31日にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
3. 本報使用の遺構図及び遺物実測図は調査員が分担し、原稿執筆は、第1章、第2章、第3章を福田誠、第4章を神山晶子、第5章を福田が担当し、編集は福田が行った。
4. 本報に使用した遺構全景写真は、木村美代治がボール式リモコン撮影装置を用いて行ったものである。個別遺構写真・出土遺物写真は、福田・菊川が撮影を行った。
5. 発掘調査の体制は以下の通りである。  
主任調査員 福田 誠(鎌倉市教育委員会嘱託) 原 廣志  
調査員 菊川 泉 神山晶子 木村美代治  
調査補助員 本城 裕 須佐仁和 早坂伸市 中村一夫  
作業員 (社)鎌倉市シルバー人材センター
6. 発掘調査資料(記録図面・写真・出土遺物)は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。

## 目 次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境 .....	40	第1節 A区の遺構 .....	42
第1節 遺跡の位置 .....	40	第2節 B区の遺構 .....	43
第2節 歴史的環境 .....	40	第4章 出土した遺物 .....	50
第2章 調査の経過 .....	40	第5章 まとめ .....	50
第3章 検出した遺構 .....	42		

## 挿 図 目 次

図1 調査地点位置図 .....	41	図12 A区1面 遺構1・2 .....	53
図2 調査地点周辺図 .....	41	図13 A区1面 遺構1・2 .....	54
図3 國土座標値とグリッド設定図 .....	42	図14 A区2面まで .....	55
図4 A区土層堆積図 .....	44	図15 A区2面 方竪4 土壙4 .....	56
図5 A区2面全測図 .....	45	図16 A区3面道路下 方竪5 井戸 .....	57
図6 A区3面全測図 .....	46	図17 A区3面 方竪6 土壙10 .....	58
図7 B区土層堆積図 .....	47	図18 A区3面 地山まで 土壙12~16 .....	59
図8 B区1・2面全測図 .....	48	図19 B区1・2面包含層 .....	60
図9 B区3面・地山面全測図 .....	49	図20 B区1~3面遺構 .....	61
図10 A区表土・1面包含層 .....	51	図21 B区井戸上層 .....	62
図11 A区1面包含層下層 .....	52	図22 B区地山まで 井戸 土壙6・11・12 .....	63

## 図 版 目 次

図版1 A区2面全景・道路遺構・土壙16 .....	81	図版10 A区2面の遺物 .....	90
図版2 A区3面全景・方竪5 .....	82	図版11 A区3面の遺物 .....	91
図版3 A区方竪6 .....	83	図版12 A区3面の遺物 .....	92
図版4 B区全景 .....	84	図版13 A区3面B区1・2面の遺物 .....	93
図版5 B区井戸 .....	85	図版14 B区1~3面の遺物 .....	94
図版6 A区出土遺物 .....	86	図版15 B区井戸上層の遺物 .....	95
図版7 A区出土遺物 .....	87	図版16 B区地山面井戸土壙の遺物 .....	96
図版8 A区1面の遺物 .....	88		
図版9 A区1・2面の遺物 .....	89		

# 第1章 遺跡の位置と歴史的環境

## 第1節 遺跡の位置

調査地点の鎌倉市由比ヶ浜三丁目254番15外2筆は、榎目郵便局の一軒おいた西側に位置する。若宮大路下馬交差点より長谷寺に向かい西に延びる由比ヶ浜通りと、由比ヶ浜通りから岐れ稲瀬川を経て稲村ヶ崎に向かう二つの道路に挟まれ面している。

## 第2節 歴史的環境

調査地点の北側に面する由比ヶ浜通り（国道134号線）は「長谷小路」の道筋に当たると考えられるが、この長谷小路の名は長谷寺（註1）が創建されて以降の名で、大町大路の一部とも考えられる。また、調査地点の南側を東西に、長谷小路から稲村ヶ崎に向かって延びる路は、稲村ヶ崎路と考えられる。

『吾妻鏡』によると建長四年四月、宗尊親王が京都から下って鎌倉に入ったときに、極楽寺坂は通らず、稲村ヶ崎を廻り由比ヶ浜の鳥居の西を経て下の下馬橋に至ることが記されている。この稲村ヶ崎からの道筋は、海づたいに稲村ヶ崎を廻り、稲瀬川から内陸に入り六地蔵・若宮大路一の鳥居を経て北に、そこから下の下馬橋に至ったと考えられる。（註2）

稲瀬川から内陸に入って六地蔵に向かう途中、長谷小路との合流地点付近に調査地点が位置するものと考えられる。

調査地点の一番は、一の鳥居付から東西に延びる砂丘の頂部にあたり、西側は長谷、南側は海岸に向かいながらかに下っている。北側には砂丘に沿って東西に長く後背湿地（ラグーン）が広がっていたと考えられ、しばしば古代の土器片など遺物が採取されている。

調査地点一帯の町名「榎目」は、佐助ヶ谷と長谷の間、榎目ヶ谷に由来すると考えられる比較的古い地名で、『吾妻鏡』によれば鎌倉幕府第四代執權の北条経時はここ榎目ヶ谷に葬られたという。

註1 長谷寺は天平八年(736)の創建と言うが、大和長谷寺の縁起にならったものと思われる。

詳しい創建年代は不明であるが、梵鐘に文永元年(1264)七月十五日の銘が見られることから鎌倉時代末には成立していたと考えられる。

註2 この稲村ヶ崎から稲瀬川・六地蔵・一の鳥居・元八幡宮・辻の薬師を経て名越に至道筋は、車大路かとも旧東海道の道筋に近いともいわれ大町大路よりも古いと考えられる。

# 第2章 調査の経過

長谷小路周辺遺跡内の、神奈川県鎌倉市由比ヶ浜三丁目254番15外2筆の個人専用住宅新築工事に伴う建築申請を受け、鎌倉市教育委員会文化財課は先行して行った試掘調査により、新築工事に先立ち埋蔵文化財の発掘調査の必要性を認めた。施主の了解を戴き、住宅の基礎が入る部分に鎌倉市教育委員会が国庫補助事業埋蔵文化財発掘調査を行う運びとなった。発掘調査は、平成11年7月1日より同年8月31日までの日程で行われ、調査対象面積は85m<sup>2</sup>である。

調査にあたって、調査地の北方を東西に走る由比ヶ浜通りを意識して測量用の方眼を設定した。道脇に設置してある市4級基準点のうちD282(X=-76,550.369・Y=-26,182.200)とD281(X=-76,503.575・Y=-26,126.563)を用いて調査原点(X=-76,462.274・Y=-26,068.689)を設置した。また、調査には、交



図1 調査地位位置図

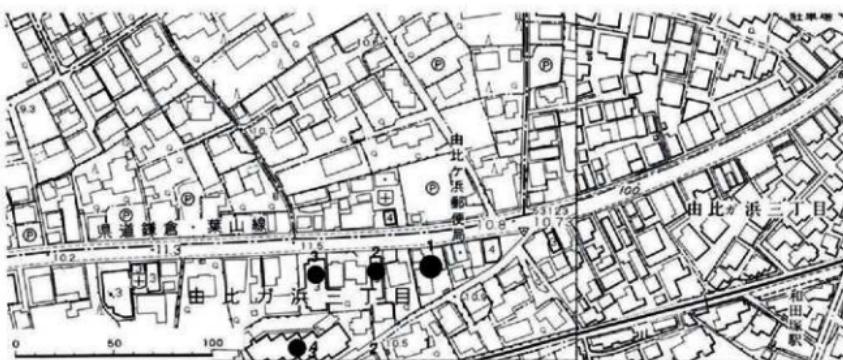


図2 調査地点周辺図

1. 調査地点
2. 長谷小路周辺遺跡（尺ビル）
3. 長谷小路周辺遺跡（由比ヶ浜三丁目258番1地点）
4. 長谷小路周辺遺跡（由比ヶ浜三丁目258番8地点）

差点脇に設置してある市3級基準点（No53123）の海拔高（10.745m）を移動し、調査地の脇に設けた仮水準点（11.390m）を用いた。調査地に設定した方眼の南北軸線は真北よりN-11° 10' 32" -Wである。調査地点の経緯は東経139° 32' 47"、北緯35° 18' 37"である。

## 第3章 検出した遺構



由比ヶ浜通り（国道134号線）

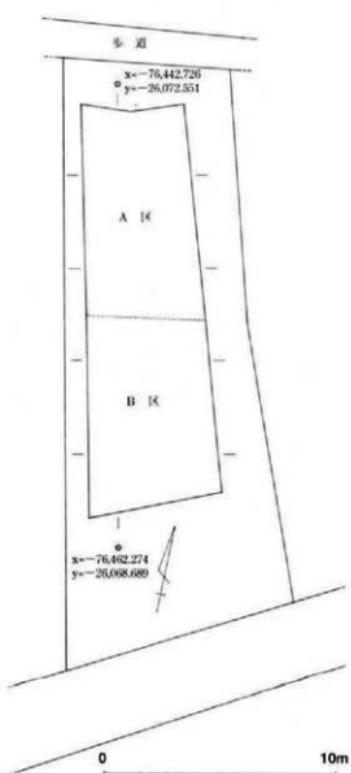


図3 國土座標とグリッド設定図

本遺跡では調査をA区・B区に分けて調査を行ったが、遺構の残存状態の極端な違いから、A区については計2面の遺構面を検出した。B区は第1面・第2面の区別が付きにくく第1・2面とまとめたが、B区の第3面・地山面とA区の第3面がそれぞれ相当する。

### 第1節 A区の遺構

#### 第1面

搅乱が激しく面及び遺構の確認が出来ず、2面に掘り下げる途中に方堅1・2として確認されたものである。遺構の残存状況は極端に悪く、写真・図面等の記録は断念したものである。覆土中の遺物を取り上げたものを国示してある。

#### 第2面

##### 道路遺構

1面で僅かに頭を除かせていた土丹面である。現在の由比ヶ浜通りに並行し東西方向に延びると考えられる。土丹突き固めた面と砂面が交互に少なくとも3回積み重なっている状況が確認された。

由比ヶ浜通りと並行することから、かつての長谷小路と推測される。

##### 方形堅穴建築址

道路遺構の南、ほぼ基軸を同じくする方形堅穴建築址（以下方堅）を2棟検出した。方堅3を方堅4が切る形となり、更に方堅4を土壙4が切り込んでいる。方堅3は僅かに西壁の一部と北壁が残るのみであった。規模は不明である。方堅4は南北4m、東西不明である。南壁には鎌倉石製の石材が僅かに遺存していた。

##### 土壙

土壙4は方堅4を切り込んでいる。南北2.5m、東西不明の土壙である。土壙5は南北約4mの不定形の土壙である。

#### 第3面

##### 方形堅穴建築址

方堅を2棟検出した。方堅5の掘方は南北5.7mで、底面

に鎌倉石製の切石を巡らしている。切石から推測する方堅5の規模は南北4mである。東西幅は調査区外に延びるため不明である。方堅6は南北約7mの掘方を持つ大型の方堅である。

2面の土壙5はこの方堅6の埋没時の窪みとも考えられる。

#### 土壙

土壙6は道路造構面の下で確認した。規模は南北約1.2m、東西約1.3mの擂鉢状の土壙である。

#### 井戸

井戸は方堅6の掘削中に確認し方堅6を切り込んでいた造構である。掘方の径約1.3mである。壁際のため崩落の危険があるため、完掘していない。

## 第2節 B区の遺構

### 第1・2面

A区同様に擾乱が激しかったが、1・2面という形で調査を行った。

#### 土壙

土壙1は東西約1.5mの擂鉢状の土壙である。土壙2は僅かにL字状のコーナ部のみである。方堅の残りとも推測される。土壙3は調査地の南壁際で位置する東西2m程の方形の土壙である。小型の方堅の可能性もある。方堅4も同じく南北2.8m程の方形の土壙になるものと推測される。壁際のため規模は不明。土壙5は土壙1の右隣に位置する径80cm程の擂鉢状の土壙である。

#### 第3面・地山面

A区と異なりB区では堅く締まった黄灰色砂の地山面を確認した。地山面の確認されてない場所を3面としたが、ほぼ同一面である。

#### 土壙

土壙7は井戸を切り込んでいる径2mほどの擂鉢状の土壙である。土壙8は南壁際で確認した方形の土壙である。更に南と西に延びることから、方堅と推測されるが規模不明である。土壙9も南壁際で検出された東西2.5m程の落ち込みである。調査区外に延びるため規模等は不明である。土壙10は土壙7の南に位置する径1m程の土壙だが、土壙7に大半を削り取られ委細不明である。土壙11は井戸の西、西壁との間で確認した土壙である。南北2m程であるが形等は不明である。土壙12は北壁際で検出した土壙である。東西約1m程の規模である。

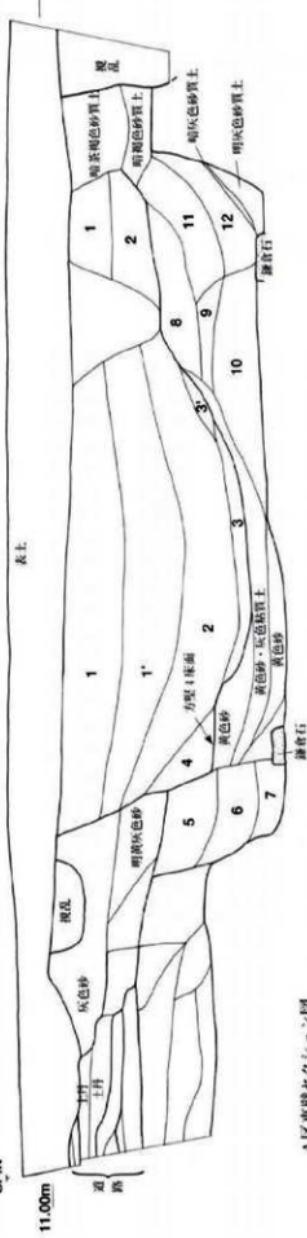
#### 井戸

東西5m以上、南北4.5m、深さ約2.2m以上の大きな掘方を持つ井戸である。底面附近で一辺約1mの井戸枠木組みと漆喰の痕跡を確認した。遺存状態が悪く、湧水と砂地のため完掘は断念した。

B区井戸(図21・22)では遺物の出土状況から見て、青磁・白磁片が多く出土している。とくに青磁では蓮弁文碗・白磁では口兀皿が数を占めている。地山面の遺構(図22)において、遺物に関して特に上層との変化は感じられない。

以上、本遺跡は道路と平行する方形堅穴建築址と井戸、土壙といった組合せになると考えられる。

SP-S



1. 透明色砂質土 原生地帯・土堆地帯。
2. 透明色砂質土 5~15cmの土堆地帯。貝殻多。
3. 灰色粘土質土。
4. 相模貝殼 素地少量含む。
- 5~7. 黄灰色砂 素地は原生地・土堆地含G. 方眼5の層認め。
- 8~9. 黄灰色砂 素地、土堆地・貝殼地多。
10. 透明色砂質土 土堆地・原生地含C.
11. 黄灰色砂 原生地・土堆地多。
12. 黄色砂 8~12cm厚5の層認めの土。
13. 土堆層。
14. 新透水性。
15. 黄透水性 (原生地含C)
16. 黄透水性
17. 透明透水性
18. 黄透水性 (原生地含C)
19. 土堆層
20. 透水性土堆
21. 土堆層
22. 黄透水性
23. 土堆層

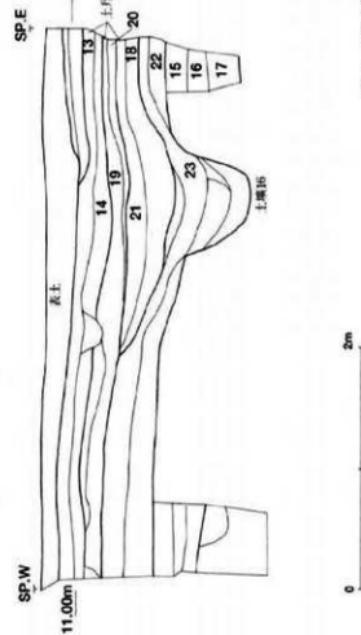


図4 A区土壤堆積図

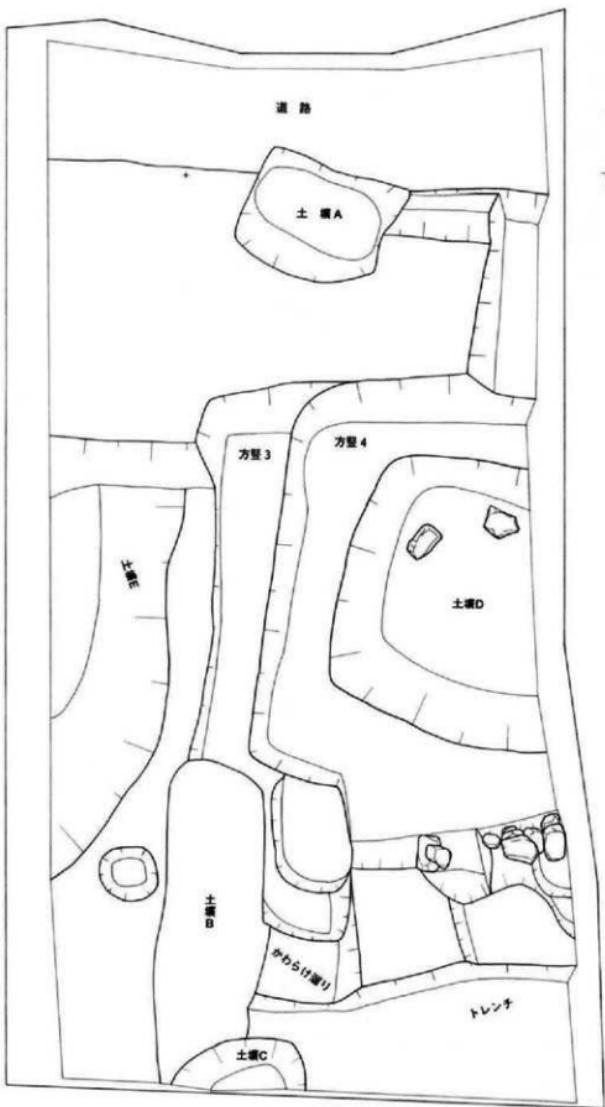


図 5 A区 2面全測図

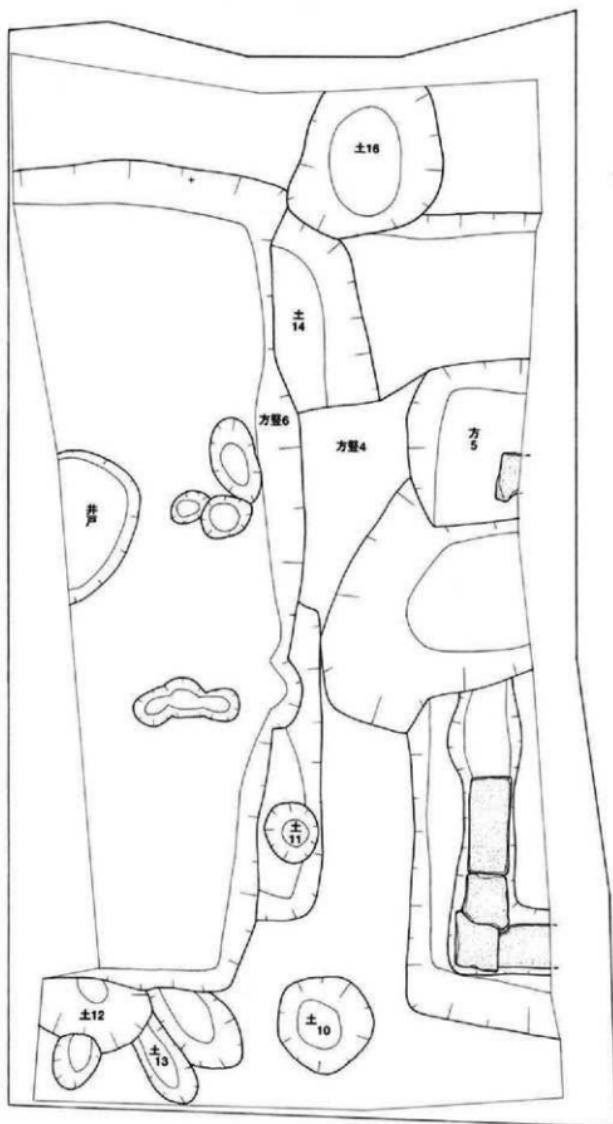


图6 A区3面全测图

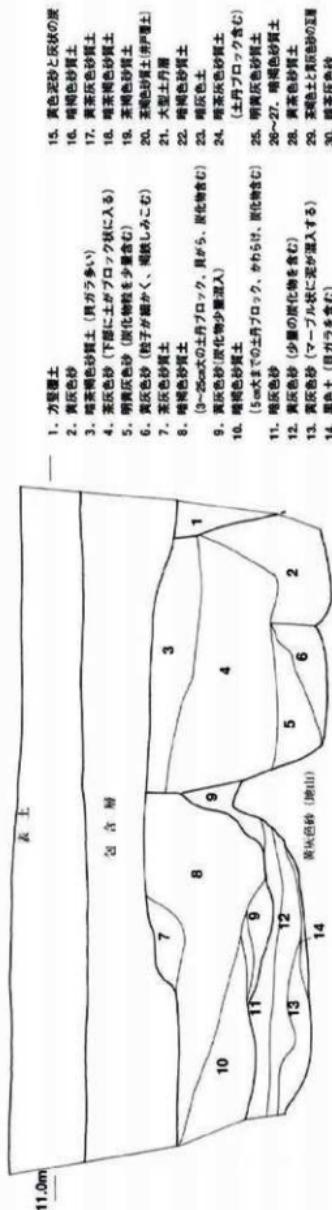
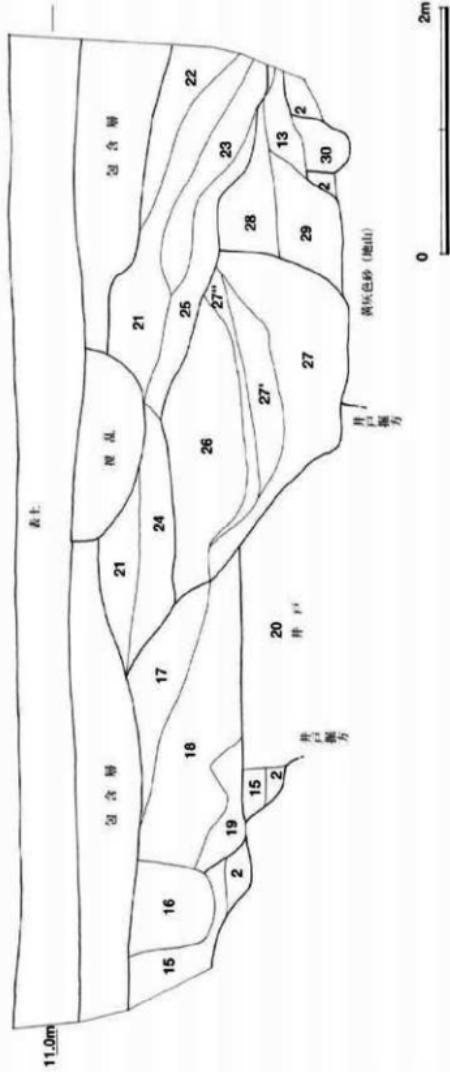


図 7 地区土壤堆積図

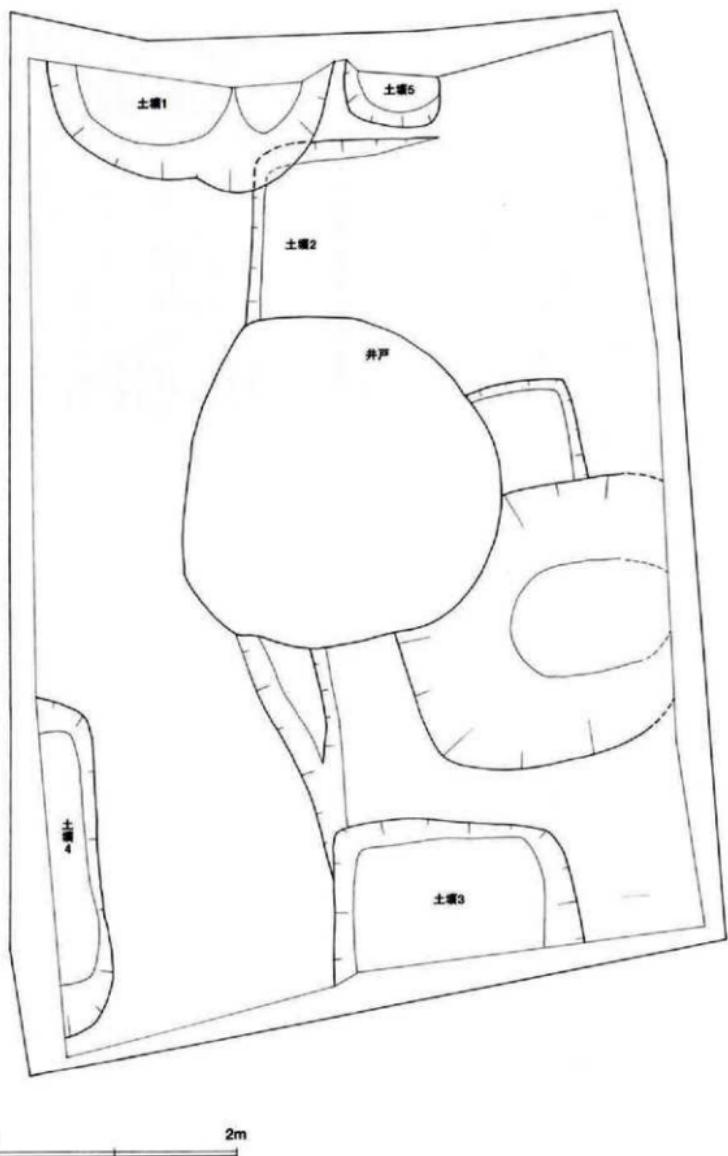


図8 B区1・2面全測図

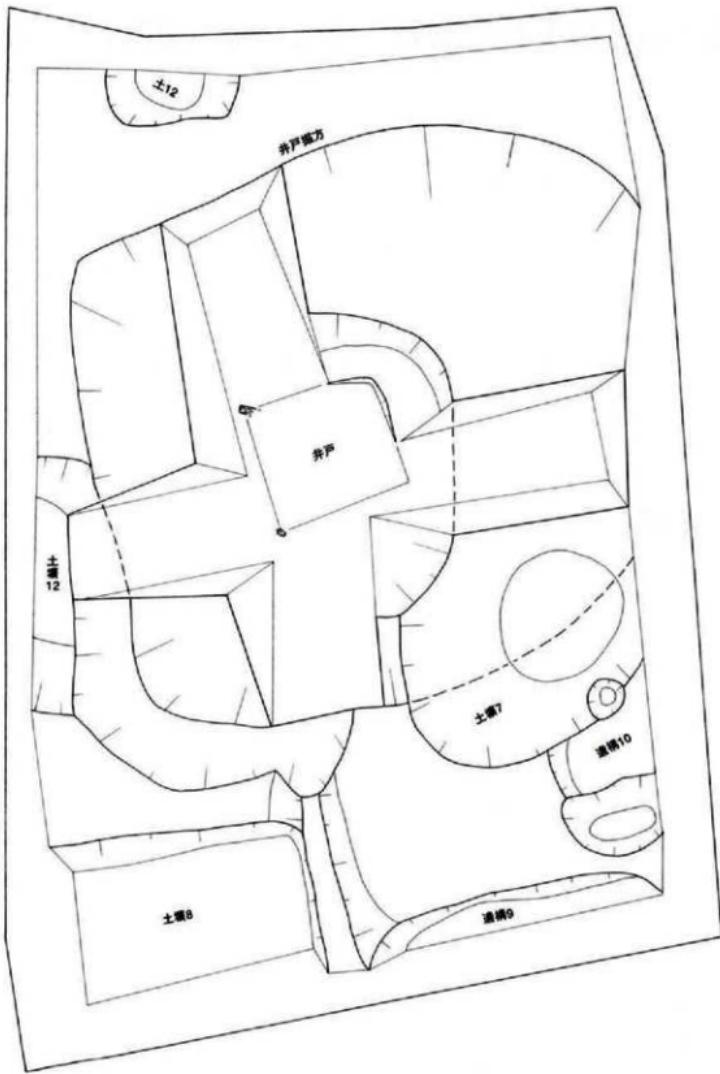


図9 B区 3面・地山面全測図

## 第4章 出土した遺物（図10～22、図版6～18）

本遺跡は、A区・B区に分けて調査が行われたが、ともに1面包含層、1面遺構に伴う遺物には、器壁が薄く丸底のかわらけ、縁帶の幅のやや狭い常滑の甕などが含まれ、14世紀前半代の年代が与えられる遺物が多く見られる。A区1面方堅1・2は遺存状態が悪く、遺構図中に示すことが出来なかつたが、遺物は埋め土中のものであり直接遺構に伴うものではないと考える。A・B区の2・3面遺構出土の遺物（図14～20）は口径が7～8cm、11～12cmの器壁の均一な大形と中形のかわらけが見られる。また、白磁口兀皿片の点数も多く、早島式土器を含むなど、13世紀末～14世紀初め頃の傾向が見られる状況であった。

B区井戸（図21・22）からは、遺物の出土状況から見て、青磁・白磁片が目立つ。特に青磁では蓮弁文碗・白磁では口兀皿が数を占めている。地山面の遺構（図22）で、遺物に関して特に上層との変化を感じられない。

以上、遺物から見て本遺跡の年代幅としては、13世紀後半から14世紀前半代が当たるものと考える。

## 第5章 まとめ

当遺跡、長谷小路周辺遺跡（由比ヶ浜三丁目254番15地点外筆）は、今回の調査で東から西に向かう砂丘状に営まれていたことが明らかになった。道路遺構・方形堅穴建築址・井戸等が発見された。

### 道路遺構

A区北辺で東西方向に延びる道路遺構が検出確認された。現在の由比ヶ浜通り（国道134号線）の六地蔵より西を『鎌倉市史』では長谷小路と想定し、長谷小路南側を長谷小路周辺遺跡としている。

今回、検出確認された道路遺構はまさに長谷小路の南辺に当たるものと考えられる。道路の構造は、土丹と砂を交互に積み重ねたもので、幾度も補修を重ねた様子が伺える。

調査地の南側を西南に、長谷小路から稻村ヶ崎に向かって延びる路は、稻村ヶ崎路と考えられる。稻村ヶ崎を通り、稻瀬川河口から内陸に入って六地蔵に向かう道路と推定され、長谷小路周辺遺跡（由比ヶ浜三丁目258番1地点・由比ヶ浜三丁目194番40地点）の調査でこの稻村ヶ崎路と考えられる道路遺構が検出されている。当遺跡では、掘削深度の関係で南側道路際は調査されていないため確認はされなかった。しかし、長谷小路と、稻村ヶ崎路との合流地点付近に調査地点が位置するものと考える。

### その他の遺構

長谷小路に沿って建ち並ぶ方形堅穴建築址群とその裏手にある井戸・土壙といった構図が考えられる。遺物を概観するならば、地山面のかわらけは手捏ね成形のかわらけがほとんど見られない。糸切り成形のかわらけも、いわゆる薄手丸深になりきっていないと考えられることから、13世紀後半から14世紀前半の年代が与えられよう。

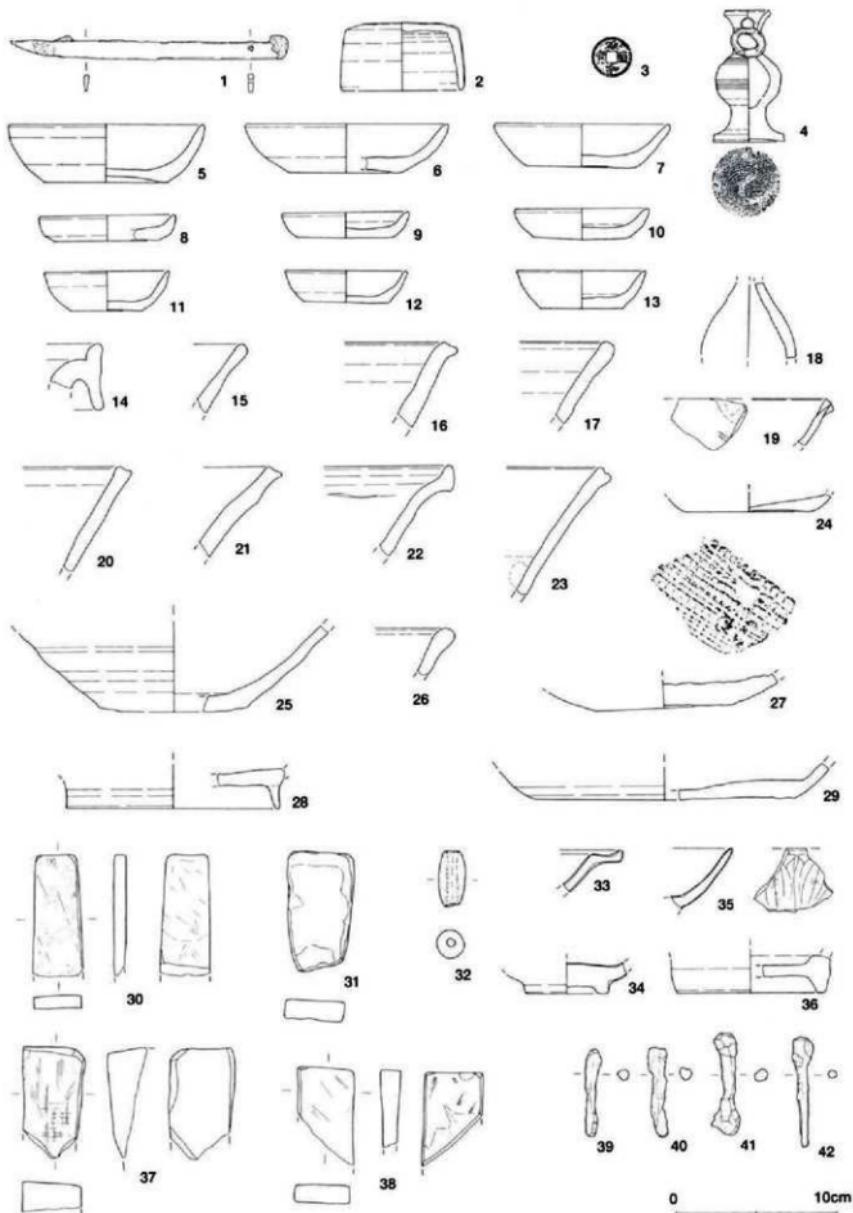


图10 A区表土·1面包含层

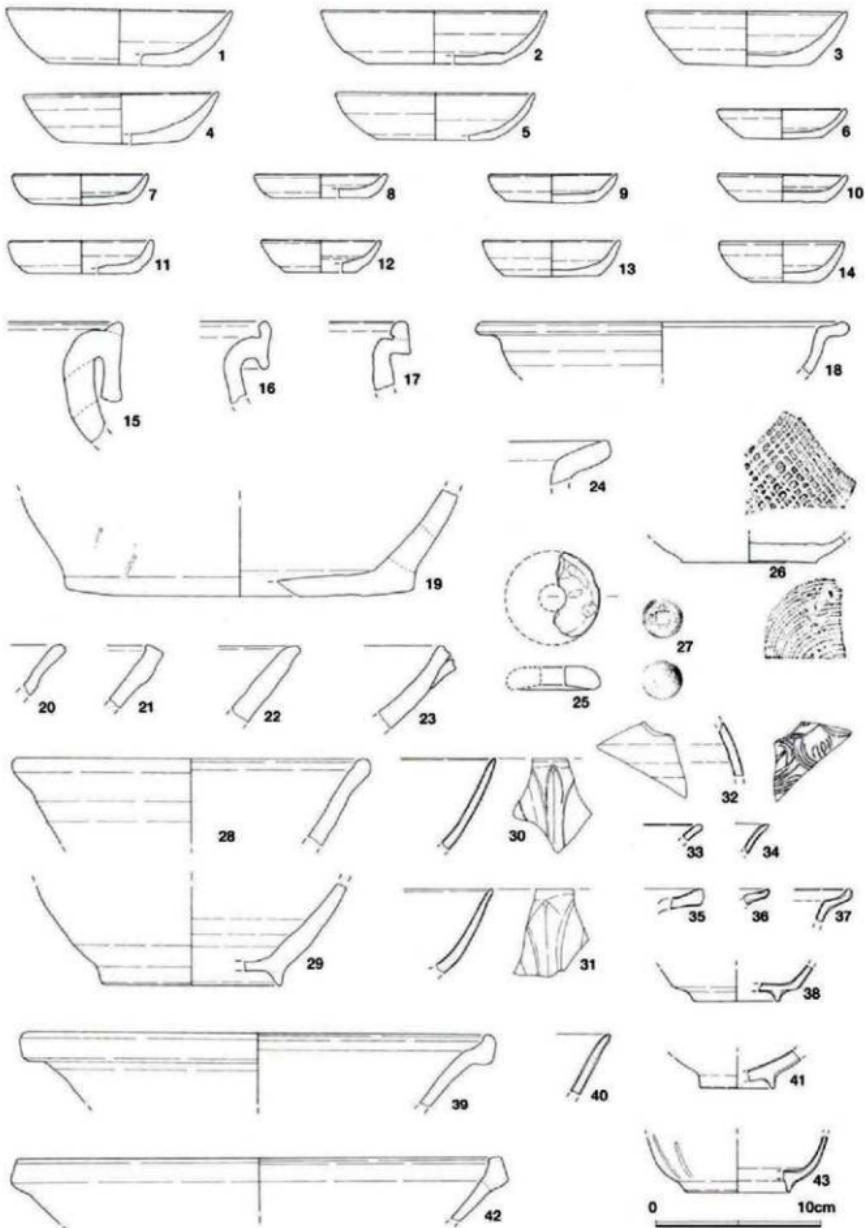


图11 A区1面包含层下层

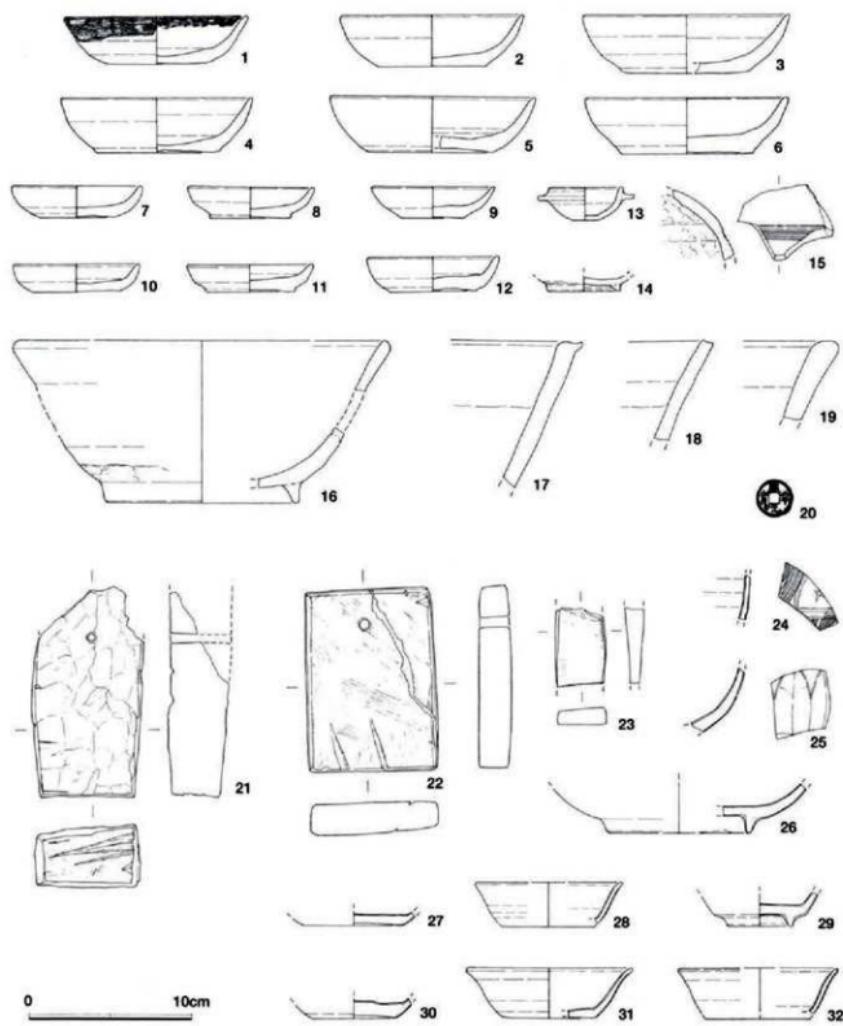


図12 A区1面 造構1・2

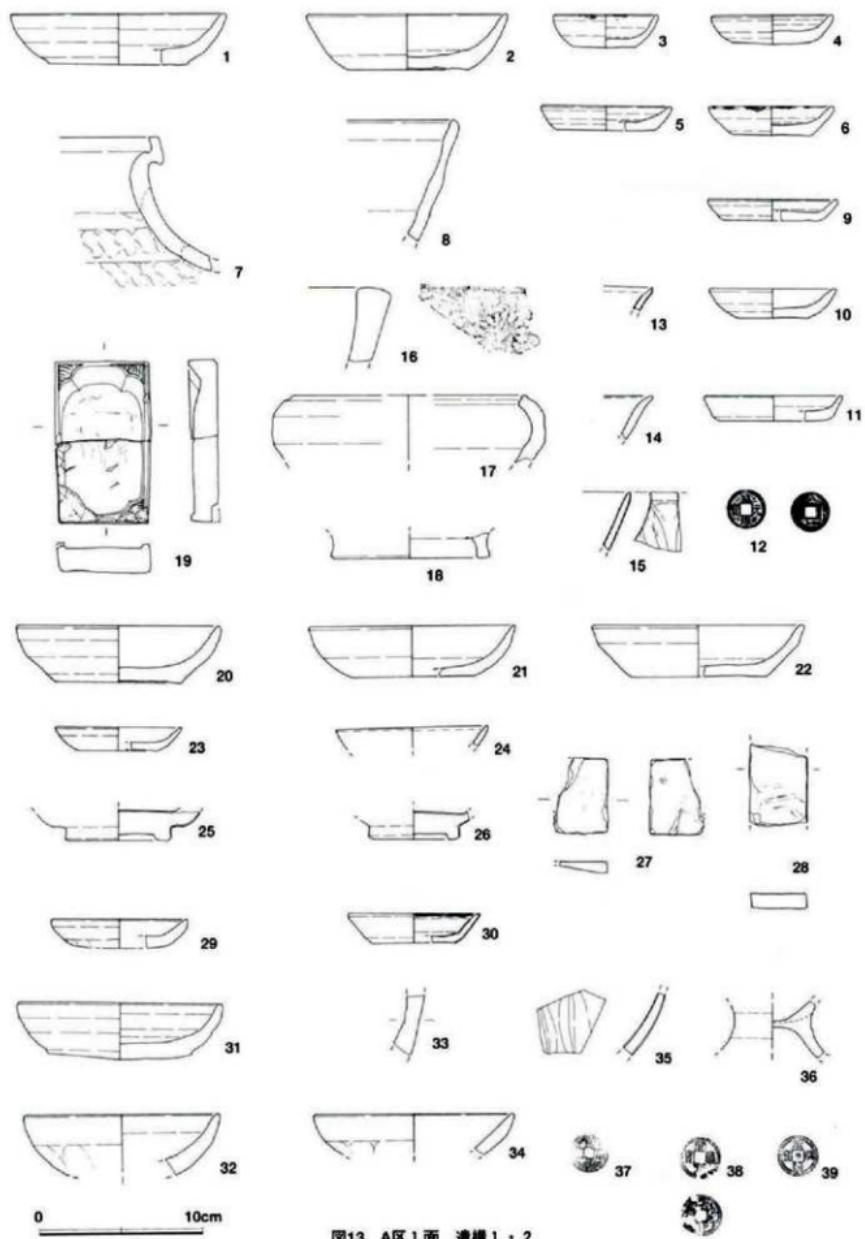


図13 A区1面 遺構1・2

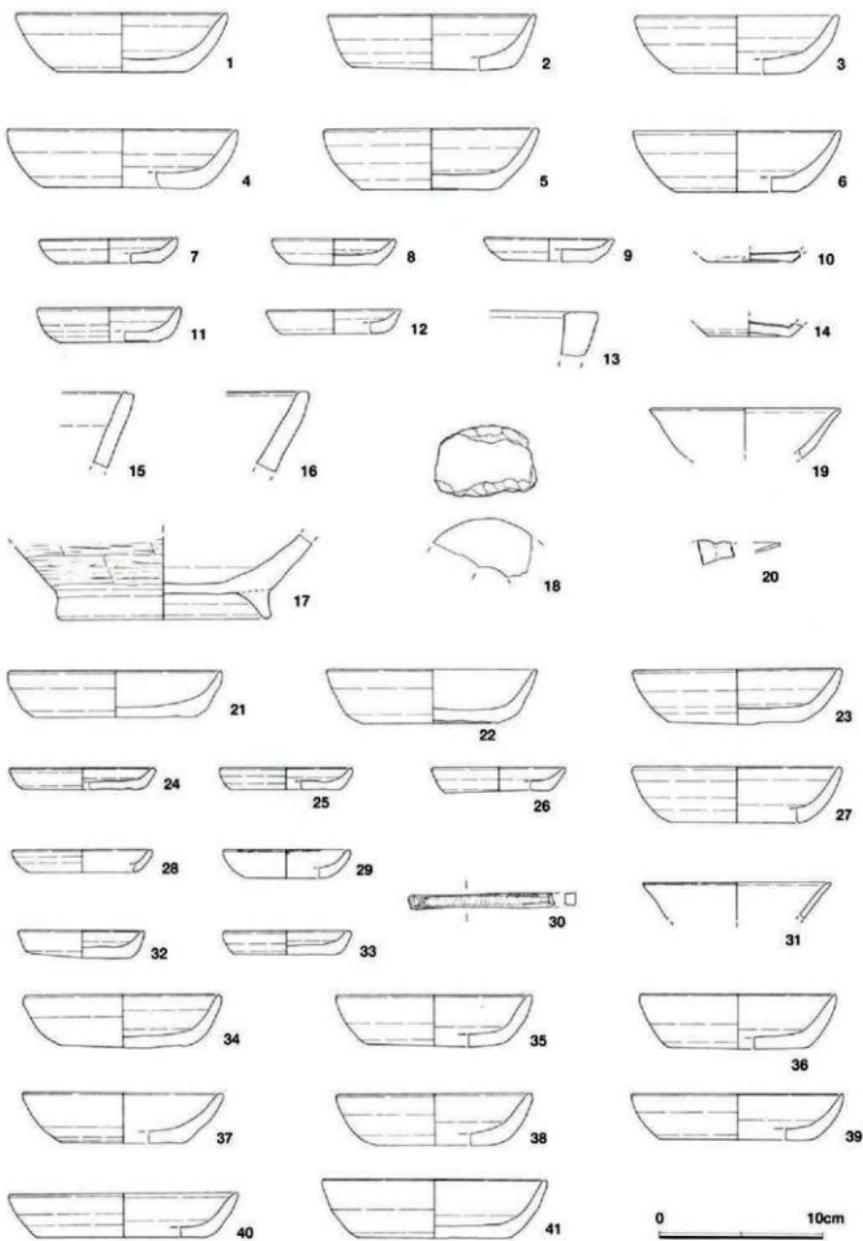


図14 A区 2面まで

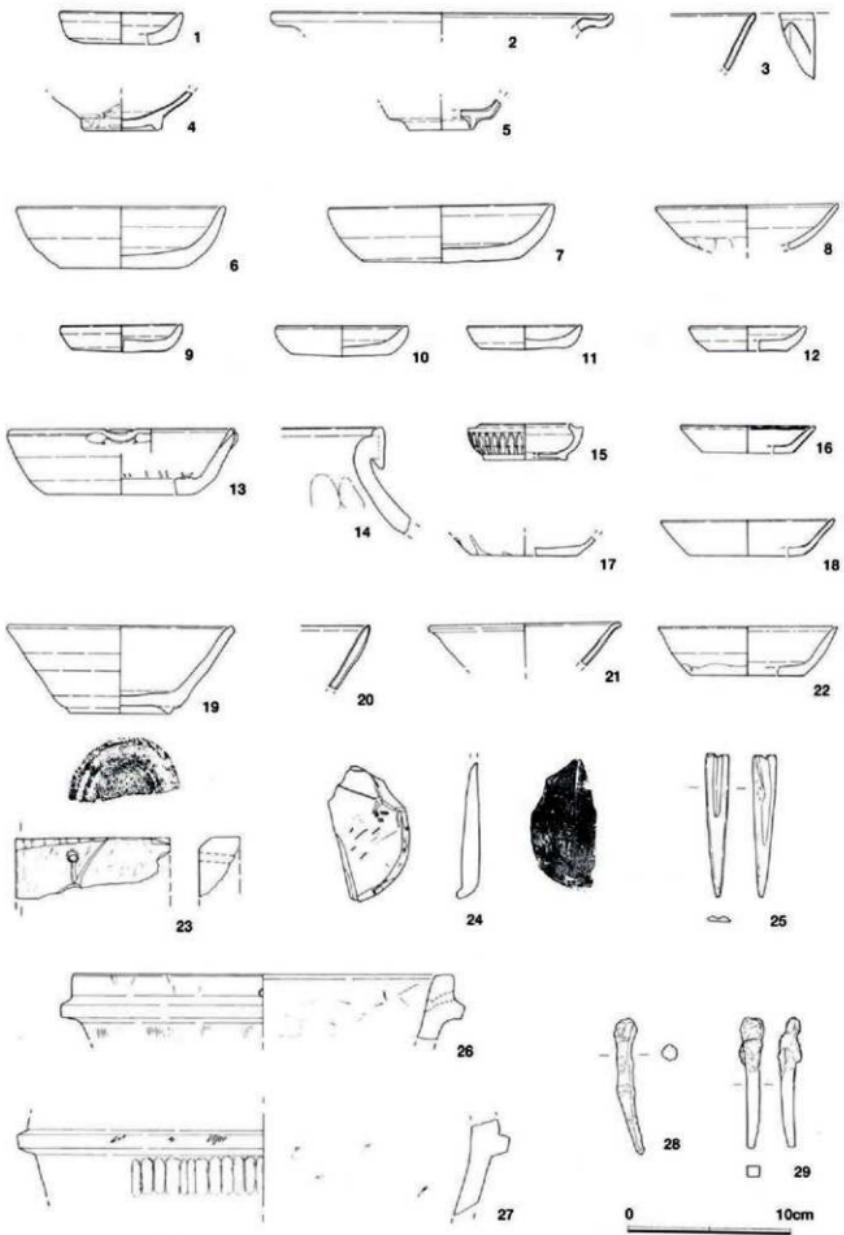


図15 A区2面 方堅 土堅4

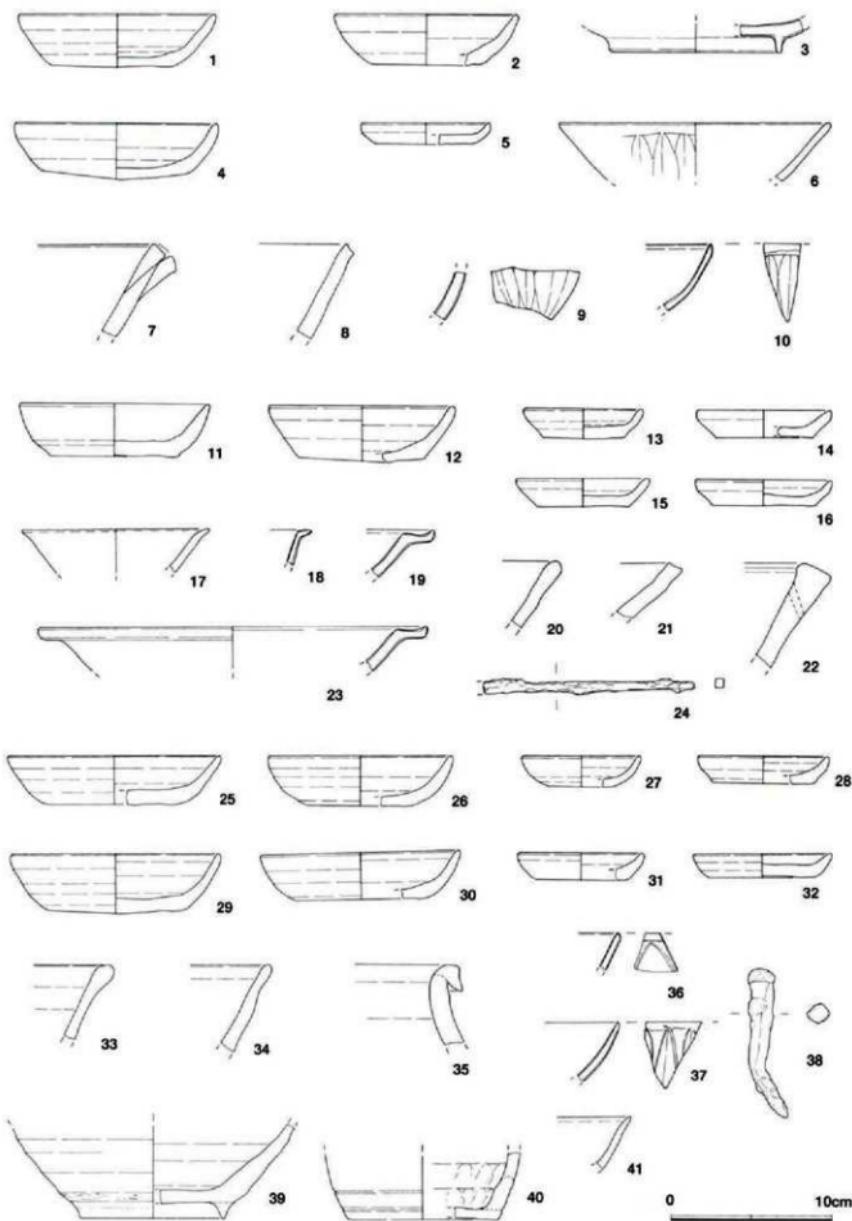


図16 A区3面 道路下 方堅5・井戸

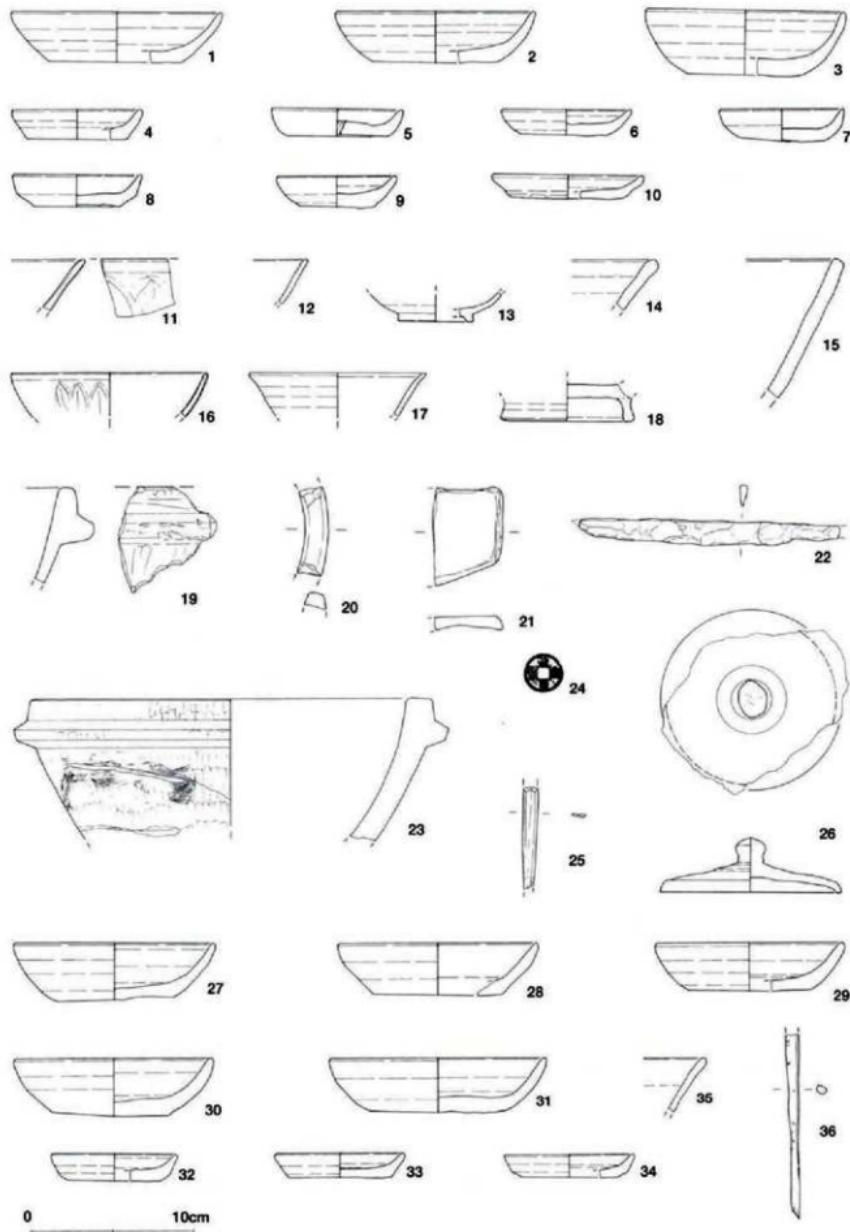


图17 A区3面 方竖6 土块10

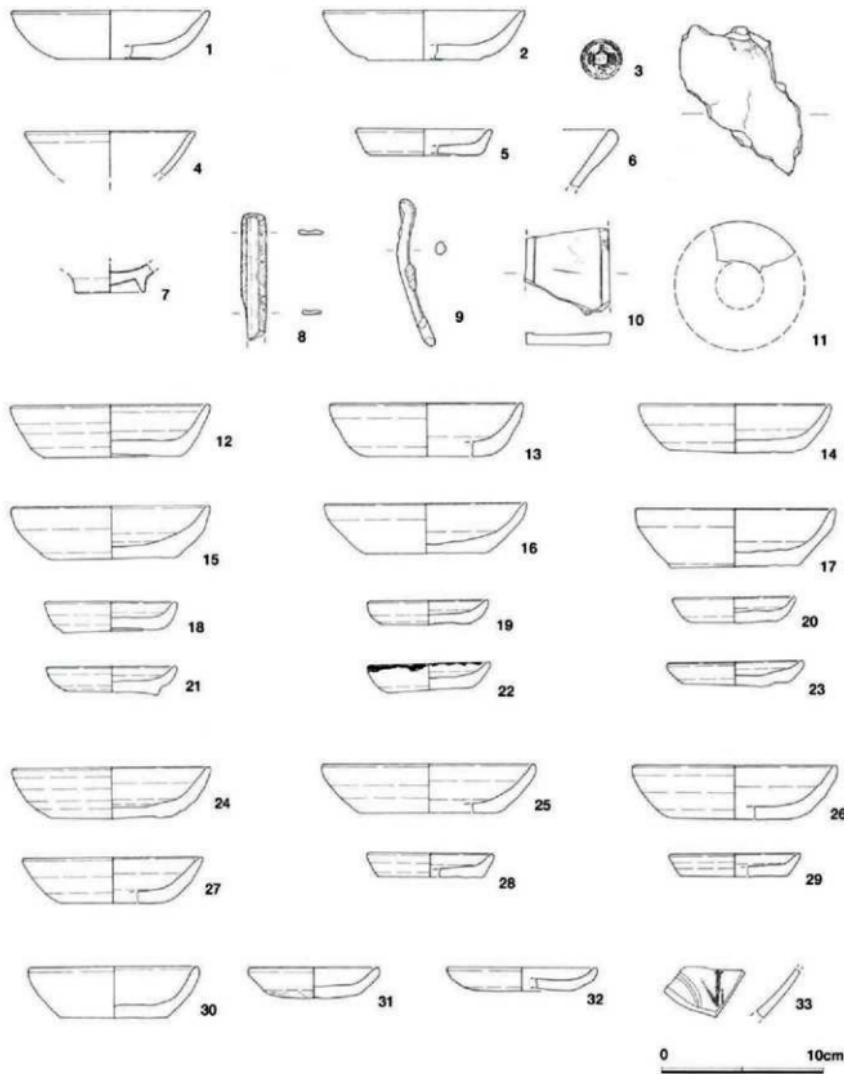


図18 A区 3面地山まで 土壌

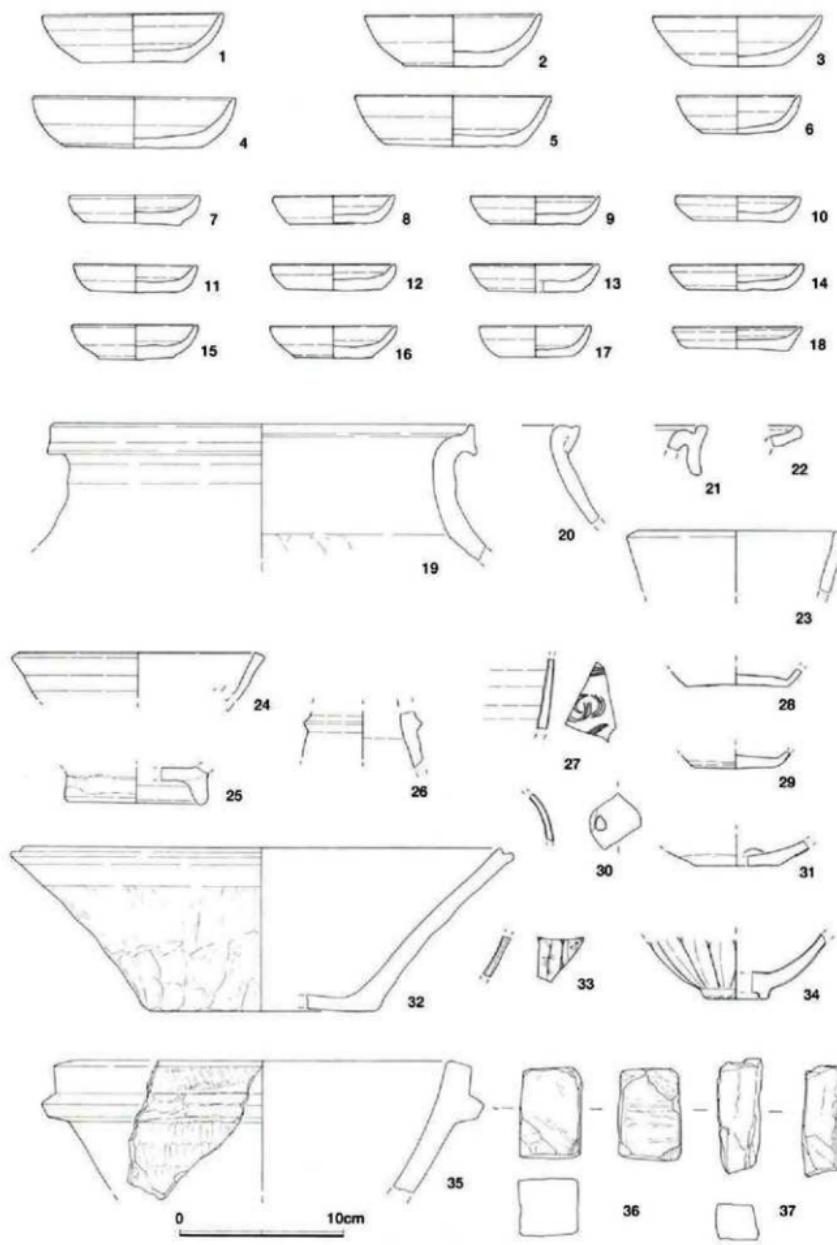


図19 B区1・2面 包含層

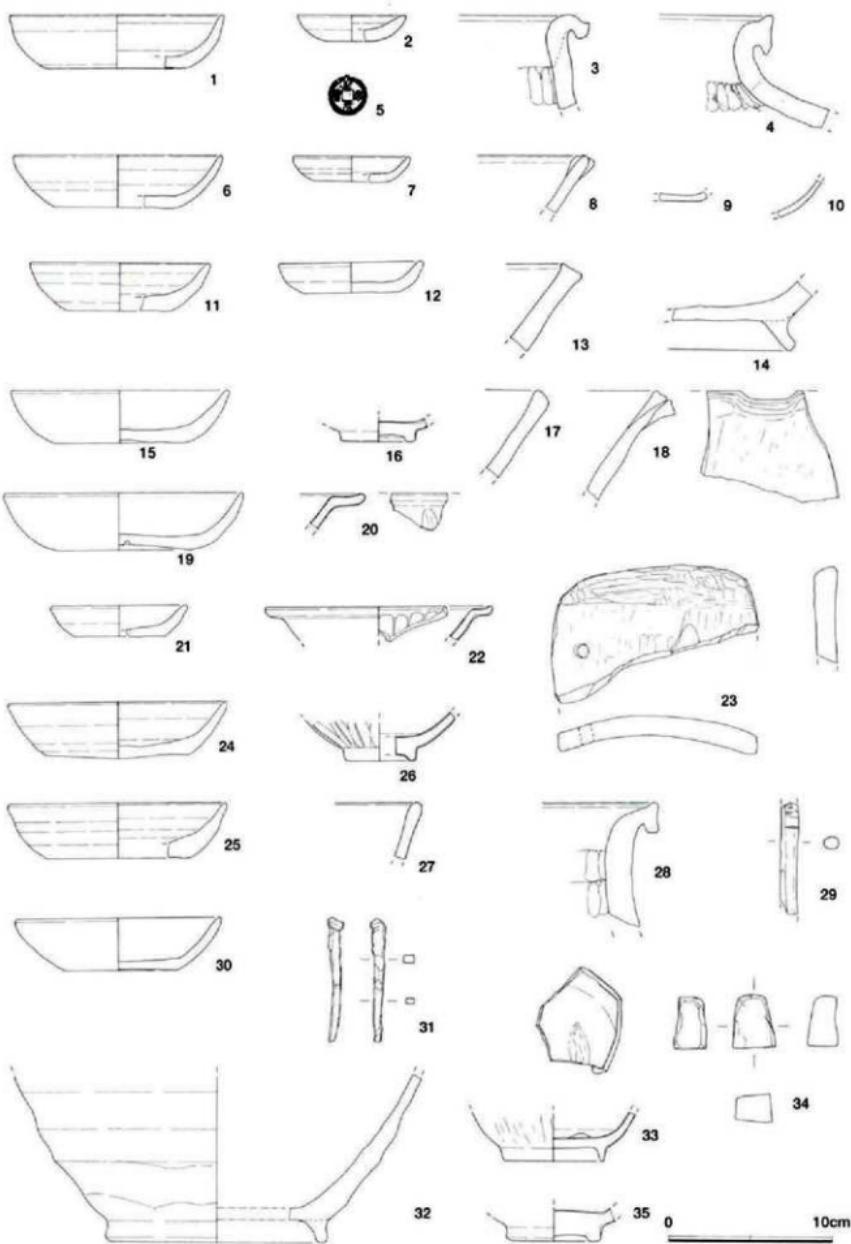


図20 B区 1～3面 遺構

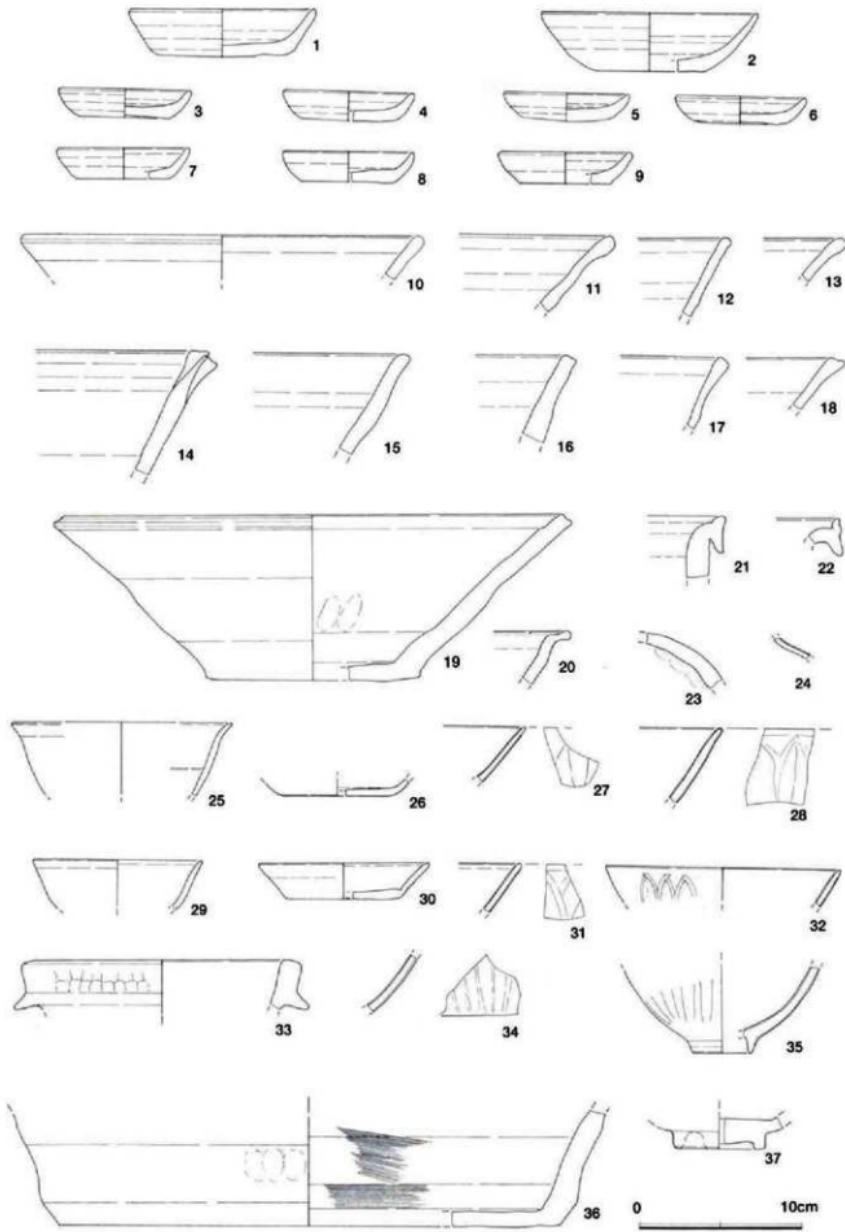


図21 B区井戸上層

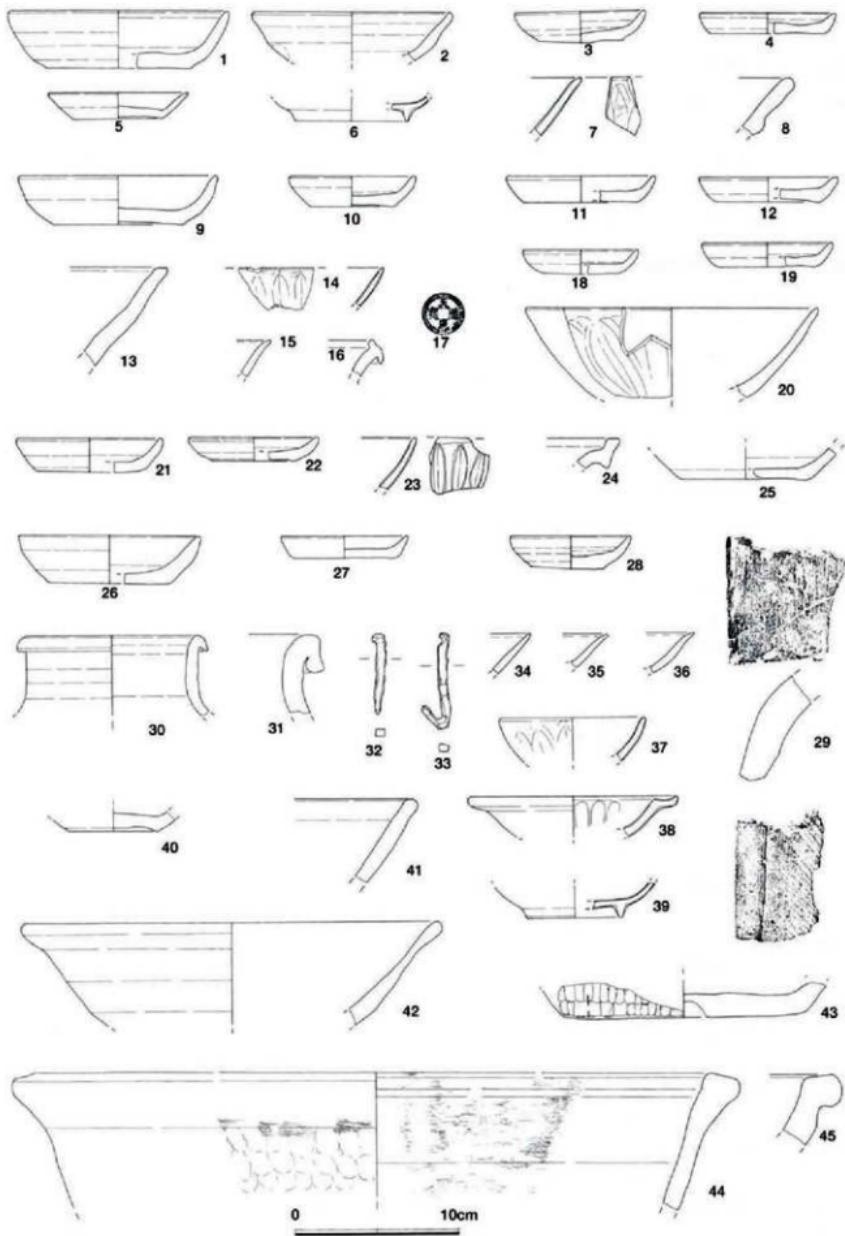


図22 B区地山まで 井戸

図10 A区 表土

単位はcm

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
1	鉄製品 刀子	全長 17.3cm (推定)	刃長 9.2cm (推定)	尾部に目釘穴の小孔あり	
2	青白磁梅瓶蓋	口径 7.9cm	器高 4.2cm	素地 乳白色 繊密 細密 水青色半透明	
3	銭	政和通宝 北宋 初鑄 1111年			
4	瀬戸仏草瓶	口径 2.6cm 底径 4.5cm	器高 8.1cm	胎土 灰黄色 黑色粒 細密 黄緑色	

図10 A区1面 包含層

( )内は復元数値

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
5	かわらけ	(12.0)	(7.5)	3.6	ロクロ
6	かわらけ	(12.4)	(7.0)	3.0	ロクロ
7	かわらけ	(10.8)	(6.6)	2.7	ロクロ
8	かわらけ	(8.8)	(6.5)	(1.6)	ロクロ
9	かわらけ	(7.7)	(6.0)	1.6	ロクロ
10	かわらけ	(8.2)	(6.0)	(1.9)	ロクロ
11	かわらけ	(7.2)	4.4	2.5	ロクロ
12	かわらけ	(7.4)	4.4	2.0	ロクロ
13	かわらけ	(7.8)	(5.1)	2.4	ロクロ
14	常滑 瓢	胎土 灰色 長石粒少量 色調 暗赤褐色			
15	常滑 捺鉢	胎土 暗褐色 長石粒 色調 褐灰色			
16	常滑 捺鉢	胎土 砂粒 長石粒 石英粒 小石 色調 明黄褐色			
17	常滑 捺鉢	胎土 砂粒 長石粒 石英粒 小石 色調 赤褐色			
18	瀬戸 花瓶	胎土 灰色 色調 外体面は灰釉が施され、明緑灰色を呈する			
19	瀬戸 卸皿	色調 灰白色			
20	常滑 捺鉢	胎土 砂粒 長石粒 石英粒 小石 色調 にぶい黄橙色			
21	常滑 捺鉢	胎土 褐灰色 細かい長石粒 色調 灰色			
22	魚住 鉢	胎土 砂粒を大量に含む 色調 灰色			
23	常滑 捺鉢	胎土 灰色 砂粒 長石粒 石英粒 小石 色調 灰赤色			
24	瀬戸 折縁皿	底径 (7.8cm) 胎土 灰色 細密 明オリーブ灰色			
25	魚住 鉢	底径 (9.2cm) 胎土 砂粒を大量に含む 長石粒 石英粒 小石 色調 灰色			
26	山茶碗窯系捏鉢	胎土 灰色 砂粒 小石 色調 灰褐色			
27	瀬戸 卸皿	胎土 灰色 細密 内面灰釉 外面明緑灰色			
28	山茶碗窯系捏鉢	高台径 13.0cm 胎土 砂粒 長石粒 石英粒 小石 色調 灰色			
29	瀬戸 瓢	底径 (16.0cm) 胎土 浅黄橙色 細密 灰釉のハケ塗り			
30	砥 石	長さ (7.5cm) 幅 2.9cm 厚さ 8.0cm			
31	摺り常滑	胎土 灰白色 長石、砂粒を多く含む粗胎 断面の研磨はそれほど強くない			
32	土 錘	長さ 3.4cm 幅 1.8cm 胎土 微砂 雲母 色調 浅黄橙色			
33	青磁折腰皿	素地 灰白色 精良 繊密 細密 灰オリーブ色不透明			
34	青磁 瓢	素地 灰色 精良 繊密 細密 明緑灰色透明			
35	青磁蓮弁文碗	素地 灰白色 精良 繊密 細密 オリーブ灰色透明			
36	青白磁梅瓶	高台径 (9.1cm) 素地 灰白色 堅密 細密 明緑色透明			

37	砥石	長さ (7.0cm) 幅 3.6cm 厚さ (1.8cm)
38	砥石	長さ 6.0cm 幅 3.4cm 厚さ 1.1cm
39	釘	長さ 5.6cm 幅 0.7cm 厚さ 0.6cm
40	釘	長さ 5.7cm 幅 0.7cm 厚さ 0.7cm
41	釘	長さ 6.4cm 幅 0.8cm 厚さ 0.7cm
42	釘	長さ 6.9cm 幅 0.6cm 厚さ 0.4cm

図11 A区1面 包含層下層

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
1	かわらけ	(13.6)	(8.8)	3.4	ロクロ
2	かわらけ	(13.5)	(8.2)	3.2	ロクロ
3	かわらけ	(12.0)	(7.5)	3.4	ロクロ
4	かわらけ	(11.8)	(7.2)	3.6	ロクロ
5	かわらけ	(11.9)	(7.0)	2.9	ロクロ
6	かわらけ	(7.6)	(4.7)	1.9	ロクロ
7	かわらけ	(8.1)	(5.7)	1.8	ロクロ
8	かわらけ	(7.9)	(5.8)	1.4	ロクロ
9	かわらけ	(7.6)	(5.6)	1.7	ロクロ
10	かわらけ	(7.8)	(5.3)	1.6	ロクロ
11	かわらけ	(8.5)	(6.4)	2.0	ロクロ
12	かわらけ	(7.1)	(4.3)	1.9	ロクロ
13	かわらけ	(8.2)	(5.8)	2.2	ロクロ
14	かわらけ	(7.3)	(3.9)	2.5	ロクロ
15	常滑壺	胎土 砂粒 石英粒 長石粒 色調 にぶい赤褐色			
16	常滑壺	胎土 長石粒 色調 淡赤灰色～灰色（芯部）			
17	常滑壺	胎土 砂粒 長石粒 石英粒 色調 灰赤色			
18	瀬戸鉢	胎土 黄橙色 精良 細密 軸渠 緑灰色			
19	常滑壺	底径 (21.0cm) 胎土 灰色 砂粒 長石粒 石英粒少量 色調 赤褐色			
20	常滑鉢	胎土 長石粒 色調 茶灰色～灰色			
21	常滑捏鉢	胎土 長石粒 色調 褐灰色			
22	常滑鉢	胎土 長石粒 色調 濃灰色			
23	常滑鉢	胎土 長石粒 色調 濃灰色			
24	古代土器	胎土 微妙 雲母 赤色粒 色調 にぶい黄橙色			
25	滑石製品	復元形 5.7cm 瓢の転用かは不明			
26	瀬戸錦皿	底径 (8.0cm) 色調 橙色			
27	錢	嘉祐通寶 北宋 初鑄年 1056年			
28	山茶碗窯系捏鉢	口径 (21.0cm) 胎土 黄灰色 長石微粒を少量含む			
29	山茶碗窯系捏鉢	底径 10.8cm 胎土 灰色 砂粒 石粒			
30	青磁	素地 灰色 堅緻 軸渠 オリーブ灰色透明			
31	青磁蓮弁文碗	素地 灰色 堅緻 軸渠 明オリーブ灰色透明			
32	青白磁梅瓶	素地 灰白色 堅緻 軸渠 明緑灰色透明			

33	白磁口兀皿	素地 灰白色 坚緻 軸薬 明オリーブ灰色透明
34	白磁 碗	素地 灰白色 坚緻 軸薬 淡灰色透明
35	青磁 鉢	素地 灰色 坚緻 軸薬 明オリーブ灰色透明
36	青磁 折縁鉢	素地 灰白色 坚緻 軸薬 灰白色透明
37	青磁 鉢	素地 灰白色 坚緻 軸薬 緑灰色透明
38	青磁 折腰碗	胎土 灰白色 精良 細密 軸薬 灰オリーブ色透明
39	魚住 鉢	口径 (27.6cm) 胎土 暗灰色 小石少量
40	青磁 無文碗	胎土 灰白色 精良 細密 軸薬 緑灰色不透明
41	青磁 碗	高台径 2.2cm 素地 灰白色 精良 細密 軸薬 緑灰色不透明
42	魚住 捧鉢	口径 29.1cm 胎土 砂粒 石粒少量 色調 灰褐色
43	青磁蓮弁文碗	素地 灰白色 坚緻 軸薬 オリーブ灰色透明

図12 A区1面1・2面共通部

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
1	かわらけ	11.3	6.1	2.9	ロクロ
2	かわらけ	11.2	6.5	3.1	ロクロ
3	かわらけ	12.7	7.8	3.5	ロクロ
4	かわらけ	11.0	7.5	3.4	ロクロ
5	かわらけ	12.6	7.7	3.4	ロクロ
6	かわらけ	12.4	8.2	3.5	ロクロ
7	かわらけ	7.9	4.7	1.9	ロクロ
8	かわらけ	7.8	5.0	1.9	ロクロ
9	かわらけ	7.4	4.0	1.9	ロクロ
10	かわらけ	7.7	5.3	1.7	ロクロ
11	かわらけ	7.6	5.7	1.7	ロクロ
12	かわらけ	8.0	5.4	2.2	ロクロ
13	鍔 筋	4.4	1.3	2.0	胎土 灰白色 白かわらけ質で、やや微粉質 色調 浅黄褐色 鍔を貼り付ける
14	早島式土器	高台径 4.3cm	胎土 灰白色 微砂質		
15	瀬戸四耳壺	胎土 灰白色 白色 黒色微砂粒 軸薬薄緑灰色の灰釉 外面肩部に六条沈線			
16	山茶碗窓系捏鉢	22.5	11.6	10.0	胎土 灰白色 白かわらけ質で、やや微粉質
17	常滑 捧鉢	胎土 長石粒 石英粒	色調 灰赤色		
18	常滑 捧鉢	胎土 長石粒 砂粒	色調 赤橙色		
19	手焼り	胎土 黒色微紗 赤色粒 白色粒	色調 表面灰黒色 芯部明赤灰色		
20	錢	熙寧元寶 北宋	1068年		
21	温石 滑石	長さ 13.0cm 幅 6.8cm 厚さ 3.6cm	円孔径 6mm	上下面及び、左側面は荒い刃物痕を残す 右側面及び下端面に摺条痕が観る、横方向に走る	
22	滑石 温石	長さ 11.2cm 幅 8.0cm 厚さ 2.0cm		上方に径6mm程の円孔、側端面及び両面は細かな摺痕を残すが緻密な調整で加工する	
23	砥 石	残存長 5.8cm 幅 3.1cm 厚さ 1.1cm	中砥	色調 灰褐色	
24	青白磁梅瓶	素地 白色 細密 坚緻 軸薬	水青色	薄い施釉 牡丹唐草文	
25	青磁 蓼弁文碗	素地 灰白色 黒色微砂少量	堅緻	軸薬 明緑灰色半透明	

26	青磁無文碗	高台径 8.6cm 素地 灰色 黑色微砂粒やや多い 軸薬 暗オリーブ色透明
27	白磁口兀皿	底径 6.0cm 素地 白色 細密 堅密 軸薬 乳白色不透明 薄い施釉
28	白磁口兀皿	口径 9.1cm 素地 白色 細密 堅密 軸薬 青味白色半透明 薄い施釉
29	青磁無文折腰皿	高台径 3.9cm 素地 灰色 黑色微砂粒少量 堅密 軸薬 緑灰色透明厚い施釉
30	白磁口兀皿	底径 5.1cm 素地 乳白色 精良、堅密 軸薬 灰白色半透明 薄い施釉
31	白磁口兀皿	口径 10.1cm 底径 5.5cm 器高 3.1cm 素地 灰白色 黑色微砂多く緑灰白色不透明
32	白磁口兀皿	口径 9.7cm 素地 灰白色 細密 軸薬 灰白色透明 薄い透明

図13 A区1面・2面・遺構出土遺物

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
1	かわらけ	(13.0)	(8.5)	(3.2)	ロクロ
2	かわらけ	12.2	7.3	3.4	ロクロ
3	かわらけ	6.2	3.8	2.0	ロクロ
4	かわらけ	7.2	4.7	1.8	ロクロ
5	かわらけ	(7.8)	(6.1)	(1.5)	ロクロ
6	かわらけ	7.4	4.8	1.7	ロクロ
7	常滑窯	縁帶幅 1.6cm	胎土	灰色 長石、石英、砂粒少々	色調 茶褐色
8	山茶碗窯系捏鉢	胎土	灰色 長石、黒色粒多し	色調 灰色	

図13 A区1面 方豎1(遺構1)

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
9	かわらけ	(7.8)	(6.0)	(1.3)	ロクロ
10	かわらけ	(7.7)	(4.2)	1.8	ロクロ
11	かわらけ	(8.2)	(6.5)	(1.6)	ロクロ
12	錢	咸淳元年 宋初鑄 1265年			
13	白磁口兀皿	素地 乳白色	軸薬	灰白色不透明 薄い施釉	
14	白磁口兀皿	素地 灰白色	軸薬	灰白色透明	
15	青磁蓮弁文碗	素地 灰色	堅密	軸薬 明緑灰色透明	
16	手培り	胎土 暗灰色	外体面	にぶい赤褐色	
17	常滑品口鉢	口径 14.0cm	胎土	灰黒色 長石粒、砂粒 外体面 暗褐色	
18	漬戸	底径 (9.1cm)	胎土	灰黄色 精良、細密	灰軸 直などの器形が考えられる
19	硯	残長 5.3cm	幅 5.7cm	厚さ 1.5cm	

図13 A区1面 土壌2

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
20	かわらけ	12.3	7.7	3.5	ロクロ
21	かわらけ	(12.5)	(7.1)	(3.1)	ロクロ
22	かわらけ	(12.8)	(8.2)	(3.2)	ロクロ
23	かわらけ	(7.7)	(4.8)	1.4	ロクロ
24	白磁口兀皿	口径 (9.1cm)	素地	灰白色 精良、細密	軸薬 灰白色透明
25	青磁 碗	高台径 6.1cm	素地	灰色 精良、細密	軸薬 暗緑灰色透明
26	青磁 碗	高台径 4.9cm	素地	灰色 精良、細密	軸薬 淡明緑灰色透明

27	砾石	長4.7cm 残存幅3.1cm 厚さ0.4~0.7cm 色調にぶい黄橙色				
28	砾石	残存長4.9cm 残存幅3.0cm 厚さ0.9cm 色調淡明赤灰色				

図13 A区2面道路下

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形	
29	かわらけ	(8.2)	(6.8)	(1.8)	手捏ね	
30	白磁口兀皿	(8.0)	(5.2)	(1.8)	素地灰白色堅緻釉薬灰白色透明	
31	かわらけ	(6.2)	(8.8)	3.5	ロクロ	
32	かわらけ	(11.8)	(11.0)		手捏ね	
33	白磁四耳壺	素地	灰白色	堅緻釉薬	明緑灰色透明	
34	かわらけ	(12.0)	(10.8)		手捏ね	
35	青磁蓮弁文碗	素地	灰白色	堅緻釉薬	明緑灰色不透明	
36	台付き壺	胎土	美砂	色調	橙色脚部片	

図13 A区道路3面

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形			
37	錢	紹聖元寶北宋初鑄1094年						
38	錢	開元通寶唐初鑄621年						
39	錢	元祐通寶北宋初鑄1086年						

図14 A区2面まで

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形	
1	かわらけ	(12.7)	(8.0)	3.6	ロクロ	
2	かわらけ	(12.5)	(9.7)	3.3	ロクロ	
3	かわらけ	(12.2)	(7.5)	3.5	ロクロ	
4	かわらけ	(13.8)	(9.4)	3.5	ロクロ	
5	かわらけ	12.8	3.7	3.7	ロクロ	
6	かわらけ	(12.4)	(7.4)	3.7	ロクロ	
7	かわらけ	(8.2)	(6.0)	1.5	ロクロ	
8	かわらけ	(7.4)	(5.4)	1.6	ロクロ	
9	かわらけ	(7.7)	(5.6)	1.4	ロクロ	
10	白磁口兀皿	底径5.3cm	素地	灰白色	黒色微砂少量	堅緻釉薬灰白色不透明
11	かわらけ	(8.7)	(6.1)	2.1	ロクロ	
12	かわらけ	(8.0)	(6.2)	1.5	ロクロ	
13	手焼り	色調	灰褐色	鉢形		
14	白磁口兀皿	素地	灰白色	緻密堅緻	釉薬灰白色透明	体部下端から外底にかけて露胎
15	常滑捏鉢	胎土	微砂	小石を少量含む	色調	灰褐色
16	常滑捏鉢	胎土	微砂	色調	にぶい赤褐色	

図13 A区道路3面

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形	
17	山茶碗窯系捏鉢	高台径12.6cm	胎土	長石継石英粒砂粒を大量に含む	色調	明青灰色
18	輪の羽口	径(8.4cm)	口径(2.8cm)	色調	赤褐色	

図14 A区2面 土壌1

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成	形
19	白磁口丸碗	口径 11.6cm	素地	灰白色	精良	釉薬 乳白色
20	青白磁菊花皿	素地	白色	釉薬	非常に薄い	青白色

図14 A区2面 かわらけ溜り

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成	形
21	かわらけ	12.8	10.0	2.9		ロクロ
22	かわらけ	12.6	8.6	3.3		ロクロ
23	かわらけ	12.4	8.0	3.4		ロクロ
24	かわらけ	(8.8)	(7.1)	(1.3)		ロクロ
25	かわらけ	(8.0)	(6.7)	(1.3)		ロクロ
26	かわらけ	(8.0)	(6.4)	(1.5)		ロクロ
27	かわらけ	(12.6)	(8.0)	(3.4)		ロクロ
28	かわらけ	(8.4)	(6.5)	(1.4)		ロクロ

図14 A区2面 土壌3

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成	形
29	かわらけ	7.7	5.1	1.8		ロクロ
30	骨製品	残存長 8.9cm	幅 0.7~0.9mm	加工途中と思われる		
31	白磁口丸碗	口径 11.5cm	素地	灰白色	精良	釉薬 乳白色

図14 A区2面 土壌5

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成	形
32	かわらけ	7.5	5.8	1.7		ロクロ
33	かわらけ	7.6	6.8	1.5		ロクロ
34	かわらけ	11.8	8.3	3.3		ロクロ
35	かわらけ	(11.6)	(7.8)	3.1		ロクロ
36	かわらけ	(11.8)	(8.0)	3.3		ロクロ
37	かわらけ	(12.0)	(7.8)	3.2		ロクロ
38	かわらけ	(11.7)	(7.1)	3.3		ロクロ
39	かわらけ	(12.8)	(9.2)	2.9		ロクロ
40	かわらけ	(13.8)	(10.4)	2.7		ロクロ
41	かわらけ	(13.5)	(9.3)	3.6		ロクロ

図15 A区2面 方盤4

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成	形
1	かわらけ	(7.4)	(6.3)	1.9		ロクロ
2	青磁鉢	口径 (21.0cm)	素地	灰色	堅緻	釉薬 オリーブ灰色透明
3	青磁蓮弁文碗	素地	灰白色	堅緻	釉薬	明緑灰色不透明 二次焼成を受け釉薬は失透
4	白磁碗	高台径 (5.0cm)	素地	灰色	堅緻	釉薬 灰白色透明
5	青磁折腰皿	高台径 (4.0cm)	素地	灰白色	堅緻	釉薬 淡緑灰色透明

図15 A区2面 方盤4 土壙4

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
6	かわらけ	12.6	7.6	3.7	ロクロ
7	かわらけ	(13.5)	(9.4)	3.4	ロクロ
8	早島式土器	(11.0)			胎土 微砂 小石 色調 淡黄色
9	かわらけ	(7.3)	(5.9)	1.6	ロクロ
10	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.8	ロクロ
11	かわらけ	(7.3)	(5.8)	1.8	ロクロ
12	かわらけ	(7.0)	(4.7)	1.5	ロクロ
13	常滑鉢	(13.5)	(8.8)	4.0	胎土 微砂 石英粒 色調 内外面灰釉
14	常滑 瓢	胎土 微砂 石英粒 長石粒 色調 赤橙色			
15	青白磁合子	口径 5.5cm 底径 5.0cm 器高 2.2cm 最大径 7.0cm (交合部) 素地 乳白色 精良 織密 釉薬 明青灰色透明 脊面に幅の狭い蓮弁文			
16	白磁口兀皿	(8.2)	(5.5)	1.7	素地 灰白色 堅緻 釉薬 灰白色透明
17	白磁口兀皿	素地 灰白色 堅緻 釉薬 灰白色透明			
18	白磁 皿	(10.5)	(7.0)	2.2	素地 灰白色 釉薬 灰白色透明 口兀皿に類似するが、口縁部露胎ではない
19	山茶碗	(13.6)	5.3	5.3	高台径 (6.2cm) 胎土粗く灰色微砂粒少量 色調灰白色
20	青磁無文碗	素地 灰色 堅緻 釉薬 オリーブ色透明			
21	青磁無文碗	素地 灰色 堅緻 釉薬 オリーブ灰色透明			
22	白磁口兀皿	(10.9)	(6.9)	2.9	素地 灰白色 堅緻 釉薬 灰白色透明
23	滑石製温石	残長 3.6cm 幅 9.5cm 厚さ 2.5cm			
24	硯	残存長 8.2cm 幅 1.4cm~0.5cm			
25	骨製品斧	残存長 8.7cm 幅 1.4~0.3cm 厚さ 0.3cm			
26	滑石鏡	口径 (23.3cm)			
27	滑石鏡	外面縦方向のヘラ磨き			
28	釘	長さ 8.4cm 幅 0.9cm 厚さ 0.9cm			
29	釘	長さ 8.2cm 幅 1.4cm 厚さ 0.7cm			

図16 A区3面

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
1	かわらけ	12.0	7.5	3.3	ロクロ
2	かわらけ	(11.2)	(6.6)	(3.1)	ロクロ
3	青磁折腰皿	高台径 (10.2)	素地 橙色 堅緻 釉薬 緑灰色不透明 細かい貫入有り		
4	かわらけ	(12.4)	(9.1)	3.5	ロクロ
5	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.3	ロクロ
6	青磁蓮弁文碗	素地 灰色 堅緻 釉薬 オリーブ灰色 内外面に細かい貫入有り			
7	常滑 捺鉢	胎土 長石粒 石英粒 砂粒 色調 茶褐色			
8	常滑 捺鉢	胎土 長石粒 砂粒 色調 茶褐色 内面降灰			
9	青磁蓮弁文碗	素地 灰白色 堅緻 釉薬 オリーブ灰色 薄い施釉			
10	青磁蓮弁文碗	素地 灰色 堅緻 釉薬 オリーブ灰色 内外面に貫入有り			

図16 A区3面 方堅5

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
11	かわらけ	(11.6)	8.0	3.3	ロクロ
12	かわらけ	(11.4)	(7.7)	(3.5)	ロクロ
13	かわらけ	(7.2)	(5.0)	(1.9)	ロクロ
14	山皿	(8.2)	(6.1)	(1.7)	外面口縁付近にわずかに降灰付着
15	かわらけ	(8.1)	(5.7)	1.8	ロクロ
16	かわらけ	(8.4)	(6.3)	1.2	ロクロ
17	白磁口兀皿	口径 (11.6cm)	灰白色	精良 細密 軸薬 明オリーブ灰色	
18	青磁碗	素地	灰白色	精良、細密 軸薬 明緑灰色不透明	
19	青磁折腰皿	素地	灰白色	精良 軸薬 オリーブ黄色不透明 厚い施釉	
20	山茶碗窓系捏鉢	胎土	灰色	長石粒 石英粒 内面薄い降灰で、光沢を持つ	
21	常滑捏鉢	胎土	暗灰色	長石粒を多く含む 外体面 灰褐色～褐色	
22	手焼り	色調	灰褐色		
23	青磁折腰皿	口径 (24.0cm)	胎土	灰白色 精良、細密 軸薬 暗緑灰色不透明	
24	鉄製品	断面は角の取れた四角形が基本と思われるが、鋒で彫れていますので不明瞭			

図16 A区3面 井戸

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
25	かわらけ	(13.0)	(8.0)	(3.0)	ロクロ
26	かわらけ	(11.2)	(6.6)	(3.1)	ロクロ
27	かわらけ	(7.2)	(4.1)	(1.9)	ロクロ
28	かわらけ	(8.0)	(6.2)	(1.7)	ロクロ
29	かわらけ	(12.8)	(8.2)	3.7	ロクロ
30	かわらけ	(12.2)	(8.0)	(2.9)	ロクロ
31	かわらけ	(7.6)	(5.4)	(1.7)	ロクロ
32	かわらけ	(8.4)	(6.6)	1.5	ロクロ
33	山茶碗窓系捏鉢	胎土	砂粒 長石粒 石英粒	色調 灰色	
34	山茶碗窓系捏鉢	胎土	砂粒 長石粒 石英粒	色調 灰色	
35	常滑瓶	胎土	砂粒 長石粒 石英粒	色調 灰色	
36	青磁蓮弁文碗	素地	灰白色	堅緻 軸薬 明緑灰色	
37	青磁蓮弁文碗	素地	灰白色	堅緻 軸薬 明緑灰色	
38	釘	長さ 9.5cm	幅 0.9cm	厚さ 0.2cm	
39	山茶碗窓系捏鉢	高台径 8.8cm	胎土	微砂 長石粒 石英粒	色調 にぶい赤褐色
40	常滑窓口壺	底径 9.2cm	胎土	砂粒 長石粒 石英粒	色調 鈍い橙色
41	白磁口兀皿	素地	灰白色	堅緻 軸薬	灰白色不透明

図17 A区3面 方堅6

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
1	かわらけ	(12.8)	(8.2)	(3.1)	ロクロ
2	かわらけ	(12.0)	(7.7)	(3.6)	ロクロ

3	かわらけ	(12.0)	(7.0)	(4.0)	ロクロ
4	かわらけ	(7.8)	(6.1)	(1.8)	ロクロ
5	かわらけ	8.0	6.2	1.7	ロクロ
6	かわらけ	7.8	5.4	1.5	ロクロ
7	かわらけ	7.6	5.3	2.0	ロクロ
8	かわらけ	7.8	5.3	2.0	ロクロ
9	かわらけ	7.2	4.6	1.8	ロクロ
10	かわらけ	(9.0)	(7.4)	(1.4)	手捏ね
11	青磁蓮弁文碗	素地	灰白色	堅織 紬葉 明緑灰色半透明	
12	白磁口兀皿	素地	灰白色	堅織 紬葉 灰白色不透明	
13	白磁口兀皿	底径 (4.6cm)	素地	灰白色 堅織 紬葉 灰白色不透明	
14	山茶碗窓系捏鉢	胎土	灰褐色	長石粒 石英粒 砂粒	
15	山茶碗窓系捏鉢	胎土	砂粒 小石粒	長石粒 石英粒 色調 灰褐色	
16	青磁蓮弁文碗	口径 (11.9cm)	素地	灰白色 堅織 紬葉 明緑灰色不透明	
17	白磁口兀皿	口径 (10.8cm)	素地	灰白色 堅織 紬葉 灰白色不透明	
18	瀬戸四耳壺	高台径 (8.0cm)	胎土	黄色及び灰白色 砂粒 紬葉 灰白色不透明	
19	滑石製鍋	小片のため復元不可能	体部厚 7mm程度		
20	滑石製鍋	口径17cm程度			
21	擦り常滑	胎土	薄橙灰色	長石粒 石英粒 砂粒 色調 暗赤褐色 常滑斉片転用	
22	刀子	残長 15.9cm	幅 1.3cm	厚さ 0.5cm	刃長 13.4cm
23	滑石製鍋	口径 (21.4cm)	最大径 (46.6cm)	割れ口を削って隙間を作り、接着剤を塗り充填する 内面も同じ 接着剤は一見泥状 (麦糠か)	
24	銭	熙寧元寶 北宋 初鑄年 1068年			
25	骨製品斧	残長 6.2cm	幅 0.9cm	厚さ 0.2cm	
26	鉄蓋	径 (11.0cm)	高さ 3.9cm		

図17 A区3面 土壙10

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
27	かわらけ	12.2	6.9	3.5	ロクロ
28	かわらけ	(12.0)	(7.8)	(3.1)	ロクロ
29	かわらけ	(11.4)	(7.4)	(2.4)	ロクロ
30	かわらけ	12.0	7.1	3.2	ロクロ
31	かわらけ	(13.0)	(8.2)	(3.5)	ロクロ
32	かわらけ	(7.6)	(5.6)	(1.7)	ロクロ
33	かわらけ	(7.8)	(6.3)	1.5	ロクロ
34	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.4	ロクロ
35	山茶碗窓系捏鉢	胎土	長石粒 石英粒 砂粒	色調 灰白色	
36	骨製品	残長 (11.5cm)	幅 0.8cm	厚さ 0.6cm	

図18 A区3面 土壙12

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
1	かわらけ	(12.1)	(6.5)	3.0	ロクロ

2	かわらけ	(12.4)	(7.0)	3.2		ロクロ
3	銭	天福通宝 北宋 初鑄 1017年 楷書				
4	白磁口元皿	口径 (10.4cm)	素地 堅敏 灰白色 軸葉 灰白色透明			
5	かわらけ	(8.2)	(6.6)	1.6		ロクロ
6	山茶碗窯系捏鉢	胎土 灰色 粗い長石粒を少量含む	色調 口縁部付近は緑灰色の降灰付着			
7	青磁碗	胎土 灰色 軸葉 青灰色不透明				
8	骨製品笄	残長 7.9cm 幅 1.5cm 厚さ 0.2cm				
9	釘	長さ 9.3cm 幅 0.6cm 厚さ 0.8cm				
10	硯	残存長 5.3cm 幅 5.4cm 厚さ 0.6~0.7mm				
11	輪の羽口	復元径 8cm				

図18 A区3面 土壌14

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成	形
12	かわらけ	12.0	8.3	3.2		ロクロ

図18 A区3面 土壌16

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成	形
13	かわらけ	(11.7)	(7.6)	3.2		ロクロ
14	かわらけ	(11.6)	(8.2)	3.1		ロクロ
15	かわらけ	12.0	7.6	3.2		ロクロ
16	かわらけ	(12.2)	(7.6)	3.1		ロクロ
17	かわらけ	12.0	7.6	3.2		ロクロ
18	かわらけ	8.0	5.9	1.9		ロクロ
19	かわらけ	7.2	5.5	1.5		ロクロ
20	かわらけ	(7.5)	(5.2)	1.6		ロクロ
21	かわらけ	7.8	5.5	1.6		ロクロ
22	かわらけ	7.4	5.3	1.6		ロクロ
23	かわらけ	8.2	6.6	1.4		ロクロ

図18 A区3面 土壌15

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成	形
24	かわらけ	(12.0)	(7.4)	3.2		ロクロ
25	かわらけ	(13.0)	(8.4)	(3.0)		ロクロ
26	かわらけ	(12.4)	(7.7)	(3.3)		ロクロ
27	かわらけ	(11.0)	(6.4)	(2.8)		ロクロ
28	かわらけ	(7.6)	(6.4)	(1.5)		ロクロ
29	かわらけ	(8.0)	(6.6)	(1.4)		ロクロ

図18 A区3面 土壌13

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成	形
30	かわらけ	10.3	6.5	3.2		ロクロ
31	かわらけ	7.9	6.2	1.9		手捏ね
32	かわらけ	(9.0)	(7.2)	1.5		手捏ね

33	青磁櫛文碗	胎土	灰白	堅緻	釉薬	オリーブ灰色透明
----	-------	----	----	----	----	----------

図19 B区1・2面 包含層

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
1	かわらけ	(10.9)	(6.4)	2.9	ロクロ
2	かわらけ	(10.6)	(6.0)	3.1	ロクロ
3	かわらけ	(10.2)	(5.5)	3.0	ロクロ
4	かわらけ	(12.2)	(8.4)	3.1	ロクロ
5	かわらけ	(11.8)	(8.0)	3.1	ロクロ
6	かわらけ	7.4	4.5	2.3	ロクロ
7	かわらけ	7.9	6.0	1.7	ロクロ
8	かわらけ	7.3	5.4	1.7	ロクロ
9	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.7	ロクロ
10	かわらけ	7.5	5.8	1.5	ロクロ
11	かわらけ	7.5	5.1	1.7	ロクロ
12	かわらけ	7.5	5.7	1.6	ロクロ
13	かわらけ	(7.7)	(5.6)	1.7	ロクロ
14	かわらけ	(8.0)	(5.9)	1.6	ロクロ
15	かわらけ	7.6	4.5	2.2	ロクロ
16	かわらけ	(7.6)	(4.7)	2.0	ロクロ
17	かわらけ	(6.6)	(4.4)	1.9	ロクロ

図19 B区1・2面 包含層

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
18	かわらけ	7.8	6.0	1.7	ロクロ
19	常滑 瓢	口径 (25.4cm)	胎土	赤灰色 色調 暗赤灰色	
20	常滑 瓢	胎土	長石粒 石英粒	色調 暗灰色	
21	常滑 瓢	胎土	長石粒	色調 灰色	
22	瀬戸 折線鉢	胎土	灰褐色	釉薬 淡緑灰色の自然釉	
23	常滑	口径 (12.2cm)	胎土	暗灰色 長石粒少量 色調 暗灰色 (片口鉢?)	
24	瀬戸 卸皿	口径 (14.3cm)	胎土	黄灰色白色 釉薬 黄灰色 灰釉刷毛塗り	
25	瀬戸 四耳壺	高台径 (8.8cm)	胎土	灰色 釉薬 淡灰緑色の自然釉	
26	瀬戸 壺	胎土	灰白色	釉薬 鉄釉 内管状、又は耳付きの剥離	
27	青白磁 梅瓶	素地	灰色 釉薬 明オリーブ灰色透明		
28	白磁 口兀皿	底径 6.3cm	素地	灰白色 釉薬 淡青緑灰色透明	
29	白磁 口兀皿	素地	白色 黒色微砂粒 釉薬 青味灰白色透明		
30	青白磁	素地	白色 釉薬 青味灰白色透明 壺か?		
31	青磁 盆	素地	灰白色 釉薬 淡灰緑色透明 内面にヘラ彫り有り		
32	常滑 捺鉢	口径 (29.0cm)	底径 (14.0cm)	器高 10.1cm 胎土 灰色 表面 赤褐色	
33	青磁蓮弁文碗	素地	灰白色 釉薬 淡緑灰色不透明		
34	青磁蓮弁文碗	高台径 (4.0cm)	素地	灰白色 釉薬 薄い緑色透明	

35	滑石鍋	口径 (22.8cm)			
36	砥石	長さ 5.6cm 幅 3.7cm 厚さ 3.6cm 滑石製			
37	石製品	残存長 7.3cm 残存幅 2.5cm 厚さ 2.1cm 砥の加工端材か			

図20 B区1・2面 土壌1

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
1	かわらけ	(12.9)	(8.5)	3.2	ロクロ
2	かわらけ	(6.6)	(3.2)	1.6	ロクロ
3	常滑 瓢	胎土	灰色	砂粒 小石粒	色調 暗灰色
4	常滑 瓢	胎土	暗灰色	砂粒 石英粒	小石粒 色調 暗赤灰色

図20 B区1・2面 土壌6

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
5	銭	聖宋元寶 北宋	1101年		

図20 B区1・2面 土壌6

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
6	かわらけ	(12.6)	(7.6)	(3.2)	ロクロ
7	かわらけ	(7.0)	(4.8)	(1.5)	ロクロ
8	山茶碗窓系捏鉢	胎土	砂粒 長石粒	色調	灰褐色
9	白磁口丸皿	素地	白色	緻密	釉薬 明緑灰色不透明
10	白磁口丸碗	素地	白色	緻密	釉薬 明オリーブ灰色不透明

図20 B区1・2面 土壌2

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
11	かわらけ	(10.8)	(6.2)	(2.9)	ロクロ

図20 B区1・2面 土壌3

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
12	かわらけ	(8.7)	(5.7)	1.9	ロクロ
13	常滑 捺鉢	胎土	灰色	長石粒	色調 灰赤色
14	常滑 捺鉢	胎土	にぶい橙色	長石粒	色調 赤褐色

図20 2面下地山まで 土壌5

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
15	かわらけ	(13.1)	(7.9)	3.3	ロクロ
16	青磁 瓢	底径 4.0cm	高台径 4.6cm	胎土	灰白色 精良 細密 釉薬 明緑灰色透明
17	常滑 捺鉢	胎土	長石粒少量	色調	赤褐色
18	常滑 捺鉢	胎土	灰色	長石粒	色調 外体面 灰赤色 内体面 暗赤褐色
19	かわらけ	(14.5)	8.2	3.5	ロクロ 底部に貫通しない孔あり
20	青磁 皿	素地	灰白色	精良 細密	釉薬 明緑灰色不透明 外面達弁文
21	かわらけ	(8.2)	(5.5)	1.9	ロクロ
22	青磁 折腰皿	素地	灰色	精良・細密	釉薬 緑灰色透明
23	滑石 温石	滑石鍋からの転用			

図20 B区3面 土壌10

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
24	かわらけ	13.2	8.7	3.5	ロクロ
25	かわらけ	(13.2)	(8.7)	(3.3)	ロクロ

図20 B区3面 土壌7

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
26	青磁蓮弁文碗	高台径(4.4cm)	素地	灰色 堅緻 軸葉 オリーブ灰色透明	
27	山茶碗窓系捏鉢	胎上	微砂 石英粒	雲母 色調 灰色	
28	常滑 麦	胎上	灰色 石英粒	色調 にぶい赤褐色	

図20 B区3面 土壌9

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
29	骨	残長 6.8cm	幅 1.0cm	厚さ 0.7cm	刃物痕あり

図20 B区3面 土壌8

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
30	かわらけ	12.3	7.8	3.2	ロクロ
31	釣	残存長 7.2cm			
32	山茶碗窓系捏鉢	底径 13.5cm	胎上	灰色 長石粒 色調 灰色	
33	青磁折線皿	高台径 6.0cm	素地	灰白色 精良 軸葉 緑灰色不透明 内面 双魚文 連弁文	
34	滑石製品	残存長 3.3cm	残存幅 2.6cm	厚さ 1.8cm	用途不明
35	青磁 碗	素地	灰白色	精良 軸葉 明緑色透明	

図21 B区井戸上層

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
1	かわらけ	(11.2)	(7.5)	2.9	ロクロ
2	かわらけ	(13.2)	(6.6)	(6.1)	ロクロ
3	かわらけ	(8.0)	(5.8)	1.8	ロクロ
4	かわらけ	(7.8)	(5.7)	(1.9)	ロクロ
5	かわらけ	7.6	5.7	1.9	ロクロ
6	かわらけ	(7.8)	(4.7)	1.7	ロクロ
7	かわらけ	(7.8)	(5.7)	(1.9)	ロクロ
8	かわらけ	(7.8)	(5.6)	(1.9)	ロクロ
9	かわらけ	(7.8)	(5.6)	(1.9)	ロクロ
10	山茶碗窓系捏鉢	口径(25.2cm)	胎上	灰色 砂粒 石英粒 長石粒 小石 色調 灰褐色	
11	山茶碗窓系捏鉢	胎上	灰色 砂粒 長石粒 石英粒 小石 色調 灰褐色		
12	山茶碗窓系捏鉢	胎上	茶灰白色 砂粒少量	色調 黄灰褐色 濡美?	
13	山茶碗窓系捏鉢	胎上	砂粒 小石	色調 灰色	
14	常滑 捏鉢	胎上	砂粒 長石粒 石英粒 小石	色調 橙色	
15	常滑 捏鉢	胎上	暗灰褐色 砂粒 長石粒 石英粒 小石	色調 茶褐色	

16	常滑 捏鉢	胎土 砂粒 石英粒 長石粒 小石 色調 茶褐色
17	常滑 捏鉢	胎土 砂粒 小石 色調 茶褐色
18	山茶碗窓系捏鉢	胎土 砂粒 小石 色調 灰色
19	常滑 捏鉢	口径 (30.4cm) 底径 (13.2cm) 胎土 暗灰褐色 砂粒 長石粒 石英粒 色調 茶褐色
20	瀬戸 折縁鉢	胎土 灰白色 軸葉 薄い灰緑色 外面 軸葉剥離
21	常滑 麦	胎土 暗灰褐色 砂粒 長石粒 石英粒 小石 色調 茶褐色
22	常滑 麦	胎土 砂粒 長石粒 石英粒 小石 色調 茶褐色
23	瀬戸 麦	胎土 薄い灰色 軸葉 淡緑灰色
24	青白磁 小壺	素地 灰白色 堅緻 軸葉 水青色
25	白磁口兀瓶	口径 13.5cm 素地 白色 細密 軸葉 灰白色透明 内面体部中央に一条凹線
26	白磁口兀瓶	底径 (6.4cm) 素地 白色 細密 軸葉 白色不透明
27	青磁蓮弁文碗	素地 灰色 堅緻 軸葉 薄い灰緑色
28	青磁蓮弁文碗	素地 灰白色 堅緻 軸葉 淡い青緑色
29	白磁口兀瓶	口径 (10.2cm) 素地 白色 細密 軸葉 灰白色不透明
30	白磁口兀瓶	口径 10.3cm 底径 6.8cm 器高 2.2cm 素地 白色 細密軸葉 青味灰白色半透明
31	青磁蓮弁文碗	素地 灰白色 堅緻 軸葉 薄い灰緑色
32	青磁蓮弁文碗	口径 (14.4cm) 素地 灰色 堅緻 軸葉 薄い緑色
33	滑石鍋	口径 (15.6cm)
34	青磁蓮弁文碗	素地 灰白色 堅緻 軸葉 薄い青緑色
35	青磁蓮弁文碗	高台径 (3.5cm) 素地 灰白色 堅緻 軸葉 薄い緑色
36	手焙り	底径 (30.8cm) 胎土 砂粒 小石 色調 灰褐色
37	青磁蓮弁文碗	高台径 (5.6cm) 素地 灰色 軸葉 黄灰色不透明

図22 B区地山面まで

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成	形
1	かわらけ	(13.2)	(8.8)	(3.5)		ロクロ
2	かわらけ	(11.8)	(10.2)			手捏
3	かわらけ	(7.8)	5.2	1.9		ロクロ
4	かわらけ	(8.2)	(7.0)	(1.3)		ロクロ
5	白磁口兀瓶	素地 灰白色	精良 軸葉	灰白色不透明		
6	青磁 折腰瓶	素地 灰白色	精良 細密	軸葉 明緑灰色不透明		
7	青磁蓮弁文碗	素地 灰白色	精良 細密	軸葉 緑灰色透明		
8	山茶碗窓系捏鉢	胎土 灰白色	長石粒を少量含む			

図22 B区地山 土壙11

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成	形
9	かわらけ	(12.0)	(8.0)	2.9		ロクロ
10	かわらけ	7.5	5.1	1.8		ロクロ
11	かわらけ	(8.8)	(7.0)	1.1		ロクロ
12	かわらけ	(8.8)	(6.3)	1.5		ロクロ
13	山茶碗窓系捏鉢	胎土灰白色	精良気泡有り	外面ハケ (?) による根ナデ 内面白の斑点状降灰釉		

14	青磁蓮弁文碗	素地 灰白色 精良 細密 軸葉 明緑青色不透明 軸唇は比較的厚い
15	白磁口兀皿	素地 灰白色 精良 細密 軸葉 灰白色
16	須恵 壺	胎土 灰白色 7 c 半ば頃不透明
17	錢	天祐通寶 北宋 初鑄年 1017年

図22 B区地山 土壌12

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
18	かわらけ	(7.0)	(4.6)	(1.5)	ロクロ
19	かわらけ	(7.8)	(6.0)	(1.5)	ロクロ
20	青磁蓮弁文碗	口径(17.8cm)	素地 にぶい黄橙	精良 軸葉 明黄褐色透明 篷がごく弱く不鮮明	

図22 B区地山 土壌6

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
21	かわらけ	(8.7)	(6.7)	2.1	ロクロ
22	かわらけ	(7.7)	(5.2)	1.4	ロクロ
23	青磁蓮弁文碗	素地 灰白色	堅綿	軸葉 薄い緑灰色透明 篷連弁が細く1つ1つが独立する	
24	常滑 壺	胎土 暗灰褐色	砂粒 石英粒	小石 色調 暗赤褐色	
25	山茶碗	底径(7.6cm)	胎土 微絹	雲母 赤色粒少量	色調 暗灰色

図22 B区地山 土壌12

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
26	かわらけ	(10.8)	(7.2)	2.9	ロクロ
27	かわらけ	(7.2)	(6.1)	1.4	ロクロ
28	かわらけ	7.2	4.4	2.0	ロクロ
29	男瓦	凹面布目痕	凸面繩目痕	幅広の削り	
30	常滑 壺	胎土 砂粒	長石粒 石英粒	小石 色調 赤灰色	
31	常滑 壺	胎土 砂	長石粒 少量含む	外体面 暗赤褐色 内面 灰褐色	
32	釘	長さ 5.0cm	幅 0.3~0.5cm	厚さ 0.4cm	
33	釘	長さ 6.0cm	幅 0.5cm	厚さ 0.4cm	
34	白磁口兀皿	素地 灰白色	精良 細密	軸葉 灰白色透明	
35	白磁口兀皿	素地 灰白色	精良 細密	軸葉 明オリーブ灰色透明	
36	白磁口兀皿	素地 灰白色	軸葉	明オリーブ灰色透明	
37	青磁蓮弁文碗	素地 灰白色	軸葉 明緑灰色	連弁の縞が弱く、不明瞭	
38	青磁 折腰皿	口径(12.5cm)	素地 灰白色	精良 細密 軸葉 明緑灰色半透明	
39	青磁 折腰皿	底径(5.8cm)	内面連弁	図22-38と同一個体か?	
40	山茶碗	底径(5.4cm)	胎土 砂粒	小石粒 色調 灰白色	
41	常滑 捺鉢	胎土 砂粒	長石粒 石英粒	小石粒 色調 にぶい赤褐色	
42	山茶碗窓系捏鉢	胎土 砂	長石粒、砂を少量含む	色調 灰白色 内体面に緑灰色の降灰付着	
43	滑石鍋	底径(14.7cm)			
44	手焼り	口径(44.0cm)	胎土 砂粒 石粒	小石 色調 灰褐色 (鉢形)	
45	手焼り	表面にぶい黄橙、断面中心部は灰色を呈す			

71 72 73 74

# 写 真 図 版



▲A区2面全景(西より)

▼道路透構の断面図(南より)



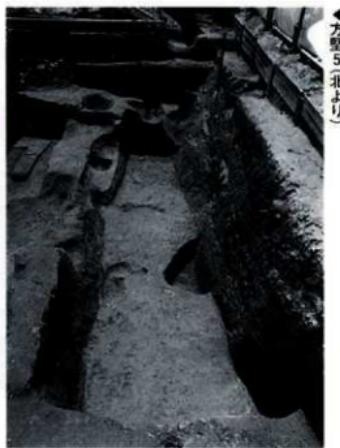
▼土壤16(南より)



図版 2



▲ A区 3面全景(南より)



◀ 方壁5(北より)



図版 3



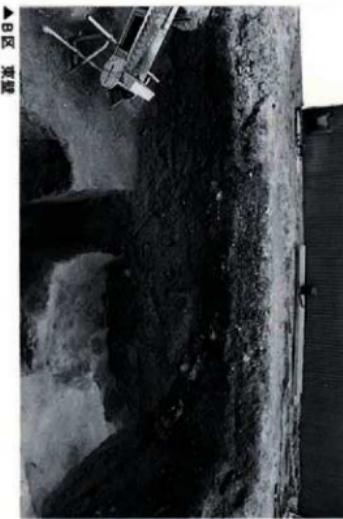
▲方堅 6 敷石



▲方堅 6 敷石



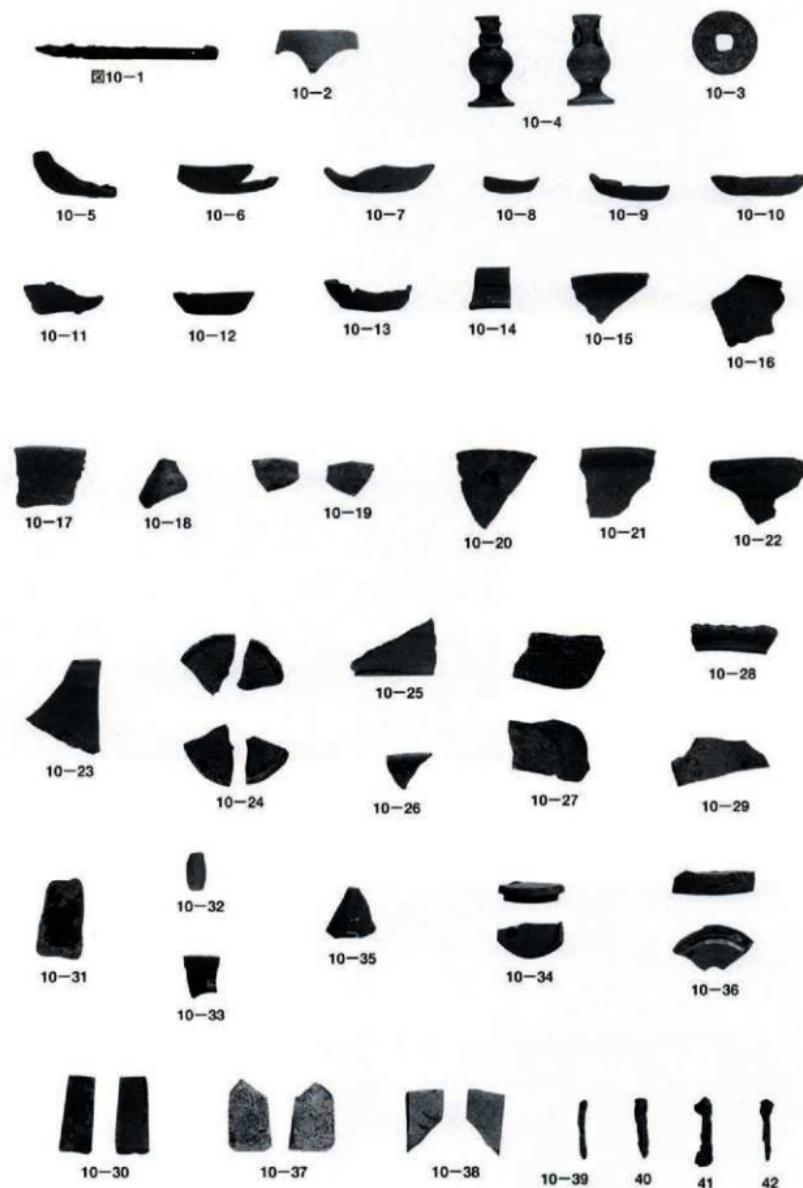
◀方堅 6 断面(西より)



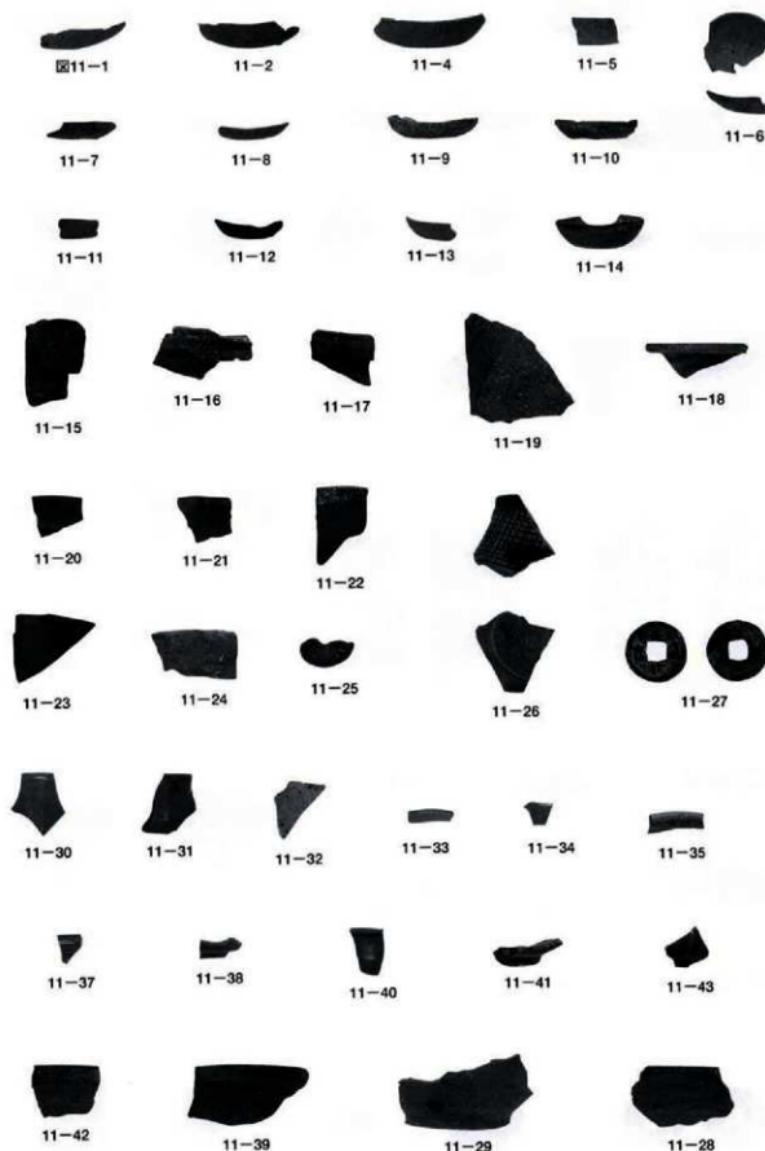
図版 5



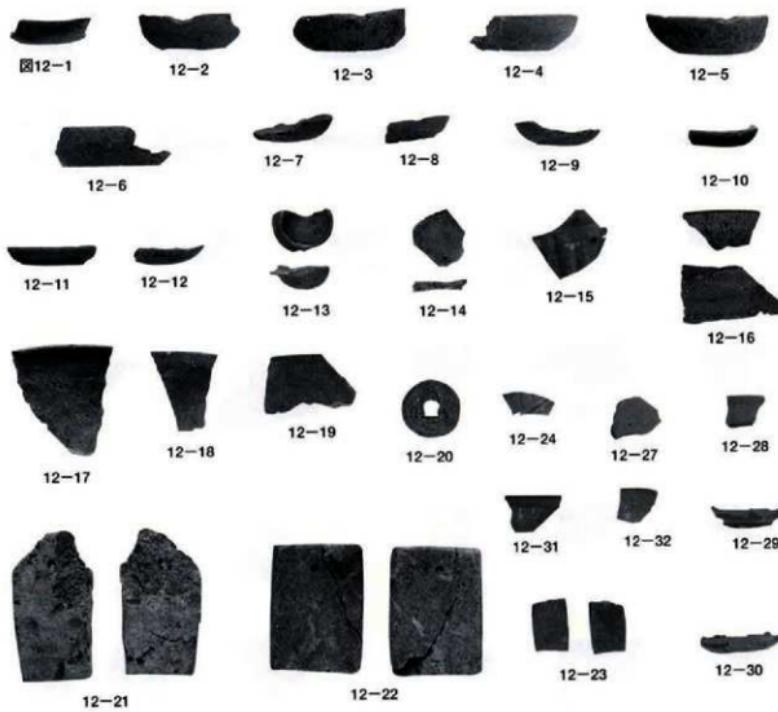
図版6



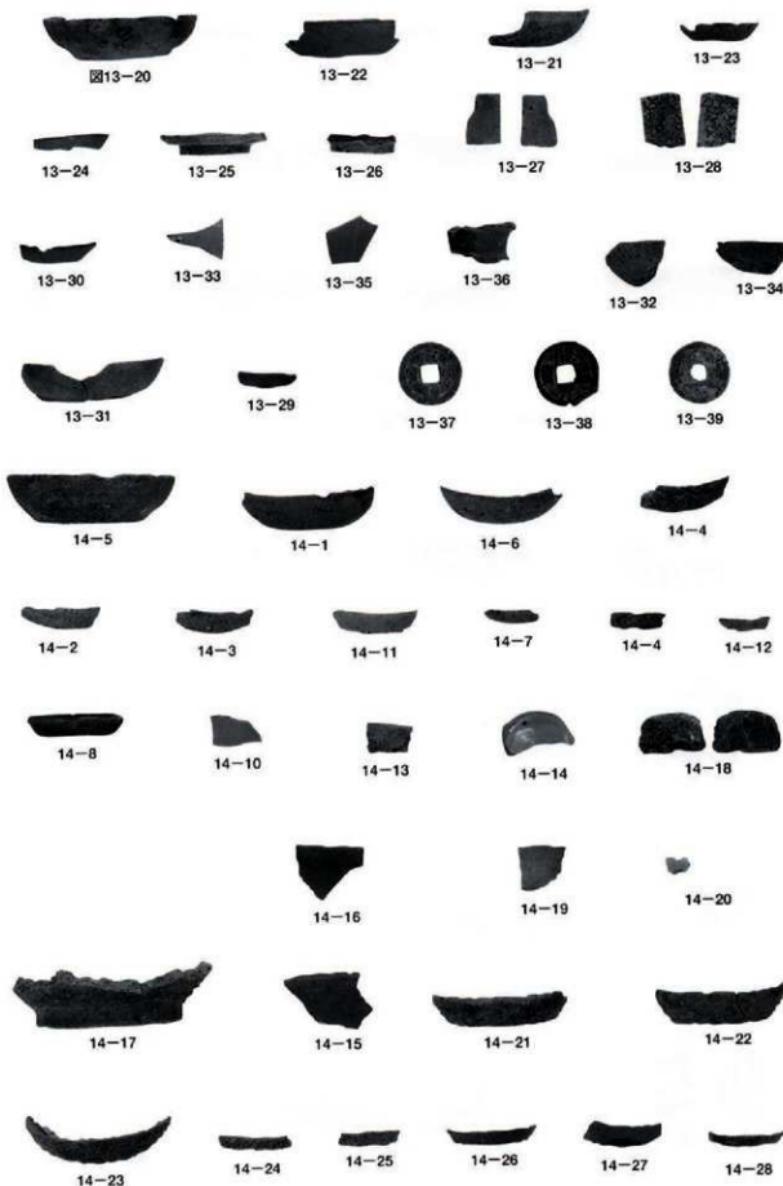
図版 7



図版8



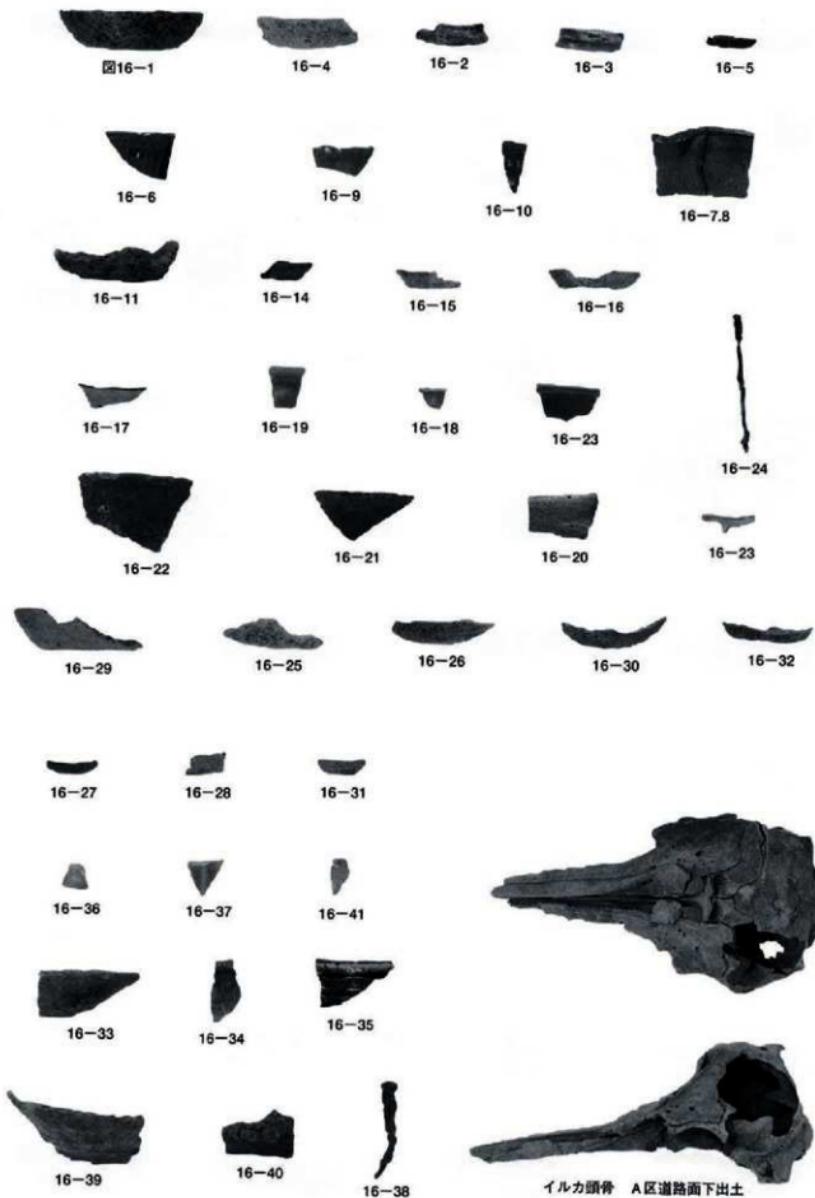
図版 9



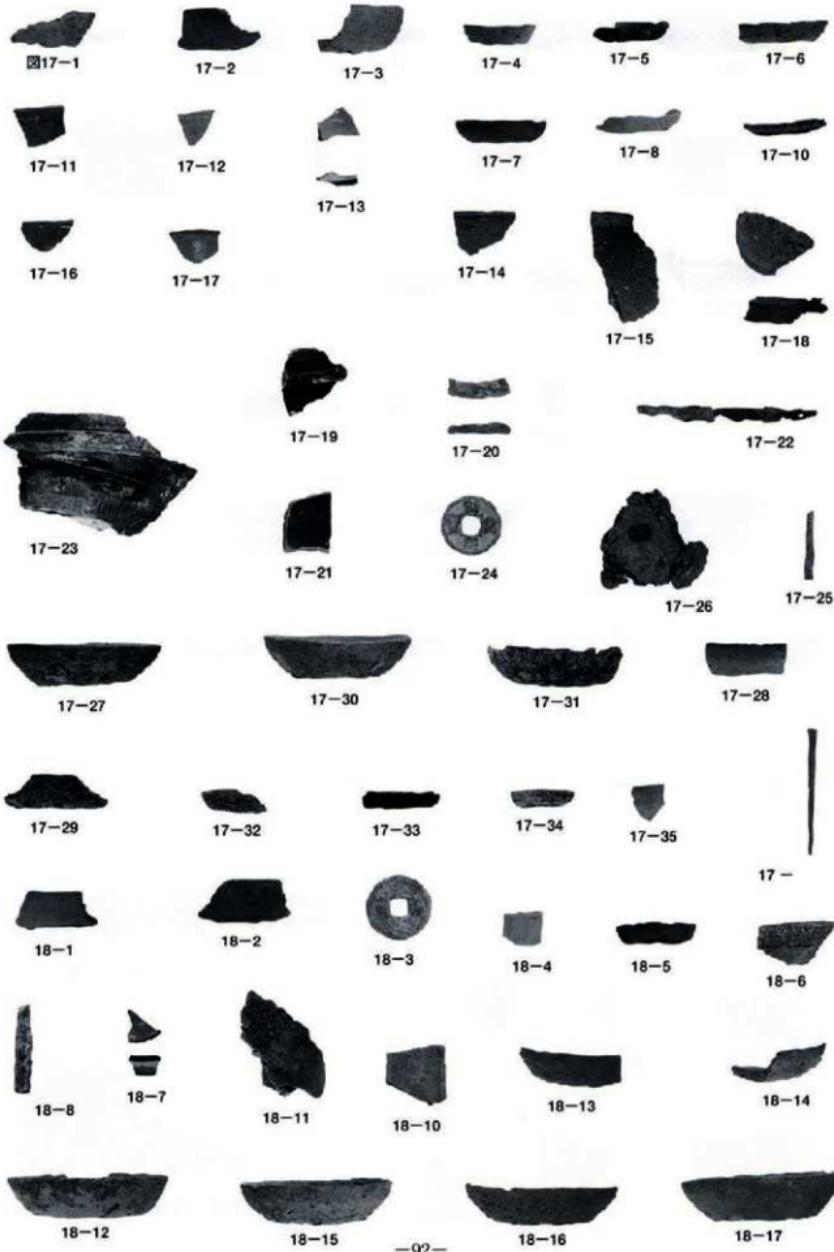
図版10



図版11



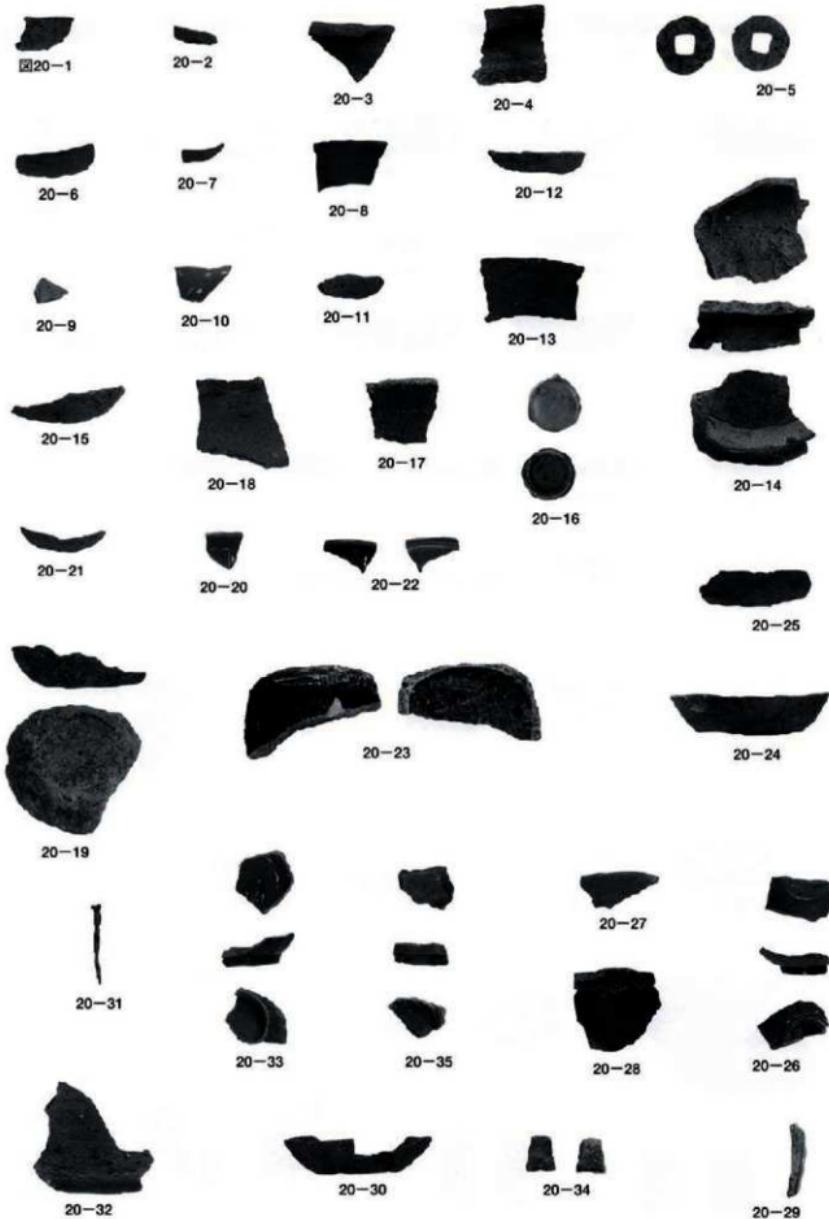
図版12



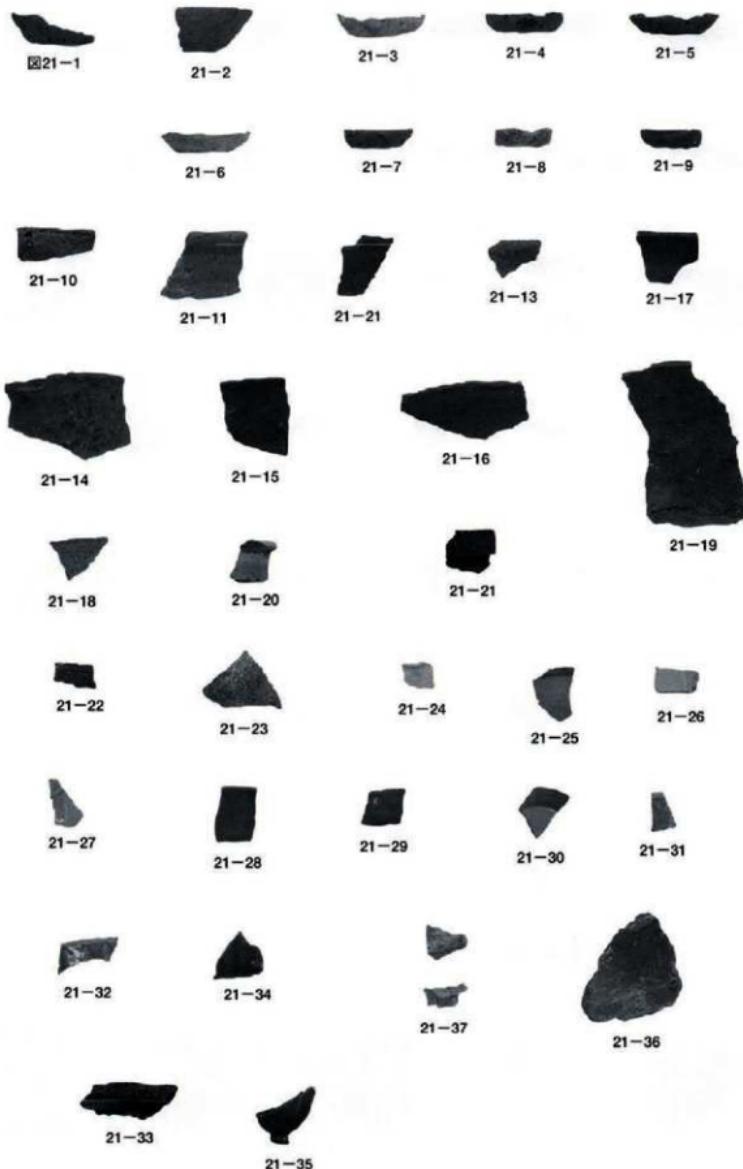
図版13



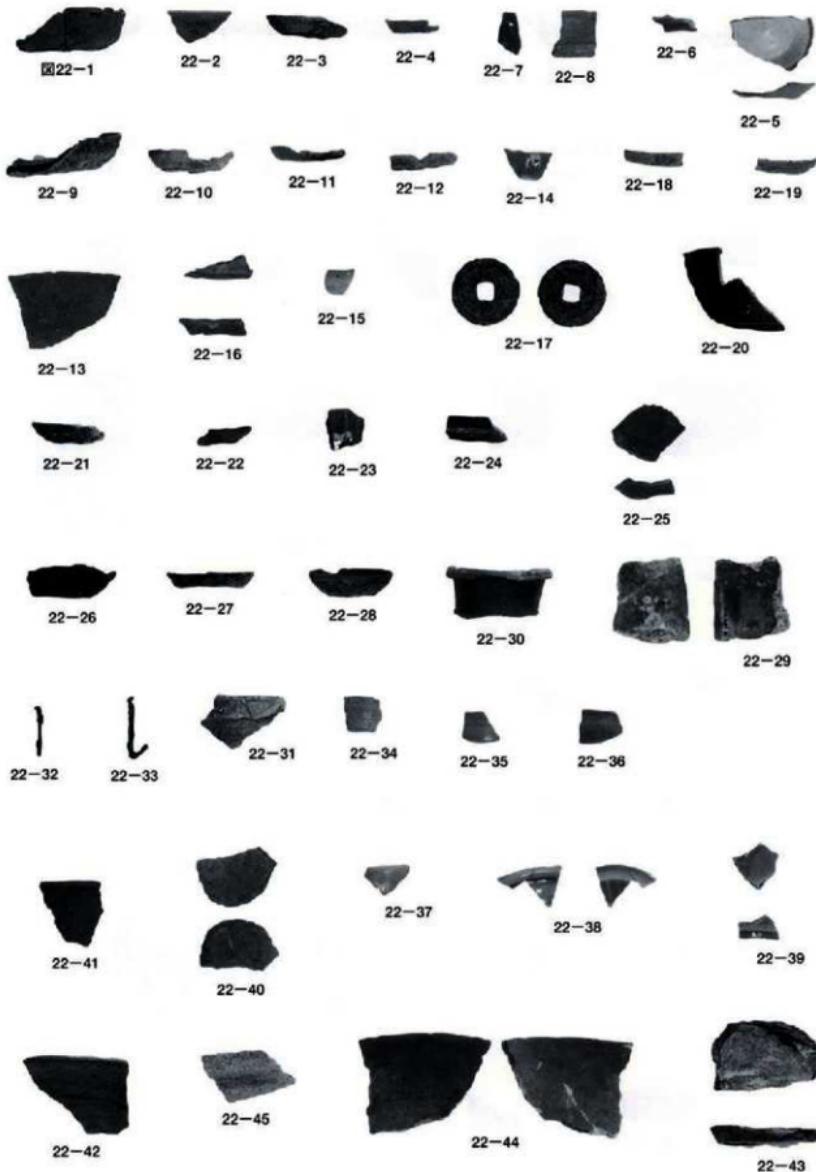
図版14



図版15



図版16



## 報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成12年度発掘調査報告書							
卷次	17							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	福田誠 神山晶子 菊川泉							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 神奈川県鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	平成13年3月							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因	
長谷小路 周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 由井ヶ浜三丁目 254番15外 2筆地点	14204	236	35° 18' 37"	139° 32' 47"	19990701 19990831	85.0	住宅建設
取容遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	特記事項				
長谷小路 周辺遺跡	中世都市遺跡	鎌倉時代 室町時代	方形堅穴建築址 井戸・土塹	道路遺構と平行する 方形堅穴建築址				

わかみやおおじ しゅうへん いせきぐん  
若宮大路周辺遺跡群 (NO.242)

小町二丁目402番5地点

## 例　　言

1.本報は鎌倉市小町二丁目402番5地点における住宅建設に伴う発掘調査報告である。

2.調査は平成11年7月6日から8月6日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。

3.調査体制は以下のとおりである。

担当者 手塚直樹

調査員 野本賢二、小柳津シゲ子、山上玉恵

調査補助員 田畠衣理、渡辺美佐子

作業員 大戸道猛、奥山利平、多田徳蔵、町田義一、山崎一男（鎌倉市シルバー人材センター）

調査協力者 福田誠（鎌倉市教育委員会）、本城裕、須佐仁和

4.本報の執筆は第3章の一部を田畠が、それ以外を野本が行い、これを手塚、野本が編集した。

5.資料整理は手塚、山上、渡辺、田畠、野本と兼任優先が行った。

6.写真は、全景（ポール式高所撮影）を木村美代治が、その他の遺構を野本が、遺物を兼任が撮影した。

7.本報に掲載した地図は鎌倉市都市基本図1:2500、1:500を縮小して使用した。

8.報文中のPはPit（柱穴）を表す。

9.本報中の遺構図縮尺は以下のとおりである。

図10 1:30

図4・5・6・8・9・11 1:60

10.遺物実測図の縮尺は基本的に3分の1である。それ以外は各々に縮尺を付した。

11.出土遺物の情報は遺物観察表に記した。遺物実測図番号、遺物観察表番号、遺物写真番号はそれぞれ一致する。

12.遺物写真的縮尺は不同である。

13.図面、写真、遺物等の資料はすべて鎌倉市教育委員会が保管している

14.発掘調査及び出土品整理にあたっては、次の諸氏・諸機関に御教示・御協力を賜った。（順不同・敬称略）

鈴木次郎（神奈川県教育庁）、佐藤仁彦（逗子市教育委員会）、鎌倉考古学研究所、（社）鎌倉市シルバー人材センター、高橋組、（株）殖産住宅相互

## 目 次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	102
第2章 調査の経緯と経過	108
第3章 発見された遺構と遺物	113
第4章 まとめ	121

## 挿 図 目 次

図1 調査地点と周辺の遺跡	103	図8 建物	114
図2 遺跡の位置	104	図9 墓	115
図3 グリッド設定図	108	図10 土坑・かわらけ埋納遺構	116
図4 遺構図(1)	109	図11 南北溝2~5	117
図5 遺構図(2)	111	図12 遺構出土遺物	119
図6 井戸	113	図13 遺構外出土遺物	120
図7 井戸出土遺物	113		

## 表 目 次

表1 周辺の遺跡一覧表	104	表3 中世遺物総破片数	123
表2 遺物観察表	123		

## 写 真 図 版 目 次

図版1 1.調査区全景(合成・南から)	127	3.調査区中央土坑群(西から)	128
2.井戸2(北から)	127	図版3 1.土坑8獣骨出土状況(南から)	129
3.墓(南から)	127	2.かわらけ埋納遺構(北から)	129
図版2 1.南北溝2~5(南から)	128	3.調査風景	129
2.南北溝と現小町大路(南東から)	128	図版4 遺物写真	130

# 第1章 調査遺跡の位置と歴史的環境

本調査地点は鶴岡八幡宮の南約300m、JR鎌倉駅の北東約500m、「若宮大路周辺遺跡群」（神奈川県遺跡台帳NO.242）<sup>(註1)</sup>の北東、小町大路<sup>(註2)</sup>と呼ばれる南北道路沿い東側に位置する。本調査地点の西方は「北条小町邸跡」（同台帳NO.282）、「宇津宮辻子幕府跡」（同台帳NO.239）、「北条時房・顯時邸跡」（同台帳NO.278）があり、北には鶴岡八幡宮、「政所跡」（同台帳NO.247）、宝戒寺及び「北条高時邸跡」（同台帳NO.281）、滑川を挟んだ東には「東勝寺跡」（同台帳NO.246）が存在する。

縄文時代前期（約5000～6000年前）の海進時、本地点周辺の小町・雪ノ下地域を含む鎌倉の低地は海中にあったと考えられている。縄文時代中期の海退後、砂質低湿地・砂丘間低地となり、縄文時代晚期以降は砂泥質平地となる<sup>(註3)</sup>。

本地点北東の大倉で弥生時代中期（宮ノ台期）を主体とする集落が発見されているが、本地点周辺で当該期の遺物は少量出土するものの遺構の発見例は無い。ただ、本地点西の「宇津宮辻子幕府跡」内小町二丁目366-1番地点の中世基盤層中で深堀（中期・宮ノ台期）が3点が集中して出土しているため<sup>(註4)</sup>、本地点付近にも集落が存在する可能性は高い。

古墳時代の住居址（前期）や古墳群（後期）が南の海浜地域で発見されるが、本地点周辺での当該期の遺構の発見例はほとんど無い<sup>(註5)</sup>。

奈良時代（8世紀前半）には相模国鎌倉郡が成立していた<sup>(註6)</sup>。その範囲は現在の鎌倉市のはか、逗子市、横浜市・藤沢市の一部と推定されている。本地点を含む旧鎌倉地域一帯は鎌倉郷・荏原郷に推定され、本地点西の今小路西遺跡（御成小学校）では鎌倉郡衙が発見された<sup>(註7)</sup>。本調査地点周辺の小町・雪ノ下地域では当該期の遺構の発見例は少ないものの、発掘調査時に若干量の土師器、須恵器等の遺物が混入している場合が多い。

鎌倉時代初期、本地点北東の大倉に御所（幕府）が置かれる。これは縄文時代晚期以降、谷底平野・山麓平野が広がりはじめ、土地の乾燥化が進んでいたため、都市鎌倉がこの大倉の地から始まったという上本進一氏の指摘は興味深い。鎌倉時代中期以降、御所は本地点西（若宮大路東）に置かれ、幕府関連の建物や北条氏邸宅や御家人邸宅等が集中する政治中枢域であったことは史実に明らかである<sup>(註8)</sup>。

『吾妻鏡』建長三年（1251）十二月三日と文永二年（1265）三月五日の記事において、鎌倉中の商業地域が七ヶ所に指定されたとき、いずれの場合も「小町」が選ばれている。おそらく、小町大路沿いにあったと思われるが不明である。

本地点西を南北に走る「小町大路」の初見は『吾妻鏡』建久二年（1191）3月4日条の記事である<sup>(註9)</sup>。また、同書には鎌倉時代中期將軍等が宇津宮辻子御所の出入りのために小町大路を通ったことが記されている<sup>(註10)</sup>。宇津宮辻子の御所を廻る郭内や小町大路沿いには北条氏や御家人の邸宅が並んでいたことがわかる。

南北朝から室町時代にかけて、鎌倉時代の中枢域であった小町大路沿いに日蓮宗寺院（本覚寺、大巧寺、妙勝寺、妙隆寺）が進出してくる<sup>(註11)</sup>。寺院はすべて小町大路に面している点は興味深い。寺院の進出はこれらの外護者である上杉氏やその重臣等が関係している可能性が高いと言える<sup>(註12)</sup>。雪ノ下・小町周辺地域では土壙墓の発見例があるものの当該期の遺構は希薄といえる。

江戸時代以降都市の面影が薄れ、鎌倉は物見遊山の対象とされ、多くの人々で賑わったらしい。16世紀末、旧鎌倉地城はほとんど幕府領となり、小町村・雪ノ下村の場合、幕府領のほか寺領（鶴岡八幡宮、建長寺、宝戒寺、本覚寺、大巧寺）となつた。19世紀以降、幕府領は大名領となり、明治時代の廃藩置県まで続く。明治時代初頭の絵図等を見ると、本地点周辺は畠地と書かれており<sup>(註13)</sup>、おそらく、江戸

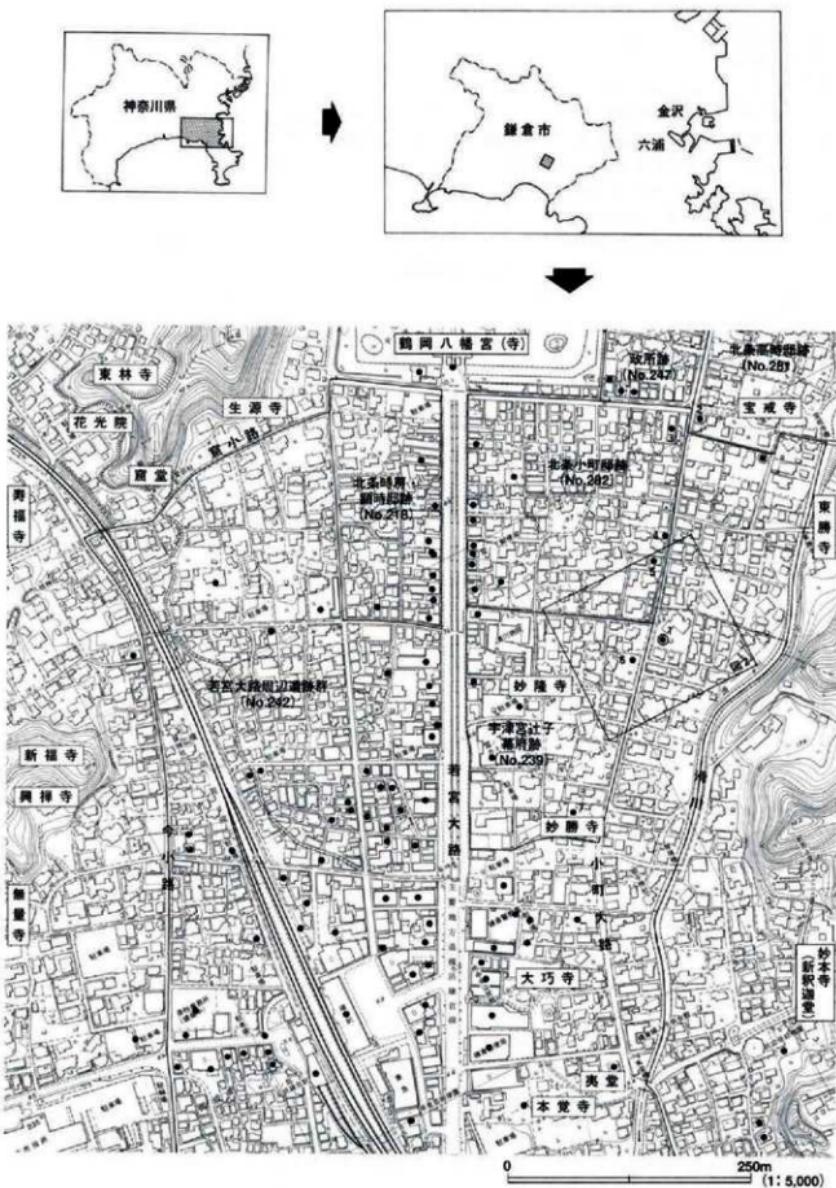


図1 調査地点と周辺の遺跡

番号	神奈川県 遺跡台帳番号	遺 跡 名	所 在 地	種 別	時 代	調査年度	文献
1	242	若宮大路周辺遺跡群（本調査地点）	小町二丁目402番5	都市	中世	1999年	
2	281	北条高時邸跡	小町二丁目426番3	都市	中世	1994年	a
3	282	北条小町邸跡（北条泰時・時頼邸跡）	雪ノ下一丁目395番	都市	中世	1988年	b
4	282	北条小町邸跡（若宮幕府跡）	雪ノ下一丁目432番2	都市	中世	1977年	c
5	282	北条小町邸跡（北条泰時・時頼邸跡）	雪ノ下一丁目432番2	都市	中世	1988年	d
6	239	宇津宮辻子幕府跡	小町二丁目374番1	都市	中世	1998年	e
7	239	宇津宮辻子幕府跡	小町二丁目389番1	都市	古墳・中世	1994年	f

表1 周辺の遺跡一覧表

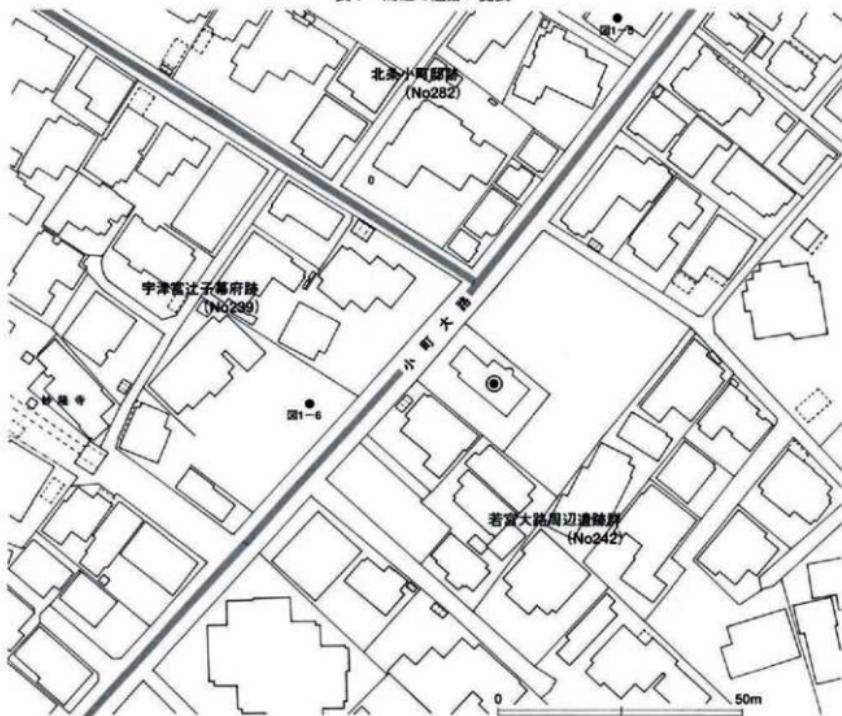


図2 遺跡の位置

時代のある時期まで遡るのはないかと考えられる。

小町大路沿い（北は宝戒寺、南は夷堂橋）では現在まで6ヶ所で発掘調査が行われている（図1）。  
地点2は「小町大路」と「横大路」との結節点の東、現宝戒寺境内の南にあたり、中世面3面、近世面1面が発見されている。中世期（13世紀後葉～15世紀前葉）は調査区西で中世の小町大路と側溝が発見され、道路地業面上で轍が確認されている。近世期（17～19世紀）は屋敷の一部が確認されている。

地点3では木組みを伴う横大路側溝が確認されているが、小町大路の側溝（南北溝）は発見されていない。

地点4では極小規模な確認調査が行われているが、小町大路側溝の発見にはいたっていない。

地点5では現小町大路の西端から約7m西で、3時期にわたる木組みを伴う小町大路側溝が発見されている。

地点6では室町時代（2時期）の小町大路の路面と鎌倉時代（6時期）の小町大路側溝が発見された。

溝2の底からは、小町大路（御所）側溝の作事を、幕府が御家人に課役として割り当てた工事区間の表示と推定される木簡が出土した。

地点7では中世生活面4面（13世紀前半～15世紀前半）が確認され、掘立柱建物等が発見されている。

また、調査区東のトレンチ調査では小町大路側溝と考えられる落ち込みが発見されている。

註

- 「若宮大路周辺遺跡群」は北条小町邸跡（神奈川県台帳NO.282）、宇津宮辻子幕府跡（同台帳NO.239）、北条時房・時頃邸跡（同台帳NO.278）を除く、南北は鶴岡八幡宮から大町大路（推定）、東西は滑川から今小路までを範囲とする。2小町大路の範囲はよくわかっていないが、高柳光寿氏は筋替橋から九品寺辻りまでと推測している。また、田代都夫氏は小町大路と大町大路は連続した南北路で、夷堂橋より北が小町大路、南が大町大路と推測している。

高柳光寿「第11章 9.小町大路・小坪路・横大路」「鎌倉市史」総説編 吉川弘文館 1959年

田代都夫「小町大路と大町大路・中世都市の中の「町」と「路」「湘南考古学同好会々報」73 湘南考古学同好会 1998年

3上本進二氏によれば本地点周辺は砂質平野・氾濫平野に相当する。

上本進二「鎌倉・逗子の地形発達史と道路形成」「池子棲敷戸跡」（仮称）医療保健センター建設地内埋蔵文化財発掘調査団・東国歴史考古学研究所 2000年

4田畠佐和子「宇津宮辻子幕府跡の調査」「第1回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨」 鎌倉考古学研究所・中世都市研究同人会 1991年

5宇津宮辻子幕府跡（小町二丁目389番1地点）では花粉分析が行われ、古墳時代中期頃に水田だった可能性が指摘されている。

鈴木茂「宇津宮辻子幕府跡の花粉化石（宇津宮辻子幕府跡）」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」12（第1分冊） 鎌倉市教育委員会 1996年

6東大寺正倉院文書のうち、天平七年（735）作成の相模國封戸租交易帳に鎌倉郡鎌倉郷、尺度郷、荏原郷が記載されている。また、天平勝寶元年（749）銘の正倉院御物の古製には、鎌倉郡沼浜郷、方瀬郷と見える。

高柳光寿「第1章 鎌倉郡・鎌倉郷」「鎌倉市史」総説編 1959年

7道構は1世紀前半から10世紀にかけてのものである。

河野貞知郎ほか「今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会 1990年

8鎌倉時代における北条氏邸宅の変遷については、貫達人氏、秋山哲雄氏の論文に詳しい。

貫達人「北条氏亭址考」「金沢文庫研究紀要」第8号 金沢文庫 1971年

秋山哲雄「都市鎌倉における北条氏の邸宅と寺院」「史學雜誌」第106編第9号 東京大学史學會 1997年

9「南風烈。丑寅小町大路遭失火。江馬殿（義時）。相模守（大内惟義）。村上判官代（基國）。比企右衛門尉（能員）。同藤内（朝宗）。佐々木三郎（盛綱）。昌寛法橋。新田四郎（忠常）。工藤小次郎（行光）。佐貫四郎（廣綱）已下の人屋數十燒亡。（中略）此間幕府同災。」

10、「吾妻鏡」に以下の記事が見える。宇津宮辻子御所および若宮御所の南門より北の記述である。

寛喜二年（1230）12月9日条 「亥親。竹御所。入御于營中。是御嫁娶之儀也。絆起楚忽。為密儀之間。非晴儀。且被用御輿。經小町大路。入御南門。」

嘉定元年（1236）6月29日条 「（前略）依可有明王院（五大堂尊）。供養。將軍家為御參道出御。（中略）其後御出於南門。小町大路北行。塔辻東行。」

建長四年（1252）4月14日条 「將軍家（宗尊親王）始御參鶴岳之八幡宮。（中略）路次。小町大路北行。政所西行。到島居 南下御。」

建長五年（1253）1月3日条 「（前略）經小町大路。入御相州（北条時頃邸宅）南門。」

文応元年（1260）3月21日条 「戊戌御息所（宗尊親王室）入御。（中略）町大路南行。入御所東門。」

11妙巖山本覚寺は応永二十八年（1421）もしくは永享八年（1436）の創建と伝える。長慶山正覺院大巧寺はもと十二所にあり、もと大行寺と称して源頼朝の祈願所であったと伝える。天文年間（1532～54年）に五世日棟が安産の神をまつたとの伝承があり、現在でも安産祈願の参拝客があとを絶たない。妙勝寺は創建不明。「日蓮辻説法碑」がある地の西に在ったが、明治二十九年（1896）福島県新山町に移転した。「相模國鎌倉郡村志」に建武二年（1335）

創建とみえるが、実のところ不明である。ちなみに、妙勝寺の門前にあった「日蓮腰掛石」が明治三十四年（1901）、現在地に移されている。「日蓮辻説法跡」、「腰掛石」に関しては、鈴木千歳「鎌倉史蹟考」（『鎌倉古絵図・紀行一錦山紀行篇』東京美術 1976年）に詳しい。般昌山妙隆寺は至徳二年（1385）創建と伝え、開基が千葉胤貞であることから千葉氏の屋敷跡とも伝える。法宣院（日蓮宗中山門流中山法華經寺の子院）末。腰掛山実教寺は大永年間（1521～28）、法心院日意が開いたと伝えるが、いつの頃か葉山一色に移っている。本興山常在寺は元弘の乱で廢絶し、大永三年（1523）に日在によって再興されたと伝える。以上のほか護法寺、常在寺、能藏寺、普妙寺、量詮院といった寺院や、福荷社、神明宮、浅間社、太神宮といった神社があつたらしいが、元の所在地は不明である。

〔小町村〕『相模国鎌倉郡村誌』神奈川県図書館協会 1991年

〔国説鎌倉年表〕鎌倉市 1989年

12妙隆寺の開基は千葉氏と伝える。湯浅治久氏は、応永期（15世紀初頭）武藏国守護である大膳上杉氏の守護代を努めた埴谷氏の出身である法宣院の末寺、講演職が上総、下総をはじめ鎌倉小町、武藏、洛中、東海道等、大膳上杉氏の守護管領を中心に分布し、その保護のもとに展開している事を指摘している。この時期、日蓮宗中山門流が江戸（東京）湾の港湾地や、奥州に到る陸上交通の拠点等の都市的な場に展開する。鎌倉において、港湾地である和賀島周辺もしくは和賀島と小町を結ぶ路沿い（現在の小町、大町、材木座）にも日蓮宗寺院が展開することから、これらも何かしらの因果関係があると考えられている。

湯浅治久「東國の日蓮宗」「中世の風景を読む2都市鎌倉と坂東の海に暮らす」新人物往来社 1994年

13明治四年（1871）完成の「鶴岡八幡宮境内絵図」を見ると、西は小町大路、東は滑川、北は宝成寺南限、南は夷堂橋の範囲は「畠」と書かれている。

〔鎌倉の古絵図〕Ⅱ 鎌倉国宝館 1969年

#### 参考文献

「吾妻鏡」新訂増補国史大系 吉川弘文館 1933年

#### 一覧表出典

- a.原廣志ほか「北条高時邸跡」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」12（第1分冊）鎌倉市教育委員会 1996年
- b.菊川英政「北条泰時・時頼邸跡」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」5 鎌倉市教育委員会 1989年
- c.松尾宣方「若宮幕府跡」「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報」1 鎌倉市教育委員会 1983年
- d.菊川英政ほか「北条泰時・時頼邸跡」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」5 鎌倉市教育委員会 1989年
- e.原廣志「鎌倉市宇津宮辻子幕府跡」「第22回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨」神奈川県考古学会 1998年
- f.原廣志・佐藤仁彦「宇津宮辻子幕府跡」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」12（第1分冊）鎌倉市教育委員会 1996年

## 第2章 調査の経緯と経過

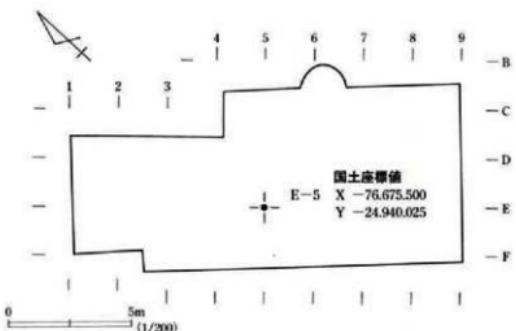


図3 グリッド設定図

在が確認された。このため、事業者との協議を数回行うとともに、文化財保護法の規定に基づく手続きが行われた。調査実施方法の協議で以下のことが決定した。

- ・钢管杭を新築建物の基礎杭として使用するので、杭の強度安定のため、これにかかる深い遺構に関しては完掘はない。
- ・確認調査の結果から遺構面2面が確認されたが、上の1面（地表面から約45cm下（海拔8.75m））である泥岩地業面は調査期間が限られたため、これを断念し、中世基盤層上面のみを調査対象とする。

発掘調査は平成11年7月6日から同年8月6日まで行われた。調査面積は約180m<sup>2</sup>。以下、調査の過程を記す。

7月6日 重機によるⅠ区表土掘削（地表下約80cm）	7月28日 Ⅱ区調査開始
7月8日 機材搬入、Ⅰ区調査開始	7月30日 道路面検出
7月9日 ベルトコンベア設定、遺構掘り	7月31日 南北溝掘り
7月16日 グリッド設定、平面実測	8月5日 Ⅱ区全景
7月23日 Ⅰ区全景、調査区北壁土層実測	8月6日 平面実測、調査区北壁土層実測、撤収
7月26日 重機によるⅠ区残土移動・Ⅱ区表土掘削	

平成11年6月、本地点において钢管杭を打設する工事が実施されている状況が確認された。工事関係者に事情を確認したところ、建築確認申請の手続き完了後の工法変更により杭打ちの基礎構造が採られ現地施工に至ったとのことであった。当該地における同種の工事内容では埋蔵文化財への影響が不可避であると考えられたため、急遽、確認調査を実施したところ、地表下40cm以下に埋蔵文化財の存

## 土別注記

1. 黄茶褐色土 混岩粉・かわらけ片・炭粒を含む。砂混じり。  
 2. 黄茶褐色砂（貝砂）  
 3. 泥岩層（第1面）  
 4. 泥岩層 3に比べて薄い。  
 5. 喀茶褐色土  
 6. 喀茶褐色土  
 7. 茶褐色土 混岩粉・かわらけ片・炭粒を含む。  
 8. 茶褐色土 玄石を多く含む。  
 9. 茶褐色土 8に比べて泥岩（~4cm大）を多く含む。  
 10. 喀褐色土 泥岩粉・かわらけ片・炭粒を含む。  
 11. 喀褐色土 泥岩塊（~5cm大）・泥岩粉・炭粒を含む。  
 12. 喀灰褐色粘土 泥岩粉・かわらけ片・炭粒を含む。  
 13. 喀灰褐色粘土  
 14. 喀褐色細砂  
 15. 哈褐色粘土  
 16. 黄茶褐色土  
 17. 黑褐色土 自然遺体（植物）を若干含む。植質空穴あり。  
 18. 黑褐色土 泥岩粉を若干含む。しまりあり。  
 19. 黄褐色細砂 泥岩粉・粘土と混じる。  
 20. 黄褐色細砂 中世墓群層（B）の流れ込み。  
 21. 黑褐色細砂 細砂・泥岩粉と混じる。  
 22. 黑褐色細砂  
 23. 黑褐色土 砂混じり。  
 24. 黑褐色土 細砂・粘土と混じる。  
 25. 黑褐色砂質土（中世墓群層）  
 26. 黑褐色細砂（自然堆積層）  
 27. 泥入物なし。

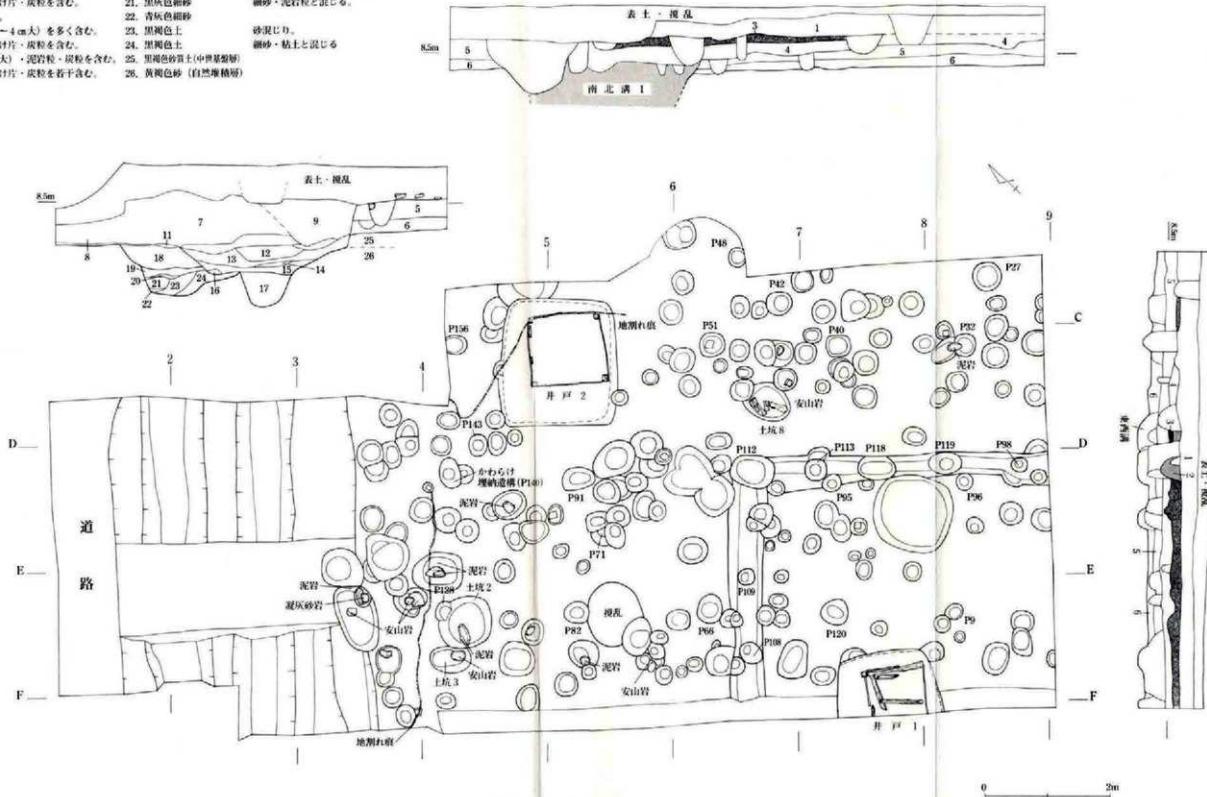


図4 造構図(1)

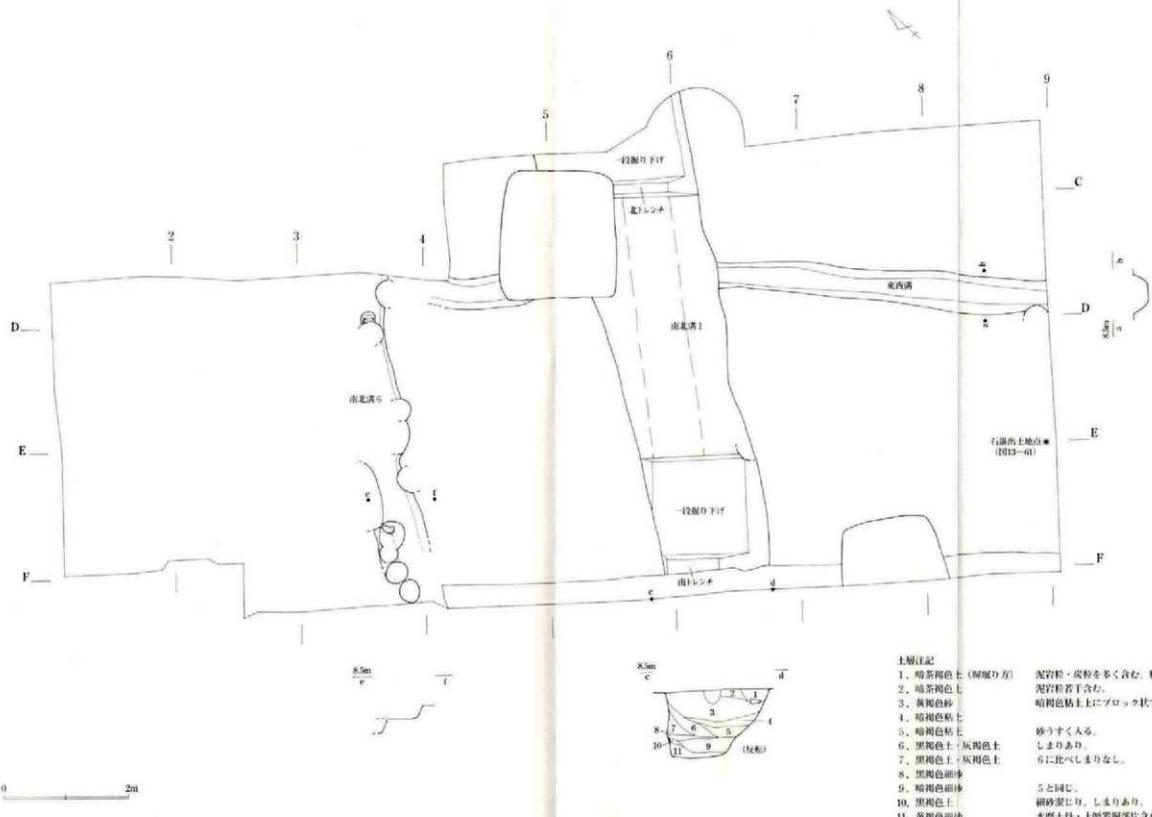
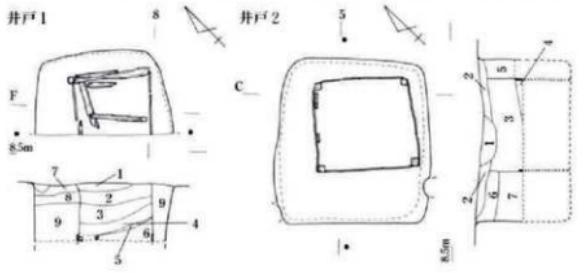


図5 造構図(2)

## 第3章 発見された遺構と遺物

地表面から約45cm下（海拔8.75m）で泥岩敷の地業を確認したが、調査期間等の関係からこの面をとばし、地表面から55~80cm下（海拔8.4~8.65m）までを重機で掘削した。さらに35~60cm（海拔約7.8~8.3m）を人力で掘り下げ、中世基盤層上で遺構の一括確認を行った。4ラインあたりを境に、西側



土質記

1. 黄褐色土・泥質土（～3cm）、不含む。
2. 黄褐色土・泥質土（～3cm）、不含む。
3. 黄褐色土・泥質・泥炭質・土器・灰多く含む、しまりない。
4. 黄褐色土・泥質・泥炭質・土器・灰多く含む、しまりない。
5. 灰層
6. 黄褐色土・泥質・泥炭質・土器・灰多く含む、しまりない。
7. 黄褐色土（灰褐色土と混じる）
8. 黄褐色砂（7.5比～8.5比）
9. 黄褐色砂（灰白色土なし、南北溝上層（3層）と共に）

土質記

1. 黄褐色土（田畠） 泥質土・かわらけ含む、ほりなし。
2. 黄褐色土（山耕田） 泥質土・かわらけ含む、ほりなし。
3. 黄褐色土（山耕田） 泥質土（30cm以下）・泥炭質・花崗岩・かわらけ含む、しまりあり。
4. 黄褐色土・多量の泥炭質含む、しまりあり。
5. 黄褐色土・10比～15比多く混じる。
6. 黄褐色土（やや砂質）
7. 黄褐色土・泥質土（30cm以上）含む、粘性強度。

図6 井戸

### 井戸1（図6）

調査区南壁際の7・8-E・Fグリッドに位置する。井戸南側は調査区外に延びる。住宅基礎杭の安定と安全対策の面から完掘していないため全容は不明である。掘り方は南北110cm以上、東西170cm、確認面からの深さは70cm以上である。井戸枠は一辺（北辺）100cmの規模をもつ。井戸枠の構造は方形隅柱横桟型である。南北軸線方位はN39°-Eを示す。

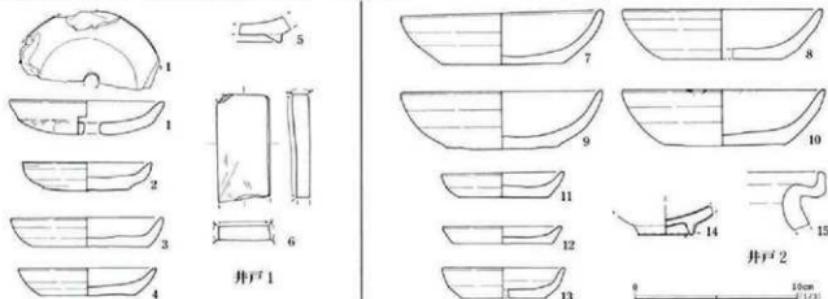


図7 井戸出土遺物

は旧小町大路の東側限界かと思われる道路状遺構と溝が検出された。東側は密に遺構が検出され、各遺構は時期差を有する。遺構は井戸2基、掘立柱建物1棟、塀1条、道路状遺構1面、溝7条、土坑8基、柱穴約180口が発見された。また遺構とは別に、4・5ライン付近で幅2~3cm程度の細い筋状の地割れ（噴砂）が発見されている。南北溝1・6、東西溝は、遺構図が煩雑になるのを避けるため、遺構図1（図4）とは別に遺構図2（図5）として示した。以下、廃絶時期の新しいものから説明する。

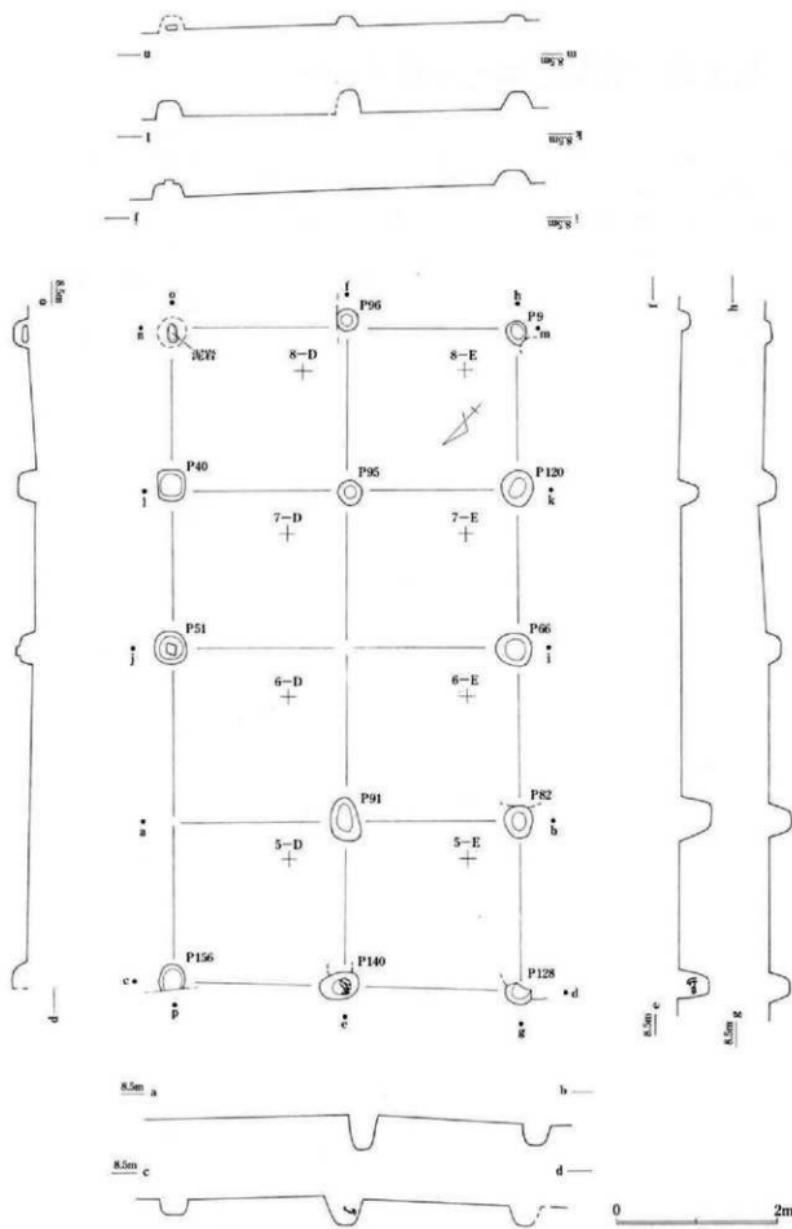


图 8 建物

出土した遺物の内訳は、かわらけ149点（手づくね17、ロクロ132）、舶載陶磁器3点（青磁碗2、青白磁皿1）、渥美窯製品（甕）3点、常滑窯製品3点（鉢1、甕1山皿1）、産地不明土器1点、平瓦1点、釘4点、仕上砥1点と獸骨4点の計169点である。そのうち図示し得たのは、図7-1～6である。1～4はかわらけで、1は手捏ね成形、2～4はロクロ成形。1は淡灰橙色を呈し、底部中央に直径9mm程度の穿孔がある。その他は淡褐色を呈し、胎土・焼成共に良好。5は山茶碗底部片。色調は灰色を呈す。高台疊付に粉穀痕が残る。6は鳴滝産仕上げ砥。色調は淡灰橙色を呈し、1面のみ使用している。

#### 井戸2（図6）

調査区北壁付近の4・5-B・Cグリッドに位置する。井戸1同様、住宅基礎杭の安定と安全対策の面から完掘していないため全容は不明である。掘り方は南北200cm、東西185cm、確認面からの深さは115cm以上を測る。平面は隅丸方形で、井戸枠の構造は一辺が110cm前後の方形隅柱横棟型である。隅柱は8×9cm前後の角材が使用されている。縦板は幅16～37cm、厚さ約2cmで、一辺に4枚を使用している。南北軸線方位はN-47°-Eを示す。

出土した遺物の内訳は、かわらけ180点（手づくね9、ロクロ171）、舶載陶磁器4点（青磁碗2、白磁四耳壺1点、青白磁皿1）、渥美窯製品（甕）1点、常滑窯製品11点（鉢3、甕8）、白かわらけ（手づくね）1点と獸骨2点の計199点である。かわらけは、手づくね成形のものが若干量出土しているもののロクロ成形がほとんどである。ロクロ成形は薄手丸深タイプのものが若干量あるが、ほとんどは厚手の内壁するものである。そのうち図示したのは、図7-7～15である。7～13はロクロ成形のかわらけ。概ね灰橙色あるいは淡橙色を呈し、胎土・焼成共に良好。10は口唇部に若干煤が付着しているため、灯明皿として使用されたと考えられる。14は龍泉窯系青磁碗の底部片。胎土は灰白色、釉調は半透明な薄緑色を呈する。高台疊付を除き、外底面まで釉が掛かる。15は常滑窯甕の口縁部片。口縁端部は垂直につまみあげている。胎土は黒褐色、色調は茶褐色を呈する。

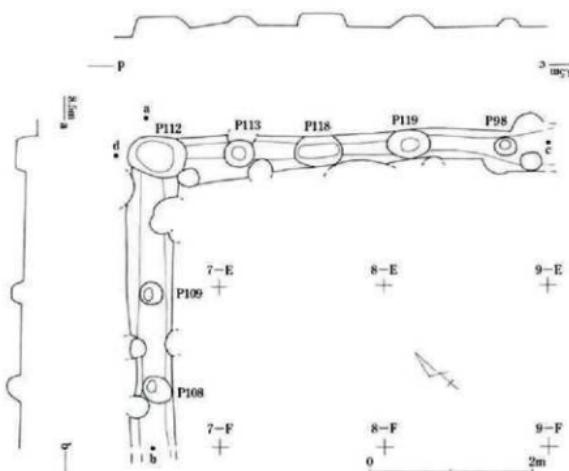


図9 堀

#### 建物（図8）

掘立柱建物である。調査区中央4～8-C～Eグリッドに位置する。確認規模は南北2間、東西4間である。柱穴間の距離は芯々で210cm前後を測り、径30～50cm前後の不整円形あるいは楕円形の柱穴が12口発見されている。確認面からの深さは10～40cmを測る。そのうちPit.51には長さ7cm、幅7cm、高さ5cmの角柱の痕跡が残る。この他にも角柱痕は6つ発見されているが、建物として捉えられなかつた。南北軸線方位はN-44°-Eを示す。柱穴内から遺物が若干量出土したが、図示し得るも



図10 土坑・かわらけ埋納遺構

のは無かった（P140は「かわらけ埋納遺構」参照）。

#### 堀（図9）

調査区南東6～8-D・Eグリッドに位置する。平面形L字状の溝状掘り方の内側に径30～50cmの不整円形あるいは楕円形を呈した柱穴が配される。南北の掘り方は上幅50cm前後、下幅20cm前後、確認面からの深さ20cm。主軸線方位はN-47°-E。東西の掘り方は上幅55cm前後、下幅30cm前後、確認面からの深さ20cm、柱穴間の距離は芯々で110cm前後を測る。主軸線方位はN-41°-W。

掘り方内の柱穴は12口発見された。確認規模は東西4間以上、南北2間以上である。柱穴間の距離は芯々で115～170cm前後を測る。調査時、柱穴と堀掘り方の覆土の差異はほとんど無かったため、布掘り状の「堀」の跡として捉えた。しかしながら、溝状掘り方と柱穴はそれぞれ別の遺構で、溝状掘り方は雨落ち溝の可能性があるかもしれない。

出土した遺物の内訳は、かわらけ195点（手づくね162点、ロクロ33点）、渥美窯製品14点（甕13、鉢1）、常滑窯製品（甕）2点の計211点である。かわらけは手づくね成形が圧倒的に多く、タイプとしては厚手で棱線が明瞭でないものが多い。図12-16は渥美窯捏鉢の口縁部片。

#### 土坑2（図10）

4-Eグリッドに位置し、南の土坑3を切る。平面は楕円形を呈し、長軸85cm、短軸80cm、確認面からの深さ27cmを測る。下場から15cm上方で泥岩塊が発見された。

出土した遺物の内訳は、かわらけ（手づくね成形）14点、青磁碗1点と軽石1点の計16点である。

図12-17は手づくね成形のかわらけの口縁部片で、灰褐色を呈する。18は龍泉窯系青磁碗。胎土は灰色、釉調は透明な灰緑色を呈する。

#### 土坑3（図10）

4-Eグリッドに位置し、土坑2に切られる。平面は長楕円を呈し、長軸65cm、短軸45cm、確認面からの深さ23cmを測る。下場から3cm上方で安山岩が発見された。出土した遺物の内訳は、かわらけ8点（手づくね6、ロクロ2）、渥美窯碗1点、滑石鍋1点の計10点である。

図12-19は渥美窯碗の口縁部片で、胎土は暗灰色を呈し、自然釉がかかる。内面に目痕がある。

#### 土坑8（図10）

調査区北東6-C・Dグリッドに位置する。平面は不整円形を呈し、長軸75cm、短軸60cm、確認面からの深さ7cmを測る。遺構内からは馬の前足部の骨（肩胛骨から中手骨にかけて？）が発見された。獸骨以外、遺物は発見されなかった。

### かわらけ埋納遺構（図10）

調査区中央4-Dグリッドに位置する。平面は長楕円を呈し、長軸50cm、短軸33cm、確認面からの深さ38cmを測る。柱穴下場から15cm上方で、手づくね成形のかわらけ（大型6点、小型1点）が数枚重なって発見され、かわらけ内には磨滅した骨片が2つ入っていた。骨片は獸骨と思われるが、小片のため種目や部位等は不明である。これらは何らかの目的で埋納したものと考えられる。

図12-26～31は手づくね成形のかわらけ。概ね灰褐色を呈する。厚手で棱線は明瞭である。32・33は用途不明の骨片で製品といえるかどうかわからない。いずれも2cm四方に成形しているようで、全体的に摩滅している。

### 道路（図11）

調査区西側1-C～Eグリッドに位置する。中世基盤層である黒褐色土を削平し、その下層の黄褐色砂

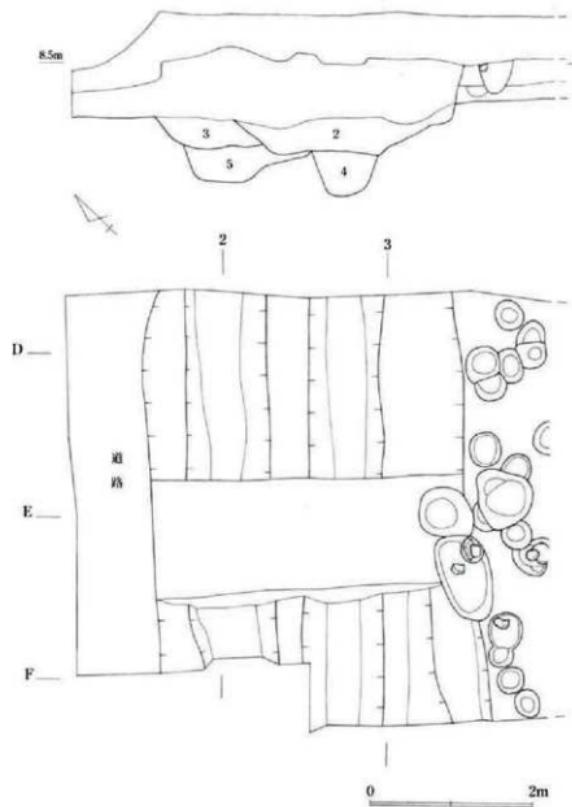


図11 南北溝2～5

を露頭させている。この直上には、5cm大の玉石を含む茶褐色土を薄く敷いている。主軸方位はN-43°Eを示し、現小町大路とほぼ並行する。この道路は旧小町大路の東側限界と考えられる。

#### 南北溝2～5（図11）

##### 溝2

調査区西側2・3-C～Eグリッドに位置する。断面は逆台形を呈する。規模は下幅130cm、確認できる深さ約40cm。根駄木等の木組み部材は発見されなかった。

出土した遺物の内訳は、かわらけ96点（手づくね33、ロクロ41、不明22）、白磁口兀皿1点、瀬戸窯雪平鍋1点、常滑窯製品2点（Ⅱ類鉢1、壺1）、山茶碗（南部系）1点、瓦賀火鉢2点、平瓦1点、銅錢1点、スラグ2点の計107点である。図12-39は銅錢で、北宋1107年初鑄の大觀通寶。常滑窯壺は口縁部片で縁帶が付くものである。

##### 溝3

調査区西側1・2-C～Eグリッドに位置する。断面は逆台形を呈する。規模は上幅・下幅とも溝2に切られ不明。確認できる深さ約40cm。根駄木等の木組み部材は発見されなかった。遺物は手づくね成形のかわらけ1点と馬と思われる下顎骨1点が出土したが、図示し得るものでは無かった。

##### 溝4

調査区西側2-C～Eグリッドに位置する。断面はU字型を呈する。規模は下幅60cm、確認できる深さ約40cm。根駄木等の木組み部材は発見されなかった。出土した遺物の内訳は、かわらけ（ロクロ成形）2点、木製品6点（箸4、独楽1、不明1）の計8点である。

図12-35はロクロ成形のかわらけ。鎌倉における中世最初期のロクロ成形かわらけ群の一つと考えられる（図示し得なかったもう1点も同じと思われる）<sup>(11)</sup>。胎土は灰褐色を呈し、砂質である。後線強く、底部脇から外反気味に開き、体部中位で外反気味に立ち上がる。口縁部は肥厚する。内底面にはナデが施されず、外底面は低速回転での糸切りである。36～38は木製品。36は独楽。削りは雑で、芯棒の穴は7mmである。37・38は箸。

##### 溝5

調査区西側1・2-C～Eグリッドに位置する。断面は逆台形を呈する規模は下幅45cm、確認できる深さ約55cm。根駄木等の木組み部材は発見されなかった。出土した遺物の内訳は、かわらけ（ロクロ成形）2点、土師器壺7点の計9点である。土師器壺は恐らく溝の北から流れてきたものであろうか。かわらけは小破片のため図示できなかった。

これらの溝の南北軸線方位はN-44°～47°-Eを示し、現在の小町大路にはほぼ平行して南北に走る。溝下場の海拔レベルの差はほとんどないが、北から南へ流れると考えられる。溝の新旧関係が明確ではないが、旧小町大路の道路に伴う側溝と考えられる。

#### 南北溝1（図5）

調査区中央5・6-B～Eグリッドに位置する。東西溝を切る。住宅基礎杭の安定と安全対策の面から完掘していないため全容は不明である。南北両端のトレンチで確認できた溝の規模は上幅170～250cm、下幅85cm、確認面からの深さ100cmを測る。主軸方位はN-37°-Eを示し、現在の小町大路に比べやや西に振れる。南トレントの下場西側で横板の痕跡が確認された。溝下場の海拔は北端で7.55m、南端で7.1mを測り、北から南へ流れれる。

#### 南北溝6（図5）

3-C～Eグリッドで溝かと考えられる落ち込みが発見された。規模は上幅・下幅ともに不明で、確認

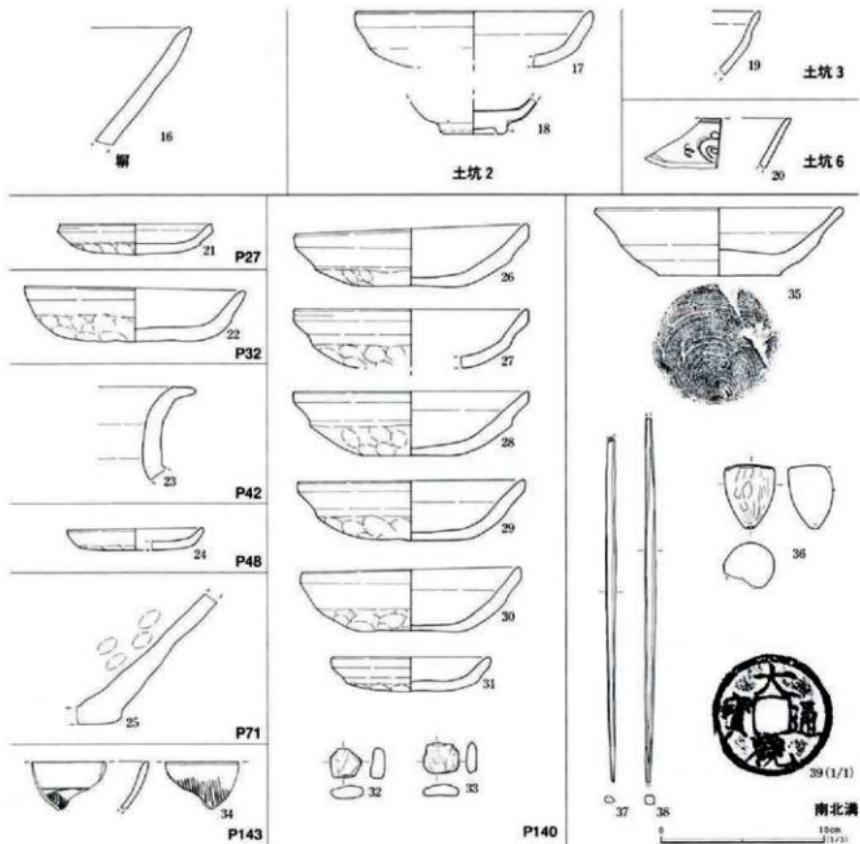


図12 遺構出土遺物

面からの深さ20cmを測る。覆土は黒褐色土で、中世基盤層に比べややしまりないが、遺構の平面プラン確認は困難を窮めた。主軸線方位はN-34°-Eを示し、南北溝1とほぼ平行である。根駄木等の木組み部材は発見されなかった。

出土した遺物の内訳は、かわらけ6点（手づくね1、ロクロ5）、青磁皿1点、獸骨1点の計8点である。いずれも小破片のため、図示し得る遺物はなかった。

#### 東西溝（図5）

調査区東側4~8-Cグリッドに位置する。南北溝1に切られる。海拔約8.2m。規模は上幅40~60cm、下幅20~35cm、確認面からの深さ10~20cmを測る。主軸線方位はN-38°-Wを示す。溝下場の海拔は西端で8.1m、東端で7.95mを測り、西から東へ流れる。東端は更に調査区外に延び、そのまま滑川方面に達すると考えられる。

#### その他の遺構出土遺物（図12）

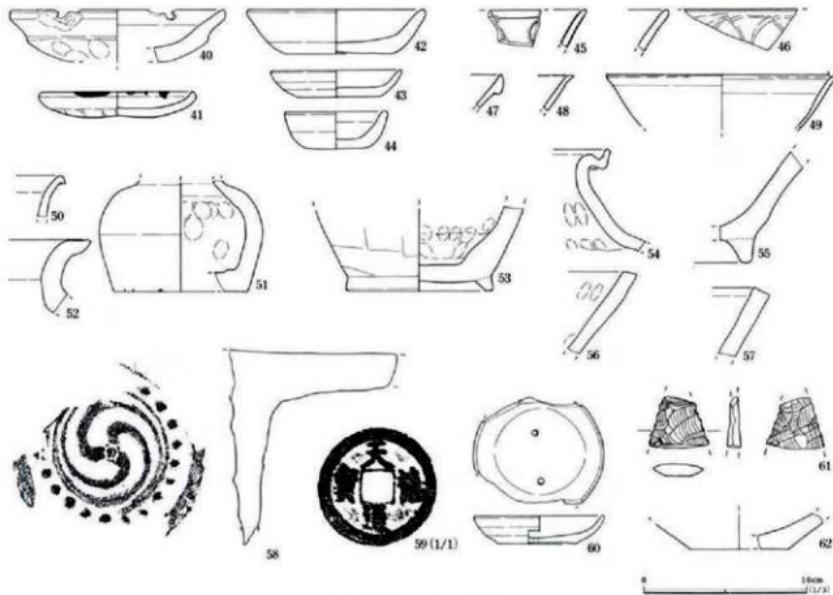


図13 遺構外出土遺物

20は龍泉窯系青磁劃花文碗の口縁部片。胎土は灰色、釉調は透明な暗緑色を呈する。土坑6出土。21・22は手づくね成形のかわらけで、21はPit.27、22はPit.32より出土。23は涅美窯窯の口縁部片。胎土は灰黒色、刷毛塗りで緑褐色の釉がかかる。Pit.42より出土。24は手づくね成形のかわらけで、灰橙色を呈する。Pit.48出土。25は常滑窯片口鉢（Ⅱ類）の底部片。胎土は灰色、器表は茶褐色を呈する。Pit.71より出土。34は同安窯系櫛搔文碗の口縁部片。胎土は淡灰黄色、釉調は透明な淡緑色を呈する。Pit.143より出土。

#### 遺構外出土遺物（図13）

40～59は中世包含層出土遺物。泥岩地業面のレベルから中世基盤層までの遺物を中世包含層出土遺物としてまとめた。

40～44はかわらけ。40・41が手づくね成形、42～44はロクロ成形。40は灰橙色、41は灰褐色を呈する。41は口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。42～44は橙色ないし褐色を呈する。44は第7層（図4）出土。45～49は船載陶磁器。45は龍泉窯系青磁劃花文碗の口縁部片。胎土は灰色、釉調は半透明な淡灰緑色を呈する。46は龍泉窯系青磁蓮弁文碗の口縁部片。胎土は灰色、釉調は半透明な灰緑色を呈する。47は白磁玉縁碗の口縁部片。胎土は灰白色、釉調は半透明な灰白色で極薄く掛かる。48は白磁端反碗の口縁部片。胎土は灰白色、釉調は不透明な灰白色で極薄く掛かる。49は白磁口兀碗の口縁部。胎土は灰色、釉調は半透明な灰白色でやや青味ががり、極薄く掛かる。50～52は涅美窯製品。50は壺口縁部片。胎土は暗灰色、刷毛塗りで黒灰色の釉が掛かる。51は壺。胎土は灰色、色調は淡灰褐色を呈する。内面肩部から胴部にかけて指頭痕が残る。内面に成分不明の付着物があり、赤く変色している。52は壺口縁部片。胎土・色調共に明灰色を呈する。自然釉は掛からず、

胎土は軟質である。53～57は常滑窯製品。53は壺。外面胴下部はヘラ削り、外底部は回転糸切り後に高台を貼り付けている。胎土は褐色、色調は茶褐色を呈する。四耳壺の可能性がある。54は甕口縁部片。口縁部をやや垂直に立ち上げている。胎土は褐色、色調は茶褐色を呈する。55～57は鉢で、55は底部片。56・57は口縁部片。55は高台が付き、内底面はかなり磨滅している。胎土は茶褐色、色調は赤茶色を呈する。58は軒丸瓦（鎧瓦）。内区に右まわりの三巴文を配し、外区に大粒の珠文が間隔をもって周囲を巡っている。内区中央には竹管文が押印される。丸瓦部分の凹面は布目痕を有し、凸面はヘラ削りとナデで調整されている。色調は暗灰色、胎土は灰白色を呈する。調査区西第6層出土。59は銅錢で、初鑄北宋1017年の天禧通寶。

#### 表土出土遺物

図13-60はロクロ成形のかわらけ。胎土は橙色を呈する。底部に径0.35cm程度の穿孔が2ヶ所ある。用途は不明である。

#### 中世以前の遺物

##### 石鎚（図11-61）

黒曜石製の無茎鎚。上端と下端は破損している。I区調査終了日に中世基盤層上面を少し削ったところ偶然に発見したものである（図5に出土地点注記）。石鎚は鎌倉市内においては台地上で発見されることが多いが<sup>(註2)</sup>、沖積地において発見されるのは珍しい<sup>(註3)</sup>。

##### 土師器

南北溝1～3で小片が出土している。その多くは最下層の粗砂中に含まれていたが、これは流水によって出土地点に流れ着いたものと考えられる。図13-62は土師器甕の底部。南北溝5出土。器表は灰茶色で、外面は一部火を受けて黒く変色している。古墳時代前期の所産か。

##### 地割れ痕（噴砂）

Dライン南の4ラインを南北に走るものと、4・5-B・Cグリッドで井戸2の内側およびその周辺を走るものがある。井戸2の覆土を断ち切っていることから、井戸2廃絶（14世紀前半）以降に発生した地震の痕跡と考えられる。噴砂は黄褐色で粗く、幅は2～3cmを測る。

註

1. 鎌倉市内の同時期のタイプ（Ⅱ群1類L）に比べて、器高が低く2～3cm後線が少ない。本地点のタイプはこの群中で先行するものなのか、同時期に併存するのか、あるいは後に続くものなのかは不明である。今後の出土例の増加を待ちたい。

清水栄徳「かわらけ」考（2）-今小路西遺跡出土資料にみる中世前期の土器様相とその両期の検討-『中世都市研究』第2号 中世都市研究同人会 1992年

宗臺秀明「中世都市鎌倉の初期かわらけ」『中近世土器の基礎研究』 XIII 日本中世土器研究会編 1998年

2. 繩文時代の黒曜石製石鎚について『鎌倉市史』考古編では、採集地として津（上ノ山）、鎌倉山（住吉）、葛原岡、上町屋（富士塚）を挙げている。いずれも丘陵上である。

赤星直忠『鎌倉市史』考古編 吉川弘文館 1959年

3. 十二所地区の大慈寺跡東、字丈六で発見されたという例があるが、詳細は不明である。

## 第4章 まとめ

本調査地点は、地表下約60cmまで近世もしくは近代以降の削平により、13世紀後半以降の中世生活面が失われていた。そのため、井戸2基を掘り込んだ生活面は確認されなかった。本調査地点西（若宮大路東）の「宇津宮辻子幕府跡」、「北条小町邸跡」の南でも同じように中世後期の生活面が失われているようである。

・溝の軸線及び変遷について

溝の新旧関係は以下の順番となる。

古：東西溝→南北溝6→南北溝1→南北溝4・5→南北溝3→南北溝2：新

南北溝は、南北溝6を除けば概ね東から西に変遷しているといえるが、南北溝2～5は周辺の立地状況等を鑑みると、小町大路側溝として差し支えないと考えられる。が、南北溝1及び6は小町大路及び若宮大路との軸線を異にし、小町大路にともなう側溝なのか、それとも小町大路に関係ない水路的なものなのか判断しかねる。

東西溝の主軸方位はN-42°-Wで、現小町大路（本地点前N-28°-E）とは直行しない。溝下場のレベルを考慮すると、調査地点東の滑川方面へ流れていると考えられる。

註

「宇津宮辻子幕府跡」内小町二丁目366-1番地点では中世基盤層上に宝永の火山灰が堆積し、その直上に水田の床土が堆積しているのが確認されている。

田畠佐和子「宇津宮辻子幕府跡の調査」「第1回鎌倉市遺跡・研究発表会発表要旨」鎌倉考古学研究所・中世都市研究同人会 1991年

図版番号	遺物番号	種別	計測値(単位はcm・括弧は復元値)	観察事項
図7	1	かわらけ	口径(9.4)	成形: 手づくね 色調: 淡灰褐色 備考: ほぼ中央に径0.9 の穿孔あり
	2	かわらけ	口径(8.9) 底径(5.3) 器高1.8	成形: ロクロ 外底: スノコ板 色調: 淡褐色
	3	かわらけ	口径9.2 底径7.5 器高1.8	成形: ロクロ 外底: スノコ板 色調: 淡褐色
	4	かわらけ	口径(8.4) 底径(5.8) 器高1.7	成形: ロクロ 外底: スノコ板 色調: 淡褐色
	5	山根瓶		胎土色調: 灰色 高台設付けに複数段
	6	甌石 山根風	長さ(6.6) 幅3.2 最大厚1.05	胎土: 淡褐色
	7	かわらけ	口径12.3 底径7.4 器高3.2	成形: ロクロ 外底: スノコ板 色調: 淡褐色
	8	かわらけ	口径(12.2) 底径(7.3) 器高3.1	成形: ロクロ 外底: スノコ板 色調: 淡褐色
	9	かわらけ	口径12.3 底径7.0 器高3.5	成形: ロクロ 外底: スノコ板 色調: 淡褐色
	10	かわらけ	口径12.4 底径7.4 器高3.4	成形ロクロ 外底: スノコ板 色調: 淡褐色 備考: 灯明皿として使用
	11	かわらけ	口径7.4 底径5.6 器高3.4	成形: ロクロ 外底: スノコ板 色調: 灰褐色
	12	かわらけ	口径7.2 底径6.1 器高1.1	成形: ロクロ 外底: スノコ板 色調: 淡褐色
	13	かわらけ	口径(7.5) 底径(5.0) 器高1.9	成形: ロクロ 外底: スノコ板 色調: 淡褐色
	14	青磁 瓶	底径(3.4)	胎土: 灰白色 輪裏: 薄緑色 手透明
	15	常滑窯 壺		胎土: 黑褐色 色調: 茶褐色
図12	16	涅槃堂 距鉢		胎土色調: 灰色
	17	かわらけ	口径(14)	成形: 手づくね 胎土: 灰褐色 備考: 再火を受けて外面部剥離
	18	青磁 瓶	底径4.1	胎土: 灰色 輪裏: 灰褐色 透明 気泡多い
	19	涅槃堂 壺		胎土: 脆胎土 自然釉 備考: 内面に目痕
	20	青磁 刻文文瓶		胎土: 灰色 輪裏: 暗緑色 透明
	21	かわらけ	口径(9.2) 器高1.9	成形: 手づくね 胎土: 淡褐色
	22	かわらけ	口径13.4 器高3.3	成形: 手づくね 胎土: 淡褐色
	23	涅槃堂 壺		胎土: 灰黒色 輪裏: 灰褐色 磁毛塵り
	24	かわらけ	口径(8.2) 器高1.3	成形: 手づくね 胎土: 灰褐色
	25	常滑窯 片口鉢(直脚)		胎土: 灰色 色調: 黑褐色
	26	かわらけ	口径14.1 器高3.6	成形: 手づくね 胎土: 灰褐色
	27	かわらけ	口径(14.2)	成形: 手づくね 胎土: 灰褐色
	28	かわらけ	口径(14.3) 器高4.0	成形: 手づくね 胎土: 灰褐色
	29	かわらけ	口径13.8 器高3.6	成形: 手づくね 胎土: 灰褐色
図13	30	かわらけ	口径13.1 器高3.8	成形: 手づくね 胎土: 灰褐色
	31	かわらけ	口径9.6 器高2.1	成形: 手づくね 胎土: 灰褐色
	32	骨製品?	長さ1.7 幅1.9 最大厚0.8	色調: 淡灰褐色 備考: 磨滅している
	33	骨製品?	長さ1.8 幅2.2 最大厚0.7	色調: 淡灰褐色 備考: 磨滅している
	34	青磁 離瓣支輪		胎土: 淡灰褐色 輪裏: 淡褐色 透明
	35	かわらけ	口径(15.0) 底径(7.6) 器高4.3	成形: ロクロ 外底: スノコ板 胎土: 灰褐色 備考: 内底面にナナニ
	36	木製品 独楽	長さ5.39 最大厚3.0	
	37	木製品 箸	長さ(21.2) 最大厚0.4	
	38	木製品 箸	長さ(22.0) 最大厚0.6	
	39	銅鏡		大鏡通宝 北宋1107年 横書
	40	かわらけ	口径(13.0)	成形: 手づくね 胎土: 灰褐色 備考: 口縁直下に穿孔1ヶ所
	41	かわらけ	口径(9.2) 器高1.5	成形: 手づくね 胎土: 灰褐色 備考: 灯明皿として使用
	42	かわらけ	口径(10.8) 底径6.6 器高2.7	成形: ロクロ 胎土: 淡褐色 外底: スノコ板
	43	かわらけ	口径7.9 底径5.0 器高1.6	成形: ロクロ 胎土: 淡褐色 外底: スノコ板
	44	かわらけ	口径6.1 底径3.6 器高2.25	成形: ロクロ 胎土: 淡褐色 外底: スノコ板
	45	青磁 刻文文瓶		胎土: 灰色 輪裏: 淡灰褐色 手透明
	46	青磁 連弁文瓶		胎土: 灰色 輪裏: 灰褐色 透明
	47	白磁 玉緑瓶		胎土: 灰白色 輪裏: 灰白色 手透明
	48	白磁 連反襷		胎土: 灰白色 輪裏: 灰白色 失透
	49	白磁 12丸瓶	口径(14.0)	胎土: 灰色 輪裏: 灰白色 (やや青味がかる) 手透明
	50	涅槃堂 壺		胎土: 灰褐色 輪裏: 黑灰色 磁毛塵り
	51	涅槃堂 壺	底径(8.2) 刃部最大径(10.0)	胎土: 灰色 色調: 淡灰褐色 備考: 内面に付着物があるが不明。全く変色している
	52	涅槃堂 壺		胎土色調: 明灰色
	53	常滑窯 壺		胎土: 褐色 色調: 茶褐色
	54	常滑窯 壺	底径(9.0)	胎土: 褐色 色調: 茶褐色 備考: 外底部回転糸切り後高台貼り付け
	55	常滑窯 片口鉢(直脚)		胎土色調: 本茶色
	56	常滑窯 片口鉢(直脚)		胎土色調: 本茶色
	57	常滑窯 壺		胎土: 茶褐色 長石粒を多く含む 色調: 茶褐色 備考: 高台は貼り付け内底面は磨削している
	58	射丸瓦		胎土: 灰白色 色調: 淡灰褐色 文様: 三つ巴文を連珠形で埋め 四面は布目ヘラナデヒナデ 凸面はヘラケズリ
	59	銅鏡(天祖通寶)		初唐年 北宋1017年 横書
	60	かわらけ	口径7.9 底径4.8 器高1.7	成形ロクロ 胎土: 淡褐色 外底: 回転糸切り 備考: 底部に径0.35cmの穿孔が2ヶ所
	61	石獅	長さ1.0 幅1.2 最大厚0.25	石材: 黒曜岩
	62	土師器 壺	底径(6.0)	色調: 茶褐色 備考: 外面は火を受けて黒く変色

表2 遺物観察表

かわらけ	粗陶器	因陶器	土器	瓦類	銅鏡	金属製品	スラグ	石製品	骨製品	本茶器	漆器類	棒子	貝殻	骨	靴底片
2245	70	411	35	15	2	9	6	15	2	6	2	0	1	19	2838

表3 中世遺物總破片数

# 報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成12年度発掘調査報告							
卷次	17							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	手塚直樹 田畠衣理 野本賢二							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 神奈川県鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2001年3月							
ふりがな	ふりがな	コ一ド	北緯	東経	調査期間	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査原因	
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
若宮大路 周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 小町二丁目 402番5地点	204	242	° ° ° ° °	19990706 19990806	182m <sup>2</sup>	個人専用住宅	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
若宮大路 周辺遺跡群	都市	鎌倉時代 室町時代	溝 掘立柱建物 井戸 土坑	かわらけ 舶載陶器 国産陶器 瓦 金觸製品 石製品 土師器 石器				

# 写 真 図 版

図版 1



図版 2



▲1. 南北溝2～5（南から）



▶2. 南北溝と現小町大路  
（南東から）

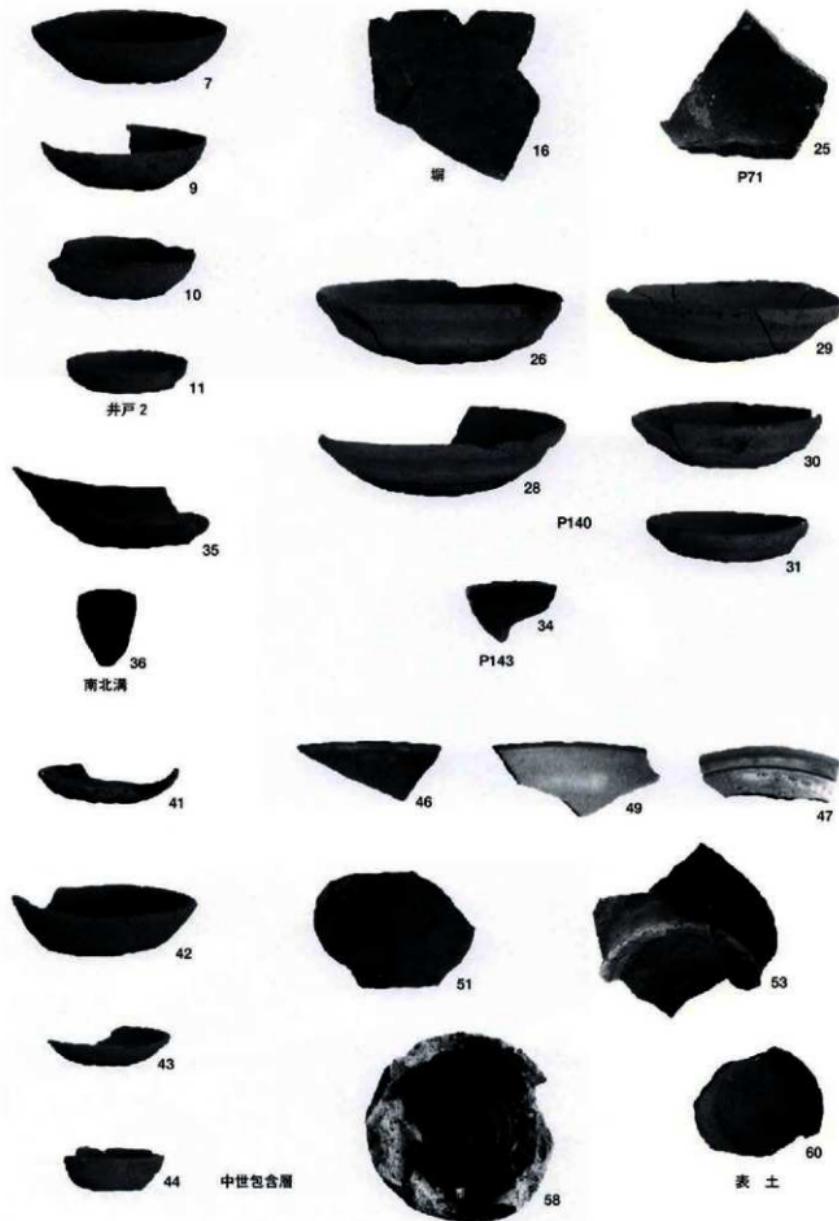


▲3. 調査区中央土坑群（西から）

図版 3



図版 4



まん どころ あと  
政 所 跡 (No. 247)

雪ノ下三丁目989番4地点

## 例　　言

1.本書は、政所跡遺跡内の神奈川県鎌倉市雪ノ下三丁目989番4地点における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。なお、今回は政所跡遺跡内での7番目の調査であるため、今次調査地点を報文中では「政所跡第Ⅶ地点」と呼称する。

2.発掘調査は、平成11年8月16日より同年10月15日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。

3.調査に当たっては以下のとおり体制を編成した。

担当者 宗基秀明

調査員 大畠明子、太田美知子

調査協力者 田口康雄、宮崎 明、有田政夫、岩城忠昭（以上、社団法人鎌倉市シルバー人材センター）

4.本書作成に当たっては、遺構図の合成・トレースを宗基秀明と太田美知子が、遺物実測・トレースを小野和代、馬瀬直子と宗基富貴子が行ったうえ、遺構関係を宗基秀明と太田美知子が、遺物関係を馬瀬直子が執筆し、それぞれを宗基秀明が加除筆した。また、第四章各節の分析報告は、文末に執筆者名を明記した。

5.出土遺物の詳細については、小野和代が作成した本編後段の遺物観察表を参照されたい。

6.本書に使用した写真うち、遺構関係を大畠明子が、遺物を馬瀬直子と小野和代が撮影した。また、麻布の電子顕微鏡写真は鶴見大学文学部文化財学科の水田勝久教授と山田真穂助手が撮影した。

7.本書の遺構と遺物の挿図の縮尺は次の通りである。

遺構全測図：1/100、個別遺構図：1/50、遺物実測図：1/3

なお、各挿図には縮尺を表示している。

8.発掘調査に際しては、調査地点近隣の横小路町内会の御好意により体験のための町内会館と湯沸かしなどの電力を拝借させていただいた。ここに、あらためて御礼申し上げます。また、報告書作成にあたって、近世陶磁器に関して佐賀県教育庁文化財課の大橋康二氏に、砥石と硯の産地同定を鎌倉考古学研究所の汐見一夫氏に、また日本女子大学の小笠原小枝教授には発見された布を出土したままの状態で現地にて観察していただき、それぞれご教示いただいた。記して感謝申し上げます。なお、報文中における事実誤認・誤謬は、編集者の責任であることを付け加えておく。（各氏の所属は平成12年度時におけるものである）

# 目 次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	135
第二章 調査の経緯と成果の概要	137
第1節 調査の経緯	137
第2節 成果の概要	138
第三章 発見された遺構と遺物	140
第1節 調査地内基本土層層序	140
第2節 第4面	141
第3節 第3面	141
第4節 第2面	142
第5節 第1面	147
第四章 分析	169
第1節 花粉化石	169
第2節 出土遺物	176
第五章 調査成果のまとめ	179

# 挿 図 目 次

図1 遺跡地位置図	136
図2 調査地点位置図	137
図3 調査区設定図	139
図4 第4面Ⅰ区全測図	141
図5 第3面Ⅰ区全測図	141
図6 第2面全測図	142
図7 第2面道路と溝4~8	143
図8 第2面溝4・5出土遺物	144
図9 第2面建物2	146
図10 第2面上埴16	146
図11 第2面上埴16出土遺物	146
図12 第2面上埴18	147
図13 第2面上埴18出土遺物	147
図14 第1面全測図	147
図15 第1面道路と溝2・3	148
図16 第1面溝3・2出土遺物	149
図17 第1面塀1(ピット102・104)出土遺物	151
図18 第1面塀2	151
図19 第1面建物1	152
図20 第1面掘込み地盤整備出土遺物(1)	153
図21 第1面掘込み地盤整備出土遺物(2)	154
図22 第1面掘込み地盤整備最上層・ 建物1(ピット25)出土遺物	155
図23 第1面井戸3・5	156
図24 第1面井戸3・5出土遺物	157
図25 第1面かわらけ溜まり1・2	158
図26 第1面かわらけ溜まり1出土遺物	158
図27 第1面上埴14	159
図28 第1面上埴14出土遺物	160
図29 第1面その他の遺構(ピット9・13・14・17) 出土遺物	161
図30 近世・近代面全測図	161
図31 第Ⅱ調査区の土層断面図と試料採取層準	169
図32 土壌28(北壁中央部)の主要花粉化石分布	172
図33 溝4(北壁)の主要花粉化石分布図	173
図34 溝5・6・7(南壁)の主要花粉化石分布図	174
図35 「平行条切り」と「楕円状条切り」拓影	177
図36 隣接調査地遺構合成図	180
図37 周辺調査区合成概念図	181

## 表 目 次

表1 遺物観察表.....	162
表2 産出花粉化石一覧.....	171

## 写 真 図 版 目 次

図版1 a. 調査前遺跡地(東より).....	187
b. 同(北西より).....	187
図版2 調査区土層壁.....	188
図版3 a. I区第4面全景(東より).....	189
b. I区第3面全景(東より).....	189
図版4 a. 第2面全景(南より).....	190
b. 第2面下道路側溝(南側トレンチ内).....	190
c. 第2面塗跡(南より).....	190
図版5 a. 第2面土壤16遺物出土状況(南より).....	191
b. 同出土かわらけ.....	191
c. 同完掘状況(南より).....	191
d. 第1面全景(南より).....	191
図版6 a. 第1面上層全景(南より).....	192
b. 第1面掘り込み地盤整備(北より).....	192
c. 第1面建物1(北より).....	192
d. 同(東より).....	192
図版7 a. 第1面道路と側溝(溝2)(東より).....	193
b. 同底面出土かわらけ.....	193
c. 第1面溝2底面遺物出土状況(西より).....	193
d. 同近景(西より).....	193
e. 同漆皿.....	193
図版8 a. 第1面道路と側溝(溝3)(南より).....	194
b. 第1面溝2・3土層断面(北より).....	194
c. 第1面井戸3(南より).....	194
d. 第1面かわらけ溜まり1(南より).....	194
e. 第1面土壤14麻布出土状況(北より).....	194
図版9 a. II区近世・近代面全景(東より).....	195
b. II区近世・近代面便所1(南より).....	195
c. II区近世・近代面便所2(南より).....	195
d. 近世・近代面遺物出土状況.....	195
図版10 出土麻布の一部.....	196
図版11 出土麻布断片電子顕微鏡写真.....	197
図版12 出土遺物(かわらけ、火鉢).....	198
図版13 出土遺物(漆器皿、斧、骨製鏃、硯).....	199
図版14 花粉化石.....	200

# 第一章 遺跡の位置と歴史的環境(図1・2)

鎌倉市旧市街地の北東、鶴岡八幡宮の東隣、横浜国大付属小学校の南に、高柳光寿氏が『吾妻鏡』建暦三年(1213)五月二日条をよりどころに鎌倉幕府「政所跡」(県遺跡台帳番号No.247)と想定されている一画がある。鎌倉幕府政所は、はやくも文治元年(1185)九月五日条の『吾妻鏡』に現れ、頼朝が従二位に昇進した入府後まもなく源氏(幕府)家政機関として成立していたと考えられる。政所は、この後、嘉祥元年の御所移転に伴って、宇都宮に移転したとも、また移転しなかったとの見解もあるが明瞭ではない(『鎌倉市史』)。また、「吾妻鏡」弘長元年三月十三日乙亥「震る。未の魁、政所の郭内失火す。廳屋・公文所・間注の屋炎上す。御倉等は炎を免る」の記事からは、政所郭内、もしくはそれに隣接して公文所と間注所のあったことがわかる。ただし、公文所と政所は性格的に重複し、従二位昇進前に設立されたと考えられる公文所が政所と併設されたとする理由は不明であるが、公文所と間注所が政所の郭内にあったとすれば、郭内での敷地割りや立地空間の配分と建物配置が問題となろう。政所に隣接していたのであれば、政所周辺の地割り問題が浮かび上がってくることになる。

今回報告する発掘調査はこうした「政所跡」内の南西隅で行われた。調査地点は、鶴岡八幡宮前を通る現在の横大路から鶴岡八幡宮の東を限る土塁に沿って7mほど北に入った路地の東側に面して位置する。八幡宮の土塁は、明治年間に源平池を掘り上げた土によって作られたものであり、この土塁が鎌倉時代の鶴岡八幡宮の東限界を示すものではない。鎌倉時代の八幡宮東側限界は、1981年に行われた鶴岡八幡宮研修道場用地の発掘調査によって、確認されている。それによれば、鎌倉時代初期以降、東側の限界は時とともに揺れ動いているものの、ほぼ現在の土塁近くにあったことが知られている。しかしながら、その南北方位は現在の土塁と一致せず、南へ進むほど東へと傾いている。そのため、今回の調査地点近くでの鶴岡八幡宮東側限界は、調査地点付近にある可能性が高い。

「政所跡」では、これまでに6地点が調査され、その内の5地点では、土塁と側溝が発見され、「政所跡」は側溝に囲まれた一定の空間をなしていたことが確認されている。唯一、1997年の調査(野本1999)において郭内地点の調査が行われ、礎石建物とそれに伴う泥岩による地盤が確認された。しかし、いずれの調査でも13世紀中ごろを過るものではなく、また「政所跡」とされる地域内での小範囲の調査に留まり、未だ明確な政所跡の姿を窺えないでいる。今回の調査も「政所跡」の南西隅であり、「政所跡」地域の内部を窺い知ることはできないが、その西側を初めて調査することとなった。

## 参考・引用文献

- 高柳光寿 1959 「鎌倉市史 総説編」吉川弘文館。  
大三輪龍彦他 1983 「研修道場用地発掘調査報告書」鎌倉市鶴岡八幡宮・研修道場用地発掘調査団。  
手塚直樹・宮田 真 1991 「政所跡」政所跡発掘調査団(第I地点)。  
瀬田哲夫 1992 「政所跡 雪ノ下三丁目966番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 8』11~131頁、鎌倉市教育委員会(第II地点)。  
瀬田哲夫 1992 「政所跡 雪ノ下三丁目965番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 8』134~191頁、鎌倉市教育委員会(第III地点)。  
手塚直樹・田畠和子 1993 「政所跡 雪ノ下三丁目988番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 9』第3分冊、165~257頁、鎌倉市教育委員会(第IV地点)。  
野本賢二 1999 「政所跡(No. 247) 雪ノ下三丁目970番2外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 15』第2分冊、79~102頁、鎌倉市教育委員会(第V地点)。

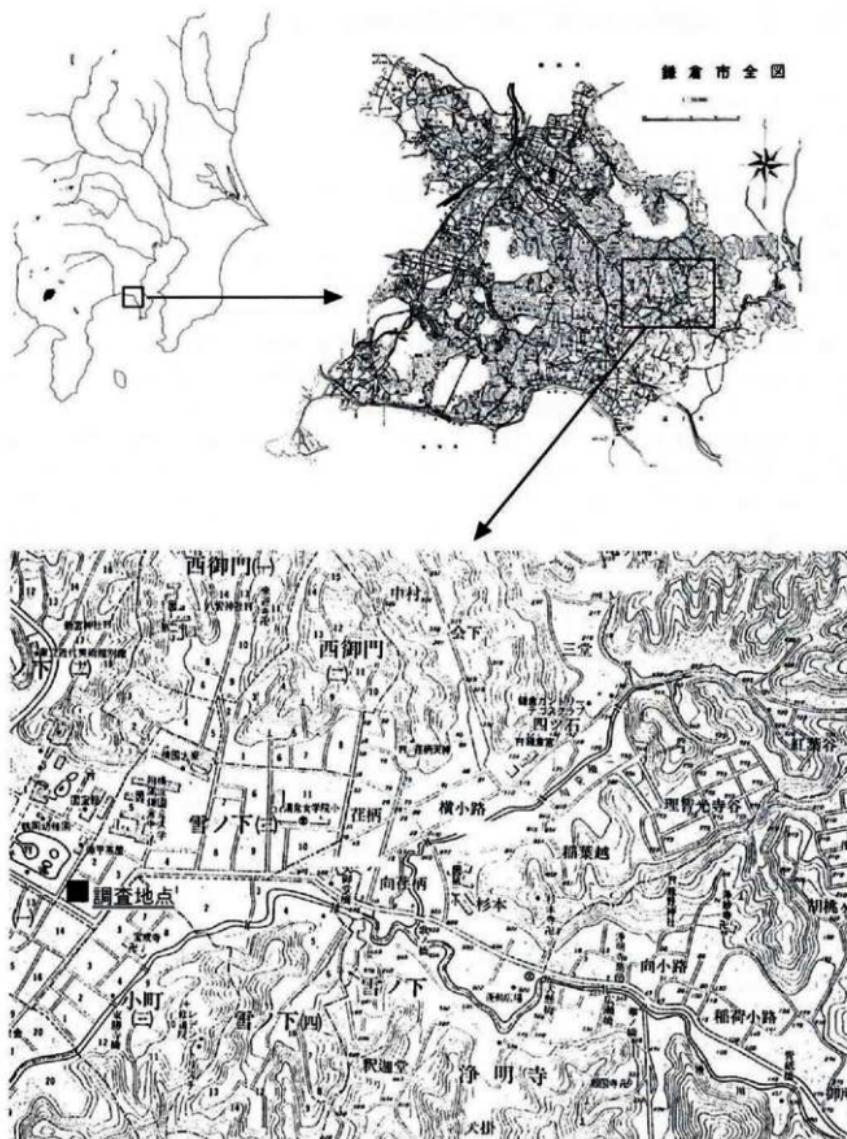


図1 遺跡地位地図

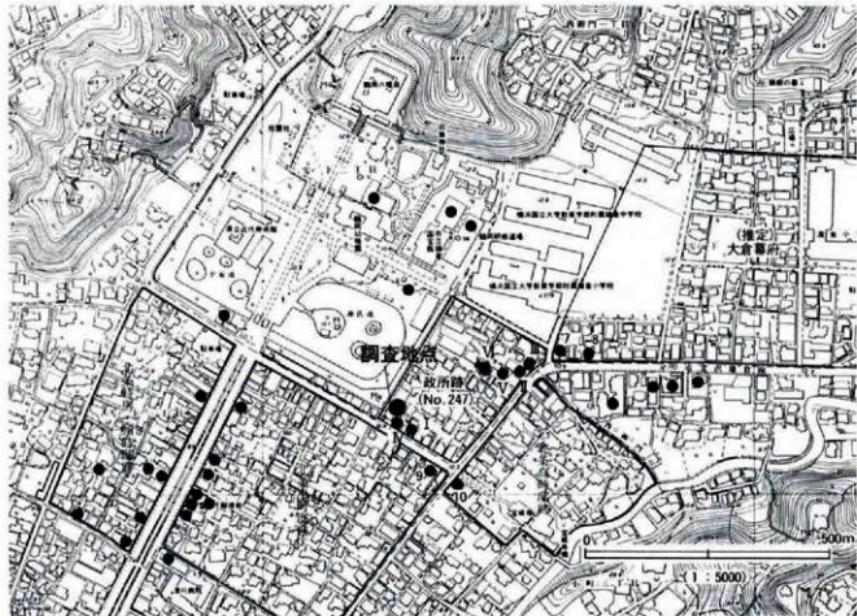


図2 調査地点位置図

## 第二章 調査の経緯と成果の概要

### 第1節 調査の経緯(図3、図版1)

調査は、鎌倉市雪ノ下三丁目989番4地点における鋼管杭による三階建て個人住宅新築の申請があり、深さ6m杭の打ち込み前に発掘調査が必要となり、国庫補助事業として、平成11年8月16日より、2週間の中止をまじで同年10月15日まで行った。工事対象面積は53.82m<sup>2</sup>であったが、隣接住宅地との敷地境プロック塀の保護のために若干調査対象面積を縮小した。実際の調査に当たっては、調査時に発生する残土を場内にて処理する方法が用いられたために、調査範囲を二分割して、敷地の奥まった半分を第I区、路地に面した半分を第II区として行なった。

調査地の200mほど東方では、鎌倉の主要河川である滑川が東西流から南北流へとその流路方向を変えており、この周囲では河岸微高地が発達している。調査地点でも滑川の氾濫による山砂の堆積が想定でき、下層において弥生文化遺構・遺物の発見が期待された。しかしながら、建築施主の意向によって、第II区では4枚の調査遺構面のうち上層の第2面までの調査しか行えなかつた。

なお、発掘調査実施に当たって、遺構測量のために調査区内に鶴岡八幡宮と調査地の間にある路地の南北方位に沿って2m単位の方眼を組んだ。方眼の各軸線には、調査地の北東隅を起点にし、南北軸線

にアラビア数字を東西軸線にアルファベットを付した。また、測量方眼の南北軸線は、磁北に対して $31^{\circ} 47' 31.5''$  東に傾き、そのC-3交点は国土座標値： $X=-75.412.172$ 、 $Y=-24.863.831$ である。

## 第2章 成果の概要

下層の砂質堆積土層上面の第4面から第3面は、調査区東半分の第Ⅰ区のみでの調査である。第4面は明瞭な生活面として確認されたのでなく、堆積土層から判断して、第3面下を順次掘り分けたものである。それは、調査地の東方で、鎌倉の主要河川である滑川が東西流から南北流へと流下方向を変える地点に西御門川が注ぎこむため、調査地周辺に河川氾濫原微高地が発達し、古代以前の集落跡を確認できるかもしれないと思ったからである。しかしながら、第3面の調査終了後、下層へと掘り進めたが、遺物は全く出土せず、発見された遺構も不明瞭は杭穴状のピットが乱雑に発見されたのみであった。

続く第3面では、これまでの周辺調査によって発見されていない12世紀末から13世紀前半の遺構が発見できるのではないかと、やはり期待したが、残念ながら明瞭な遺構と出土遺物を確認できず、第2面下の土層から10世紀以降の土器類の壊片が出土し、古代の集落址が付近にあることを窺わせるのみであった。現在、第3面をなす黒色微砂粘質土の密度分析をお願いしているが、本堆積土層が鎌倉旧市街地の中世地山層と同様のものであれば、後述のように12世紀末から13世紀初頭の調査地点では、人の活動の痕跡が残されることになる。

調査地全体を通じて発掘できた13世紀中頃の第2面からは、非常に多くの遺構が調査地いっぱいに発見され、先行する堆積土層と比べて急激な土地利用の変化を確認できる。発見された遺構は井戸、土塙、杭穴状ピット、柱穴のほかに、道路と側溝である。これらの中でも、調査地の西側に発見された道路と側溝は、続く第1面でもほぼ同位置に確認でき、当該地点における地割りの一貫性を示している。黄橙色の山砂を何層にもわたって叩き締めた道路は、その西側を調査区外にまで広げるために、規模を確認できなかった。また、その東側を後世の溝によって壊されているが、おそらくは発見された溝4に接していたものと考えられる。なお、溝4は第2面における溝の中でも最新のものであり、この他に4条の南北溝（溝5～8）が溝4の西、砂を版築した道路面の下にあることをトレンチ（深掘坑）にて確認している。すなわち、ここで確認された道路と側溝の関係は、第2面での最新の溝である溝4の時期から第1面にかけて確認できるものであり、より遡る時期については不明とせざるを得ない。さらに、はたして溝5～8が第2面に帰属し、第3面のものではない確証も、第2面以下の調査を第Ⅱ区で行えずに、得られなかつた。とくに最古の南北溝である溝7からは、13世紀第1四半期に帰属すると思われる手づくねかわらけの破片が出土していることから、第2面より遡る可能性が高い。第2面に発見された南北溝の断面形状は、V字条の溝4を除いて、5～8の溝は箱形を呈する。

道路と側溝の東側では、側溝から150cmほどはなれた柱穴列を境に、深さ50cmほどの土塙と杭穴状のピットが数多く発見され、調査区内での状況が東西で大きく異なる様子を見せる。また、小型のピットや土塙の多く掘り込まれた地域は、そこが一定の屋敷地であったとしてもその縁辺部に当たると思われる。

なお、調査地と隣接する鶴岡八幡宮の東を限る堀と土塙は、13世紀中ごろ以降ほぼ今まで変わらないものの、土塙は今回の調査地点との間にある道路まで広がっていた可能性が鶴岡八幡宮・研修道場用地の発掘から示唆されている。今回発見された道路と南北溝の方向は、鶴岡八幡宮との間にある道路にはば並行しており、第2面から第1面の時期にかけてもこの道路および側溝が鶴岡八幡宮と「政所跡」との境をなしていたことを確認できる。

13世紀末から14世紀初頭の第1面では、近現代の掘削整地によって、近世から近代とともに本来の生

活面が失われた中世最上層面から掘り込まれた遺構群を確認できた。中世遺構に限れば、調査地の西側に道路と南北側溝が、その東側に柱穴と土壠が密に掘り込まれた敷地の縁辺部と思われる空間が発見された。道路は、粗く割り取られた泥岩（土丹）を密に版張した路床で、路面は大小の泥岩を用いて平坦に作り出されている。ただし、本来の路床には砂などが用いられていたかもしれないが、近現代の削平により確認できない。道路の東に敷設された側溝は、溝3と溝2の2時期であるが、いずれも溝幅に比べて浅い箱形を呈する。さらに東に1m（三尺？）間隔の堀跡柱穴が南北に並ぶ。この堀跡を境に調査区の東側には、土壠や柱穴が数多く掘り込まれる。中でも地盤整備のために一度掘り下げた部分に多量のかわらけと泥岩細片を交えて搗き固めた基礎上の整地面には、底面に安山岩を設置した掘立柱建物の柱痕を確認できた。この建物はその位置から、調査地点の東に隣接する『政所跡 雪ノ下三丁目988番』（第Ⅳ地点）に発見されている建物の西端であると想定でき、今回発見した南北溝を西の限界とする敷

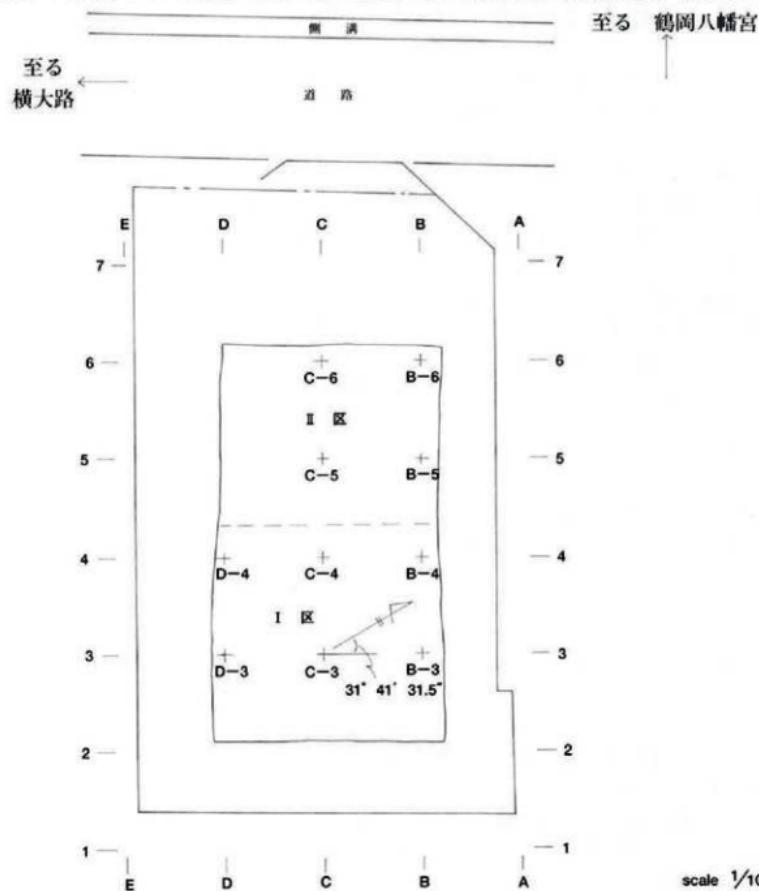


図3 調査区設定図

地がより東へと広がっていたことを確認させる。建物が建てられる以前には、泥岩で枠の作られた井戸が掘り込まれている。

この掘立柱建物を壊して、第1面の後半期に掘り込まれた土壌14は、調査区の東外へと広がる。覆土に多量の炭化物を含むこの土壤底面近くから、黒色覆土に隠れるようにして、布が折り畳まれたようにして分厚く遺存していた。時間をかけて丁寧に布の取り上げを行ったが、すでに断片化していた。布は調査区東壁面にも認められ、調査区東外まで広がっていることは確実である。上記の隣接地を調査した手塚直樹氏によれば、そこでも布が出土していたとのことで、布はかなりの大きさであったことが窺われる。調査現場にいらしていただいた日本女子大学の小笠原小枝教授によれば、布は平織りの麻布で、墨染めにされているとのことである。

## 第三章 発見された遺構と遺物

以下に、今回の調査によって発見された遺構と遺物を説明してゆく。記述に当たっては、上層より下層に向かって調査した現地での発掘手順とは逆に、年代的に古い下層より順次時間を下りながら行う。

### 第1節 調査地内基本土層層序(図6、図版2)

遺構と遺物の説明に先立って、調査地における基本的土層堆積層序を述べる。調査では、上層より近世から中世14世紀前半の遺構が同時に発見された第1面、13世紀中頃から14世紀初頭の南北方向側溝と柱穴を残す第2面、これまでの調査によって鎌倉の中世地山層と考えられている黒色微砂粘質土の第3面、さらに下層に砂質堆積土が発見された。

第4面は、酸化鉄を混じえる黄褐色砂（第1層）の上面である。さらに下層は、黄色砂層と第三紀の凝灰岩質泥岩の岩盤層へと続く。岩盤上に堆積する砂層は、繩文海進期における侵食砂と調査地東方を流れる滑川の氾濫による堆積砂と思われる。こうした砂層上での人為的生活遺構の確認は望むべきでないかもしれないが、氾濫原微高地に弥生時代の住居址が残されていないかを確かめるために、調査を行なった。しかしながら、この面からはほとんど人間の生活を示す遺構を認めることができず、まだ乾燥化していなかったと思われる。

第4面上に黑色粘質土（第2層）が堆積する。砂層上面が次第に乾燥化することによって堆積した腐植土で、粘性が非常に強い。この黒色粘質土の上面は、鎌倉旧市街地の遺跡においてしばしば中世地山を構成する。本遺跡においてもここを第3面とした。ただし、この第3面上には黄褐色の砂層（第3層）が薄く堆積しており、未だ安定した乾燥地とはなっておらず、滑川の氾濫原であった可能性がある。

黄色砂層の乗る第3面上に、20~30cmの厚さで酸化鉄を混じえる粘性の強い暗褐色粘質土が2層にわたって堆積する（第4・5層）。上層のものは、やや粘性が劣る（第5層）。本土層上面において、数多くの中世遺構を確認することができ、第5層上面を第2面とした。本土層に至るまでの堆積層は、まず土器類の破片を混入せず、わずかに第3面上と第4層中から土師器壺の小片が3点出土するのみであった。このことから、本調査地点では、第5層が中世の地山を構成しているといえよう。

第2面の上を35~50cmにわたって厚く覆う第6層は、多くの破片された泥岩の細粒や炭化物に加えて、かわらけの細片を混じえる人為的盛り土整地土である。この造成によって平坦に作り出された第6層上面を第1面とした。第1面から多くの中世の遺構を確認できたが、さらに上層に堆積する近世から近代にかけての生活面から掘り込まれた遺構群によって、かなり壊されていた。

さらに、第1面上には、大量のかわらけ片や泥岩粒子、炭化物を混入する軟弱な暗茶褐色土が堆積する（第7層）が、ここからは近世から近代の染付磁器も出土する。中世遺物を混じえるものの、近代に帰属する土層であることを確認できる。さらに上層の小石を混じえる土層上面からは、丸太杭を埋め込んだビットや近世から近代遺物が出土するごみ穴が多數掘り込まれている。このことから第7層は、第8層を施設するために、第1面上に堆積していたと思われる中世遺物包含層、もしくは生活面を削り取った後に盛り土されたものと考えられる。

## 第2節 第4面（図4、図版3）

第4面と第3面は、第I区においてのみ調査された。上述のように黄色砂層上面を面としたが、海拔8.4～8.5mに位置する本土層上面では遺跡地の北方に位置する丘陵地からの絞り水が間断なく湧き出し、砂層上面の硬さや腐植土の有無の確認はできなかった。そのような状況での精査によって、10口のビットを認めた。多くのビットは直径15cmほどの小さく、また深さ10cm内外の小規模なものであった。そのうちp73と74は深さ10cmと浅いものの直径が24cmとやや大きく、また底面に泥岩疊を持っている。ただし、その泥岩疊も非常に水磨した状態で、ビット底面に配置するために意図的に割り出したものとは考えられず、第4面を構成する黄色砂層の堆積途上に、滑川の氾濫によってもたらされたようと思われる。黄色砂層中にある泥岩疊によって作り出された空疊を利用した動物もしくは植物の生息によって砂層の土壤が一部変色したために、ビット状に認められたのではないだろうかとの感触を持つ。p73と74以外のビットも同様ではないだろうか。調査区周囲の土層壁面には、この第4面から掘り込まれた遺構を確認できない。

第4面からの出土遺物は、全くなかった。

## 第3節 第3面（図5、図版3）

鎌倉旧市街地、とくに若宮大路周辺にて中世地山を構成する黒色粘質土の上面を第3面とした。海拔8.65mの第3面でも、地下水の湧水が激しく面の状況把握は困難であった。発見できた遺構は、深さ20～30cmほどのビット13口である。ビットの深さや大きさはそれぞれまちまちであるが、直径15cmのp71や300の小さなものの、そして底面に直径10cmほどの小さな落ち込みを持つp70や65は杭跡であろう。また、p63から68もしくは72は直線上に並ぶかのように見えるが、p63が32cm、64が17cm、69が9cm、67が6cm、68が24cm、72が14cmと深さが一定でなく、間隔もまばらであり、ここから何らかの構築物を想定することは困難で

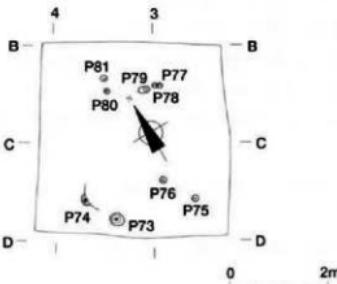


図4 第4面I区全測図

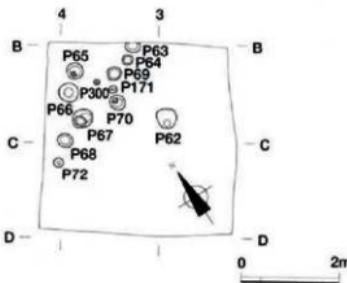


図5 第3面I区全測図

ある。ピット群が何らかの並びを示すように調査区の北西に偏っているのは、調査区北西部が上層の第2面からの掘り込みで壊されていなかったためと思われる。

こうしたピット群が何を構成していたのか明確ではないが、図6の調査区北壁土層にp63の掘り込みを確認でき、この第3面を利用して人々の生活のあったことは確実である。しかしながら、同じ土層図に確認できるように、第3面上でp63を覆う第3層は、この生活面を河川氾濫が襲ったことを示している。第3面を利用していた時期は、未だ調査地がその東方を流れる滑川の氾濫や北方の丘陵地より流れ落ちる土砂の危険にさらされる不安しない地勢にあり、その利用期間は短かったと考えられる。

第3面上と後世の第2面が始まるまでに堆積した第4層中からは、胴部に削り痕跡を持つ土師器が出土している。このほかに、中世に帰属するかわらけなどの遺物は全く出土せず、第3面は中世以前と考えられる。

#### 第4節 第2面(図6、図版4)

酸化鉄を混じえた、しまりの良い暗褐色粘質土上面を、生活面とする。ここに発見された遺構は、調査区西側に、道路と溝、調査区中央に空闊地、東側に土塙2基や井戸1基と掘立柱建物の他に多くのピットの発見された居住域が広がる。

道路は、調査区西端へと広がり、その幅員は明らかでない。溝は、道路の東隣に平行して掘り込まれており、道路の側溝と思われる。空闊地と居住域の境辺には、規則的な並びを確認することができなかつたものの、多くの柱穴が並んでいるため、居住域の西端を限る構もしくは界線の存在も想定できる。居住域には、土塙や建物の柱穴が集中して確認された。建物は調査区から東方へと拡がっている。

#### 道路と溝4~8(図7・8、図版4)

##### 道路

道路は、調査区西端に発見された。後述の溝が道路の側溝と考えられるため、南北に延伸する道路と

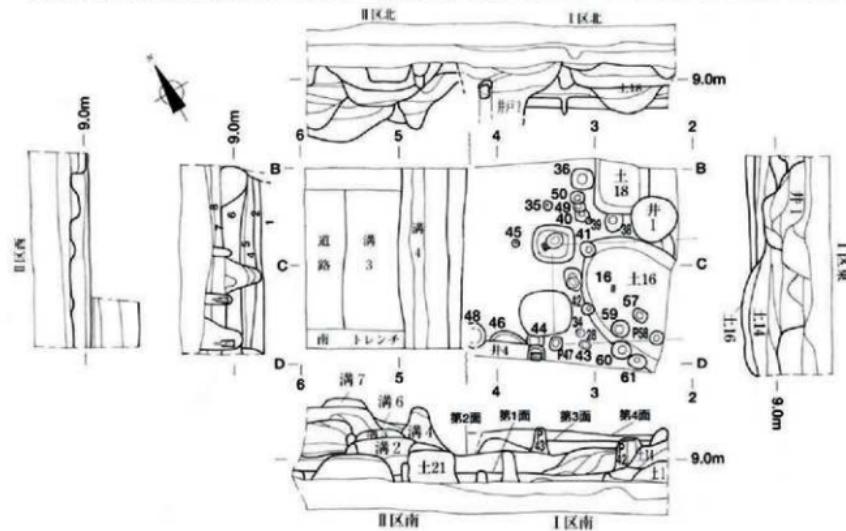


図6 第2面全測図

思われる。路盤は、茶褐色砂層、路床は、茶褐色粘質土が堅く硬化している。路盤は遺存状況がよく上層構造からの搅乱も少なかった。路盤の海拔高は、9.0mである。軸線方位は、N-30°Eを示す。道路の幅は、その東側を第1面の道路側溝である溝2・3に埋され、また西側へと調査区外に広がるため確認できなかった。

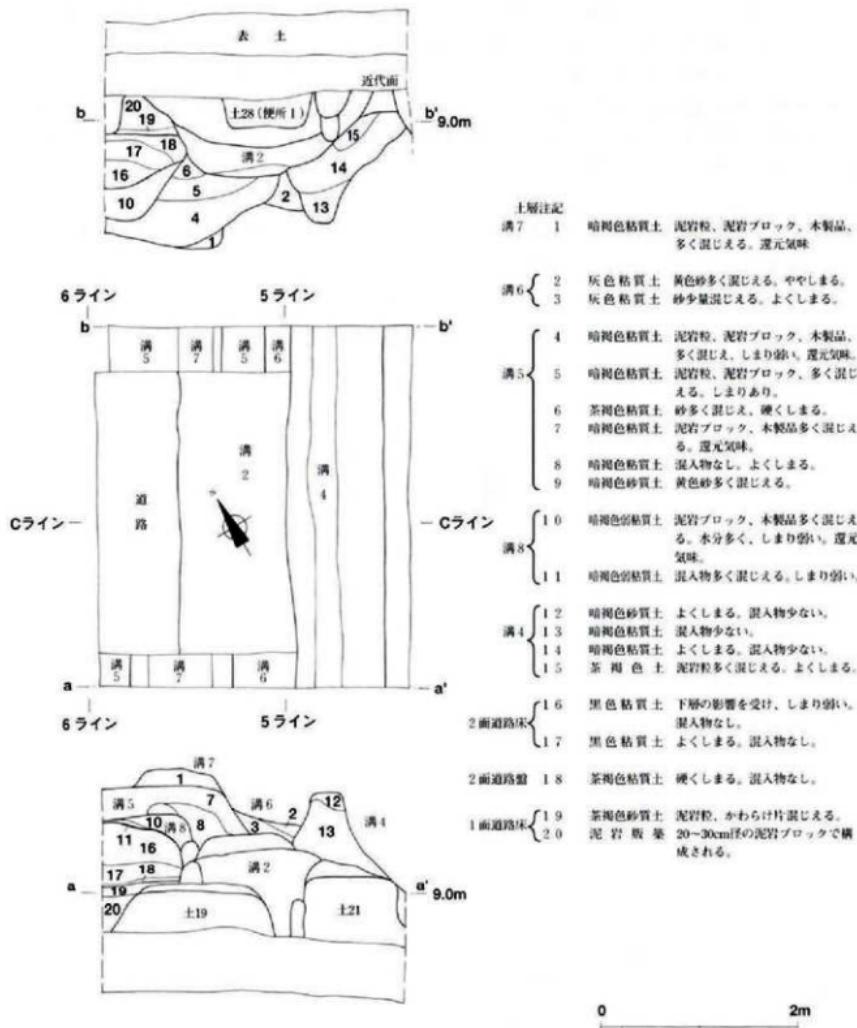


図7 第2面道路と溝4~8

#### 溝4～8

第2面で発見された溝は、道路東側に沿って延伸している。その西側掘り方は、第1面からの道路側溝である溝2・3に壊されており不明瞭である。また、溝の西側掘り方に沿って下層の溝が発見された。第Ⅱ区での調査は第2面の最上層道路遺構までであったが、より下層の道路と溝の関係を確認するためにトレンチをⅡ区調査区の北壁際および南壁際に80cm～90cmの幅で設定し、第4面下砂質堆積層まで掘り下げた。以下、トレンチの名称を北壁トレンチ、南壁トレンチと呼ぶ。発見された遺構は溝4条のみで、より下層の道路は発見できなかった。溝の東西の立ち上がりを確認できたのは溝4と6のみで、他は西側立ち上がりが調査区西外に位置する。すなわち、これらの溝の位置は東西にぶれながら設置されており、最新の溝4が最も東に位置している。また、溝4を除いた溝5～8がその西方に道路を伴っていたとの確認はなく、溝が西から東へと移動する中で、道路が当初より施設されていたのかは不明である。以下、古い溝より新しいものへと順次説明する。

#### 溝7

発見された最古の溝である。上層は溝5に壊されている。確認できた溝幅は、95cm。南北軸線方位は、N-30°-Eを示す。底面は平坦で海拔高は、北壁トレンチ内で7.7m、南壁トレンチ内で7.7mあった。

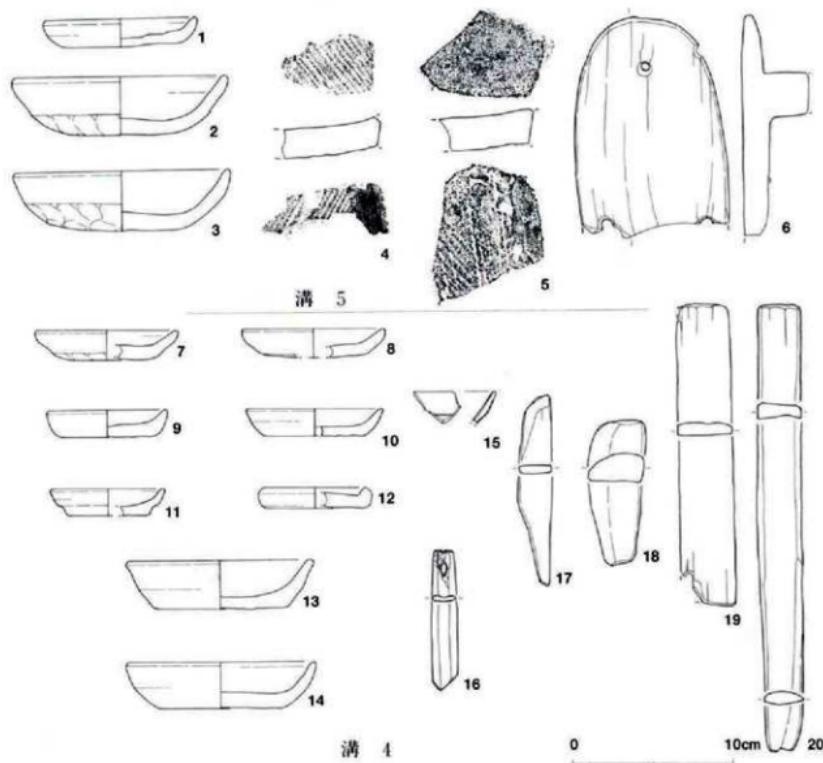


図8 第2面溝4・5出土遺物

溝内の覆土は、灰褐色粘質土で木片が多く混入する。加工品としての木片は、箸状製品が多く含まれていた。溝底からは、13世紀第1四半期に帰属すると思われる手づくねかわらけ片が出土したが、細片のため図示できなかった。

#### 溝6

東側を溝4、西側を溝5に接されている。溝底の確認はできなかった。そのため、溝の軸線も不明であるが、溝4調査掘削中に溝4の西の掘り方沿いに溝6の土層が見られるので同じ方向に延伸していると思われる。溝内の覆土は、灰褐色粘質土で砂が多い。

#### 溝5

東側を溝3・4・8に接されている。溝幅は、調査区西端から区外へ広がるため確認できなかった。南壁トレンチ内での断面形は、箱型を呈する。軸線方位は、N-30°-Eである。底面の海拔高は、北壁トレンチ内で7.72m、南壁トレンチ内で7.9mを測る。溝内の覆土下層には箸状製品を含む腐蝕木片が多く混入していたが、上層は混入物の少い暗褐色粘質土で硬く締まっている。

図8-1~6は溝5より出土した遺物である。

1は小型糸切りかわらけ。口径はやや大きく、器壁は開きながら立ち上がる。2~3は大型手づくねかわらけ。いずれも丸底気味で、体部外面中位の棱は不明瞭である。器壁はゆっくり開きながら立ち上がり、口唇部は丸く収まる。

4~5は瓦器質の平瓦。4は凹凸面とも、側縁にたいして斜めの方向に糸切り痕が残る。5の凹面は側縁に対して斜め方向の糸切り痕と布目痕、凸面はナデ消されている。

6は連齒下駄。台表には圧迫痕は見られず、横縁を境として破損している。後歯の部分は遺存していない。

自然遺物ではアカニシが出土した。

#### 溝8

東側を第1面溝3に接している。溝幅は、調査区西端から区外へ広がるため確認できなかった。溝の断面は、箱型である。溝の軸線方位は、N-35°-E。底面の海拔高は、北壁トレンチ内で7.98m、南壁トレンチ内で8.18mであった。溝内の覆土は多量の腐蝕木片のため、しまり弱い。覆土中には、数種の植物の種を調査中に認めた。後述の第四章を参照されたい。

#### 溝4

溝の断面形は薬研状である。確認できた幅は1.1m、深さ1.05mである。生活面から急坂にV字状に掘り込まれている。底面の海拔高は、北側で7.92m、中央で7.9m、南側で7.92mと平坦であった。溝内の覆土上層は、暗褐色粘質土で混入物が少なく、溝底に砂がたまる。軸線方位は、N-28°-Eを示す。建物2や道路とは同方位を示す。

図8-7~20は溝4より出土した遺物である。

7~8は手づくねかわらけ。平底で、器壁は開きながら立ち上がり、口唇部はやや尖る。9~12の小型糸切りかわらけには、器壁が厚く直立気味に立ち上がるもののや、器壁が薄く開きながら立ち上がるものが見られる。12は口径が小さく、器壁は直立して立ち上がる。13~14は大型糸切りかわらけ。器壁は薄く開きながら立ち上がる。13は内外面に煤が付着する。

15は前載青磁櫛搔文碗。淡灰緑色を呈する釉は、薄く施釉される。

16は笄。全面にわたってよく研磨されている。破損する下端の断面は擦られており、破損後に再加工されたものであろうか。

17~20は用途不明の木製品。17の左側面は面取り風に削られている。

## 建物

### 建物2 (図9)

調査区南東部に芯々距離2m前後を測る柱穴が四方に確認された。各柱穴の生活面からの深さは、それぞれp 47が38cm、p 52が46cm、p 58が42cm、p 59が42cmの一定した深さに掘り込まれている。p 47以外は、土壤や他のピットに壊されている。柱穴の芯々距離は、p 47・58の間で205cm、p 301・47の間で210cmを測る。

建物の南北軸線方位は、N-28°-Eを示す。このほかにも建物の柱穴と考えられる芯々距離を持つピットが多く発見されており、複数の建物の存在も窺われるが、確認できなかった。

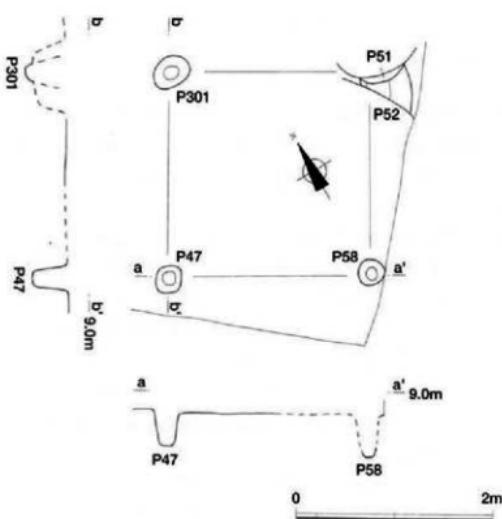


図9 第2面建物2

## 土壤

### 土壤16 (図10・11、図版5)

調査区北東壁際に発見された。平面形状は楕円形を呈し、断面形はゆるやかな鍋底状。幅は230cm、確認できる長径200cmである。土壤の長軸方位は、N-15°-W。底面の海拔高は8.3mを測る。覆土は、材木片を含む茶褐色粘質土。第2面居住域の建物2や溝4と方位が異なる。

図11-1は大型糸切りかわらけ。器壁は薄く、開きながら立ち上がる。

### 土壤18 (図12・13)

調査区北壁際に位置する。平面形状は隅丸方形を呈し、ゆるやかに落ち込む。幅は150cm、遺存する限りでの長さは105cmである。土壤の軸線方位はN-32°-Eである。建物2や溝4とほぼ同じ方位を示す。底面の海拔高は、8.3mである。覆土は、茶褐色

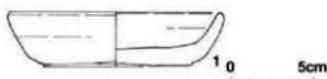
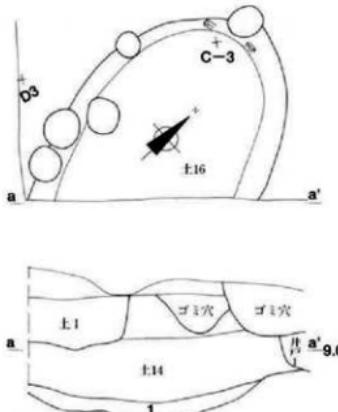


図11 第2面土壤16出土遺物



土壤注記  
1 茶褐色粘質土 木片多く混じる。



図10 第2面土壤16

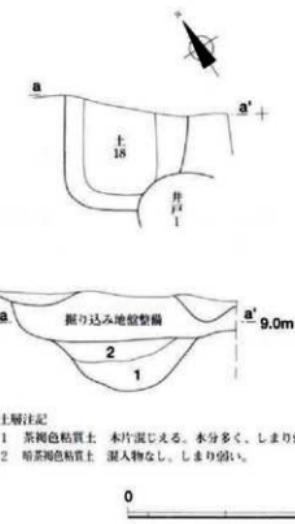


図12 第2面土壌18



図13 第2面土壌18出土物

粘質土で木片が多く混入する。

図13-1は小型糸切りかわらけ。器壁は薄く、内湾気味に立ち上がり、口唇部はやや尖る。

#### 塙跡 (図版4)

柱間や柱穴規模が不ぞろいのため、明確な塙跡、もしくは横跡とは確認できないが、道路側溝とピットや土壤が数多く発見される調査区東側との間の空閑地に、何らかの空間分離施設の介在がなければ不自然と思われる。ただし、不明瞭なものであるため、ここではその可能性を指摘するのみにとどめる。

#### 第5節 第1面 (図14、図版6)

第1面では、近現代の掘削整地によって、近世から近代とともに本来の生活面が失われた中世上層面から掘り込まれた遺構群を確認できた。そのため、本来より上層にあったかもしれない中世面からの掘り込みも第1面にて一緒に発見された可能性があり、発見された遺構群は複雑な新旧関係を持っている。

発見された遺構は、第2面と同様に、調査区の西側に道路とその側溝、調査区の東側に建物跡や土壤、井戸2基などが位置し、建物と道路側溝の間に隙跡が2列ある。

#### 道路と側溝 (図15・16、図版7・8)

##### 道路

調査区の西端に発見された。道路の東には側溝が敷設されているため、この道路は南北方向の道路と考えられる。長さは調査区いっぱいに2m80cm確認し、調査区の南北両方向に延伸することを土層壁面にて確認できる。幅は、90cmから110cmを調査区内にとどめるが、より西方へと広がることが土層壁面にやはり確認できる。道路は、粗く割り取られた泥岩（土丹）を密に版築した路床で、路盤は近現代の削平により確認できない。この削平によって、路面に轍跡などが残されていたかもしれないが、発見



図14 第1面全測図

できなかった。なお、路床面にて、直径28cm、深さ17cmのピットが1口発見された。道路施設工事中に設けられた小屋跡の痕跡であろうか。

### 溝2・3

第1面道路の東側に敷設された側溝は、溝3と溝2がある。いずれも溝幅に比べて浅い箱形を呈し、溝2は溝3の作り直しである。溝3は、下幅105cm、深さ77cmを残す。内部堆積土下層は、暗褐色のよく締まった粘質土で、水分が非常に多く、溝内堆積土であることを示している。上層では、植物質が腐敗したような茶褐色の軟弱土が多少交じり、かわらけや炭化物が混入する。溝が次第にごみ捨てによって埋没する様子がここからは窺われる。溝3の内部覆土は土壤分析を行なっているので、分析結果を後に別稿にて報告したい。溝3の底部海拔高は、調査区北壁で8.45m、調査区南壁で8.39mを測る。短い距離ではあるが、北から南へと溝底面は下がっている。

溝2は溝3を壊しながら、10cm西へ移動して開鑿される。かなりの部分を近世から近代の掘り込みによって失っているが、調査区の南北両端と中央に設けた土層観察孔からその規模を窺える。上幅2m20cm内外、下幅1m10cm、深さ77cmの浅い箱形断面を呈する。底部海拔高は、調査区北壁で8.75m、調査区南壁で8.53mを測る。やはり北から南へと溝底面は下がる。内部堆積土は大きく上下二層に分かれる。下層は茶褐色軟弱土にかわらけ片や炭化物を多く交えるもので、早くからごみ捨てによって埋

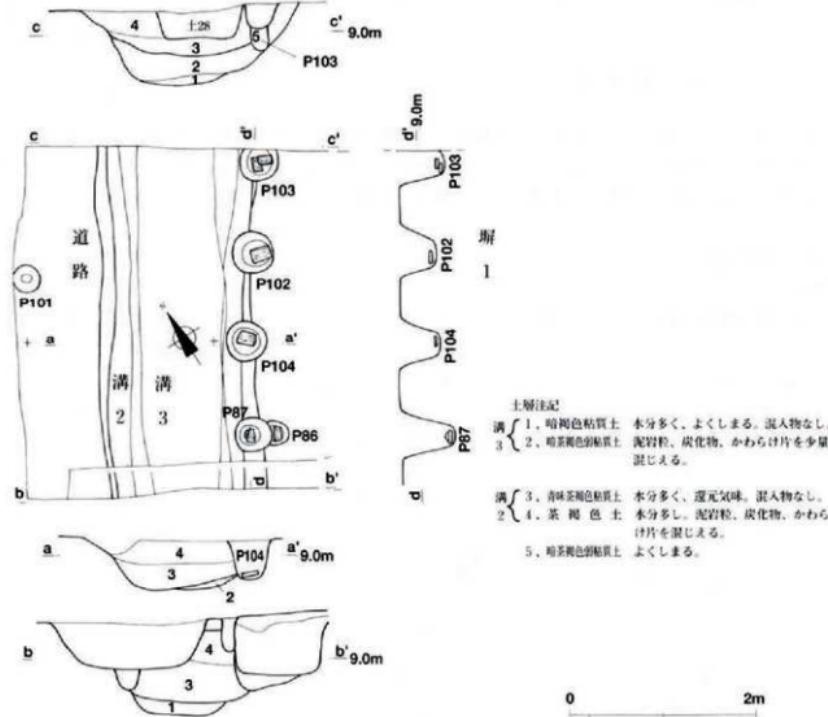


図15 第1面道路と溝2・3

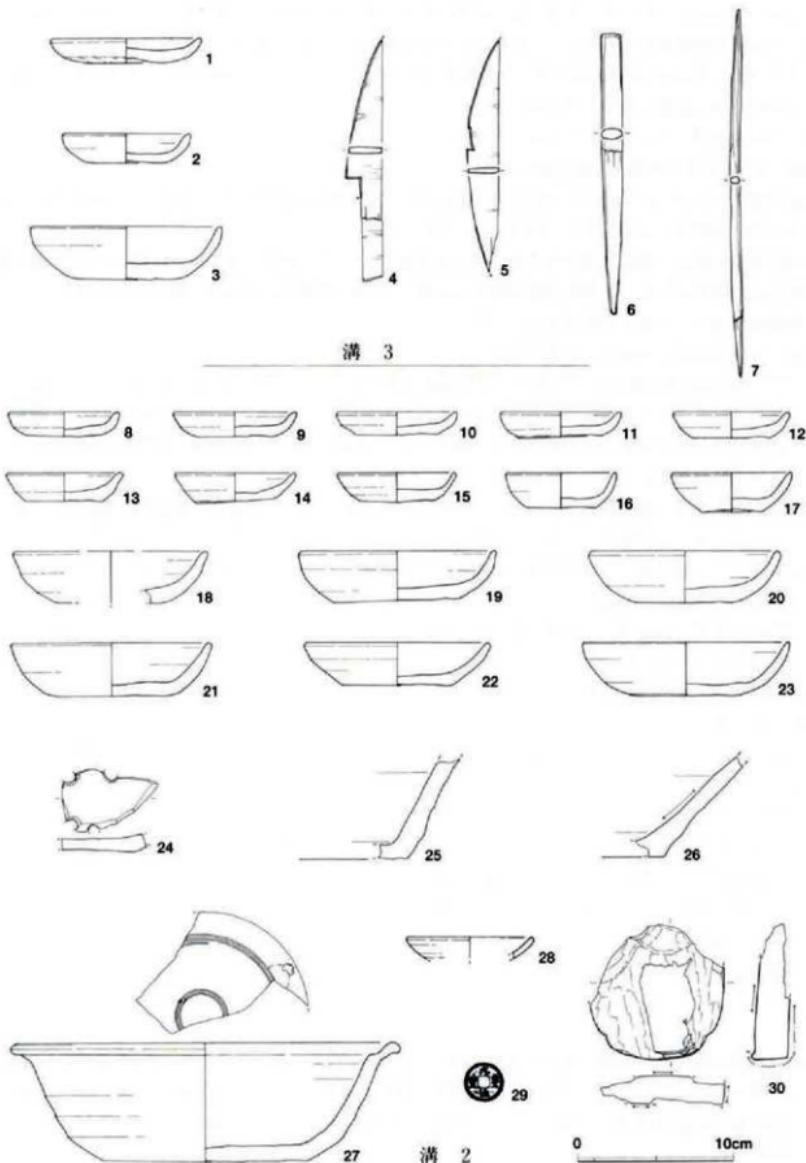


図16 第1面溝3・2出土遺物

没し始めた様子を示している。上層では、埋没し始めた溝を埋め戻してしまうように、かわらけを多量に混じえる暗茶褐色土でつき固めている。この土層上面にかわらけが集中して遺棄されていた。これらのかわらけは、第1面の遺構配置が大きく変化する時期のものであるが、同時期のかわらけ溜まりが他所にもあるため、詳細については後述する。

溝2・3の軸線は、N-30°-Eである。

図16-1~7は溝3より出土した遺物である。

1は小型手づくねかわらけ。やや背低で、器壁はゆっくり開きながら立ち上がる。2~3は大小の糸切りかわらけ。器壁はいずれも薄く、内湾気味に立ち上がる。

4~5は草履の芯か。側面に切れ込みがあり、表裏面にわずかに植物圧痕が見られる。6はヘラ状木製品。断面は梢円形を呈し、下端の両側に削りが入る。7は箸。両側面、両端面に削りが見られる。

自然遺物ではオニグルミの種子が出土した。

図16-8~30は溝2より出土した遺物である。

8~17は小型糸切りかわらけ。背低で、器壁が薄く開きながら立ち上がるものが多いうものの、背高で器壁が内湾気味に立ち上がる側面規範型を呈するものも出現している。18~23は大型かわらけ。器壁は薄く、内湾気味に立ち上がるものが多く見られる。24は穿孔かわらけ。内底面から外底面に向かって4ヶ所が焼成前に穿孔されている。

25は浅鉢型火鉢片。体部外面は指頭押さえの後、ヘラによる搔き上げ調整。体部内面は指頭押さえの後、ヘラ調整される。河野氏の分類では「I c類」に分類できるものと思われる（河野1993）。

26は常滑のこね鉢底部片。体部外面は、指頭押さえの後、工具にて粗く調整されている。内面には使用による著しい摩滅痕が残る。

27は瀬戸の灰釉折縁深鉢。内底面に横による輪文が施される。また、トチン痕が残る。13世紀前半ごろのものであろう（瀬戸市1997）。

28は舶載白磁小皿の口縁部片。

29は銅鏡。北宋（1078年）初鋤の「元豐通寶」。

30は凝灰岩製の四葉觀である。破損後、二次焼成を受け、赤褐色を呈している。良質の中国産歙州石の可能性が高い。

図示できなかったものに、漆器皿が出土した。遺存状態が悪く、本部がほとんど朽ちてやせ細っているために実測できなかったので、写真を提示した（写真図版13）。全面に黒色漆が厚めに塗布され、内底面から外面にかけて明橙色を呈する赤色漆により幹のない柳の葉文が粗く手描きされている。また、内底面の中央に不明文が薄く観察できるが、この不明文と柳葉文の赤漆の色が全く違うことから、これらの文様は時間差なく描かれたものとは考えにくい。使用後に再加工している可能性も考えられる。

自然遺物では、焼け焦げたウシカウマの肋骨片と笄が出土した。

## 堀

調査区の東に広がる居住域と道路側溝との間に2条の柱穴列がある。このうち、溝2の肩を壊して溝3の立ち上がり壁面に達するまで穿たれた柱穴列は、調査区北壁土層と調査区中央に設けた土層観察窓から明らかに溝2の機能が停止し、埋め戻された後に設置されている様子がわかる。これを堀1とする。

## 堀1（図17）

堀跡は、溝2と3の覆土に掘り込まれた p 103・102・104・87からなる。それぞれ直径50cmの上幅に深

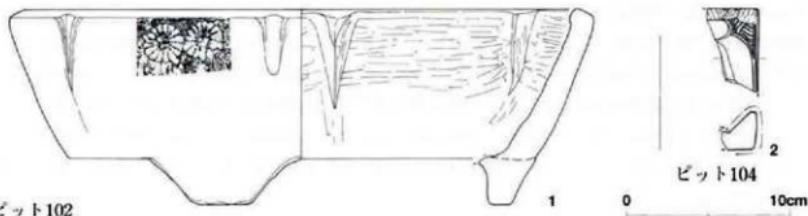


図17 第1面堀1(ピット102・104)出土遺物

さ40cmから55cmの規模をもち、底面に礎板を1枚もしくは2枚設置している。深さ40cmのp 102と104は一枚の礎板である一方、深さ50cmのp 103と深さ55cmのピット87は二枚の礎板を用いて柱の位置を調節している。各柱穴の間隔は、礎板の中心で北から104cm、92cm、104cmである。建物の半間隔で堀の柱が設けられていたと考えられる。

堀跡の南北軸線方位は、N-34°-Eをなし、道路や道路側溝より4°軸線を逸れている。

後述の堀2の位置から勘案して、道路側溝が埋め立てられた後に、東に広がる居住城が西方へと拡張されて堀1が新に設けられたと思われるが、このとき道路がどうなっていたのかは近現代に行われた上層の削平・整地によって、不明である。

図17-1は瓦質輪花型火鉢。脚部が一つ遺存している。内面は指頭による横方向のナデの後、上位では横方向に丁寧なヘラみがきが施される。外面口縁部周辺には15弁の菊花文のスタンプが2個単位で押印されている。外面は二次焼成を受け、荒く爆ぜている。河野氏の分類では「Ⅲ類」と分類される製品であろう（河野前掲）。図17-2は黒色粘板岩製の鳴滻産硯である<sup>2)</sup>。

#### 堀2(図18)

堀1から東に1m程移動した位置に、堀跡と思われる柱穴が二つ位置する。2口のピットであるが、これらが他のピットと離れて位置し、井戸などを含めた遺構の多くが発見された調査区東部と道路側溝地域を分ける位置にあるため、堀跡と想定した。

発見された柱穴、p 93とp 400はいずれもⅠ区とⅡ区の境目に位置し、それぞれの調査地域にあって柱穴の全景を把握できなかったために不完全な図面であるが、各調査地域において断面土層は確認している。柱穴規模は前述の堀1より大きく、p 400は直徑76cm深さ78cm、p 93は長軸60cm深さ56cmを測る円形から稍円形を呈する。底面に礎板は遺存しない。p 400の覆土堆積土層には掘り上げてから柱を抜きだした様子が見られる。柱穴の間隔は、底面の芯々距離で195cmを測る。また、2口の柱穴ではあるが、それらを結ぶ軸線の方針は、N-31°-Eである。道路側溝とはほぼ同じ方位を示す。

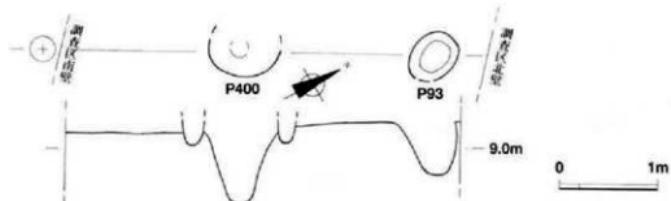


図18 第1面堀2

### 掘り込み地盤整備 (図版6)

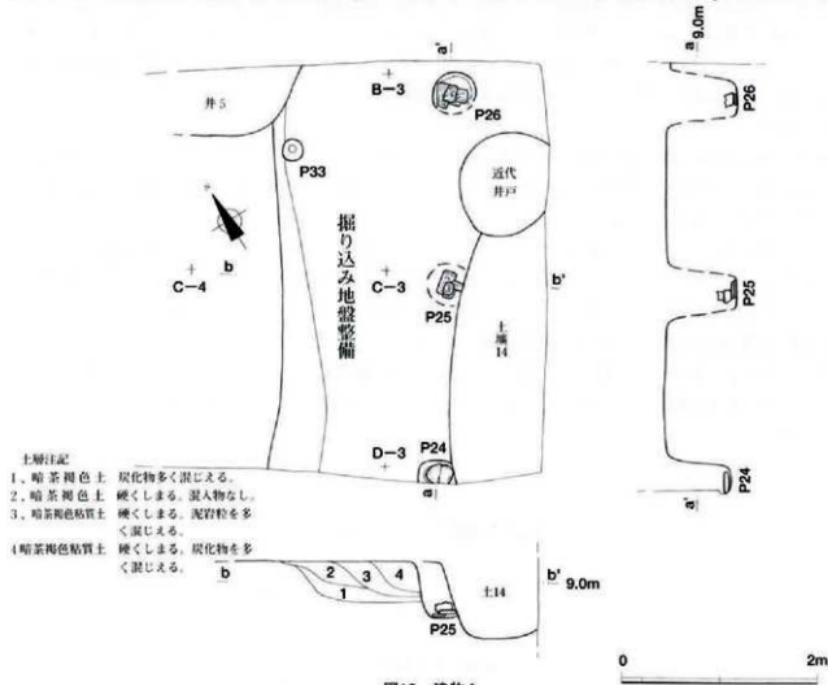
堀跡の東側には、堀2から2.5mほどの空開地をおいて、土壌や柱穴が数多く掘り込まれる地域がある。これらの遺構群は多くの切り合い・新旧関係を持ち、一時期に帰属するものではなく、上述の堀跡とともに、3時期ほどの変遷がある。中でも、建物の構築を伴った地盤整備が遺構変遷の大きな画期となっている。先行する第2面において、大型の土壌が掘り込まれた当該地域は、第1面を構成する盛り土を行なっても軟弱な地盤であったらしく、第2面の土壌16掘り込みの1mほど西方からあらためて地盤の版築を行なっている。

近現代の削平が第1面を削っているため、正確な数値は不明だが、地盤整備版築は3ラインと4ラインの間から東方に向けた地域を52cmの深さまで掘り下げた後に、粘性の強いよく締まった土に泥岩の細粒や炭化物、かわらけ片を交えた土を4回に分けてあらためて入れ直している。

### 建物

#### 建物1 (図19~22、図版6)

地盤整備された基壇状の整地面からは、底面に安山岩礫石や礫板を設置した柱穴が掘り込まれている。底面に安山岩礫石を残すP24では、直径18cmの柱の抜取痕を確認でき、また礫板を底面に据えるP25・26では礫板上に18×12cmの角柱の柱根が遺存していた。P24は調査区の南壁にかかるために全形を確認できなかったが、整地面から65cm掘り込んだ底面に長径27cmの扁平な安山岩を設置する。P25と26は、地盤



整備で入れられた土を取り除いた後に柱穴の底部付近のみを確認したために上幅の規模は不明となってしまった。しかしながら、p24の柱抜取痕とp25・26の柱根が同一規模であることから、これらの柱穴は同一の構築物を構成していたと考えられる。各柱穴の柱根と礎石の芯々距離は、198cmの等間隔にある。

建物の南北軸方位は、N-31°-Eをなす。

今回の調査区内に発見されたこの3口の柱穴から建物跡と判断することは、性急かもしれないが、東に隣接する調査地点で発見されている建物址である第1面の掘立柱建物Ⅰの軸線や柱位置と一致するものであり、その延伸部分、または別建物としてもその一部であろう。建物の西側にかわらけ溜まりが発見された。

図20~21地盤整備土中より出土した遺物である。

図20-1~9は小型手づくねかわらけ。平底ないし平底気味で、器壁は薄く開きながら立ち上がるものが多くみられるが、9のように体部外面中位に弱い稜をもつものもある。10~25は静止糸切りかわらけ。隣接する政所跡（雪ノ下三丁目988番）でも報告されているように、本遺跡地で出土した静止糸切りかわらけも、底部の切り離し方法には「平行糸切り」（10~20）、「楕円状糸切り」（21~24）の2つのタイプが観察できた。25は破片のため切り離し方法は不明である。「平行糸切り」の器形は、背低で、器壁は直立気味に立ち上がるものと、やや背高で器壁は内湾気味に立ち上がっているものがある。また、「楕円状糸切り」の器形は、体部外面中位に稜を持ち、器壁は内湾気味に立ち上がっている。両者とも、口唇部を面取りし、内底面のナデ調整は非常に弱いか、全く施されていない。26~51は小型糸切りかわらけ。背低で、器壁が直立気味に立ち上がるもののや、器壁は薄く、開きながら立ち上がるものが多くを

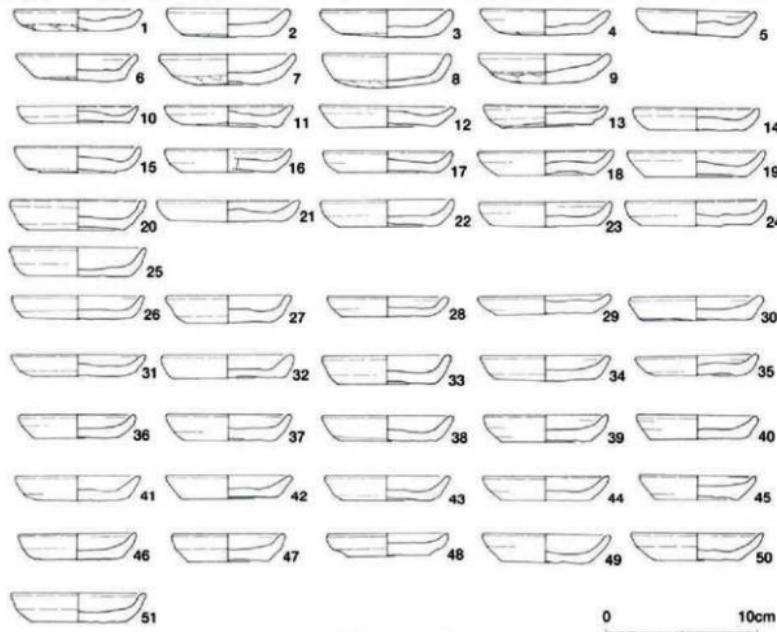
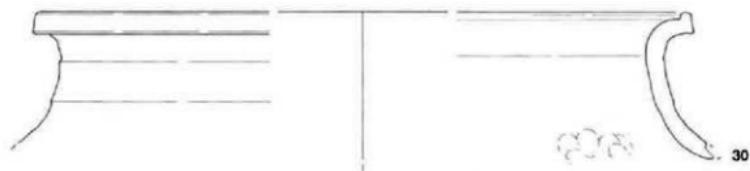
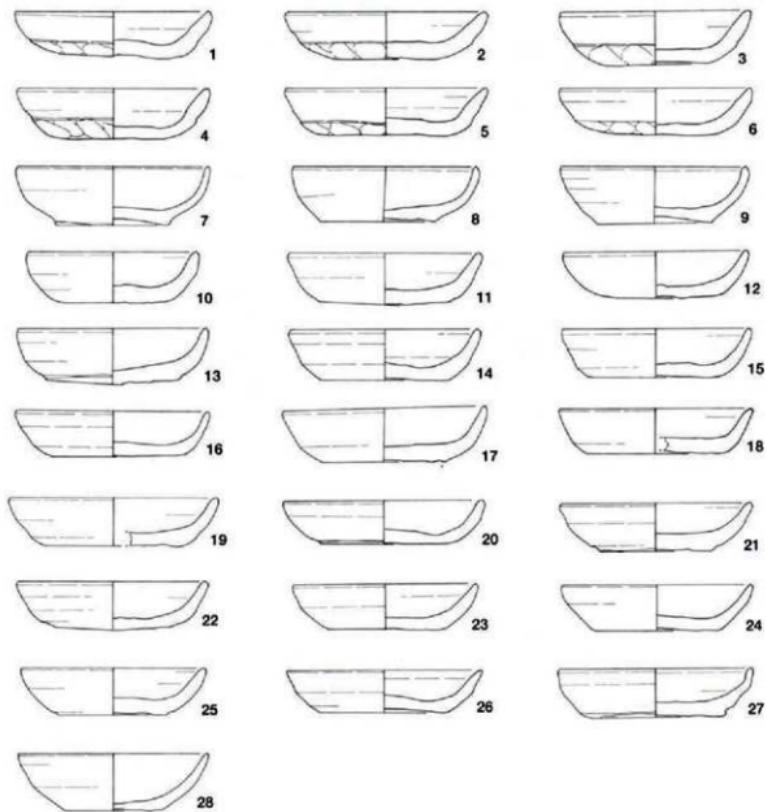


図20 第1面掘り込み地盤整備出土遺物(1)



0 10cm

図21 第1面掘り込み地盤整備出土物(2)

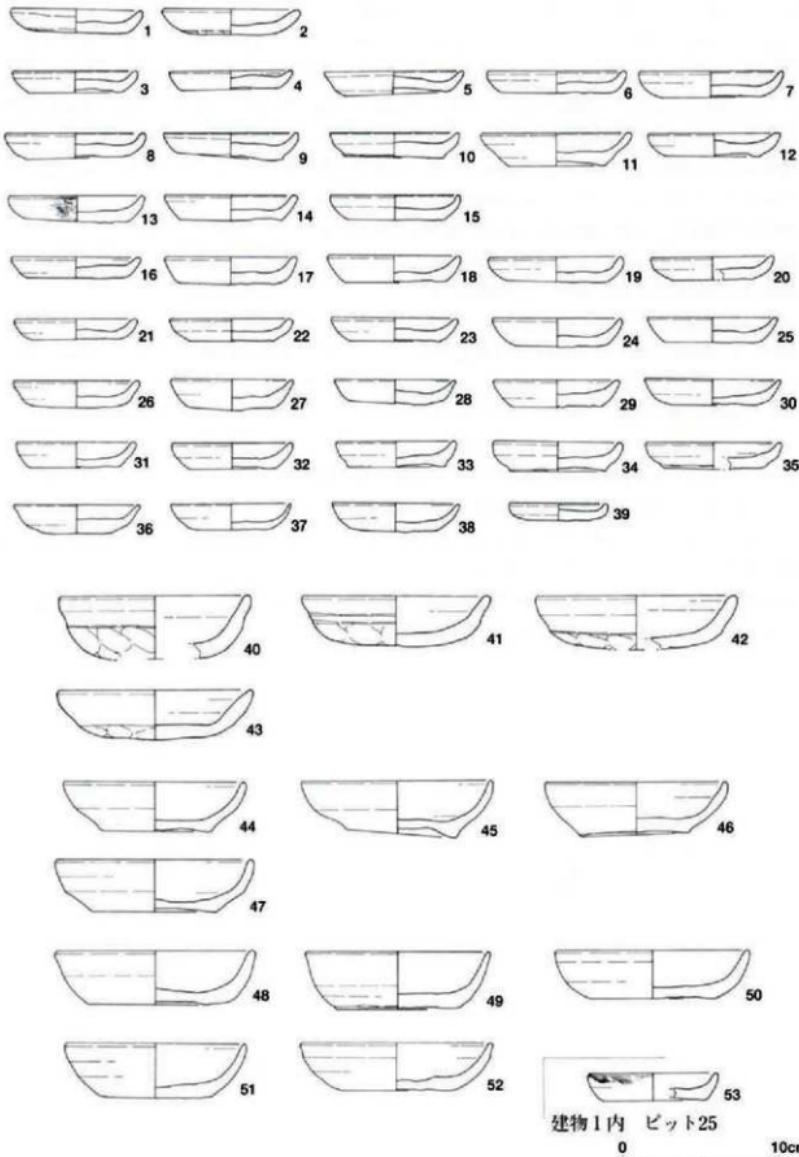


図22 第1面掘り込み地盤整備最上層・建物1(ピット25)出土遺物

占めるが、背高で、器壁は内湾気味に立ち上がる側面観碗型に近いものもわずかに混入している。

図21-1~28は大型かわらけである。1~6は手づくね。平底で、器壁は厚く、体部内面中位より外反するものが多い。また、口唇部の調整はやや尖っているものもあるが、口唇に沈線が巡るものは見られない。7~9は静止糸切り。底部はすべて「平行糸切り」で切り離される。底部は厚みがあるが、器壁はとても薄く、背高で、体部中位は腰が張っている。いずれも口唇部は面取りされている。10~28は糸切りかわらけ。口径は小振りで、器壁は厚く、丸みを帯びて内湾するもの、内底面が広く直立気味に立ち上がるものの、器壁が薄く、背高で側面観碗型に近いものがみられる。

29は山茶碗窓系こね鉢の底部片である。内底面は使用により著しく摩滅している。

30は常滑窓の口縁部片である。口縁部の形態から13世紀中ごろの製品と思われる（中野1994）。

図22は地盤整備最上層より出土した遺物である。

図22-1~2は小型の手づくねかわらけ。平底で、器壁は開きながら立ち上がる。3~15は小型の静止糸切り。底部の切り離しは3~11が「平行糸切り」、12~13は「楕円状糸切り」、14~15は破片のために切り離し方法は不明である。16~38は小型の回転糸切り。内底面が広く、器壁は直立気味に立ち上がるもののや、背高で内湾気味に立ち上がるものも見られるが、器壁は薄く、開きながら立ち上がるものが主流である。39は極小かわらけ。40~43は大型の手づくね。平底で、器壁は厚く、体部外面中位に弱い稜が残る。44~47は大型静止糸切りかわらけで、底部の切り離し方法はすべて「平行糸切り」である。器壁はとても薄く、背高で体部中位は腰が張っている。内底面に指頭による横方向のナデ調整は全く施されていない。48~52は大型糸切りかわらけ。内底面が広く、器壁は直立気味に立ち上がるものと、器壁が薄く内湾気味に立ち上がるものが見られる。

53は建物1に帰属するピット25より出土した静止糸切りかわらけである。底部の切り離しは破片のみで確認できない。口縁外面周辺に煤が付着している。

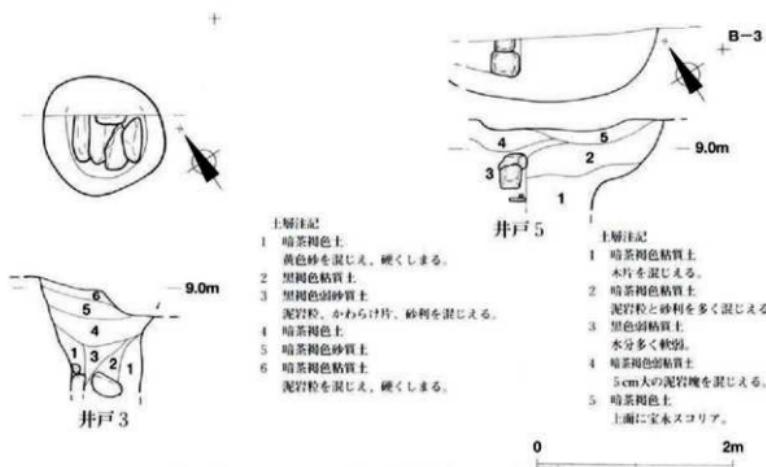


図23 第1面井戸3・5

### 井戸（図23・24、図版8）

第1面では、2基の井戸を発見した。いずれの井戸も建物跡と塙跡の間の地域に位置し、建物の建つ空間の裏手に掘り込まれている。

#### 井戸3

井戸3は地盤整備の掘り込みによってその上部が壊されているため、建物1より古い時期に作られている。調査では、井戸枠に用いられた泥岩切石の崩壊と激しい湧水による作業の危険性を強調して、底面までの掘り上げを行なわず、掘り込み面からの深さ1.2mまでの調査である。また、土層観察壁の除去も同様の条件から取り外しを行なっていないが、井戸は短径120cm、長径127cmのはば円形の上幅掘り込みから直径71cmの円形底面へと至るものと思われる。

掘り込み上幅より下方70cmあたりは、井戸廃棄後の埋め戻し土がレンズ状に堆積し、その下に井戸のかつての姿を示唆する覆土堆積が見られた。埋め戻し土を取り除くと、平面図に示した長方形や砲弾形の泥岩が井戸内を覆うように現れた。これら泥岩のうち原位置をとどめないものを慎重に取り除くと、井戸の掘方と井戸枠内を分別する土層堆積を確認できた。その結果、直径71cmの円形掘方壁面に接して泥岩の切石を積み上げて、一辺35cmの方形の井戸枠を作り出している。発見された切石泥岩は、すべて角の丸くなつたもので、当初より井戸枠のために切り出されていたかは疑問である。

図24-1は瀬戸の鉄軸插鉢の口縁部片である。二次焼成を受けており、使用痕は細破片のために確認できない。口縁部の形態から、17世紀後半の製品と思われる（瀬戸市1998）。

#### 井戸5

塙跡2のp 93を一部壊して掘り込まれる。本井戸は、I区調査時に掘方と井戸枠内的一部分を発見したが、調査区の北方に大方が位置し、また井戸枠内からの湧水が激しいために、確認面から下方1mほどしか調査できなかった。さらに、II区調査時には発生残土処理の都合上掘り込み面すら全く確認できなかった。そのため、全形を確認していない。しかしながら、図に示した土層堆積図に認めるができるように、掘方とその内側に垂直堆積を確認でき、こうした堆積状況は井戸であると考えた。

掘方は、確認面より68cmの深さまで緩やかに土壤状の掘り込みが行われた後に下方へと急激に落ちる。掘方内の覆土堆積はほぼ水平である。この掘方の内側、図上の西方に井戸枠を設置したことを示す垂直土層乖離が見られる。井戸枠内には鎌倉石と呼ばれる粗粒凝灰岩の切石が垂直方向に2段積まれ、水平方向に2個がきれいに並べられている。また、この積み石の下方に厚さ3cmの杉板と杉の角材が発見された。木材と切石による井側であろうか。

図24-2は京焼き風陶器碗の底部。胎土は淡黄色を呈し、緻密で粘性が強い。底裏に円刻が見られ、草書体で「清水」と刻印されている。1660~80年代の所産。3は美濃の鉄軸筒型碗。外面に螺旋文が施され、軸は明茶色を呈する。4は肥前染付碗。素地は弱粘質で混入物が多い。染付は暗藍色を呈し外面に手描きの雲と植物文が描かれる。1630~40年代の所産。

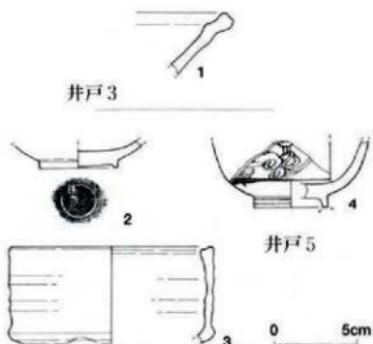


図24 第1面井戸3・5出土遺物

### かわらけ溜まり（図25・26、図版8）

上述のように二ヶ所にかわらけ溜まりを確認した。



図25 第1面かわらけ溜まり1・2

#### かわらけ溜まり1

Cライン沿いに幅60cmで、調査区北方外から南に向けて1m35cmに渡ってかわらけが稠密に発見され、そのほとんどが押しつぶされた状態で割れていた。かわらけ溜まりは、地盤整備掘り込みの後に再び平坦にされた面上が緩やかな傾斜で溝状に12cm窪んだ中に認められた。溝みの南北軸線は建物のそれとほぼ同様であり、建物の兩落ちにかわらけが捨てられたような状況である。

図26-1~2は小型の糸切りからわけ。2は口径がやや大きく、器壁は開きながら立ち上がる。3~5は大型糸切りかわらけ。おおむね器壁は薄く、背高で側面規範型を呈するものが多い。6は鉄釘。

#### かわらけ溜まり2

これは、道路側溝の溝2を埋没させた覆土最上層に位置したものと思われる。ただし、近現代の削平整地層によって失われた上層構造面の盛り土に入れられたものかもしれないが、調査区北壁での土層観察においてかわらけ溜まりの層位を確認できなかったため、明瞭ではない。挿図には、かわらけ溜まりを確認した層位で同時に発見された近代の便所跡も示している。

ここで発見されたかわらけは、すでに割れた状態のものがここに遺棄された可能性が高く、発見されたときのかわらけはすでに破片が隣同士で互いに接合するものではなかった。

#### 土壤

#### 土壤14（図27・28、図版8）

調査区の南東に位置し、建物1を壊して、第1面の後半期に掘り込まれる。調査区の南壁と東壁に掘り込み土層を確認できるため、調査区外へと大きく広がっているものと考えられる。調査区内に確認できた規模は、南北2m80cm、東西98cmの上場からゆっくりと80cm落ち込む。炭化物とかわらけ片を多量に混じえる粘質土上に砂を多く混じえる暗茶褐色土が堆積し、土壤を埋めている。多量の炭化物を含む下層からは、黒色覆土に隠れるようにして、墨染めの布が折り畳まれたようにして分厚く遺存していた。布の取り上げに時間をかけて丁寧に行ったが、すでに断片化していた。取り上げ時の状態から判断して、

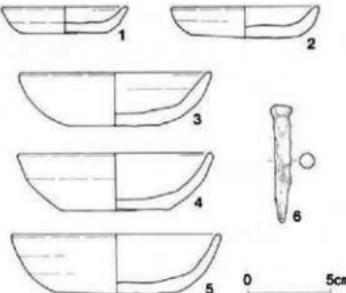


図26 第1面かわらけ溜まり1出土遺物

これらの布は土壤内に廃棄され、伴に出土した炭化物の多さから焼却されたのではないかと思われる。布は土壤底面いっぱいに認められ、土壤が広がると考えられる調査区の東から南外に向けて広がっていることは確実である。それらを一枚づつ丁寧に剥していくと、何重にも重なった断片の片面側面が袋状に折り畳まれたもの、一枚ずつ畳まれたもの、数枚重ねられているもの、両側面が観音開きに折り畳まれたもの、またくしゃくしゃと丸まっているものが確認できた。均一に折り畳まれた状態ではなかったことは明らかである。おむね縦と横糸が1本ごとに交差している平織りを呈しており、「縁」の部分も確認できた。また、漆のようなものが固まって付着している部分もあった。布は経糸のほうが細く、緯糸が太い。拡大写真を見ると、糸の熱りも経糸のほうがしっかりしていることがわかる。

隣接地（雪ノ下三丁目988番）を調査した手塚直樹氏によれば、より古い生活面からではあるが、今回の土壤14から南東に4mの地点でも布が出土していたとのことである。その布と今回の布が同一土壤からの出土とは考えられないが、何處かにわたって複数の土壤にこうした布が廃棄された可能性が考えられる。布は凶事に用いられた幔幕であろうか。

図28-1~43はかわらけである。1~9は小型の手づくね。体部外面中位に弱い稜があるものと、平底で、器壁はゆっくり開きながら立ち上がるものが見られる。10~14は小型静止糸切り。器壁は体部外面に稜を持ち、内湾気味に立ち上がるものが多い。いずれも口唇部は面取りされている。15~28は小型糸切り。15は口径が小さめである。背低で、器壁は薄く開きながら立ち上がるものが多い。29~33は大型の手づくね。29~30は器壁は厚く、丸底気味。31~33は器壁は大きく開きながら立ち上がる。34~43は大型糸切りかわらけ。内底面が広く器壁は直立気味に立ち上がるものの、器壁は薄く開きながら立ち上がるものが多い。

44は骨製箇か。二次焼成を受けて白化している。

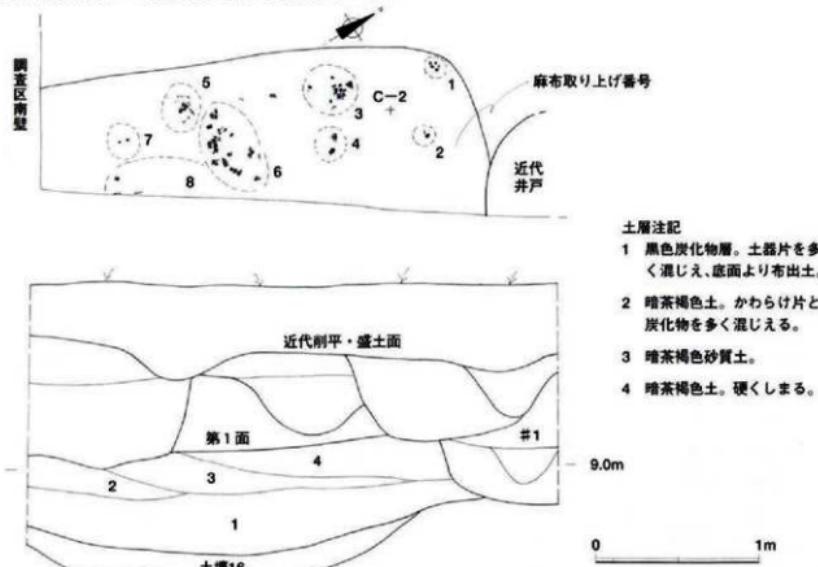


図27 第1面土壤14

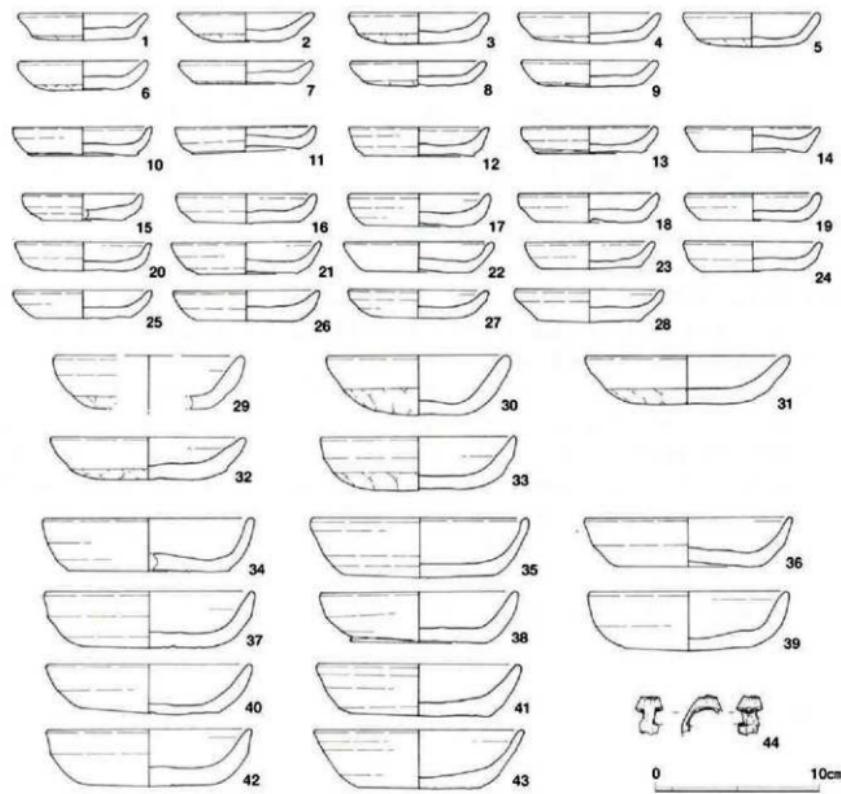


図28 第1面土壙14出土遺物

第1面その他の遺構出土遺物（図29）

#### ピット9出土遺物

図29-1は肥前の染付蛇ノ目凹型高台猪口。外面は軽い二次焼成を受ける。染付は藍色で外面に手描きの筆文が描かれており、18世紀後半の所産。

#### ピット13出土遺物

2は小型の糸切りかわらけ。器壁は体部外面中位に稜を持ち、開きながら立ち上がる。

#### ピット17出土遺物

3は小型の糸切りかわらけ。器壁は体部外面中位に稜を持ち、内湾気味に立ち上がる。

#### ピット14出土遺物

4～6はかわらけ。4は手づくね。器壁は薄く、開きながら立ち上がる。5～6は静止糸切り。5は破片のために、切り離し方法は不明。器壁は開きながら立ち上がり、口唇部は面取りされる。6は「平行糸切り」。器壁は薄く、内湾して立ち上がる。内底面の指頭による横方向のナデ調整は施されていない。

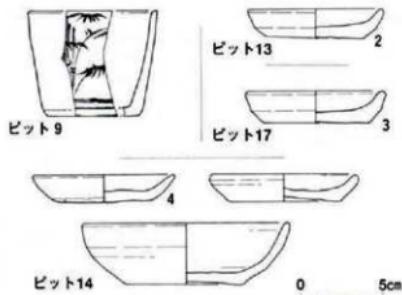


図29 第1面その他の遺構(ピット9・13・17・14)出土遺物

#### 第6節 近代面(図30、図版9)

調査前の既存建物基礎とその地業層を取り除くと、中世第1面と共に近世から近代に帰属すると思われる遺構群が顔を現した。発見した遺構は土壙と杉丸太を据えたピットである。ピットは、調査区内の中央から南西付近に集中し、土壙はそれらと重複しながら調査区の全面に発見された。中世期に調査区内に確認された道路や道路側溝は、この時期ではなく、すでに調査区全体が宅地化されていたと考えられる。

発見した遺構群は、すべてが既存建物の地業層によって上面が削られているため、掘り込みは浅い。しかし、調査区北西に位置する便所跡1・2、もしくは水溜めの水桶や甕を設置した土壙28・27から察するに、調査区内の北側が敷地の裏手に当り、杉丸田を据えるピット群が敷地内建物を構成する前面部分の一部と考えられる。土壙28からは18世紀代の国産陶磁器が出土しており、近世後半期のものであろう。

また、調査区南西部に位置し、調査区南方へと広がる矩形の土壙からは、大正期以降の国産磁器が出土している。近世には建物敷地であったところが、近代には敷地の裏手にと代わっており、宅地の分割がこの間に行われている。

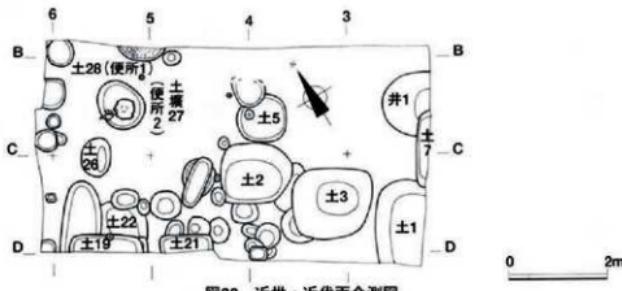


図30 近世・近代面全測図

表1 遺物觀察表(1)

回数	No	出土地	種別	口径	底径	器高	備考
8	1	2面溝5	かわらけ	9.3	7.6	1.8	動土は黒色繊維、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土
8	2	2面溝5	手づくねかわらけ	13.1	11.2	3.7	動土は黒色繊維、雲母を混じえる淡茶色弱粉質土
8	3	2面溝5	手づくねかわらけ	13.3	12.2	3.7	動土は黒色繊維、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土
8	4	2面溝5	平瓦	✓	✓	✓	動土は淡赤褐色弱粉質土
8	5	2面溝5	平瓦	✓	✓	✓	動土は淡茶色弱粉質土
8	6	2面溝5	達曲下駄	遺存長13.9幅9.5厚1.6			
8	7	2面溝4	手づくねかわらけ	8.6	6.8	1.9	動土は黒色繊維、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
8	8	2面溝4	手づくねかわらけ	8.8	6.4	✓	動土は黒色繊維、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土
8	9	2面溝4	かわらけ	7.2	6.0	1.7	動土は黒色繊維、雲母、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
8	10	2面溝4	かわらけ	8.4	6.1	1.7	動土は黒色繊維、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
8	11	2面溝4	かわらけ	6.8	4.8	1.7	動土は黒色繊維、雲母、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
8	12	2面溝4	かわらけ	6.2	6.0	1.5	動土は黒色繊維、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
8	13	2面溝4	かわらけ	11.4	7.6	3.1	動土は黒色繊維、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
8	14	2面溝4	かわらけ	11.6	7.8	2.9	動土は黒色繊維、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
8	15	2面溝4	青組繩指文鏡	✓	✓	✓	遺地は灰色弱粉質土 裸は淡灰緑色
8	16	2面溝4	笄	全長8.9幅1.6厚0.4			
8	17	2面溝4	用途不明木製品	全長12.0幅2.1厚0.5			
8	18	2面溝4	用途不明木製品	全長9.0幅3.5厚1.7			
8	19	2面溝4	用途不明木製品	全長19.0幅3.5厚0.8			
8	20	2面溝4	用途不明木製品	全長28.2幅2.8厚1.0			
11	1	2面土縫16	かわらけ	12.8	9.0	3.3	動土は黒色繊維、土丹粒、白針、雲母をわずかに混じえる桜色弱粉質土
13	1	2面土縫18	かわらけ	6.9	4.9	1.5	動土はやや多めの黒色繊維、雲母、白針、土丹粒を混じえる桜色弱粉質土
16	1	1面溝3	手づくねかわらけ	9.6	8.2	1.6	動土は黒色繊維、雲母を混じえる淡茶色弱粉質土
16	2	1面溝3	かわらけ	8.0	5.2	1.4	動土は黒色繊維、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土
16	3	1面溝3	かわらけ	12.0	6.0	3.5	動土は黒色繊維、雲母、白針、土丹粒を混じえる桜色弱粉質土
16	4	1面溝3	草履の芯?	✓	✓	✓	
16	5	1面溝3	草履の芯?	✓	✓	✓	
16	6	1面溝3	ヘラ状木製品	✓	✓	✓	
16	7	1面溝3	箸	全長23.7幅0.6厚0.4			
16	8	1面溝2	かわらけ	6.9	4.8	1.6	動土は黒色繊維、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
16	9	1面溝2	かわらけ	7.6	4.6	1.6	動土は黒色繊維、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
16	10	1面溝2	かわらけ	7.4	5.2	1.5	動土は黒色繊維、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
16	11	1面溝2	かわらけ	7.5	5.5	1.6	動土は黒色繊維、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
16	12	1面溝2	かわらけ	7.2	5.0	1.7	動土は黒色繊維、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
16	13	1面溝2	かわらけ	7.2	5.0	1.8	動土は雲母、黒色繊維、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
16	14	1面溝2	かわらけ	7.6	4.8	1.8	動土は黒色繊維、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
16	15	1面溝2	かわらけ	7.4	4.8	1.9	動土は黒色繊維、雲母、土丹粒を少々混じえる淡橙色弱粉質土
16	16	1面溝2	かわらけ	7.0	4.4	2.2	動土は黒色繊維、雲母、白針、土丹粒を混じえる弱粉質土
16	17	1面溝2	かわらけ	7.6	4.0	2.5	動土は黒色繊維、雲母、白針、土丹粒を混じえる桜色弱粉質土
16	18	1面溝2	かわらけ	12.2	✓	✓	動土は黒色繊維、雲母、白針、土丹粒を混じえる桜色弱粉質土
16	19	1面溝2	かわらけ	12.4	8.1	3.3	動土は黒色繊維、雲母、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
16	20	1面溝2	かわらけ	12.0	6.4	3.4	動土は黒色繊維、雲母、白針、小石粒を混じえる桜色弱粉質土
16	21	1面溝2	かわらけ	12.7	6.8	3.4	動土は黒色繊維、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
16	22	1面溝2	かわらけ	11.6	7.0	2.8	動土は黒色繊維、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
16	23	1面溝2	かわらけ	13.2	7.2	3.5	動土は黒色繊維、雲母、白針を混じえる桜色弱粉質土
16	24	1面溝2	穿孔かわらけ	✓	✓	✓	動土は黒色繊維、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
16	25	1面溝2	浅鉢型大鉢	✓	✓	✓	動土は小石粒を混じる灰色~淡橙色弱粉質土 器表は暗灰色
16	26	1面溝2	常滑こね跡	✓	✓	✓	動土は小石粒、白色繊維を混じえる暗褐色弱粉質土
16	27	1面溝2	瀬戸式先端灰釉折縫漆鉢	25.2	13.2	7.7	動土は黄味白色弱粉質土 裸は透明淡緑色 内底面に漆様文
16	28	1面溝2	白磁小皿	8.0	✓	✓	遺地は白色絹を多く混じえる白色粘質土
16	29	1面溝2	鏡	✓	✓	✓	『元豊通寶』
16	30	1面溝2	四葉鏡	遺存長8.9幅8.5厚2.1			赤褐色弱色岩 離地不明
17	1	1面溝1 ピット102	瓦質輪花型火鉢	31.6	24.6	11.9	
17	2	1面溝1 ピット104	鏡	遺存長5.0幅3.1厚2.3			黒色粘板岩 晴満産

表1 遺物觀察表(2)

回数	No.	出土地	種別	口径	底径	器高	備考
20	1	1面掘込み 地盤整備	手づくねかわらけ	8.1	7.4	1.4	粘土は黒色微砂、白針、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
20	2	1面掘込み 地盤整備	手づくねかわらけ	7.7	6.3	1.9	粘土は黒色微砂、白針、土丹粒を混じえる橙色弱粉質土
20	3	1面掘込み 地盤整備	手づくねかわらけ	8.3	6.5	1.9	粘土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色粉質土
20	4	1面掘込み 地盤整備	手づくねかわらけ	8.3	6.3	1.7	粘土は黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
20	5	1面掘込み 地盤整備	手づくねかわらけ	7.7	5.9	1.65	粘土は黒色微砂、雲母、土丹粒、白針を混じえる橙色弱粉質土
20	6	1面掘込み 地盤整備	手づくねかわらけ	7.8	5.9	1.7	粘土は黒色微砂、土丹粒、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
20	7	1面掘込み 地盤整備	手づくねかわらけ	8.8	7.4	2.0	粘土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる橙色粉質土
20	8	1面掘込み 地盤整備	手づくねかわらけ	8.1	7.0	2.25	粘土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
20	9	1面掘込み 地盤整備	手づくねかわらけ	8.1	7.0	2.0	粘土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色粉質土
20	10	1面掘込み 地盤整備	静止系切りかわらけ	8.0	6.5	1.15	粘土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
20	11	1面掘込み 地盤整備	静止系切りかわらけ	8.3	6.2	1.4	粘土は黒色微砂、雲母、土丹粒、白針を混じえる淡橙色粉質土
20	12	1面掘込み 地盤整備	静止系切りかわらけ	8.6	6.7	1.45	粘土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡茶色弱粉質土
20	13	1面掘込み 地盤整備	静止系切りかわらけ	7.9	6.0	1.4	粘土は黒色微砂、土丹粒、雲母、白針を混じえる橙色粉質土
20	14	1面掘込み 地盤整備	静止系切りかわらけ	8.2	6.3	1.5	粘土は黒色微砂、雲母、土丹粒、白針を混じえる橙色粉質土
20	15	1面掘込み 地盤整備	静止系切りかわらけ	8.2	5.0	1.7	粘土は雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
20	16	1面掘込み 地盤整備	静止系切りかわらけ	8.2	6.1	1.5	粘土は黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
20	17	1面掘込み 地盤整備	静止系切りかわらけ	8.4	6.6	1.45	粘土は黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
20	18	1面掘込み 地盤整備	静止系切りかわらけ	8.8	6.3	1.6	粘土は黒色微砂、雲母を混じえる淡茶色弱粉質土
20	19	1面掘込み 地盤整備	静止系切りかわらけ	9.0	6.8	1.7	粘土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡暗橙色弱粉質土
20	20	1面掘込み 地盤整備	静止系切りかわらけ	8.8	6.3	2.0	粘土は黒色微砂、土丹粒、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土
20	21	1面掘込み 地盤整備	静止系切りかわらけ	9.4	6.4	1.7	粘土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
20	22	1面掘込み 地盤整備	静止系切りかわらけ	8.6	6.5	1.7	粘土は黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
20	23	1面掘込み 地盤整備	静止系切りかわらけ	8.6	7.0	1.6	粘土は黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
20	24	1面掘込み 地盤整備	静止系切りかわらけ	9.2	7.4	1.7	粘土は黒色微砂、やや多めの雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
20	25	1面掘込み 地盤整備	静止系切りかわらけ	8.7	6.8	1.9	粘土はやや多めの黒色微砂、白針、土丹粒を混じえる淡茶色弱粉質土
20	26	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	8.5	7.0	1.55	粘土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
20	27	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	7.9	5.6	1.85	粘土は黒色微砂、土丹粒、雲母を混じえる淡茶色弱粉質土
20	28	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	7.8	5.8	1.4	粘土は黒色微砂、土丹粒を混じえる赤褐色弱粉質土
20	29	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	8.6	6.1	1.25	粘土はやや多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土
20	30	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	8.5	7.5	1.6	粘土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
20	31	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	8.8	6.0	1.4	粘土はやや多めの黒色微砂、雲母、土丹粒、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
20	32	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	8.4	7.2	1.5	粘土は黒色微砂、雲母、白針をやや多く混じえる橙色弱粉質土
20	33	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	8.2	6.5	1.9	粘土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
20	34	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	8.2	6.5	1.65	粘土はやや多めの黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土

表1 遺物観察表(3)

図版	No.	出土地	種別	口径	底径	器高	備考
20	35	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	8.0	5.3	1.3	胎土は黒色微砂、白色微砂、白針を混じえる赤褐色弱粉質土
20	36	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	7.4	5.5	1.55	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる褐色弱粉質土
20	37	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	8.0	5.9	1.75	胎土は黒色微砂、雲母をやや多く混じえる褐色弱粉質土
20	38	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	8.3	6.3	1.65	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる褐色弱粉質土
20	39	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	8.0	6.0	1.8	胎土は黒色微砂、土丹粒、雲母を混じえる淡褐色弱粉質土
20	40	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	7.8	6.0	1.6	胎土は黒色微砂、土丹粒、白針を混じえる褐色弱粉質土
20	41	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	8.0	5.4	1.8	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる淡褐色弱粉質土
20	42	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	8.0	6.2	1.7	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡褐色弱粉質土
20	43	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	8.0	5.8	1.75	胎土は黒色微砂、やや多めの雲母、土丹粒を混じえる淡褐色弱粉質土
20	44	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	8.2	5.8	1.75	胎土はやや多めの黒色微砂、白針、雲母を混じえる淡褐色弱粉質土
20	45	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	7.6	5.6	1.7	胎土は黒色微砂、土丹粒、雲母を混じえる淡褐色弱粉質土
20	46	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	7.6	5.7	1.75	胎土はやや多めの黒色微砂、白針、雲母、土丹粒を混じえる褐色弱粉質土
20	47	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	7.2	5.4	1.9	胎土は黒色微砂、雲母、白針をやや多く混じえる淡褐色弱粉質土
20	48	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	7.8	5.4	1.5	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡褐色弱粉質土
20	49	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	8.2	5.8	1.9	胎土は黒色微砂、白色微砂、白針を混じえる淡褐色弱粉質土
20	50	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	8.6	5.4	1.8	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる淡褐色弱粉質土
20	51	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	8.6	6.4	1.95	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる淡褐色弱粉質土
21	1	1面掘込み 地盤整備	手づくねかわらけ	12.4	10.8	2.95	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる褐色弱粉質土
21	2	1面掘込み 地盤整備	手づくねかわらけ	12.6	11.1	3.05	胎土は黒色微砂、白針、雲母、土丹粒を混じえる淡褐色弱粉質土
21	3	1面掘込み 地盤整備	手づくねかわらけ	12.1	10.6	3.15	胎土は黒色微砂、白針、雲母、土丹粒を混じえる褐色弱粉質土
21	4	1面掘込み 地盤整備	手づくねかわらけ	11.9	10.6	3.3	胎土は白針、黒色微砂、雲母を混じえる褐色弱粉質土
21	5	1面掘込み 地盤整備	手づくねかわらけ	12.8	11.0	3.1	胎土は黒色微砂、白針、雲母、土丹粒を混じえる淡褐色弱粉質土
21	6	1面掘込み 地盤整備	手づくねかわらけ	12.1	10.5	3.0	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒、白針を混じえる褐色弱粉質土
21	7	1面掘込み 地盤整備	静止糸切りかわらけ	12.2	7.2	3.75	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒、白針を混じえる淡褐色弱粉質土
21	8	1面掘込み 地盤整備	静止糸切りかわらけ	11.8	7.3	3.5	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる褐色弱粉質土
21	9	1面掘込み 地盤整備	静止糸切りかわらけ	11.8	7.3	3.65	胎土は黒色微砂、白針、雲母を混じえる褐色弱粉質土
21	10	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	10.8	7.4	3.3	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる褐色弱粉質土
21	11	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	12.2	8.5	3.4	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる褐色弱粉質土
21	12	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	11.7	7.8	3.1	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、土丹粒、白針を混じえる褐色弱粉質土
21	13	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	12.0	8.6	3.6	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡褐色弱粉質土
21	14	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	12.0	8.2	3.25	胎土は黒色微砂、土丹粒、白針、雲母を混じえる淡褐色弱粉質土
21	15	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	12.0	8.1	3.1	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる褐色弱粉質土
21	16	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	12.2	8.6	2.9	胎土はやや多めの黒色微砂、白針、雲母、土丹粒を混じえる褐色弱粉質土
21	17	1面掘込み 地盤整備	かわらけ	12.9	7.9	3.15	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる褐色弱粉質土

表1 遺物観察表(4)

回数	No.	出土地	種別	口径	底径	器高	備考
21	18	1面削込み 地盤整備	かわらけ	12.2	8.8	2.9	胎土はやや多めの黒色微砂、土丹粒、白針、雲母を混じえる淡褐色 弱粉質土
21	19	1面削込み 地盤整備	かわらけ	13.2	9.0	3.1	胎土は黒色微砂、雲母、やや多めの土丹粒を混じえる淡褐色弱粉 質土
21	20	1面削込み 地盤整備	かわらけ	12.6	8.7	2.85	胎土は黒色微砂、土丹粒、白針、雲母を混じえる淡褐色弱粉質土
21	21	1面削込み 地盤整備	かわらけ	12.2	7.2	3.1	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる淡褐色弱粉質土
21	22	1面削込み 地盤整備	かわらけ	11.9	8.1	3.15	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡褐 色弱粉質土
21	23	1面削込み 地盤整備	かわらけ	11.7	7.4	2.9	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡褐色弱粉質土
21	24	1面削込み 地盤整備	かわらけ	12.1	7.9	2.9	胎土は黒色微砂、土丹粒、白針を混じえる淡褐色弱粉質土
21	25	1面削込み 地盤整備	かわらけ	11.8	7.0	3.1	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡褐色弱粉質土
21	26	1面削込み 地盤整備	かわらけ	12.1	8.2	2.8	胎土はやや多めの黒色微砂、土丹粒、白針、雲母を混じえる淡褐 色弱粉質土
21	27	1面削込み 地盤整備	かわらけ	12.3	8.6	3.2	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡茶～淡褐色弱 粉質土
21	28	1面削込み 地盤整備	かわらけ	12.2	6.3	3.7	胎土は黒色微砂をわずかに混じえる淡褐色弱粉質土
21	29	1面削込み 地盤整備	山茶窯底系こね跡	＼	＼	＼	胎土は小石を混じえる灰色弱粘質土
21	30	1面削込み 地盤整備	常滑型	42.6	＼	＼	胎土は黑色微砂、白色微砂、小石粒を混じえる暗灰色粘質土 器 表は暗灰色
22	1	1面削込み地盤 整備最上層	手づくねかわらけ	8.2	6.6	1.5	胎土は黒色微砂、白針、土丹粒、雲母を混じえる淡褐色弱粉質土
22	2	1面削込み地盤 整備最上層	手づくねかわらけ	8.5	6.45	1.6	胎土は黒色微砂、白針、雲母、土丹粒を混じえる淡褐色弱粉質土
22	3	1面削込み地盤 整備最上層	静止糸切りかわらけ	7.8	5.9	1.4	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡褐色弱粉質土
22	4	1面削込み地盤 整備最上層	静止糸切りかわらけ	7.8	6.1	1.2	胎土は黒色微砂、白針、雲母、土丹粒を混じえる淡褐色弱粉質土
22	5	1面削込み地盤 整備最上層	静止糸切りかわらけ	8.7	6.5	1.5	胎土は黒色微砂、白針、雲母、土丹粒を混じえる淡褐色弱粉質土
22	6	1面削込み地盤 整備最上層	静止糸切りかわらけ	8.75	7.1	1.1	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡褐色弱粉質土
22	7	1面削込み地盤 整備最上層	静止糸切りかわらけ	9.1	6.3	1.7	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡褐色弱粉質土
22	8	1面削込み地盤 整備最上層	静止糸切りかわらけ	8.7	6.3	1.7	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡褐色弱粉質土
22	9	1面削込み地盤 整備最上層	静止糸切りかわらけ	8.5	6.6	1.55	胎土は黒色微砂、土丹粒、雲母、白針を混じえる淡褐色弱粉質土
22	10	1面削込み地盤 整備最上層	静止糸切りかわらけ	8.2	6.4	1.65	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒、白針を混じえる淡褐色弱粉質土
22	11	1面削込み地盤 整備最上層	静止糸切りかわらけ	9.4	6.2	2.1	胎土は黒色微砂、白色微砂、雲母を混じえる淡褐色弱粉質土
22	12	1面削込み地盤 整備最上層	静止糸切りかわらけ	8.1	6.05	1.5	胎土は黒色微砂、白針、雲母、土丹粒を混じえる淡褐色弱粉質土
22	13	1面削込み地盤 整備最上層	静止糸切りかわらけ	8.6	6.6	1.7	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる淡褐色弱粉質土
22	14	1面削込み地盤 整備最上層	静止糸切りかわらけ	8.2	6.6	1.65	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡褐色弱粉質土
22	15	1面削込み地盤 整備最上層	静止糸切りかわらけ	8.1	6.2	1.6	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒、白針を混じえる淡褐色弱粉質 土
22	16	1面削込み地盤 整備最上層	かわらけ	7.9	6.2	1.35	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡茶色弱粉質土
22	17	1面削込み地盤 整備最上層	かわらけ	8.2	6.5	1.8	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡褐色弱粉質土
22	18	1面削込み地盤 整備最上層	かわらけ	8.3	6.5	1.75	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡褐色弱粉質土
22	19	1面削込み地盤 整備最上層	かわらけ	8.4	6.1	1.6	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡褐色弱粉質土
22	20	1面削込み地盤 整備最上層	かわらけ	7.7	5.2	1.6	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡褐色弱粉質土
22	21	1面削込み地盤 整備最上層	かわらけ	7.6	5.6	1.3	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡褐 色弱粉質土

表1 遺物観察表(5)

回版	No.	出土地	種別	口径	底径	器高	備考
22	22	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	7.6	5.4	1.45	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる赤褐色弱粉質土
22	23	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	8.0	5.6	1.5	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる赤褐色弱粉質土
22	24	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	8.2	5.3	1.85	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
22	25	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	8.2	6.0	1.6	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
22	26	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	7.8	6.0	1.7	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
22	27	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	7.7	5.4	2.0	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
22	28	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	7.6	6.1	1.65	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
22	29	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	7.8	5.6	1.75	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる橙色弱粉質土
22	30	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	8.6	6.0	1.6	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
22	31	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	7.4	5.8	1.7	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
22	32	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	7.6	5.6	1.7	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
22	33	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	7.1	6.0	1.7	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる暗褐色弱粉質土
22	34	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	8.0	6.0	2.0	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる赤褐色弱粉質土
22	35	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	8.5	6.8	1.8	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
22	36	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	8.0	4.6	1.85	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
22	37	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	7.6	5.4	1.7	胎土は黒色微砂、雲母、白針をわずかに混じえる淡橙色弱粉質土
22	38	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	8.0	5.4	1.8	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる暗褐色弱粉質土
22	39	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	6.1	4.2	1.1	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土
22	40	1面掘込み地盤 整備最上層	手づくねかわらけ	11.8	11.4	(4.1)	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じる橙色弱粉質土
22	41	1面掘込み地盤 整備最上層	手づくねかわらけ	11.7	10.75	3.25	胎土は黒色微砂、白針、土丹粒、雲母を混じる橙色弱粉質土
22	42	1面掘込み地盤 整備最上層	手づくねかわらけ	12.5	11.2	(3.5)	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、土丹粒、白針を混じる橙色弱粉質土
22	43	1面掘込み地盤 整備最上層	手づくねかわらけ	12.2	10.0	3.25	胎土は黒色微砂、白針、雲母、土丹粒を混じる橙色弱粉質土
22	44	1面掘込み地盤 整備最上層	静止糸切りかわらけ	11.45	6.9	3.2	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
22	45	1面掘込み地盤 整備最上層	静止糸切りかわらけ	12.2	7.0	3.4	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
22	46	1面掘込み地盤 整備最上層	静止糸切りかわらけ	11.6	6.9	3.4	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
22	47	1面掘込み地盤 整備最上層	静止糸切りかわらけ	12.1	8.0	3.4	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
22	48	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	12.6	9.2	3.45	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
22	49	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	11.8	8.0	3.7	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
22	50	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	12.4	8.0	3.1	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
22	51	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	11.6	7.2	3.6	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
22	52	1面掘込み地盤 整備最上層	かわらけ	12.1	7.4	3.2	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる橙色弱粉質土
22	53	1面掘込み地盤 整備建物内 ピット25	静止糸切りかわらけ	8.1	6.2	1.8	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
24	1	1面井F1	瀬戸鉄袖鋲鉢	＼	＼	＼	胎土は淡黄白色弱粉質土
24	2	1面井F5	京焼碗?	＼	1.8	＼	胎土は淡黄白色弱粉質土 瓢はやや不透明 瓢裏には「清水」
24	3	1面井F5	美濃鉄袖筒型碗	12.5	＼	＼	胎土は淡黄白色弱粉質土 瓢は明茶色
24	4	1面井F5	船載?染付碗	＼	1.4	＼	胎土は灰白色弱粉質土 文様は外側に手描きの雲、植物文

表1 遺物觀察表(6)

回数	No	出土地	種別	口径	底径	器高	備考
26	1	1面かわらけ 盛まり	かわらけ	7.5	5.0	1.6	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
26	2	1面かわらけ 盛まり	かわらけ	8.7	6.7	1.95	胎土は黒色微砂、土丹粒、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
26	3	1面かわらけ 盛まり	かわらけ	11.55	5.55	3.3	胎土は黒色微砂、白色微砂、白針、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
26	4	1面かわらけ 盛まり	かわらけ	11.6	6.5	3.55	胎土は黒色微砂、土丹粒、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
26	5	1面かわらけ 盛まり	かわらけ	12.5	7.6	3.65	胎土は黒色微砂、白針、雲母、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
26	6	1面かわらけ 盛まり	打	全長7.3径0.9			
28	1	1面土壤14	手づくねかわらけ	7.7	6.4	1.7	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
28	2	1面土壤14	手づくねかわらけ	8.0	6.2	1.8	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
28	3	1面土壤14	手づくねかわらけ	8.3	7.6	1.9	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
28	4	1面土壤14	手づくねかわらけ	8.5	7.1	1.9	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
28	5	1面土壤14	手づくねかわらけ	8.0	6.8	2.1	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
28	6	1面土壤14	手づくねかわらけ	7.7	6.0	1.8	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
28	7	1面土壤14	手づくねかわらけ	7.9	6.6	1.4	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
28	8	1面土壤14	手づくねかわらけ	8.0	6.8	1.5	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
28	9	1面土壤14	手づくねかわらけ	8.0	6.5	1.7	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙～淡橙色弱粉質土
28	10	1面土壤14	静止糸切りかわらけ	8.4	6.5	1.7	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
28	11	1面土壤14	静止糸切りかわらけ	8.4	6.6	1.5	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる暗橙～黒灰色弱粉質土
28	12	1面土壤14	静止糸切りかわらけ	8.4	6.8	1.7	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
28	13	1面土壤14	静止糸切りかわらけ	8.1	6.2	1.6	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じる淡橙～淡橙色弱粉質土
28	14	1面土壤14	静止糸切りかわらけ	8.1	6.5	1.5	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡系～淡橙色弱粉質土
28	15	1面土壤14	かわらけ	7.2	4.8	1.6	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒を混じる淡橙色弱粉質土
28	16	1面土壤14	かわらけ	8.2	6.4	1.8	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒を混じる淡橙色弱粉質土
28	17	1面土壤14	かわらけ	8.5	6.5	2.0	胎土は多めの黒色微砂、雲母、土丹粒を混じる淡橙色弱粉質土
28	18	1面土壤14	かわらけ	8.4	6.3	1.8	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒を混じる淡橙色弱粉質土
28	19	1面土壤14	かわらけ	7.9	6.4	1.7	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、土丹粒を混じる淡橙色弱粉質土
28	20	1面土壤14	かわらけ	8.1	6.2	1.8	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じる淡橙色弱粉質土
28	21	1面土壤14	かわらけ	9.0	6.1	2.0	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じる淡橙色弱粉質土
28	22	1面土壤14	かわらけ	8.9	6.3	1.9	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じる淡橙色弱粉質土
28	23	1面土壤14	かわらけ	7.7	5.9	1.7	胎土は黒色微砂、白針、土丹粒、雲母を混じる淡橙色弱粉質土
28	24	1面土壤14	かわらけ	8.2	6.0	1.85	胎土は黒色微砂、白針、雲母、土丹粒を混じる淡橙色弱粉質土
28	25	1面土壤14	かわらけ	8.2	5.6	1.7	胎土は黒色微砂、雲母を混じる淡橙色弱粉質土
28	26	1面土壤14	かわらけ	8.7	6.0	1.8	胎土は多めの黒色微砂、雲母、土丹粒を混じる淡橙色弱粉質土
28	27	1面土壤14	かわらけ	8.3	5.7	1.7	胎土は黒色微砂、白針、雲母を混じる淡橙色弱粉質土
28	28	1面土壤14	かわらけ	8.9	6.1	2.0	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、土丹粒を混じる淡橙色弱粉質土
28	29	1面土壤14	手づくねかわらけ	11.3	8.4	1.8	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒を混じる淡橙色弱粉質土
28	30	1面土壤14	手づくねかわらけ	10.8	9.6	3.6	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じる淡橙色弱粉質土
28	31	1面土壤14	手づくねかわらけ	12.2	10.1	3.0	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じる淡橙色弱粉質土
28	32	1面土壤14	手づくねかわらけ	11.7	9.6	2.65	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じる淡橙色弱粉質土
28	33	1面土壤14	手づくねかわらけ	11.8	10.5	3.35	胎土は黒色微砂、雲母を混じる淡橙色弱粉質土
28	34	1面土壤14	かわらけ	12.7	10.0	3.2	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒、白針を混じる淡橙色弱粉質土
28	35	1面土壤14	かわらけ	13.0	9.0	3.6	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、土丹粒、白針を混じる淡橙色弱粉質土
28	36	1面土壤14	かわらけ	12.5	8.8	3.0	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じる淡橙色弱粉質土
28	37	1面土壤14	かわらけ	12.5	8.2	3.5	胎土は多めの黒色微砂、雲母、土丹粒を混じる淡橙色弱粉質土
28	38	1面土壤14	かわらけ	11.9	8.3	3.15	胎土は多めの黒色微砂、雲母、白針を混じる淡橙色弱粉質土
28	39	1面土壤14	かわらけ	12.0	7.75	3.7	胎土は多めの黒色微砂、雲母、白針を混じる淡橙色弱粉質土
28	40	1面土壤14	かわらけ	12.3	8.5	3.1	胎土は多めの黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じる淡橙色弱粉質土
28	41	1面土壤14	かわらけ	12.2	8.5	3.15	胎土は多めの黒色微砂、白針、土丹粒、雲母を混じる淡橙色弱粉質土
28	42	1面土壤14	かわらけ	12.3	8.7	3.5	胎土は多めの黒色微砂、雲母、土丹粒、白針を混じる淡橙色弱粉質土

表1 遺物観察表(7)

図版	No.	出土地	種別	口径	底径	器高	備考
28	43	1面土塼14	かわらけ		12.7	7.5	3.6 脱土は黒色微砂、白針、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
28	44	1面土塼14	骨製鍋?		遺存長2.3遺存幅1.6		
29	1	1面ピット9	肥前染付窯口	8.0	5.6	6.4 龜ノ目円形高台 文様は外側に手描き竹文	
29	2	1面ピット13	かわらけ		8.1	5.9	1.75 脱土は多めの黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
29	3	1面ピット17	かわらけ		8.1	6.4	1.9 脱土は黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
29	4	1面ピット14	手づくねかわらけ		8.6	6.6	1.7 脱土は黒色微砂、雲母、白針をやや多く混じえる淡橙色弱粉質土
29	5	1面ピット14	静止糸切りかわらけ		8.7	7.0	1.7 脱土は黒色微砂、雲母、白針をやや多く混じえる淡橙~暗灰色弱粉質土
29	6	1面ピット14	静止糸切りかわらけ	12.6	7.3	3.8 脱土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土	

# 第四章 分析

## 第1節 政所跡第Ⅷ地点の花粉化石

政所跡第Ⅷ地点は鎌倉市雪ノ下三丁目に所在し、ここは政所跡の南西隅にあたる。この発掘調査で道路、溝、土壌など近世から13世紀中頃までの遺構が発見されている。場所としては西側に鶴岡八幡宮、南に北条泰時・時頼邸跡があり、鎌倉時代における政治の中心的位置にあたる。以下に溝より採取した土壌試料について行った花粉分析結果を示し、政治の中心地周辺における古植生を検討した。また、近世の便所遺構については数点の鎌倉時代溝試料を合わせて寄生虫卵分析を行った。

### 1. 試料

試料は第Ⅱ調査区の北（試料1～9）および南壁断面（試料10～12）より採取された12点である（図31）。各試料について、試料1（土壌28=便所1？）は褐色を帯びた黒～黒灰色の有機質シルトで、炭片や土丹、レキ（チャート）などが認められる。また、便所の底板とみられる材片（ツガ属）も混入している。その下位は灰褐色の砂質粘土で、土丹片が多く、カワラケ片や炭片も散在している（溝2）。試料2（溝3上部）は黒褐色～灰黄色の砂質有機質粘土で、上部は土丹起源の黄褐色砂が多く認められる。試料3（溝3下部）はやや砂質の黒褐色有機質粘土である。試料4（溝5上部）はやや砂質の黒色粘土で、粘性が高く、材片が認められる。試料5（溝5下部）および試料6（中世地山）は黒色の有機質粘土で、メロン仲間の種子が上部で、材片は下部で多い傾向を示し散在している。試料7～9は溝4の覆土で、試料7は粘性の高い黒色粘土で、土丹が点在している。試料8・9は黒色の砂質粘土で、粘性が高く、下部は砂が多く混入している。また、上部にはメロン仲間の種子が散在している。試料10（溝5：南壁）は黒色の砂質粘土で、砂が多く混入しており、薄い材片が多く認められる。試料11（溝6）は褐色を帯びた黒色砂質粘土で、土丹の小塊が散在している。試料12（溝7）はやや泥炭質の黒褐色砂質粘土である。また、溝6の下位より中世地山試料（暗赤褐色～黒褐色の粘土質砂で、3～5mm程度の土丹塊が散在）を採取し粒度分析を行っている（近刊の別稿を参照）。

なお、試料1～3および9の4試料については寄生虫卵分析をメインとした。また、土壌28（試料1）は近世（18世紀後半）、溝3（試料2・3）は13世紀末～14世紀前半、溝4～7（試料4～12）は13世紀中頃と考えられている。

### 2. 分析方法

上記した12試料のうち寄生虫卵分析試料を除

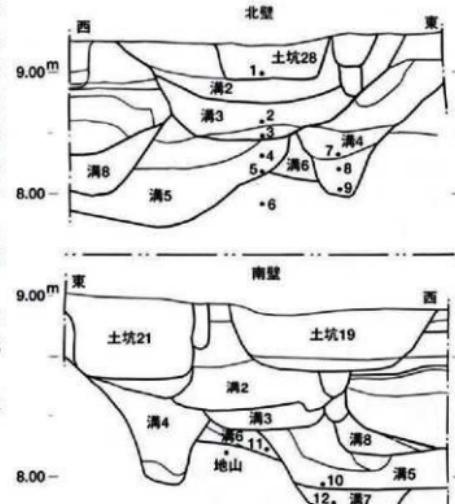


図31 第Ⅱ調査区の土層断面図と試料採取層準

く8試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約3~5g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトトリス処理（無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフランにて染色を施した。

また寄生虫卵分析（試料1~3および9）は体積を測定した土壤について上記花粉分析と同様の方法で処理し、残渣および検鏡の容量を測定してプレパラートを作成した。

### 3. 分析結果

検出された花粉・胞子・寄生虫卵の分類群数は、樹木花粉37、草本花粉37、形態分類を含むシダ植物胞子3、寄生虫卵6の総計83である。これら花粉・シダ植物胞子・寄生虫卵の一覧を表2に、分布を図32（北壁：土壤28、溝3・5）、図33（北壁：溝4）、図34（南壁：溝5~7）に示した。なお、分布図は全花粉・胞子総数を基準とした百分率で示してある。また、表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。

検査の結果、樹木花粉の占める割合は全体に低く、最も多い地点1の試料でも30%弱である。以下に各地点ごとに示す。

土壤28、溝3・5（図32）：樹木花粉の産出傾向から下位より花粉化石群集帯I・IIを設定した。

花粉帶I（試料4~6）は少ない樹木花粉のなかでスギ、ヤナギ属、コナラ属アカガシ亜属がやや目立って検出されている。その他、マキ属、ツガ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）、コナラ属コナラ亜属、シノキ属-マテバシイ属（以後シイ類と略す）などが全試料より得られている。草本類ではイネ科が最も多く、40%前後の出現率を示している。次いでアザ科-ヒユ科が15%前後、ヨモギ属、アブラナ科が10%前後を示している。その他では、ソバ属が試料4より、また最下部試料6よりベニバナ属がそれぞれ1個体づつ検出されている。寄生虫卵では鞭虫卵が最も多く、特に試料4・5で多産している。次いで回虫卵が多く、その他肝吸虫卵や横川吸虫卵が若干観察されている。

花粉帶II（試料1~3）はマツ属複雑管束亜属（アカマツ、クロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）の増加で特徴づけられる。スギは一度減少するものの最上部では再び出現率を上げている。また、I帯で目立って検出されたアカガシ亜属は減少傾向が見え、シイ類も同様である。草本類ではイネ科が下部の2試料で60%前後と非常に多く検出されているものの最上部試料1では減少し、代わってアザ科-ヒユ科、アブラナ科が多産している。その他ではヨモギ属が下部の2試料で10%前後を示すが最上部では全く得られず、ソバ属が試料3から若干検出されている。寄生虫卵は最上部試料1からは得られず、下部の2試料ではやはり鞭虫卵が最も多く、次いで回虫卵で、その他毛頭虫卵（肝毛頭虫卵？）、肺吸虫卵、肝吸虫卵、横川吸虫卵が若干検出されている。

北壁2（溝4）：やはり検出数が少ない樹木花粉のなかでスギとアカガシ亜属が全試料1%を越える出現率を示している。草本類ではイネ科が40%前後の出現率を示し最も多く、次いでアザ科-ヒユ科、ヨモギ属となっており、アザ科-ヒユ科は上部2試料では20%を越えている。またこの2試料においてタンボボ亜科が1%を越えて検出されており、その他、カヤツリグサ科、アブラナ科が5%前後の出現率を示している。寄生虫卵も全試料から検出されており、やはり鞭虫卵が最も多く、特に試料7において

表2 産出花粉化石一覧

和名	学名	学名											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
裸木													
モク属	<i>Podocarpus</i>	-	-	-	1	2	1	-	1	2	6	-	-
モク属	<i>Abies</i>	-	1	-	1	2	2	2	-	1	1	4	1
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	-	-	2	3	4	3	-	1	1	14	3
トウヒ属	<i>Picea</i>	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属单被葉科	<i>Pinus subgen. Haploxyylon</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属单被葉科	<i>Pinus subgen. Diploxyylon</i>	66	17	15	9	5	2	12	4	1	2	11	1
マツ属(その他)	<i>Pinus (Umbra)</i>	14	1	1	1	1	1	5	-	1	1	4	-
コロセマツ属	<i>Schizotropis</i>	-	-	-	-	2	2	2	2	2	2	-	-
ヌメ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	49	9	1	25	30	27	24	17	3	16	76	10
ヌメ	T. C.	-	-	-	1	4	3	1	3	1	4	5	-
ヤナギ属	<i>Alnus</i>	-	-	-	29	13	3	1	6	-	16	5	7
ベニシダ属	<i>Carpinus</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カシ属	<i>Juglans</i>	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
クマシダ属-アサガ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	3	3	-	2	1	1	2	-	4	2	-	-
カバノキ属	<i>Ostrya</i>	-	1	2	2	1	1	-	1	-	1	-	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	-	1	1	1	1	1	-	1	-	1	3	-
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	1	1	1	1	-	-	2	2	-	1	2	-
ブナ	<i>Fagus japonica</i> Maxim.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
コナラ属コラ属	<i>Quercus palustris</i>	4	3	-	2	2	2	2	2	2	2	2	2
コナラ属アカガシ属	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	2	7	9	19	9	7	19	13	1	-	-	-
クリ属	<i>Castanea</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シノノミ属-マタバシイ属	<i>Castanopsis - Passnia</i>	-	-	3	3	3	3	3	3	-	-	7	-
ニレ属-ヤケニレ属	<i>Elmus - Zelkova</i>	4	1	-	8	-	1	2	4	-	5	2	2
ヌリ属-ムクノキ属	<i>Celtis - Aphananthe</i>	2	4	1	-	2	1	2	1	-	2	1	-
ブナ属	<i>Liquidambar</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シナノクサ属	<i>Aesculus</i>	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-
ソクジ属	<i>Ulmus</i>	-	2	2	-	-	-	-	2	-	-	1	-
ソクジ属	<i>Parthenocissus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	<i>Araliaceae</i>	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズキ属	<i>Cornus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
カキ属	<i>Eriobotryaceae</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カキノキ属	<i>Diospyros</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カキノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カキノキ属	<i>Viburnum</i>	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-
基本													
ガマ属	<i>Typha</i>	1	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-
サンゴモモガ属	<i>Alium</i>	-	-	1	-	1	-	-	1	-	-	-	-
オモガ力属	<i>Spartina</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
イモ科	<i>Gramineae</i>	67	433	374	309	353	157	217	174	40	194	393	189
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	7	27	-	22	19	31	18	17	4	8	20	10
ツユクサ属	<i>Comelinna</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-
イネ科	<i>Anemone</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ヌスアオイ属	<i>Mitchella</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ヌスアオイ属	<i>Lilium</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カラマツ属	<i>Maianthemum</i>	-	2	1	2	2	2	2	3	-	3	2	2
ガシギシ属	<i>Emex</i>	-	-	-	3	4	-	-	4	1	4	1	-
イフクトリノオ部	<i>Polygonum sect. Bistorta</i>	-	1	1	-	1	-	5	1	-	3	1	-
サナエグサ属-ウナギツカニ属	<i>Polygonum sect. Persicaria-Echinocaulon</i>	-	1	1	-	1	-	1	-	-	2	1	-
ツバメ属	<i>Epogaea</i>	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-
アザレ科ヒトエ科	<i>Chionanthus - Amaranthaceae</i>	93	102	23	111	137	67	126	157	6	62	28	34
スペリオニ科	<i>Portulacaceae</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	2	1	1	11	20	2	2	2	1	32	6	5
カラマツ属	<i>Thlaspium</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-
他のムカシウタ科	<i>other Ranunculaceae</i>	-	-	17	1	1	1	-	1	-	1	-	-
クマガタ属	<i>Hedysarum</i>	87	27	29	82	46	12	39	15	8	30	17	11
ワレモコウ属	<i>Sanguisorba</i>	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	2	1
他のハラ科	<i>other Rosaceae</i>	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ノアズキ属	<i>Bunaria</i>	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のムメ科	<i>other Loganiaceae</i>	-	1	1	-	-	-	1	2	-	-	-	-
ヌリタガタ属-近似種	<i>cf. Aneurypta</i>	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-
ツブリタガタ属	<i>Laportea</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨコクサ属	<i>Hibiscus</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	1	4	1	5	3	2	2	3	-	4	5	3
アヌサ属	<i>Solomia</i>	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
オオバコ属	<i>Plantago</i>	-	-	2	11	10	-	4	8	1	3	5	1
ガリガニンジン属	<i>Scrophulariaceae - Campanula</i>	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-	1	2
ペニバンナ属	<i>Carthamus</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	-	109	42	61	52	81	30	108	5	76	56	118
他のキク科	<i>other Tubuliflorae</i>	1	9	5	5	5	2	2	6	2	5	4	4
ラン科	<i>Liliidae</i>	3	5	3	8	9	4	8	7	-	1	17	3
シダ植物													
ヒカゲノカズラ属	<i>Lycopodium</i>	3	-	7	5	4	3	1	-	1	3	-	-
新形孢子	<i>Monolete spore</i>	15	3	12	8	9	4	2	6	1	8	22	14
三形孢子	<i>Trilete spore</i>	2	3	9	4	2	6	1	0	8	2	-	-
樹木													
健虫	<i>Acaris</i>	-	47	23	61	82	28	57	18	5	35	27	15
毛虫	<i>Trichorhiza</i>	-	214	167	209	441	55	356	85	14	104	165	58
毛虫	<i>Capillaria</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
駒虫	<i>Paragonimus</i>	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
駒虫	<i>Clonorchis</i>	-	3	8	3	2	1	4	6	1	4	2	2
駒虫	<i>Metagonimus</i>	-	1	2	4	3	2	4	2	1	-	-	-
樹木粉	<i>Arbores pollen</i>	137	59	36	108	88	62	88	66	9	64	211	32
草本粉	<i>Nonarboreal pollen</i>	270	729	517	636	677	267	453	514	72	445	482	390
シダ植物孢子	<i>Spores</i>	21	6	4	23	18	17	13	25	4	13	37	16
花粉-孢子類	<i>Total Pollen &amp; Spores</i>	428	785	557	767	783	448	554	605	85	522	710	438
不明花粉	<i>Unknown pollen</i>	12	10	6	23	12	15	16	22	8	14	29	7

T. - C. は Taxonome-Cephaletaxace-Cupressaceasを示す

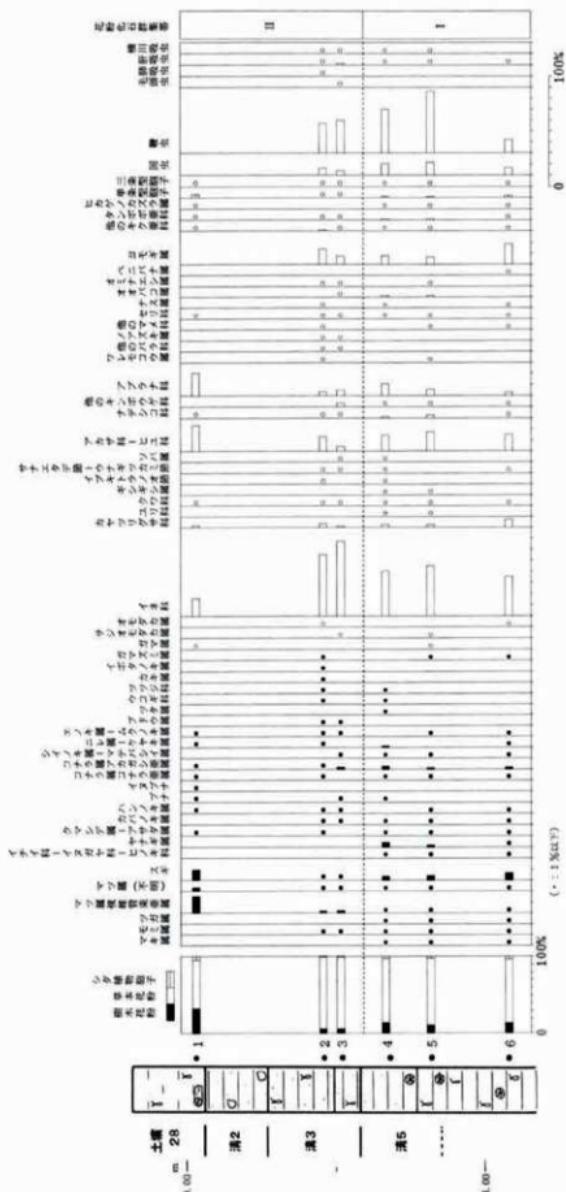


図32 土壁28（北壁中央部）の主要花粉化石分布図  
（樹木花粉は樹木花粉類数、草本花粉・胞子・苔生植物は花粉・胞子絶対数として百分率で算出した）

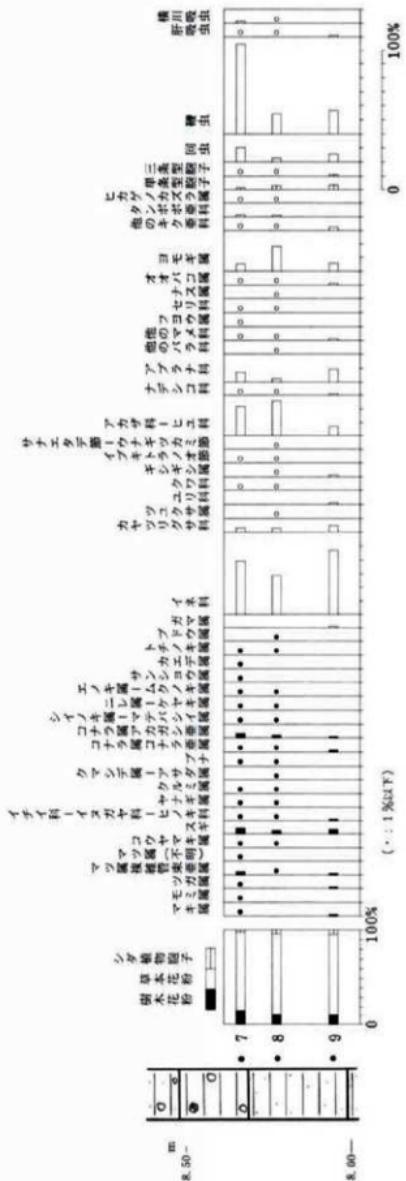


図33 溝4(北壁)の主要花粉化石分布図  
 (樹木花粉は樹木花粉・樹子・被子植物花粉類と樹木花粉・樹子・被子植物花粉類として百分率で算出した)

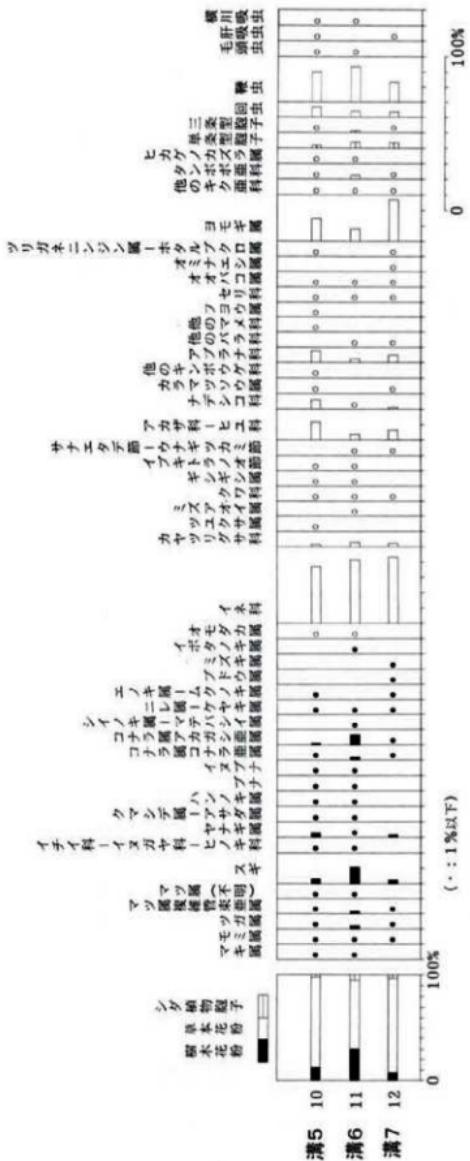


図34 満5・満6・満7 (南都) の主要花粉化石分布図  
(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・孢子・寄生虫卵は花粉・孢子総数と基準として百分率で算出した)

で多産している。次いで回虫卵となっており、その他肝吸虫卵、横川吸虫卵が若干検出されている。

南壁：北壁2同様にスギとアカガシ亜属が目立って検出されており、ツガ属、ニヨウマツ類、ヤナギ属、コナラ亜属がこれらに次いでいる。草本類ではイネ科が最も多く、40%前後の出現率を示している。次いでヨモギ属が多く、試料12では約27%に達している。その他について、アブラナ科が5%前後の出現率を示しており、カヤツリグサ科が全試料1%を越えて得られている。寄生虫卵も全試料から検出されており、そのなかではやはり鞭虫卵が最も多く、回虫卵がそれに続き、その他毛頭虫卵（肝毛頭虫卵？）、肝吸虫卵、横川吸虫卵が若干検出されている。

#### 4. 遺跡周辺の古植生

土壌28、溝3・5遺構（図32）の分析結果をもとに政所跡第Ⅲ地点周辺の古植生について検討した。

13世紀中頃：花粉帯Iにあたり、スギ林やアカガシ亜属を主体とした照葉樹林が優勢であったと推測される。しかしながらこれら樹木類の占める割合は非常に低いことから、遺跡近辺にはこれらの森林はなかったと推測される。おそらく周辺丘陵部に成立していた林より飛来したり、溝を通して運ばれてきたのであろう。またこの林について、13世紀中頃の鎌倉は急速に発展した時期で、周辺丘陵部のスギ林や照葉樹林は破壊されたことが考えられており（鈴木1999）、政所跡近辺丘陵部においてもこれらの森林が占める割合は小さくなっていた、あるいは疎林状態になっていたと推測される。

溝周辺については、イネ科をはじめとしてアカザ科-ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属などが多産しており、これらの雑草類が多く生育していたことが推測される。しかしながら本地点は政所の南西端に位置し、西側は鶴岡八幡宮、南側は横大路を挟んで北条泰時・時頼邸と政治の中心的位置にあり、溝周辺といつても雑草類が生い茂る景観は想像し難い。溝上部にはメロン仲間とみられる種子が散在しており、食した後種子が捨てられたことが推測される。このように当時の溝はゴミ捨て場であったと考えられており（馬淵1989）、星敷地内において刈られた雑草類が溝に捨てられ、これらの花粉が溝内に供給されたことも予想される。さらにサジオモダカ属やオモダカ属、溝6（試料11）のミズアオイ属などは水田雑草を含む分類群であり、多く検出されているイネ科花粉にもイネ（属）と推測される花粉も認められることから、場所は不明であるが水田域より水路や溝を通してイネの花粉も混入して大量のイネ科花粉の産出となったと思われる。これは他の雑草類についても同様であり、水田周辺に生育していたこれら雑草類の花粉もイネ花粉とともに溝に供給されたことが考えられる。

一方でアカザ科-ヒユ科、ヨモギ属には薬として利用される分類群もあり、1個体のみが検出されたベニバナ属同様に薬として利用されることにより花粉が溝内に供給されたことが考えられる。また、花粉形態からは言及できないがアブラナ科には食用とされる分類群も多く、ソバ属も同様であるが食料として利用された際にその花粉が溝内に混入したことが考えられる。

以上のように溝内に花粉化石が混入する要因はいろいろ考えられるが、分類群により要因は異なることが容易に推測される。しかしながらその特定は難しく、現時点においてここでは「イネ科、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属などの花粉化石はいろいろな要因がはたらいて多産という結果になった」ととどめたい。

13世紀末～14世紀前半：花粉帯IIの下部にあたり、周辺丘陵部ではニヨウマツ類が目立つ森林に代わっていたとみられる。先にも記したが13世紀中頃に周辺丘陵部のスギ林や照葉樹林は破壊されたことが考えられており、その跡地にニヨウマツ類の二次林が形成された（鈴木1999）のである。しかしながら樹木花粉の占める割合はさらに小さくなっており、ニヨウマツ類の林は疎林であったと推測される。

方、草本類では依然としてイネ科、アザラ科-ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属などの雑草類が多く検出されており、これは上記と同様のことが考えられる。

近世（18世紀後半）：花粉帶Ⅱの上部にあたり、ニヨウマツ類の二次林がさらに目立つ存在となった。またスギも再び増加しており、これは植林によるものと推察される。草本類でアザラ科-ヒユ科とアブラナ科が多産している。試料は便所遺構の埋積物と考えられており、薬あるいは食料として利用され糞便として遺構内に混入したことが推察される。

### 5. おわりに

溝試料における草本類の多産については北条泰時・時頼邸跡でもみられる。すなわち、木枠のある若宮大路側溝においてもイネ科、アザラ科-ヒユ科、ヨモギ属などが多く検出されており、溝周辺での生育が推測されている（鈴木 1996）。しかしながら木枠があることから土手の所での生育は考えられず、まして本地点も当時のメインストリートである横大路に面していることから、上記分類群が溝周辺に生い茂るような景観は想像し難い。このように草本類の多産の要因について現時点においては特定できないと考え、今後の課題としたい。

### 引用文献

- 菱木恒治 1994 「線虫症」『医学要點双書10 寄生虫病学』第2版、67~110頁、金芳堂。  
馬淵和雄 1989 「ゴミ捨て場としての溝」「よみがえる中世【3】」96~98頁、平凡社。  
大田区立郷土博物館 1997 「トイレの考古学」東京美術、229頁。  
鈴木 茂 1996 「花粉分析」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 平成7年度発掘調査報告」(第2分冊)、261~270頁、  
鎌倉市教育委員会。  
鈴木 茂 1999 「神奈川県鎌倉市における鎌倉時代の森林破壊」「國立歴史民俗博物館研究報告」第81集、131~139頁。  
辻 守康 1994 「吸虫症」「医学要點双書10 寄生虫病学」第2版、111~134頁、金芳堂。

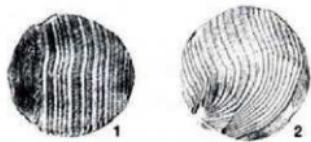
鈴木 茂 (バレオ・ラボ)

## 第2節 出土遺物

第2面に帰属する遺構からは、手づくねと糸切りかわらけが出土している。手づくねかわらけは、淡茶～淡橙色弱粉質胎土である。器形は平底気味で器壁は、体部外面中位の稜も退化して、開きながら立ち上がるが多い。一方、糸切りかわらけは、淡橙～橙色弱粉質胎土で、直立気味の器壁や、開きながら立ち上がるものが目立ち、出土したかわらけからおよそ13世紀中頃と考えられる。

第1面より出土したかわらけは、手づくね、糸切り、静止糸切りが混在している。おおむね、淡橙色～橙色を呈する弱砂質～粉質気味の胎土。手づくねかわらけは、平底で体部外面中位の稜は弱く、2面より出土したものと大きな差は見られない。糸切りかわらけは、器壁は薄く開きながら立ち上がるものと、背高で内弯気味に立ち上がり、側面觀碗型を呈するものが多くみられる。これらの様相から、およそ13世紀後半から14世紀初頭頃と考えられる。

上述のような出土遺物観のなかで、最も多く出土したかわらけについて2点ほど気がついた点を記します。まず、第1面に帰属する掘り込み地盤整備下層と最上層より出土したかわらけをみてみる。小型かわらけは口径7.0~9.5cm以内、器高1.0~2.0cm前後、底径口径比1.2~1.75、大型かわらけは口径11.0~13.0cm前後、器高2.8~3.8cm以内、底径口径比1.3~1.75に収まる。また、大型かわらけの器形は内底面広く、器壁は直立、もしくは開きながら立ち上がるものが多く見られるが、最上層からは側面觀碗型を呈するものは含まれていないものの、下層ではわずかに見られる。一方、小型かわらけは、器壁は直立



第35図 「平行糸切り」と「楕円状糸切り」拓影 (S=1/3)

ないしは、わずかに開きながら立ち上がるものが多くのを占める。大型・小型ともに大きな器形の違いは見られず、また最上層と下層出土を比べても器形の違いがないことから4回にわたって積み重ねを行っている堆積土層であるが、一時期に埋め戻していたことを確認できる。

第2点としては、「政所跡」におけるこれまでの調査でも多数出土している静止糸切りかわらけを取り挙げたい。13世紀後半から14世紀初頭ごろの本遺跡地第1面から出土している多くの静止かわらけは、多めの黒色微砂・雲母片を混じえる弱砂質胎土と良好な焼成により、かなり硬質のものが多い。小型は口径8.0~9.5cm前後、器高1.2~2.2cm、底径口径比1.2~1.5前後である。器形は、直立しない内窓気味に立ち上がり、おむね口唇部は面取りされている。大型は口径11.5~13.0cm以内、器高3.2~3.7cm、底径口径比1.65~1.75に収まる。器形は背高で器壁は非常に薄く、体部外面中位に強い稜を持ち内弯して立ち上がる。出土数は少ないが、器形が整っている。小型・大型ともに内底面のナデはほとんど見られない無調整のものが多く、また回転糸切りの底部に多くみられる「スノコ状圧痕」も見あたらない。

次に、手づくねかわらけ、糸切りかわらけ、静止糸切りかわらけが混在して出土する類例を鎌倉市内遺跡から探ると「北条時房・顯時邸跡」(雪ノ下一丁目265番地3地点)の第5面の土壇10・105、「政所跡I」(雪ノ下三丁目987番1・2)の2面、「政所跡VI」(雪ノ下三丁目970番2外)の2面下の包含層、それと隣接する「政所跡IV」(No.247 雪ノ下三丁目988番地点)のかわらけ溜りが挙げられる。「政所跡」以外の出土地が、「北条時房・顯時邸跡」で、当時「鎌倉赤橋(八幡宮赤橋)辺」と呼ばれて、北条氏との結び付きを示す重要な地域であったところ(宗臺1999)であることも興味深い。

上に挙げた調査地点のうち「政所跡IV」地点を除いては、13世紀中頃に帰属し、13世紀後半に属する「政所跡IV」では静止かわらけが折り重なった状態で大量に発見された。出土量は小型のものが圧倒的に多く、口径7.0~10.0cm、器高1.0~2.7cm、底径口径比1.2~1.7に収まる。器形はやや背高で、器壁が直線的に開きながら立ち上がるものと、外反気味に開きながら立ち上がるものが多い。「政所跡IV」以外の小型静止かわらけに、背高で、器壁が直線的に開くものがあまり見られないのは、出土量の違いなのか判然としない。大型は口径11.0~13.0cm、器高2.7~4.0cm、底径口径比1.3~1.7に散在している。器壁は厚いもの、薄いものが混在しているが、体部外面中位に強い稜を持ち、内弯して立ち上がる。

また、底部の糸切り離し方法は、「平行糸切り」と「楕円状糸切り」の2つのパターンが見られたので、粘土を使ってどのような糸切りの仕方をするのかを実験してみた。なお、糸切りに使用した糸は底部の状態がわかりやすいように、わらの穂先の部分を大きく燃て太めの糸とした。

1は底部を切り離す際に輪轤を静止させ、糸を向こうから手前に平行移動させたものの拓影。

2は輪轤を静止させ、糸を向こうから手前に平行移動させながら、途中から片手を素早く手前に引き込んだ例の拓影である。

1が「平行糸切り」、2が「楕円状糸切り」の切り離し法と想定できる。輪轤を静止させて糸切りする場合は、輪轤台にのせたかわらけと糸を慎重に水平に保たなければ器の高さが簡単に変わるので時間を要するが、回転糸切りの場合では、底部の切り離したい器の高さに印をつけておけば手早く仕上げることができることが実験からわかった。

今回出土した同時期の静止糸切りかわらけと回転糸切りかわらけの器形上の差異はあまり見られなかったが、静止糸切りはおむね、胎土が砂質気味で、硬質に焼成され、口唇部周辺を強いナデで面取り

風に調整していること、内底面のナデ調整は無く、底部の「スノコ状圧痕」が見られないなどの違いがある。当時、すでに量産されていたかわらけが、なぜ回転糸切りよりも手間のかかる、静止糸切りかわらけを製作していたのか、また何のために使われたのかなど様々な問題点を解明する手がかりを示すことはできなかったが、13世紀中～後半の静止糸切りかわらけが「政所跡」で集中して用いられていたことは確認できた。今後、工房・工人などの要因もからめた考察を行うための資料の増加に期待したい。

馬瀬直子

#### 参考文献

- 宗基秀明 1998 「中世都市鎌倉の初期かわらけ」『中近世土器の基礎研究』 XIII、67～81頁、日本中世土器研究会編。  
河野真知郎 1995 「中世都市鎌倉—遺跡が語る武士の都」講談社選書メチエ。  
石井 進・大三輪龍彦 1989 「よみがえる中世3 武士の都鎌倉」平凡社。  
藤沢良章 1988 「中世の食器考—〈かわらけ〉ノート」『列島の文化史』 5、59～94頁。  
宗基・宗基 1996 「横小路周辺遺跡 二階堂字横小路110番3地点—永福寺関連遺跡—」横小路周辺遺跡発掘調査団。  
宗基・宗基 1999 「北条時房・頼時邸跡 雪ノ下一丁目265番3地点—中世都市鎌倉中心域の調査」北条時房・頼時邸発掘調査団、東国歴史考古学研究所。

## 第五章 調査成果のまとめ

今回の調査で発見された遺構群は、13世紀中頃の第2面と13世紀末から14世紀初頭の第1面を中心とする調査を行った。その概要については、すでに「調査成果の概要」において記した。ここでは、今回で7地点目となった「政所跡」遺跡内の隣接地点での発掘調査（図2参照）成果と比較し、まとめにかえたい。

まず今回の調査地点に最も隣接し、鶴岡八幡宮前面を横切る横大路に面した雪ノ下三丁目988番地地点（第IV地点）と雪ノ下三丁目987番1・2地点（第I地点）をみてみる。第IV地点からは、13世紀第2四半期から第3四半期の第2面と、13世紀代4四半期から14世紀第1四半期の第1面が確認されている。第I地点からは、13世紀中頃から14世紀初頭の第2面、14世紀半ば以降の第1面が確認されている。第I地点では、第1面の遺構の遺存状況が不良であったために、第2面帰属遺構の年代幅がやや広くなったものと思われるが、第IV地点と第I地点ともに、調査区の南端に位置する横大路の側溝から3m以上北に奥まった付近を南限とする建物が東西に広がって発見されている。発見されている建物は何度かの建て替えが行われているが、少なくとも両地点で3棟の掘立柱建物を確認している。第IV地点第2面の最北の建物だけがその軸線方位を違えているが、両地点の建物軸線はN-31°～33°-Eであり、柱通りと柱間も未調査部分を越えてほぼ一致することから、かなり大規模な掘立柱建物であったと想定できる<sup>3)</sup>。これら建物の南北軸線は、また調査区南端の横大路側溝と直交関係にあり、「政所跡」遺跡内の敷地利用は横大路を基準としていたと考えられる。

今回の調査で発見された生活面の帰属年代は、第V地点のそれとほぼ一致するが、今回発見されたN-30°-Eの南北軸線方位をもつ道路遺構と堀跡は横大路側溝と直交するものであり、「政所跡」遺跡の南限と西限が確認されたことになる。このような状況にあって、今回発見された遺構のうち、建物の南北軸線方位はN-31°-Eであり、隣接地点発見の建物の軸線方位と一致し、同一の空間、「政所」敷地内であることを確認させる。ただし、柱通りをみるとかぎり、第2面では今回調査地点の建物と隣接地点建物は一致せず、同一建物の延伸部分とは思われない。敷地の西側限界地域に当たる今回の調査地点の建物は、隣接地点発見の大型建物に付属するものであろうか。他方、第1面の建物は、その柱通と柱間から第V地点の掘立柱建物の延伸部分である可能性を持っている。

このように、今回の調査地点は「政所」跡の南西限界に位置し、そこに発見された建物は隣接地点に確認されている大型掘立柱建物とは別の付属舎のものであり、また数多く発見された土壙は「政所」敷地南西隅に設けられたごみ穴的性格を持っている。ただし、第1面の土壙14から発見された大量の墨染布の出土は、単なるごみ捨てとは言い切れない。第IV地点の西端に発見されている布は、今回発見のものより古い第2面に確認されている。このように時期のことなる生活面から連続して「政所」跡の南西隅近くから貴重な布が大量に土壙に遺棄されている状況には、何らかの意味合いがあったのではないだろうか。墨染めの布が凶事に用いられた幔幕などであるならば、直会行事の一部である可能性もある。

なお、遺棄された意味の解釈と同時に、中世前期の染織資料は非常に乏しく、貴重な研究資料になるものと思われる。

次に、隣接地点だけではなく、「政所跡」遺跡内の他の調査地点と周辺地域での調査成果を図37に示した。「政所跡」遺跡の中央付近に位置する雪ノ下三丁目970番2外地点（第VI地点）では、礎石建物の一部とその建築に備えた泥岩版築地業跡の東端が発見されて、これまでの当該地域では発見されていなかった礎石建物跡が「政所跡」郭内の内部にあったことを確認させる。同様の泥岩版築面は、第V地点

でも発見されており、「政所跡」遺跡の北部、または北東地域には礎石建物が数地点に存在したかもしれない。

他方、雪ノ下三丁目966番1地点（第Ⅱ地点）と雪ノ下三丁目965番地点（第Ⅲ地点）では、南北道路とその西側に取りつく側溝が隣接した地点で発見され、「政所跡」遺跡の東の限界が確認されたものと考えられている。これによって、今回の調査地点の南北道路と東側側溝、第Ⅳ地点と第Ⅰ地点での東西

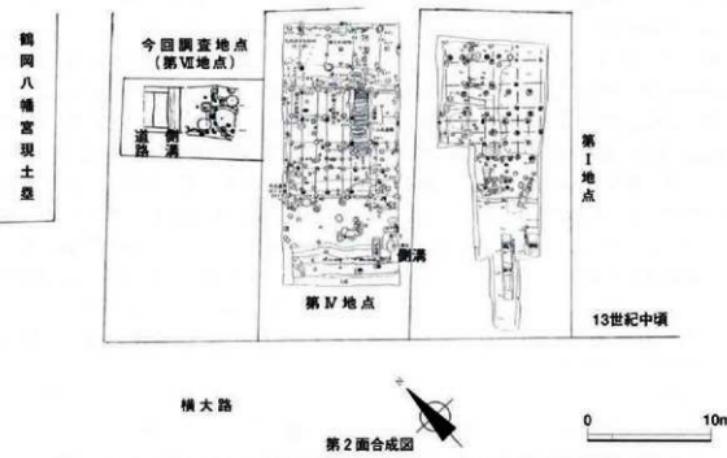


図36 隣接調査地点構造合成図



図37 周辺調査区合成概念図  
-181-

に延びる横大路の北側側溝、第Ⅱ地点と第Ⅰ地点の南北道路および西側側溝から、「政所跡」の東西の限界と南の限界が確認されたことになる。そして、以上の道路側溝の方位を示せば、すでに記した今回発見の南北道路側溝はN-30°-S、第Ⅱ・第Ⅰ地点の南北道路側溝はN-30°30'-E、第Ⅳ・第Ⅰ地点の横大路道路側溝はE-31°-Sである。それぞれの道路側溝が接続していたのであろうかの問題も残るが、ほぼ完全な直角関係のコの字に「政所跡」が開まれていることがわかる。この東西と南北の軸線方位は、発掘調査で発見された第Ⅳ地点での泥岩地業方位や掘立柱建物のそれと一致すると同時に、現在の雪ノ下三丁目の中にある路地の方位とも一致している。

こうした溝に開まれた「政所跡」遺跡の東西の幅を、溝の内側で測ると81mである。また、溝の外側では89mを測る。それぞれ27丈と29.5丈となる。ほぼ30丈幅の敷地であろうか。

「政所跡」と市道を挟んで西には、鶴岡八幡宮が位置する。市道に接しては八幡宮の東を限る土塁が巡らされているけれども、本土星は明治の鶴ヶ岡八幡宮寺の寺社分離の後に、舞殿の前面に広がる源平池掘り上げ土を用いて造築されたものであって、中世以来の姿をとどめるものではない。

鶴岡八幡宮境内でもこれまでに5地点で発掘調査が行われているが、中でも研修道場用地の調査において13世紀中ごろに遡る鶴岡八幡宮の東を限る土塁の一部とその内側に位置する溝(堀)が発見されている。この溝(溝5)を図上に合成して、さらに南へと延長させるならば、今回発見された「政所跡」の南西隅にある道路とぶつかりりますことになる。両地点が75mほど離れているために、この誤差を生み出すのかもしれないが、今回発見された道路と側溝の関係がより古い溝5~8においては道路を伴うことが確認されていないため、道路が当初から設置されていたのかも問題となる。

このように、「政所跡」の規模が今回の調査によって明らかにされたが、依然としてこの地域での生活面は13世紀中ごろを遡るものではなかった。今回発見された第2面が残されていた中世地山層の形成は、おそらくは先史時代にまでさかのほる時期に水に洗われるような状態から次第に湿地となって土壤の堆積の始まったことを地山層の粒土分析の成果は示している(近刊別稿参照)。こうした地理条件が「政所跡」での生活痕跡の残され方に大きく関わっていることを窺わせる。

また、出土資・試料の各分析からも、これまでの調査で得られた成果の追認と同時に新たな課題が提出されている。花粉化石と大型植物化石分析からは、イネ科、アカザ科-ヒュウ科、ヨモギ属などの草本類が数多く確認されているが、それは近年調査された宇津宮辻子墓跡でのように若宮大路側溝と屋敷地の間に車寄せの空間が広がっていることが要因かもしれない、政所跡においても横大路と「政所跡」の間に土塁の存在が示唆されているが、そのような空間に草本類が育成していたのであろうか。さらに、栽培植物であろうとされる中でも、カキノキ、ナス、ゴボウは新たな知見であり、これらの島が今小路西遺跡(御成小学校内)で想定されている町家の裏庭などで栽培していたのだろう。しかし、それだけでは都市鎌倉の需要は満たされていなかったであろうから、近隣のものが市場にもたらされていたのであろう。

樹種同定では、本報告で割愛した近世の便所とした遺構に埋設されていた樽状の木製品がツガ属であると報じられた。江戸遺跡との比較のもと、関東南部地域での近世材木需要と植生が今後の問題であろう。なお、便所とした遺構から全く寄生虫卵が確認できなかったことは、これを便所とする合理性を欠くものであるかもしれない。

今回「政所跡」の南西隅の限界を確認することができたが、「政所跡」内部の様子を探る必要はもとより、「政所跡」の北側限界や「政所跡」と隣接する鶴岡八幡宮との関係、「政所跡」の北東にあったとされる大倉幕府跡、さらには「政所跡」の近隣にその存在が想定される問注所との関連も残された問題

である。

註

- 「石質も若干違ひ、西夷の例はないことから赤岡産の可能性は低い。また、硯裏に特有の刻印や彫り込みも見られないことから特注品とも考えられない。」との御教示を沙見氏よりいただいた。
- 「縁には石材を切り落とす為に目印が付けられ、その線を利用して波文様風に線彫りされている。また、「海」の部分は非常に深く削られているので、かなりの大型品であろう。」との御教示を沙見氏よりいただいた。
- 政所跡道路内での各調査地点の測量方眼設定基準がすべての地点で共有しておらず、また国土座標軸上の数値を求めていないために、ここでの発見遺構合成図は手作業で行ったことから誤差が大きいものと思われる。

引用・参考文献

- 大三輪龍彦 他 1983 「研修道場用地発掘調査報告書」鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書所収、鎌倉市鶴岡八幡宮・研修道場用地発掘調査団。
- 河野眞知郎 1993 「中世鎌倉火鉢考－東国との関連において－」「考古学論叢 神奈川」第2集、54~79頁、神奈川考古学会。
- 九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念」九州近世陶磁学会。
- 瀬田哲夫 1992 「政所跡（No. 247）雪ノ下三丁目966番1地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 8」11~131頁、鎌倉市教育委員会（第Ⅱ地点）。
- 瀬田哲夫 1992 「政所跡（No. 247）雪ノ下三丁目965番地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 8」133~191頁、鎌倉市教育委員会（第Ⅲ地点）。
- 瀬戸市史編纂委員会 1998 「瀬戸市史 陶磁史篇 六」。
- (財)瀬戸市埋蔵文化財センター 1997 「古瀬戸編年表」「(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第5輯」。
- 手塚直樹・田畠佐和子 1992 「政所跡（No. 247）雪ノ下三丁目988番」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 9」165~257頁、鎌倉市教育委員会（第Ⅳ地点）。
- 手塚直樹・宮田 真 1991 「神奈川県鎌倉市 政所跡」政所跡発掘調査団（第Ⅰ地点）。
- 中野晴久 1994 「赤羽、中野 生産地における編年について」「全国シンポジウム「中世常滑焼をとて」資料集」日本福祉大学知多半島総合研究所会。
- 野本賢一 1999 「政所跡（No. 247）雪ノ下三丁目970番2外地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15」79~102頁、鎌倉市教育委員会（第Ⅴ地点）。

# 写 真 図 版



a. 調査前遺跡地（東より）



b. 同（北西より）

図版 2

関東区工事課





a. I区第4面全景（東より）



a. I区第3面全景（東より）

図版 4



a. 第2面全景（南から）



b. 第2面下道路側溝（南側トレンチ内）



c. 第2面探跡（南より）



a. 第2面土壤16遺物出土状況  
(南より)



b. 同出土かわらけ



c. 同穴掘状況 (南より)



(第二区)



(第一区)

d. 第1面全景 (南より)

図版 6



b. 第1面掘り込み地盤整備（北より）



a. 第1面上層全景（南より）



c. 第1面建物1（北より）



d.  
同  
（東より）



a. 第1面道路と側溝(溝2)(南より)



c. 第1面溝2底面遺物出土状況  
(西より)



b. 同底面出土かわらけ



e. 同漆皿



d. 同近景(西より)

図版 8



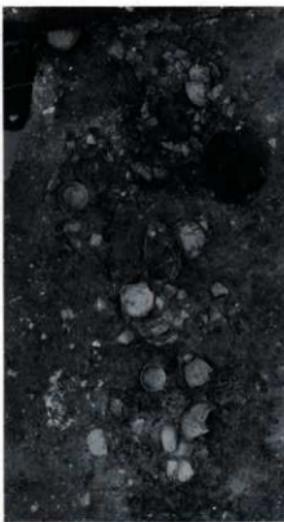
b. 第1面溝2・3土層断面（北より）



a. 第1面道路と側溝（溝3）  
(南より)



c. 第1面井戸3（南より）



d. 第1面かわらけ溜り1  
(南より)



e. 第1面土壤14麻布出土状況（北より）



a. Ⅱ区近世・近代面全景 (東より)



b. Ⅱ区近世・近代面便所 1 (南より)



c. Ⅱ区近世・近代面便所 2 (南より)



d. 近世・近代面遺物出土状況

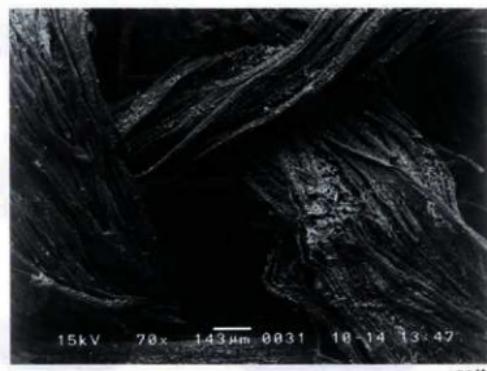
図版10



出土麻布の一部



30倍



70倍



1000倍

(鶴見大学文学部文化財学科)  
（永田氏・山田氏撮影）

出土麻布断片電子顕微鏡写真

図版12





溝2下層出土・写真のみ  
漆器皿



8-16  
笄



28-44  
骨製飾



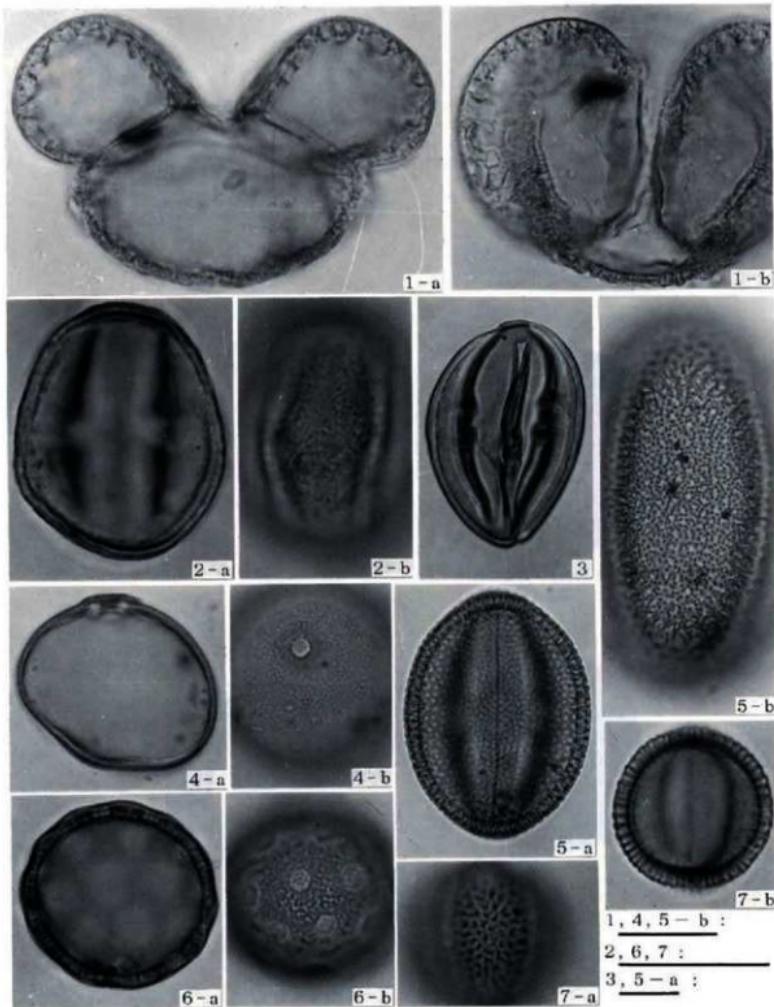
16-30

硯



17-2

図版14



花粉化石 (scale bar : 20μm)

- |                                 |                             |
|---------------------------------|-----------------------------|
| 1 : マツ属複維管束亞属 PLC.SS 2863 試料 3  | 5 : ソバ属 PLC.SS 2864 試料 3    |
| 2 : コナラ属アカガシ亜属 PLC.SS 2862 試料 2 | 6 : ユリ科タイプ PLC.SS 2867 試料 8 |
| 3 : カキ属 PLC.SS 2860 試料 2        | 7 : アブラナ科 PLC.SS 2861 試料 2  |
| 4 : イネ科 PLC.SS 2865 試料 8        |                             |

## 報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうきほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成12年度発掘調査報告書							
卷次	17							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	宗基秀明・馬瀬直子							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 神奈川県鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2001年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因	
まんじゅうあと 政所跡	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうきほうこくしょ 神奈川県鎌倉市 雪ノ下三丁目 989番4地点	204	247	° ° ° ° °	19990816 19991015	53.82	個人住宅建設	
取容遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
政所跡	都市遺跡	中世前期	道路 道路側溝 建物跡	かわらけ 墨染麻布	政所跡西側限界線の確認と 鎌倉時代の麻布の出土			

げ ば しゅうへん いせき  
下馬周辺遺跡 (No.200)

由比ガ浜二丁目110番5地点

## 例　　言

1. 本報は鎌倉市山比ガ浜二丁目110番5地点に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が行なった。
3. 現地調査は平成11年8月17日から10月5日までの実働28日間、調査面積は38.5m<sup>2</sup>である。
4. 現地での調査体制は以下の通り。  
主任調査員 菊川英政  
調査員 小林重子  
調査補助員 石元道子・条健一  
協力機関名 (社)鎌倉市シルバー人材センター
5. 整理作業(挿図・図版作成)は小林が、報告の編集は菊川が行なった。
6. 出土品を含むすべての発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

# 本文目次

第一章 調査の概要	207
1. 調査地点の位置	207
2. 調査の方法	207
3. 層序と生活面	207
第二章 検出した遺構	209
1. 一面の遺構	209
2. 二面の遺構	209
3. 三面の遺構	209
4. 四面の遺構	209
第三章 出土遺物	216
1. 一面の遺物	216
2. 二面の遺物	216
3. 三面の遺物	216
4. 四面の遺物	216
第四章 まとめ	224
1. 出土遺物の特徴	224
2. 遺跡の年代と性格	224

# 挿図目次

図1 調査地点と周辺の遺跡	206
図2 土層堆積図	207
図3 調査区設定図	208
図4 一面・二面全体図	211
図5 二面、土壤1・2・3	212
図6 三面・四面全体図	213
図7 三面、溝2・土壤5・6・7・8	214
図8 四面、土壤9・10・建物1	215
図9 一面包含層・二面遺構の遺物	219
図10 二面包含層の遺物	220
図11 三面遺構・包含層の遺物	221
図12 四面遺構の遺物	222
図13 四面包含層・生活面下部の遺物	223

# 図版目次

図版1 一面全景・二面全景	227
図版2 二面土壤4・二面ピット3	228
図版3 三面全景・土壤5	229
図版4 三面土壤8・ピット17	230
図版5 三面土壤6・7ほか	231
図版6 四面全景・遺物出土状態	232
図版7 四面土壤9・10	233
図版8 四面遺物出土状態	234
図版9 堆積土層	235
図版10 遺物(自然遺物)	236
※ 報告書抄録	237

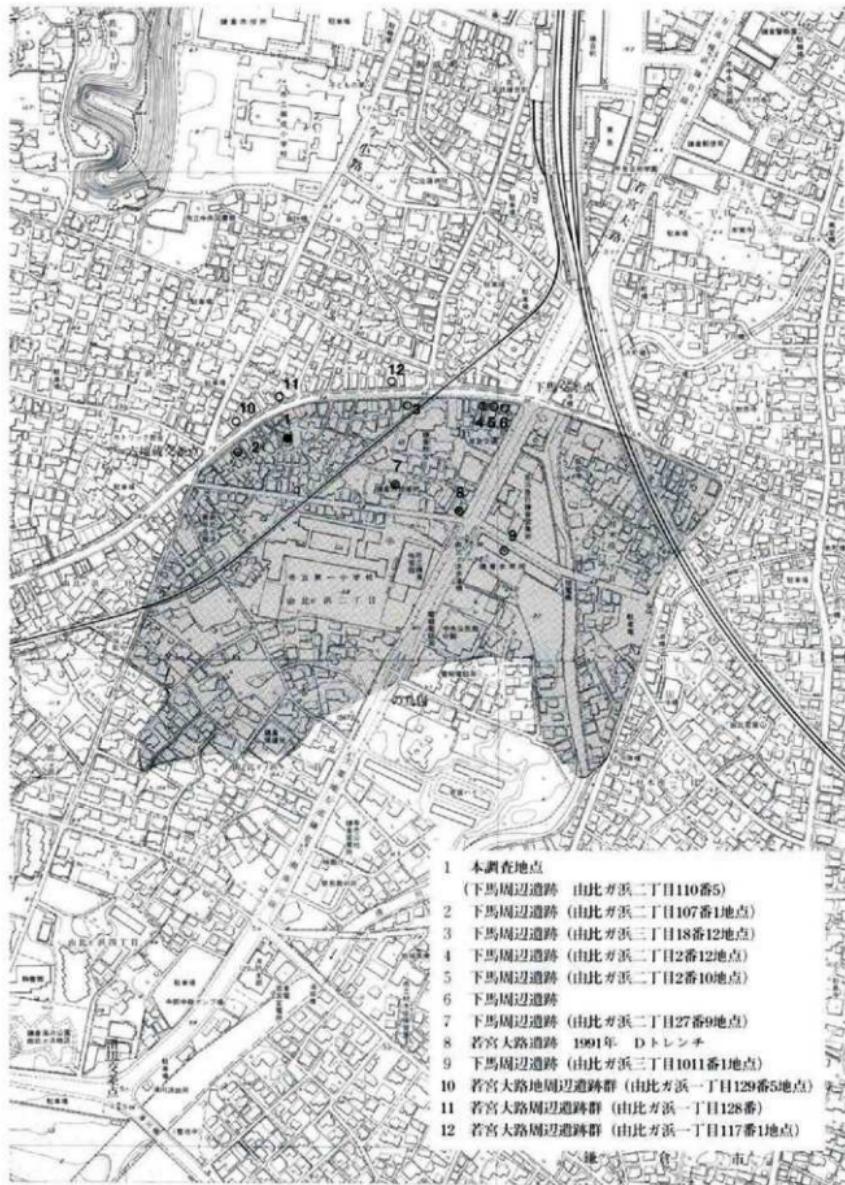


図1 調査地点と周辺の遺跡

# 第1章 調査の概要

## 1. 調査地点の位置

下馬周辺遺跡は鎌倉市街地の中央やや南寄りにあり、若宮大路が国道134号線と交差する「下馬」とその南方「一の鳥居」に挟まれた南北300m、東西500m程の範囲を占めている。一の鳥居が建つ辺りは海拔10mの海岸砂丘頂部、下馬交差点の辺りは海拔3.6mの鎌倉中央部で最も低い場所であり、地形は南から北へ緩やかに傾斜している。これまでの調査事例から見ると、遺跡範囲の大部分は砂丘であり、国道134号線に沿った一帯はその後背湿地となっていたようである。周辺での発掘調査はすでに8箇所で行なわれ、本地点はその西端に近い位置（図1）にある。

## 2. 調査の方法

調査地点周辺は宅地が密集しており、重機掘削や土砂の場外搬出が非常に困難な状態であった。そのため、排土置場を確保し隣地との安全な後退距離を保つ必要上、調査区は対象地のほぼ中央に東西7.0m×南北5.5mの範囲で設定した。また、測量方眼は2m間隔とし、東西軸にアルファベット、南北軸に算用数字を付した。測量軸と鎌倉市4級基準点との関係は次頁（図3）に示してある。

## 3. 層序と生活面

地表下1.2mに堆積する灰色粘土層（4層）は近世の水田耕作土であり、同層を除去して中世の遺物包含層（5・6層）を検出した。遺物包含層の厚さは約30cm、この中に3時期の生活面が確認できる。

地表下1.6m以下は自然堆積層である。後背湿地の砂質土（7層・A～C層）と飛砂による海岸砂丘（D層）の一部、その下には水磨した小砾と貝殻（ナミノコガイ）を含む茶褐色貝砂層（E層）が観察された。（図2）

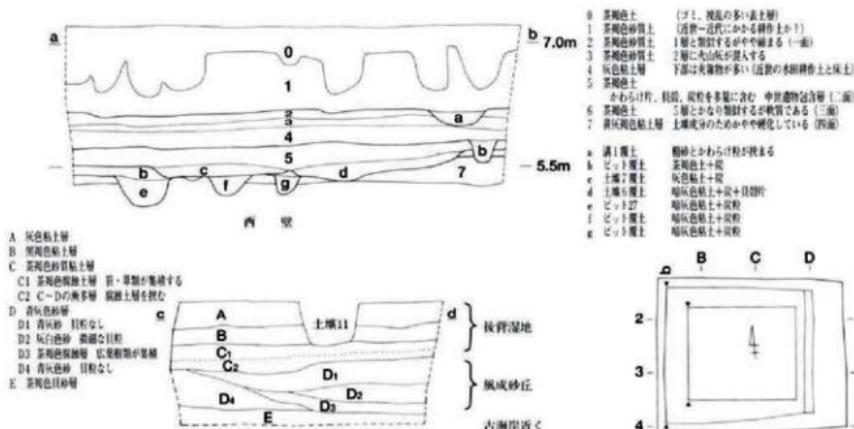
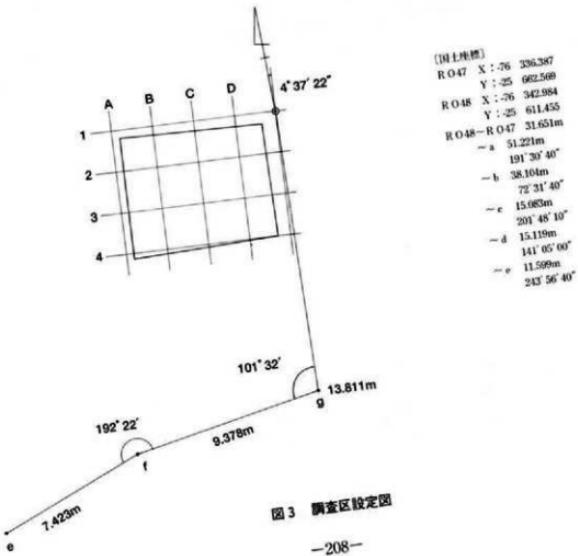
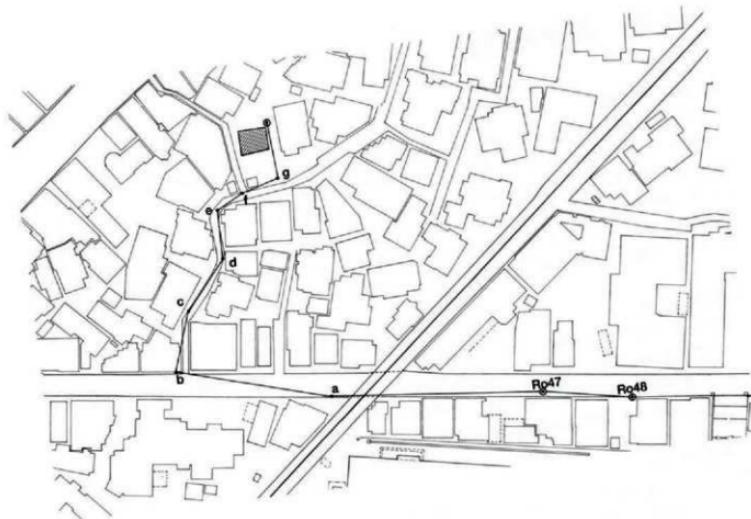


図2 堆積土層



## 第2章 検出した遺構

### 1. 一面の遺構

溝1（図4） 調査区の中央を北西から南東へ直線的に伸びる断面U字形の浅い溝で、幅40~55cm、深さ約20cmを計測する。宝永火山灰を含む2層を切って掘り込まれ、覆土中から幕末~明治期頃の染め付け細片が出土した。水の流れた痕跡は明瞭ではないが、排水溝を兼ねた区画溝であろう。

なお、溝1の南西側にある丸太杭（直径6cm）とその抜け跡（直径8cm、深さ22cm）は、一面の上層から打ち込まれたものである。

### 2. 二面の遺構

土壤1（図4・5） 短辺1.1~1.4m×長辺3.0m余、深さ約25cmの長方形の土壤である。土壤2に南角隅を切られ、西壁際には覆土に掘り込まれた柱穴の礎板と根石（凝灰岩）が残る。覆土は上下に分層可能で、下層は茶褐色の木質腐蝕屑と薄い粘土層が互層状に堆積していた。ゴミ穴あるいは便所であろうか。覆土中から糞石（図9-38）が1点出土した。

土壤2（図4・5） 短辺0.9m×長辺2.4m、深さ約40cmの長方形の土壤である。底面が平坦でないことを除けば形態・覆土とも土壤1と似ており、同じくゴミ穴あるいは便所と考えられる。西壁際で骨片（歯骨？）が出土、北西角の木片は下部土層中の木材で本遺構に伴うものではない。

土壤3（図4） 下部土層中の木片周囲を掘りすぎたもので遺構ではない。

土壤4（図4・5） 短径0.7m×長径1.1m、深さ約30cmの楕円形の土壤である。出土遺物も少なく特筆すべきことはない。なお、覆土および周辺部に打ち込まれた杭は端材を利用した簡易なもので、一辺2cm×3cm角（板杭は幅4cm×厚さ0.5cm）、長さ20~30cm前後のものが多い。

柱穴（図4） 4穴が見つかった。いずれも直径は40cm前後、深さはP1約25cm、P2約24cm、P3不明、P4約26cm。P4の礎板は一辺8cm×18cm、厚さ約1cmである。

### 3. 三面の遺構

土壤5（図6・7） 短辺0.8m×長辺1.8m以上、深さ約25cmの長方形あるいは長楕円形の土壤である。覆土・出土遺物に特徴はないが、主軸方向と掘り込まれた位置が二面の土壤1・2と似ており、同じ性格の遺構と考えられる。溝2より新しい。

土壤6（図6・7） 半径0.9mの半円形であるが、調査区外に続くため土壤の全形は不明。深さ約25cm、底面のピット12~14との新旧関係は不明。完形のかわらけ皿（図11-166）1点が出土した他、覆土中に炭化物と貝殻（ハマグリ・キサゴ）を多く混入していた。ゴミ穴であろうか。

土壤7（図6・7） 土壤の形状は不明瞭、深さ約10cm。出土したかわらけ皿4点（図6-a~d）は四面の土壤10と重複する位置にあり、どちらに帰属する遺物かよく判らない。

土壤8（図6・7） 短径1.3m×長径1.5m、深さ約25cmの楕円形の土壤である。四面の土壤9とまったく同じ位置にあるが、同一遺構であるかは判然としない。

溝2（図6・7） 幅40~50cm、深さ約10cmの浅い溝である。特筆すべきことはない。

柱穴・礎板（図6） 柱穴の確認は難しく、礎板を検出してはじめて柱穴の存在に気づく例も多い。三面と四面を合成して検討したが、建物としての柱並びはよく判らなかった。礎板の確認面からの深さ

と海拔高（斜位の礎板は平均値）を図6の一覧表に記録した。

#### 4. 四面の遺構

**土壙9（図6・8）** 三面土壙8の真下で確認された。隅丸長方形に近い平面形態であったが、掘り進むうちに、南側部分が梢円形に深く落ち込んでいることが判った。覆土は上下2層に分けられ、隅丸長方形部分は木質腐蝕土と細砂を互層状に挟む黒灰色粘土層で貝殻が多く含み、梢円形部分は貝殻粒を混入する灰白色の砂層であった。それぞれが別遺構の可能性もあり性格は明瞭ではないが、覆土中からチユウ木と見られる木片が出土しており、便所あるいはゴミ穴と考えられる。

**土壙10（図6・8）** 三面土壙7と重複する。直径1.0～1.1m、深さ約1.0mの不整円形の土壙である。形態及び湧水量の多さから見て井戸か。覆土中から弓の形代（図10-206）が出土した。

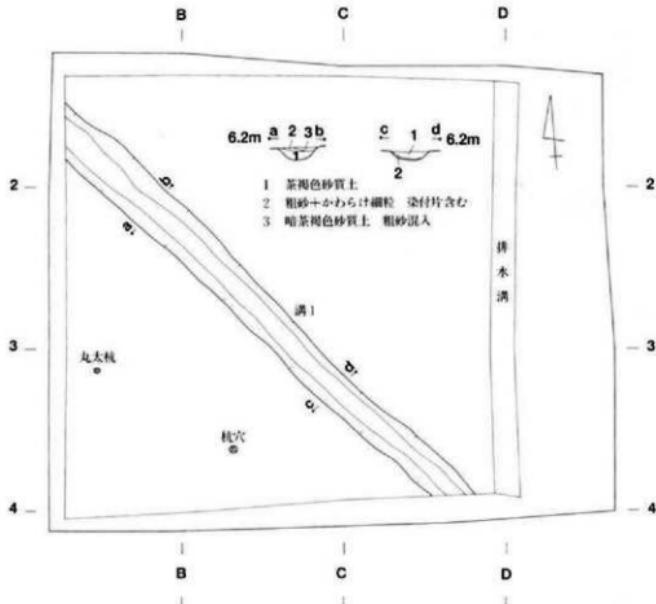
**土壙11（図6）** 短径60cm×長径70cm、深さ49cm。浅い窪みであったが掘りすぎて原形を失う。出土遺物なし。

**建物1（図6・8）** 柱並びから建物の一部を考えたが、柱間隔が215cmと広く疑問も残る。

**柱穴・礎板（図6）** 柱穴・礎板の深さと海拔高（斜位の礎板は平均値）は図6の一覧表に示した。柱穴の他に杭穴や単なる窪みも含み、礎板はすべて三面より上の柱穴に伴うと考えている。なお、調査区西壁にかかるピット27には黄茶褐色の木質腐蝕土が堆積しており、チユウ木と見られる木片（図12-214～236）が多量に出土した。三面の遺構である。

**その他（図6）** 調査区の北東及び南西部分が窪んでいた。北東部分は堆積土層の違いを掘り上げただけであるが、南西部分は底面に薄い炭層が広がり、漆器椀・魚の鱗・貝殻が見つかっている。漆器椀（図版6）は黒漆塗り無文、被膜のみ。鱗は未鑑定のため魚種不明。貝殻はナガラミで40×60cmの範囲（図版8）に約687個体が集積されていた。

一面全体図



二面全体図

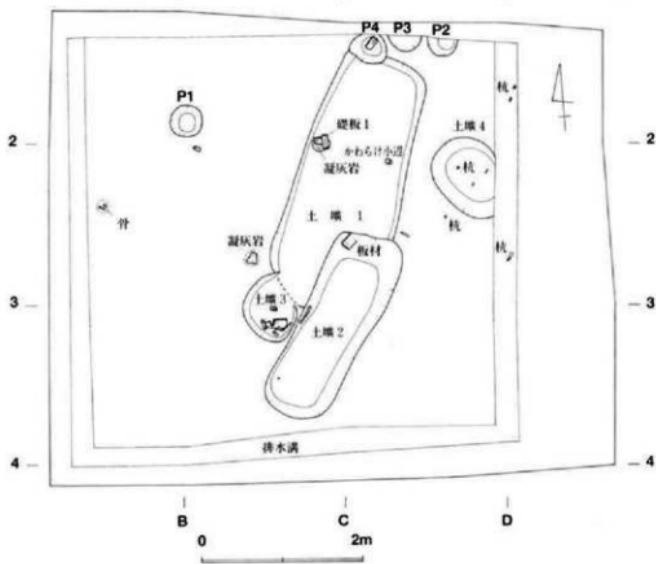


図4 一面・二面全体図

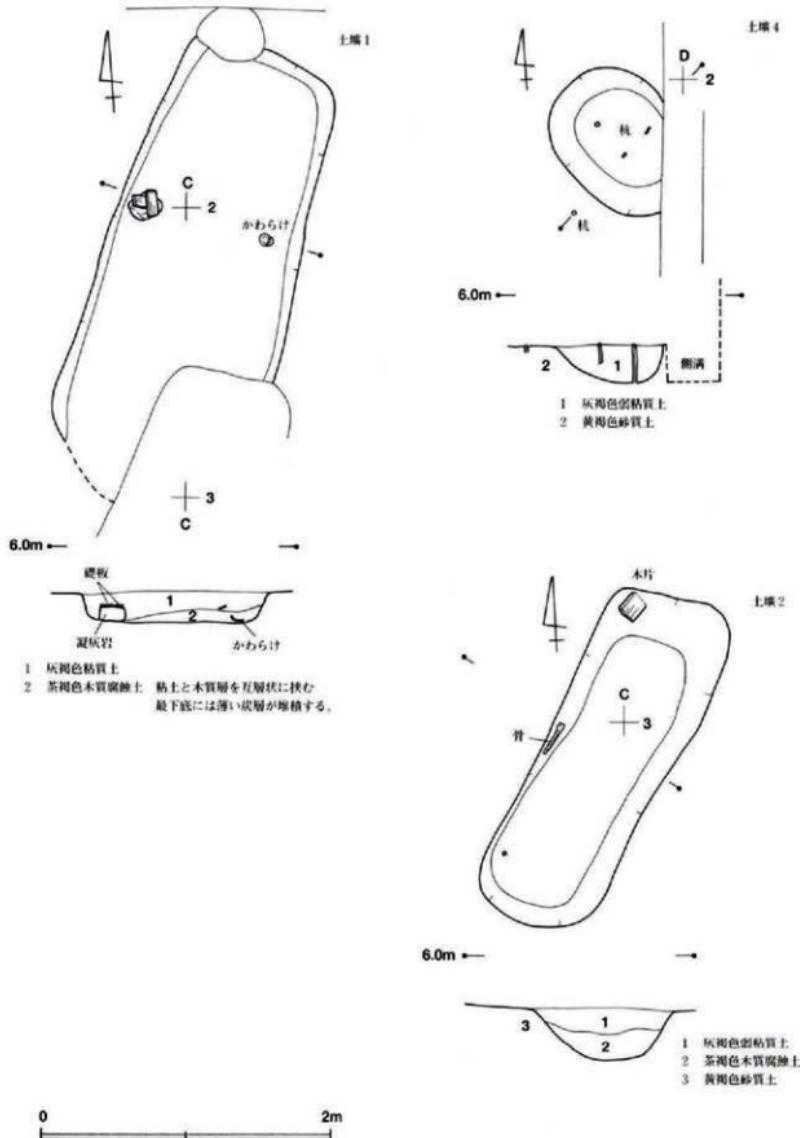
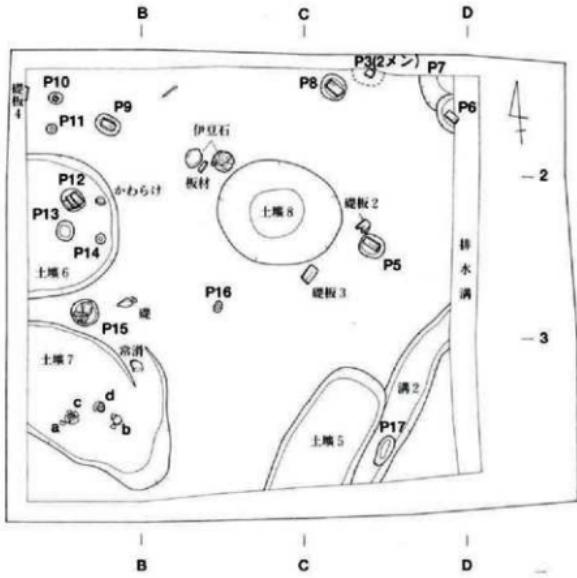
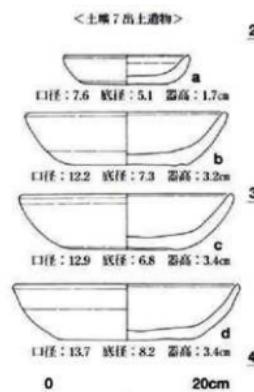


図5 二面土壤1・2・3



<三面・四面の柱穴・縦板>

		柱穴	GL深度	海抜高
P.4	○	-14.2cm	5.49m	
P.5	○	-23.7cm	5.22m	
P.6	○	-8.1cm	5.38m	
P.7	-	-25.8cm	5.21m	
P.8	○	-12.7cm	5.30m	
P.9	○	-5.8cm	5.41m	
P.10	柱穴	17cm		
P.11	柱穴			
P.12	○	-8.3cm	5.42m	
P.13	-	-20.0cm	5.29m	
P.14	柱穴			
P.15	(焼)	-22.0cm	5.27m	
P.16	柱穴			
P.17	直み?			
P.18	(P.8)			
P.19	○	-11.6cm	5.34m	
P.20	○	-1.5cm	5.28m	
P.21	○	-7.2cm	5.33m	
P.22	-	(振りすぎ)		
P.23	-	(振りすぎ)		
P.24	-	(振りすぎ)		
P.25	○	-16.5cm	5.30m	
P.26	柱穴			
P.27	-	-40.0cm	5.00m	
(三)	縦板1	+ 8.0cm	5.38m	
(三)	縦板2	+ 8.7cm	5.33m	
(一)	縦板3	+ 11cm	5.40m	
(一)	縦板4	+ 9.0cm	5.58m	※一面で確認
(四)	縦板5	+ 45cm	5.25m	
(一)	縦板6	+ 68cm	5.27m	※三面で確認

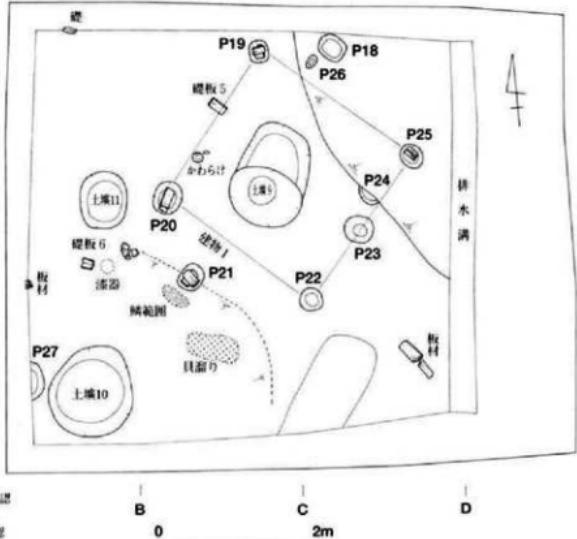


図6 三面・四面全体図

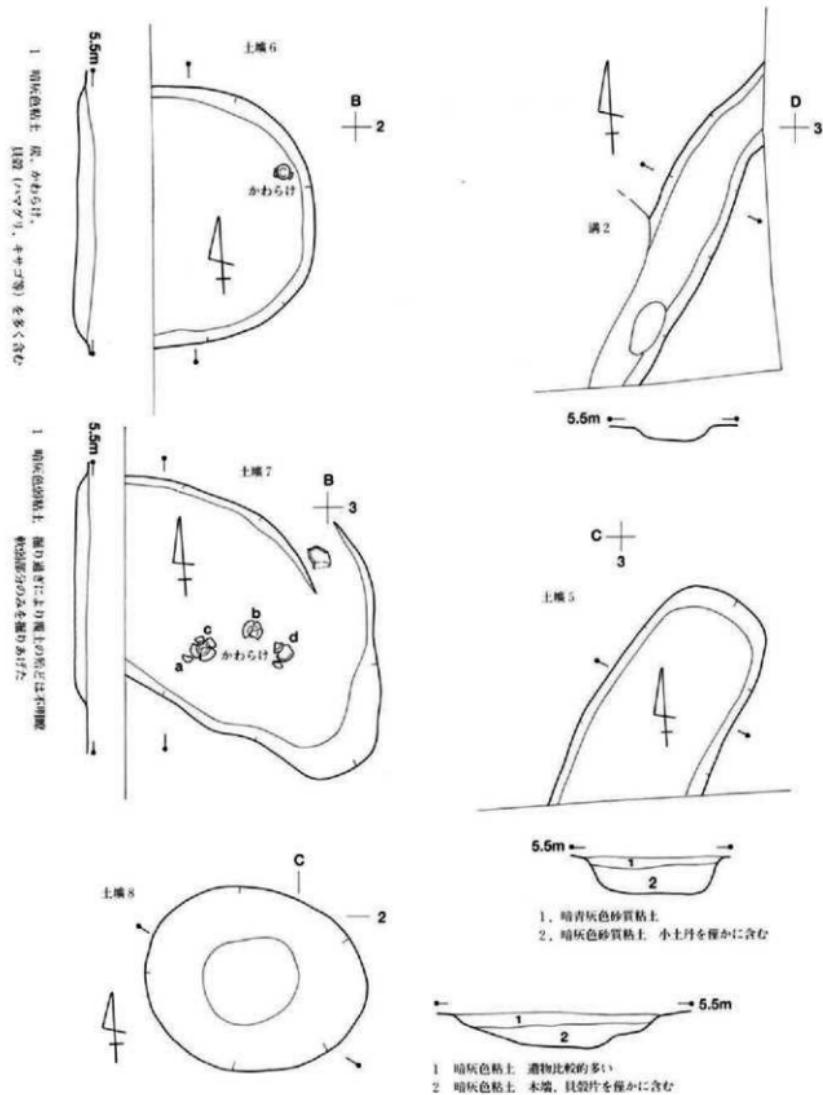


図7 三面溝2・土塁5・6・7・8

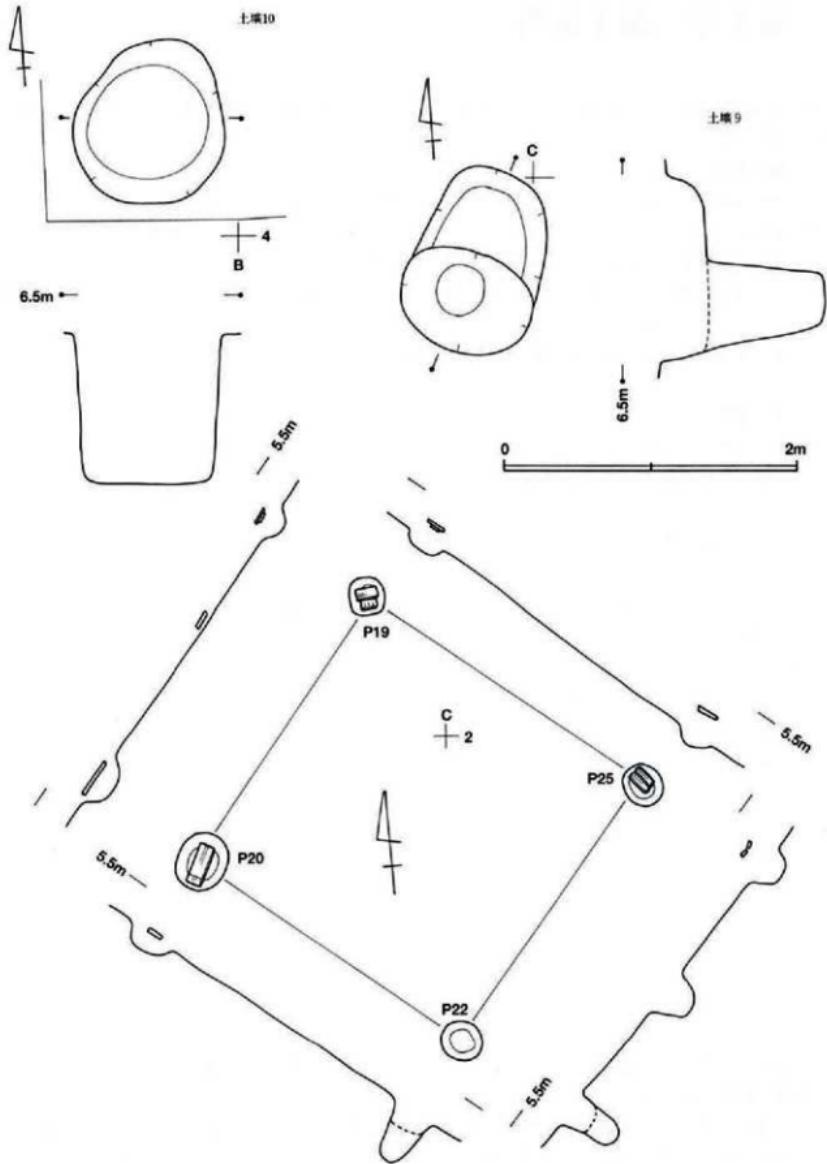


図8 四面土壤9・10・建物1

## 第3章 出土遺物

出土遺物は整理箱にして6箱であった。測図できた遺物の説明と同じ遺構・層序から出土した遺物の内訳(破片点数)を記しておく。

### 1. 一面の遺物

近世以降の層位から出土した遺物で直接一面に帰属するものはない。すべて混入品である。1~6は近代の畑耕作土(1層)、7~9は宝永火山灰包含層(3層)、10~16は近世の水田耕作土(4層)の上面に部分的に堆積する貝殻混じりの砂層から出土した遺物である。

いずれも小片(図9-1~16)であり詳細は省く。かわらけ皿(1・2・7・10・11)、瀬戸(3は鉢皿、8・12・13は折縁皿)、常滑捏ね鉢(5)、山茶碗窯捏ね鉢(4・15)、鉄釘(6)、磨り常滑(9)、砥石(16)がある。なお、瀬戸描り鉢(14)は17世紀の大窯製品であろう。

### 2. 二面の遺物

土壤1(図9-17~39) 17~28はかわらけ皿(24は完形)、29は白磁口禿皿、30~32は瀬戸(30~31は入子皿、32は鉢皿)、33~35は常滑捏ね鉢、36は土製品(土器質手焙り)、37は鉄釘、38は糞石、39は土師器器台(古墳時代前期、混入品)である。

出土遺物の内訳(破片点数)は、かわらけ皿(大26点/小24点)、船載品(青磁1点/白磁1点)、瀬戸(皿1点/不明2点)、常滑(捏ね鉢4/壺甕24点)、山茶碗窯(捏ね鉢4点)、瓦(平2点)、土製品(手焙り5点)、金属製品(鉄釘1点)、木製品(漆器1点)、自然遺物(鳥獸魚骨8点/糞石1点)。

土壤2(図9-40~48) 40~44はかわらけ皿(44は完形)、45は瀬戸入子皿、46は山茶碗窯捏ね鉢、47は常滑甕、48は平瓦である。

出土遺物の内訳(破片点数)は、かわらけ皿(大48点/小9点)、船載品(青磁1点)、瀬戸(皿1点)、常滑(壺甕19点)、山茶碗窯(捏ね鉢1点)、瓦(平1点)、土製品(手焙り1点)、自然遺物(鳥獸魚骨4点/種子1点)。

土壤4(図9-49~54) 49~51はかわらけ皿、52~53は山茶碗窯捏ね鉢、54は紡錘車(滑石製、転用品)であろうか。

出土遺物の内訳(破片点数)は、かわらけ皿(大84点/小15点)、常滑(壺甕2点)、山茶碗窯(捏ね鉢2点)、土製品(輪羽口1点)、石製品(紡錘車1点)、自然遺物(鳥獸魚骨3点)。

ピット1(図9-55~61) 55~59はかわらけ皿(55と57は略完形)、58は山茶碗窯捏ね鉢、61は常滑甕である。

出土遺物の内訳(破片点数)は、かわらけ皿(大4点/小6点)、常滑(壺甕1点)、渥美(壺甕2点)、山茶碗窯(捏ね鉢1点)。

ピット2(図9-62) 62はかわらけ皿。

出土遺物の内訳(破片点数)は、かわらけ皿(大2点/小1点)、船載品(青磁1点)、常滑(壺甕2点)。

包含層(図10-63~145) 63~87はかわらけ皿、88~89は船載品(88は青磁碗、89は青白磁合子)、90~96は瀬戸(90~91は灰釉小壺、92は灰釉碗、93は鉢皿、94~96は折縁皿)、97~110は山茶碗窯(100と101は碗、97~99と102~110は捏ね鉢)、111は備前描り鉢、112~113は魚住捏ね鉢、114~124は常滑(114~115と119~124は捏ね鉢、116~118は壺甕か)、125~127は土製品(125~126は瓦器質手焙

り、127は伊勢系甕鉢)、128~135は石製品(128~133は砥石、134と135は燧石)、144~145は須恵器壺の破片で混入品。

出土遺物の内訳(破片点数)は、かわらけ皿(1887点)、舶載品(青磁18点/白磁3点/青白磁3点/褐釉1点)、瀬戸(44点)、常滑(捏ね鉢23点/壺甕431点)、渥美(鉢1点/壺甕36点)、山茶碗窯(碗5点/捏ね鉢60点)、備前(播り鉢3点)、魚住(捏ね鉢2点)、瓦(1点)、土製品(手焼り34点/鉢釜2点)、金属製品(鉄釘19点)、石製品(石鍋1点/硯3点/砥石7点/燧石2点)、木製品(漆皿1点)、古代(土師器1点/須恵器3点)、自然遺物(鳥獸魚骨数点)、貝殻(アカニシ2点/サザエ2点)。なお、かわらけ皿は数量、瀬戸は器種不明が多いため細分できなかった。

### 3. 三面の遺物

土壤5(図11-146~150) 146~148はかわらけ皿、149は山茶碗窯捏ね鉢、150は常滑壺甕の小片である。

出土遺物の内訳(破片点数)は、かわらけ皿(大17点/小7点)、瀬戸(1点)、常滑(壺甕7点)、渥美(壺甕1点)、山茶碗窯(捏ね鉢1点)。

土壤6(図11-157~169) 157~168はかわらけ皿(165は内面に墨書、166は手捏ね整形)、169は青磁碗である。

出土遺物の内訳(破片点数)は、かわらけ皿(大81点/小16点/手捏ね3点)、舶載品(青磁2点)、常滑(壺甕2点)、山茶碗(捏ね鉢1点)、自然遺物(鳥獸魚骨1点)、貝殻(アカニシ2点/サザエ1点)。

土壤7(図11-170~176) 170~171はかわらけ皿(17は手捏ね整形)、172は白磁口禿皿、173は瀬戸鉢皿、174は常滑甕、176は瓦器質手焼き。175は須恵器の壺蓋で混入品である。

出土遺物の内訳(破片点数)は、かわらけ皿(大28点/小7点/手捏ね3点)、舶載品(白磁1点)。瀬戸(不明2点)、常滑(壺甕15点)、山茶碗(捏ね鉢1点)、土製品(手焼り1点)、自然遺物(鳥獸魚骨1点/種子1点)、貝殻(アカニシ1点)、古代(須恵器1点)。

土壤8(図11-154~156) 154~155はかわらけ皿、156は土鍤である。

出土遺物の内訳(破片点数)は、かわらけ皿(大36点/小6点)、常滑(壺甕1点)、渥美(壺甕1点)、土製品(土鍤1点)、木製品(漆皿1点)、自然遺物(種子3点)、貝殻(ハマグリ1点)。

包含層(図11-177~179) 177~178はかわらけ皿、189は瀬戸鉢皿、190~192

は常滑(192は捏ね鉢、190~191は壺甕)、193~194は山茶碗窯捏ね鉢、195は渥美壺甕、196は魚住捏ね鉢、197は至道元宝(初鑄995年、草書)、198~199は須恵器の壺甕類で混入品。

出土遺物の内訳(破片点数)は、かわらけ皿(大304点/小51点/手捏ね5点)、舶載品(青磁1点/白磁1点/青白磁3点)、瀬戸(不明2点)、常滑(捏ね鉢2点/壺甕37点)、渥美(壺甕8点)、山茶碗窯(捏ね鉢7点)、魚住(捏ね鉢1点)、土製品(手焼り1点)、金属製品(銅錢1点)、自然遺物(鳥獸魚骨8点)、貝殻(アカニシ2点)、古代(須恵器2点)。

### 4. 四面の遺物

生活面直上(図12-200~201) 200~201はかわらけ皿(手捏ね整形、200は完形品)。

土壤9(図12-202~206) 202~205は木片(203と204は箸)、上層出土。206は手捏ね整形のかわらけ皿、下層出土。

出土遺物の内訳(破片点数)は、かわらけ皿(手捏ね1点)、木製品(箸3点/折敷片5点/竹および炭化材数点)、自然遺物(鳥獸魚骨2点)、貝殻(アカニシ7点/アワビ1点/キサゴ65点/サザエ2点)

点／バティラ 1 点／サルボウ 1 点／ハマグリ 3 点)。

**土壌10** (図12-207~212) 207~209はかわらけ皿 (208のみ糸切り底)、211は箸、212は弓の形代であろうか、曲がった樹枝の両端を刻み、引 (ゆはず) 部分を作り出している。

出土遺物の内訳 (破片点数) は、かわらけ皿 (糸引き 1 点／手捏ね 17 点)、舶載品 (青磁 1 点)、木製品 (建築部材 ? 3 点／形代 1 点)、自然遺物 (鳥獸魚骨 5 点)、貝殻 (アカニシ 5 点／キサゴ 70 点／タマキビ類 3 点／サザエ 2 点／ツメタガイ 1 点／バイ 1 点／アサリ 2 点／ハマグリ 5 点)、古代 (土師器 1 点／須恵器 1 点)。

**ピット27** (図12-213~236) 213はかわらけ皿、214~236は箸あるいはチユウ木の可能性ある木片である。多くは端部を欠損し、長さは 12~16cm に集中している。

出土遺物の内訳 (破片点数) は、かわらけ皿 (大 1 点)、木製品 (チユウ木 ? 30 点)。

**包含層** (図13-237~252) 237~247はかわらけ皿 (241~244 と 247 は手捏ね整形)、248は渥美甕、249~251は常滑壺甕類の口縁部、252は土師器甕である。

出土遺物の内訳 (破片点数) は、かわらけ皿 (大 86 点／小 12 点／手捏ね 30 点)、舶載品 (青磁 2 点)、常滑 (甕甕 16 点)、渥美 (甕甕 2 点)、山茶碗窯 (捏ね鉢 1 点)、木製品 (建築部材 ? 4 点、焼け焦げたもの 3 点含む)、自然遺物 (鳥獸魚骨 4 点)、貝殻 (アカニシ 3 点／キサゴ 2 点／ハマグリ 2 点)、古代 (土師器 2 点／須恵器 4 点)。

**生活面下部** (図13-253~256) 四面とした 7 層 (図 2 参照) を除去し黒褐色粘土の B 層上面まで掘り下げた際に出土した遺物である。253~254はかわらけ皿 (254 は手捏ね整形)、255は土師器甕であろうかよく判らない。256は輕石、平坦面は使用による摩擦か不明である。

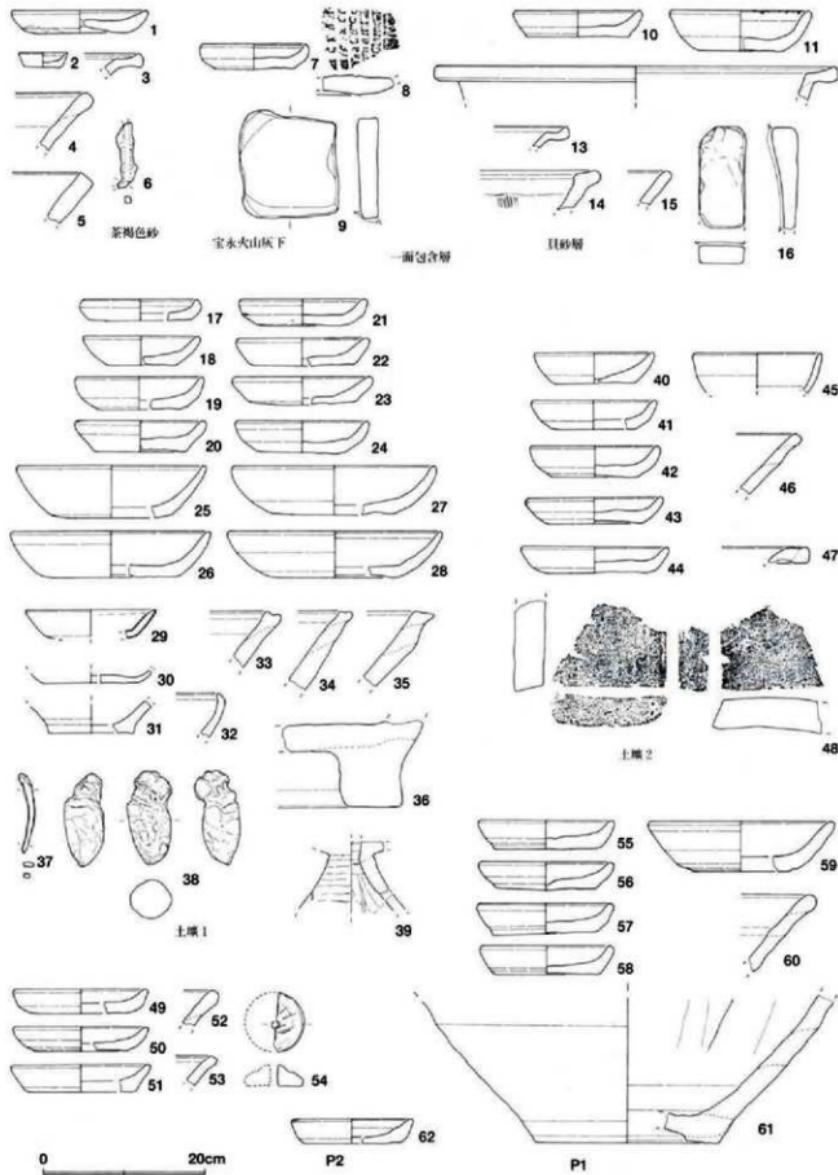


図9 一面包含層・二面造構の遺物

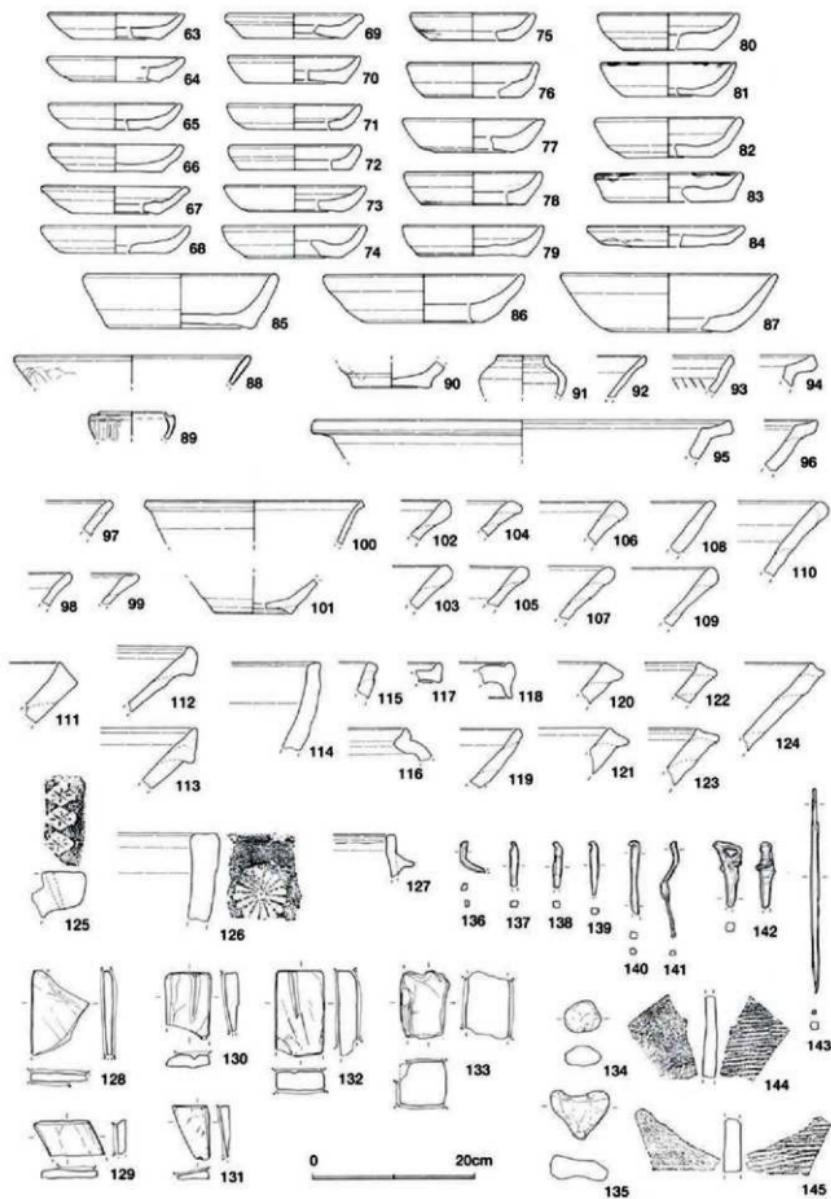


図10 二面包含層の遺物

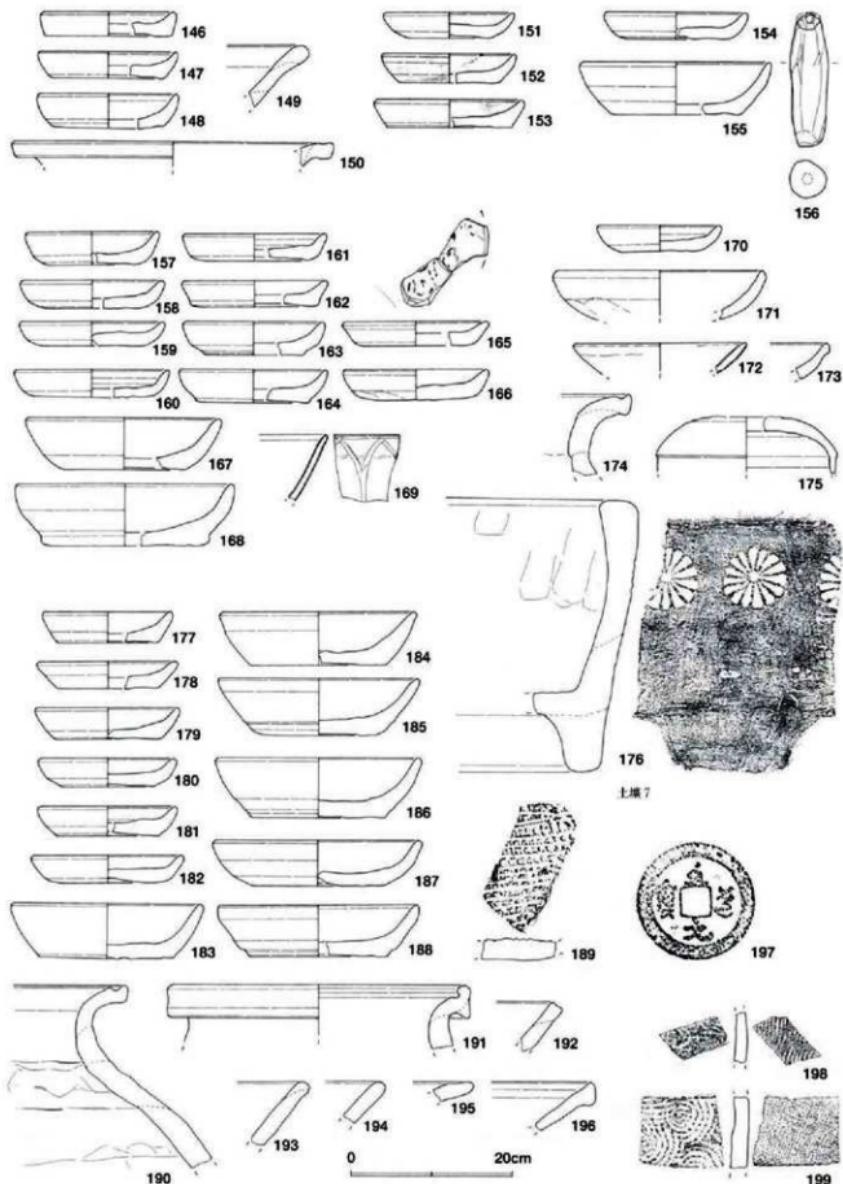


図11 三面発掘・包含層の遺物

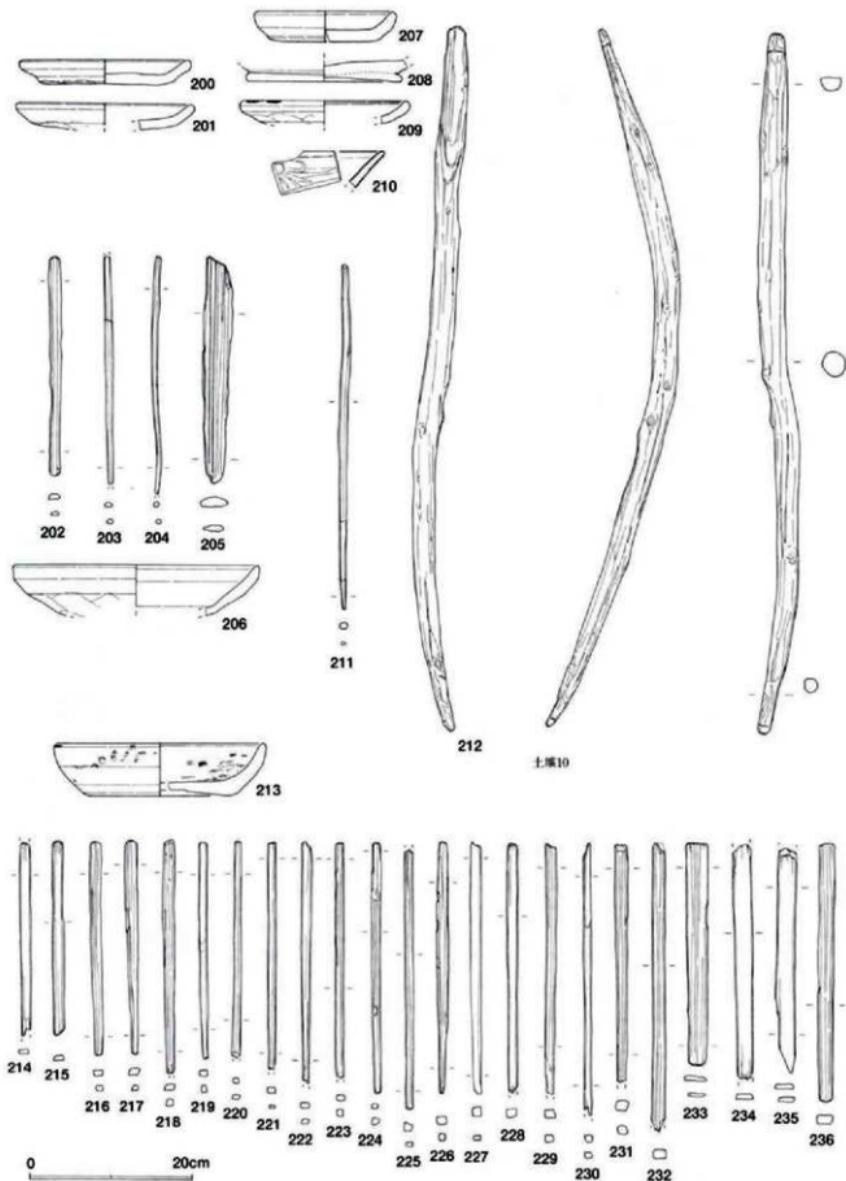


図12 四面造構の遺物

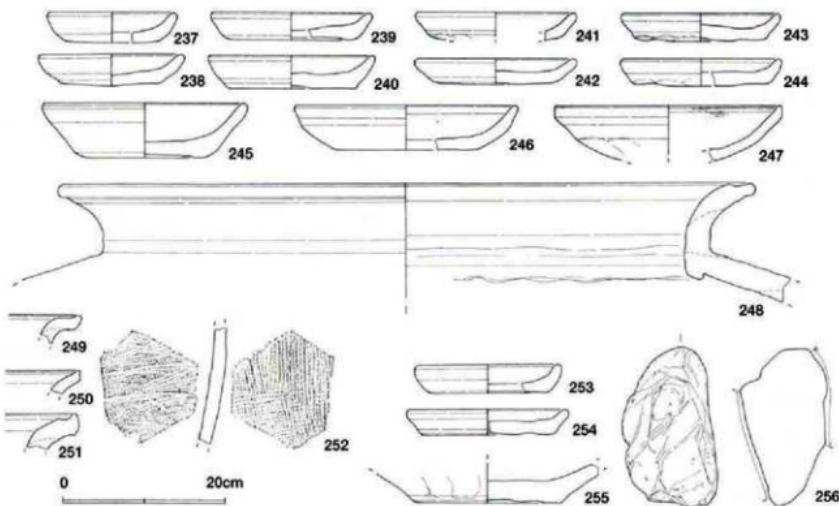


図13 四面包含層・生活面下部の遺物

## 第4章 まとめ

### 1. 出土遺物の特徴

本地点から出土した遺物は整理箱にして6箱分である。鎌倉市街地や海岸砂丘中央部に立地する遺跡と比べればはるかに少量であり、内容的にも種類の乏しいものであった。

遺物は地表下1.5~1.8mの中世層に集中し、接合不能な破片が圧倒的多数を占めている。種別ではかわらけ皿が最も多く、次いで常滑の甕や山茶碗窓の捏ね鉢が多い点は鎌倉の中世遺跡に通有であるが、青磁盤・白磁盤といった舶載器や鉢皿・折縁鉢などの瀬戸製品があまり見られない点に市街地や砂丘の遺跡と異なる特徴がある。

なお、特筆すべき遺物に土壙1出土の糞石がある。おそらく小動物と思われる直径2.5×長さ6.0cmの小振りな糞であるが、類例が少ないため当時の環境を知る貴重な資料となろう。

### 2. 遺跡の年代と性格

一面は宝永四年（1707年）の富士火山灰降下後の生活面であるが、建物址は見つからず、生活中に必要な陶磁器類も出土しなかった。おそらく溝1は耕作地などの区画溝であろう。

二面から四面は大規模な整（盛）地が行なわれず生活が継続したため、時期差のある遺構群が重複して見つかった。しかし、遺構配置や切り合い関係を見ると、市街地や砂丘中央部の遺跡と比べて遺構密度は低いと言わざるを得ない。不整形土壙やピット、不明瞭な落ち込みを除いてこれら遺構群を整理するとおおむね次のようになる。

【建物址】建物を復元するには至らなかったが、掘立柱建物あるいは板廻い建物に伴うと考えられる礎板が見つかった。礎板上面の海拔高（図6）を参考とすれば、海拔5.50mを超える位置にある礎板は二面あるいはそれより上から掘り込まれた建物柱穴である可能性が高く、海拔5.20~5.40m付近にある礎板は二面あるいは三面の建物柱穴と考えられるため、少なくとも2棟の時期の異なる建物が存在したと推測できる。

【土壙】遺構の性格は不明であるが、ゴミ穴・便所・井戸などの用途が考えられる。平面形態から分類すれば、長方形（土壙1・2・5）と円形（土壙8・10）の他に隅丸方形（土壙9）がある。なお、長方形の土壙は近接した位置に主軸方向を同じくして掘られている点に特徴があり、同じ目的・用途で連続的に使用されていたことが判る。

二面から四面の遺構群は出土遺物から見ると14世紀前半から13世紀前半までの間に納まる。しかし、遺跡の主体は14世紀前半から13世紀後半にかけての時期にあり、確実に13世紀前半までさかのほる遺構は見つからなかった。

# 写 真 図 版



一面 全景（南から撮影）



二面 全景（南から撮影）

図版 2



二面 土壌 4 半截状況



二面 ピット 3、土層断面で検出した柱

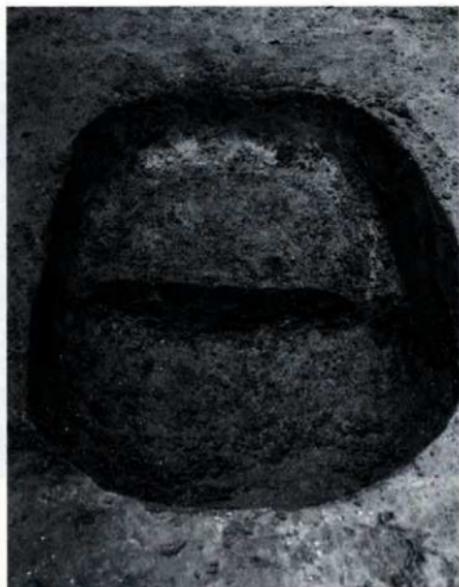


三面 全景 (南から撮影)



三面 土壠 5 (北から撮影)

図版 4

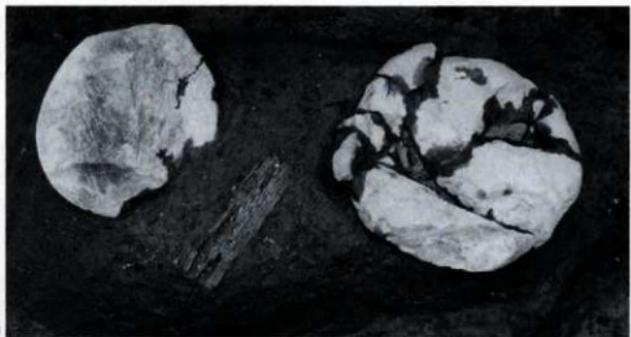


三面 土壌 8、中層から底部断面



三面 ピット17、硬板3・4（南から撮影）

図版 5



三面 土壌 8 西側  
伊豆石 2 石  
(南から撮影)



三面 土壌 6 底面  
ピット12硬板  
かわらけ皿

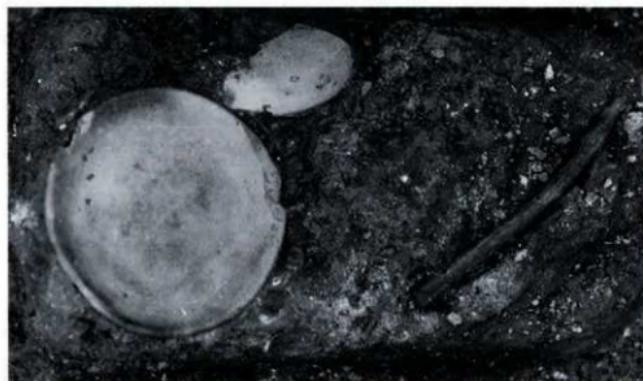


三面 土壌 7 上面  
かわらけ皿  
(図 6-a~d)

図版 6



四面 全景  
(南から撮影)



四面 生活面上  
かわらけ皿



四面 南西部出土  
漆器柄



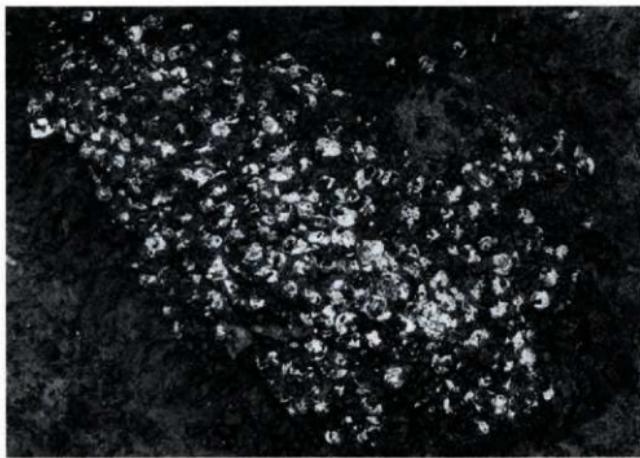
四面 土壌9 (東から撮影)



四面 土壌10 (東から撮影)



四面 炭層範囲、貝溜まり、鰐範囲



貝溜まり

图版 9



図版10



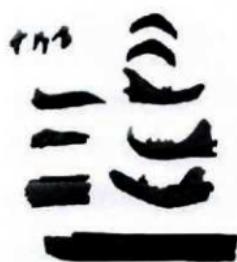
黒石



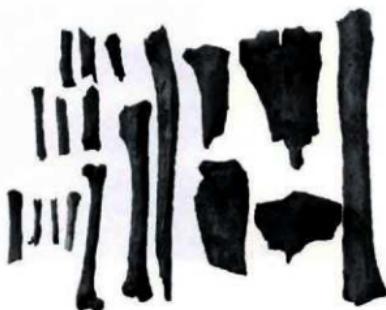
種子



貝だまり出土のナガラミ



歯牙・頸骨



四肢骨



脊椎



脊椎

## 報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうきほうこくしょ						
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
副書名	平成12年度発掘調査報告						
卷次	17						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	小林重子、菊川英政						
編集機関	鎌倉市教育委員会						
所在地	〒248-8686 神奈川県鎌倉市御成町18番10号						
発行年月日	西暦2001年3月						
ふりがな	ふりがな	コ一ド	北緯	東經	調査期間	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査原因
所取遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	° ° °			
下馬周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜	204	236	° ° °	19990817 19991005	38.5	個人専用住宅の建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
下馬周辺遺跡	中世都市遺跡	13C後半 14C前半	溝 土壙 建物址	かわらけ皿 常滑・瀬戸 など6箱	糞石の出土		

こめまち いせき  
米町遺跡 (No.245)

大町二丁目2313番15地点

## 例　　言

1. 本報は神奈川県鎌倉市大町二丁目2313番15に所在する米町遺跡の発掘調査報告書である。

2. 本調査は個人専用住宅建設工事に伴う埋蔵文化財の事前発掘調査として実施した。

3. 調査期間は平成11年9月6日～10月23日である。

4. 調査体制は以下の通りである。

調査主体　鎌倉市教育委員会

調査担当　瀬田哲夫

調査員　　条健一

作業員　　(社) 鎌倉市シルバー人材センター

5. 資料整理及び報告書作成は瀬田、石元道子が行った。

6. 本報に使用した写真は遺構を条が、遺物を瀬田が撮影し、本報の執筆、編集は瀬田が行った。

7. 発掘調査及び出土品整理にあたっては、次の諸氏に御教示を賜った。

瀬戸窯製品分類　　藤沢良祐(瀬戸市埋蔵文化財センター)

貿易陶磁分類　　手塚直樹(鎌倉考古学研究所)

動物骨分類　　宗臺富貴子(鎌倉考古学研究所)

石材(砥石・硯)分類　　汐見一夫(鎌倉考古学研究所)

9. 本報の凡例は以下の通りである。

・図版縮尺　　遺構　1/40

　　全体図　1/200

　　遺物　1/3、1/1

・遺構図版　　水系高は海拔標高値を示す。

・遺物図版　　←→は使用痕の範囲、···は釉薬の範囲を示す。

　　油煙の範囲は黒塗り表示である。

10. 本報告に関わる出土品等の記録は一括して鎌倉市教育委員会が保管している。

## 目次 本文目次

第1章 遺跡概観	243
第1節 遺跡の立地	243
第2節 調査経過	246
第3節 堆積土層	246
第2章 検出した遺構と遺物	248
第1節 第1面	248
第2節 第2面	249
第3節 第3面	250
第4節 第4面	254
第5節 第5面	256
第6節 第6面	258
第7節 第7面	265
第8節 第8面	267
第9節 岩盤確認トレンチ	268
第3章 まとめ	271

## 挿図目次

図1 調査地点位置図	244	図15 第5面出土遺物	257
図2 調査地点周辺図	245	図16 第6面	259
図3 グリット割付図	246	図17 第6面出土遺物(1)	260
図4 堆積土層図	247	図18 第6面出土遺物(2)	261
図5 第1面	248	図19 溝1出土遺物	261
図6 第1面出土遺物	248	図20 溝6出土遺物	263
図7 第2面	249	図21 溝8出土遺物	264
図8 第2面出土遺物	249	図22 第7面	265
図9 第3面	250	図23 溝2出土遺物	265
図10 第3面遺構出土遺物	250	図24 第7面出土遺物	266
図11 第3面出土遺物	252	図25 第8面	267
図12 第4面	253	図26 溝4出土遺物	267
図13 第4面出土遺物	255	図27 岩盤面確認トレンチ	268
図14 第5面	256	図28 第8面～岩盤面出土遺物	269

## 図 版 目 次

図版 1 1.西区第1面（北から）.....	275	7.西区第6面溝1（北から）.....	276
2.東区第1面（北から）.....	275	8.西区第6面溝1（南から）.....	276
3.西区第2面（北から）.....	275	図版 3 1.西区第7面溝2・3（西から）.....	277
4.東区第2面（北から）.....	275	2.西区第7面溝2・3（南から）.....	277
5.西区第3面（北から）.....	275	3.西区第8面溝4（西から）.....	277
6.東区第3面（東から）.....	275	4.西区第8面溝4（北から）.....	277
7.西区第4面（北から）.....	275	5.西区岩盤トレンチ（南から）.....	277
8.東区第4面（東から）.....	275	6.東区東壁セクション（西から）.....	277
図版 2 1.東区第5面溝5（東から）.....	276	7.東区調査終了状況（南から）.....	277
2.東区第5面溝5（北東から）.....	276	8.東区岩盤トレンチ（西から）.....	277
3.東区第6面溝6・7・8（東から）.....	276	図版 4 出土遺物（1）.....	278
4.東区第6面溝6・7・8（北から）.....	276	図版 5 出土遺物（2）.....	279
5.東区第6面溝6・7（南から）.....	276	図版 6 出土遺物（3）.....	280
6.西区第6面溝1（西から）.....	276	図版 7 出土遺物（4）.....	281

## 表 目 次

表1 ピット一覧表.....	270	表3 遺物計数表.....	272
表2 土坑一覧表.....	270		

# 第1章 遺跡概観

## 第1節 遺跡の立地 (Fig.1・2)

本調査地（地点1）は市内中心部から名越方面へ向かう国道134号線の南側、大町四ッ角から南東へ約50mの距離にある逆川の東岸に立地している。逆川はその源流を名越ヶ谷に発し、南流した後、谷の開口部で西に向きを変える。川はさらに本遺跡地の約60m南で緩やかに北上し、逆川橋を過ぎたところで大きく流れを西に変え、魚町橋を過ぎ、徐々に南に向きを変え上河原橋付近で滑川に合流する。本遺跡は逆川橋と魚町橋との間の逆川右岸、川が東側にやや突出した東岸に位置している。現在の地番は鎌倉市大町二丁目2313番15である。

本遺跡地は台帳の上では米町遺跡（No.245）の範囲に含まれている。文献資料等から「米町」の範囲は若宮大路と大町四ッ角との間、延命寺橋の東側の大町大路沿いと考えられ、大町四ッ角の東は「魚町」と指摘されている（註1）。米町は殺町とも記され、建長三年（1251）、及び文永二年（1265）に鎌倉中で商売を営んでもよい町屋免許地のひとつに挙げられ、活発な商業活動が展開された地域と考えられる。

遺跡地周辺において実施された発掘調査について、以下に記していきたい。

大町二丁目933番地点（地点2）では昭和63年に約330m<sup>2</sup>の調査が行われ、国庫補助事業70m<sup>2</sup>の報告が為されている。遺構検出は中世基盤層である黒褐色土上面で行われ、柱穴140口以上、土坑16基、井戸2基を検出している。井戸からは波紋台を形成する岩盤が検出され、その上面の海拔は1.9～2.0mである（註2）。図示された遺物はいずれも13世紀代のものと考えられる。

大町二丁目2315番外地点（地点3）では平成6年に約100m<sup>2</sup>の調査が行われ、掘立柱建物、柱穴列、土坑、据壇遺構、礫敷遺構、集石遺構、井戸、溝等が検出されている。出土遺物では13世紀前半から15世紀頃までのものがみられ、「主体は13世紀中～後半にあり、鎌倉のもっとも繁栄していた時代に、この遺跡もまた盛行期にあった」としている。また、集石遺構や鉄滓、フイゴ羽口の出土量の多さから、遺跡の近くに製鉄関連施設の存在を推測している（註3）。

大町二丁目391番1地点（地点4）では平成8年に約140m<sup>2</sup>の調査が行われ、中世地山を形成する黄褐色砂質土上で方形竪穴建築址5棟、板張り建物1棟、井戸1基、土坑4基、及び多数の柱穴を検出した。出土遺物からは13世紀代から14世紀前半の年代が与えられている（註4）。

大町二丁目2338番1地点（地点5）では平成9～10年にかけて約690m<sup>2</sup>の調査が行われ、中世の生活面と、古代、近世の遺構群が確認されている。中世遺構としてはかわらけ溜り、据壇、柱穴列、欄列、溝、土坑、方形竪穴建築址、掘立柱建物址、井戸等が検出され、13世紀前半～14世紀初頭頃の遺構は溝、及び欄列により区画分割される。区画一辺の基本的尺度は12.5m（4尺強）前後を想定し、「屋敷地規模の区画」としている。14世紀中頃以降になるとこの区画は放棄され、中世最終段階には一辺6m前後の土丹区画を部分的に確認するにとどまり、「町屋規模の区画」へと移り変わる（註5）。

本遺跡と同一の敷地に位置する大町二丁目2312-4、10地点（地点6）では、平成10年12月14日～平成11年1月11日にかけて約111m<sup>2</sup>の調査が実施された。国道134号線側の北側の調査区からは近世の井戸、中世の道路面と方形竪穴建築址が、南側の調査区からは鎌倉石を用いた石組み溝、地覆石、及びかわらけ溜りが検出されている。「検出された道路が「大町大路」ならば鎌倉の街区を考える上で重要である。」と指摘されている（註6）。

また、本遺跡と逆川を挟んだ西側に立地する大町二丁目2308番1地点（地点7）において、平成11年

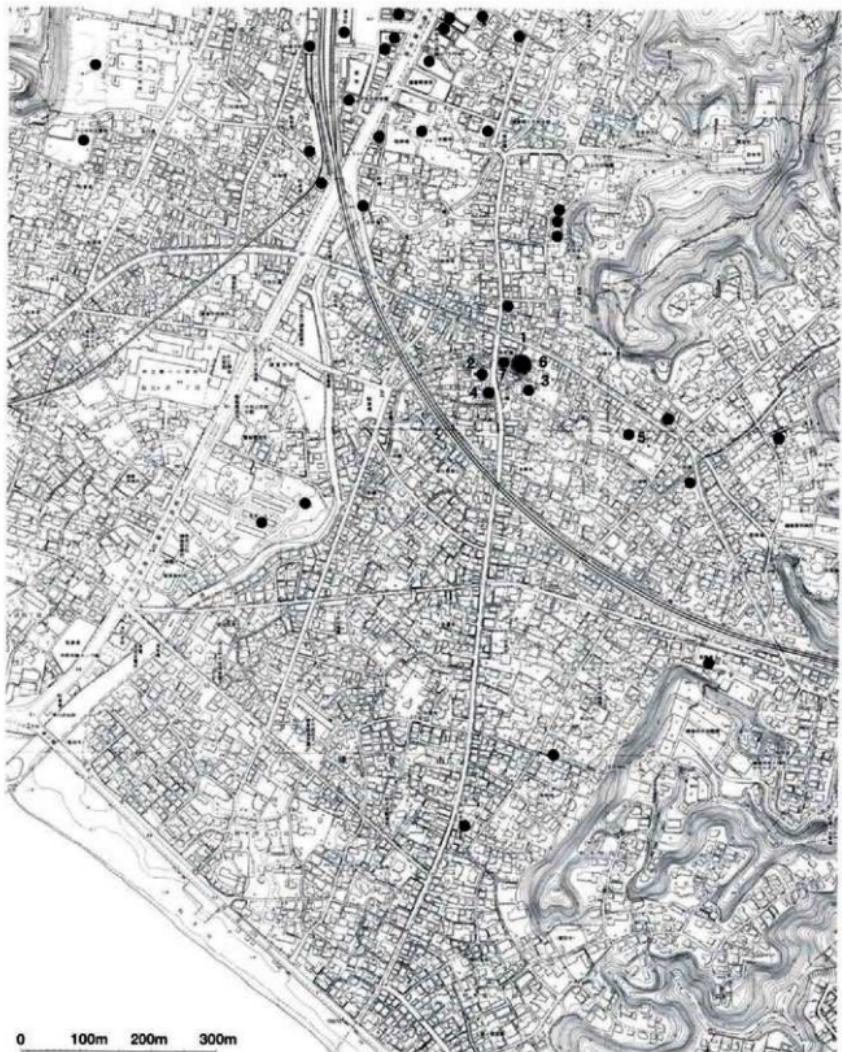


図1 調査地点位置図

12月6日～17日にかけて個人専用住宅建設に伴う事前調査として発掘調査が行われている。ここで概略を記していく。調査は敷地内に2m×2mのトレンチを6ヶ所設定し、現地表下2.5mまでを調査対象としたもので、面的な調査は不可能であり、堆積土層の観察に調査の主眼を置いた。現地表は海拔5.7m前後を測り、以下1.5～2.0mは近現代の盛土が堆積している。海拔3.1～3.4mで岩盤が検出され、岩盤上には20～30cm程の厚さで川砂が堆積している。検出されたのは河川の一部であり、逆川の埋没過程を示している。ここから出土した遺物は14世紀後半から15世紀代にかけてのものが主体であり、該期の遺構が周辺区域に存在すると考えられる（註7）。

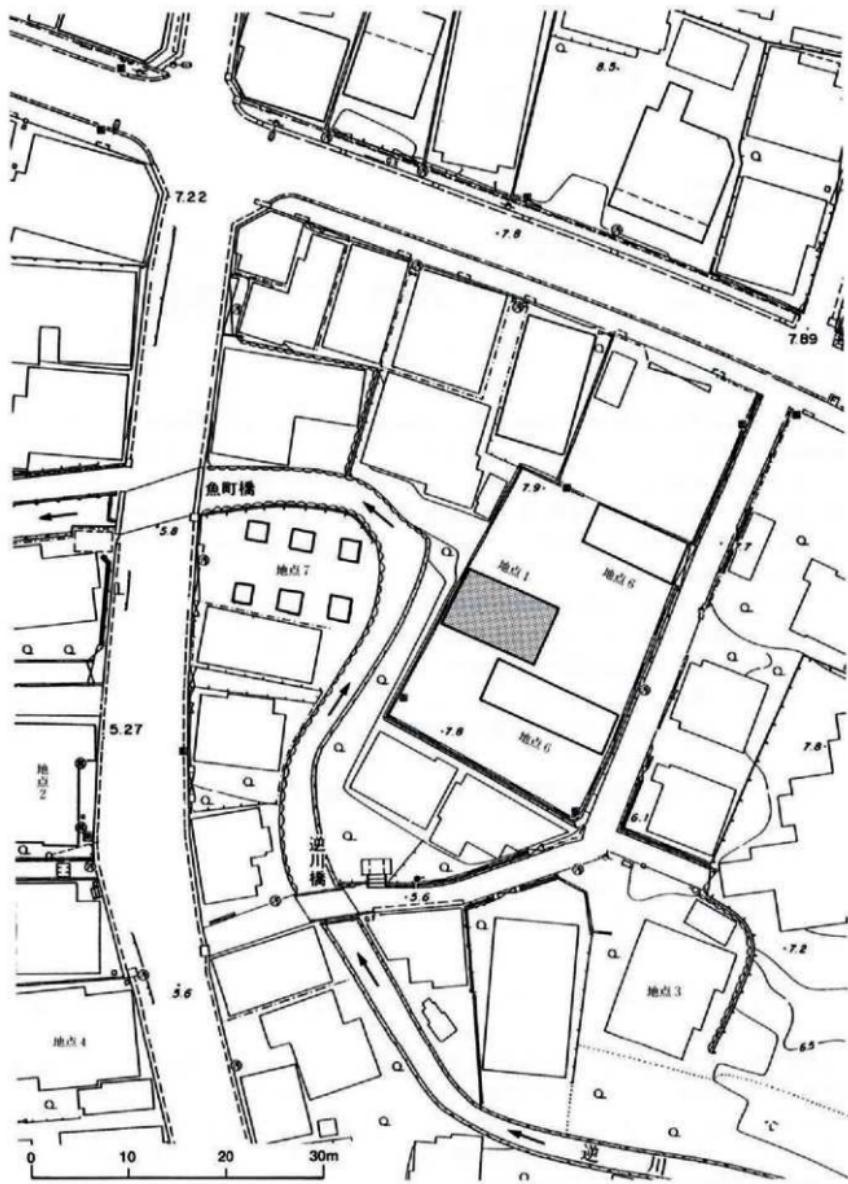


図2 調査地点周辺図

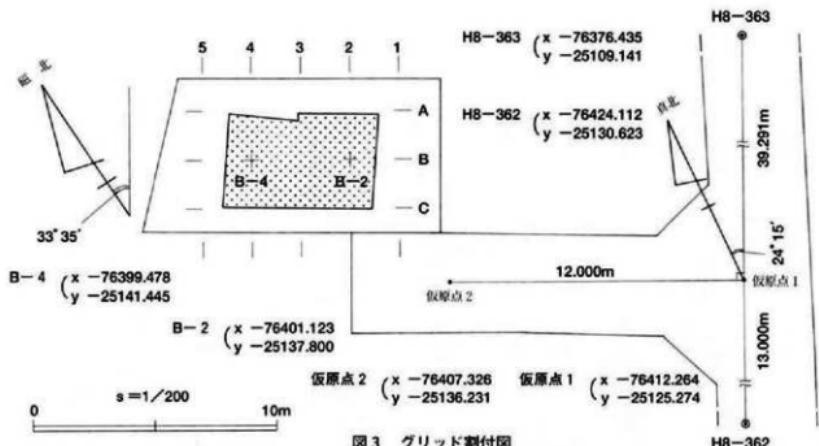


図3 グリッド割付図

## 第2節 調査の経過 (Fig.3)

本調査は鎌倉市大町二丁目2313番15地点における個人専用住宅建設に伴う事前調査として平成11年9月6日から10月23日にかけて実施された。調査面積は6m×4mの24m<sup>2</sup>であり、廃土処理等の都合から東・西に分割して作業を行った。現地表は海拔7.3m前後を測り、以下30cmは現代の盛土、その下は約60cmの厚さで宝永四年（1707）噴出の富士山火山灰が堆積している。調査はこの火山灰層までを重機により除去し、以下を人力により掘削した。検出されたのは鎌倉時代から近世にわたる遺構群であり、中世期のものは6時期を数える。

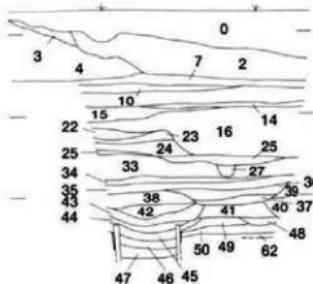
本遺跡で確認できた最古の遺構は13世紀中葉を中心とする遺物を含む東西方向の木組み溝であり、14世紀初頭までのあいだに4～5回の掘り直しが確認されている。その後14世紀中葉を中心とした時期には柱穴・土坑を主体とした遺構が検出され、多量のかわらけにより埋め立てられている。15世紀以降になると検出遺構は激減し、数口のピットのみとなる。

調査にあたり、測量用に仮原点1、2を設け、調査敷地内に2.0mの方眼を設定した。東西軸、及び南北軸には北から南へアルファベット（A～T）を、東から西へアラビア数字を付し、それぞれの方眼区画（グリッド）の呼称には北東角の軸線交点を充てた。この方眼基準点と国土座標系との関係を、鎌倉市四級基準点（H8-362、H8-363）を基に測量・算出したところ、B-2はX-76401.123、Y-25137.800、B-4はX-76399.478、Y-25141.445の国土座標を得ている。尚、グリッド南北軸は磁北に対して33° 35' 20''、真北に対して24° 15' 17'' 東に傾いている。また、標高の記載については、鎌倉市三級基準点であるNo53402よりレベル移動を行い、海拔レベルを使用している。

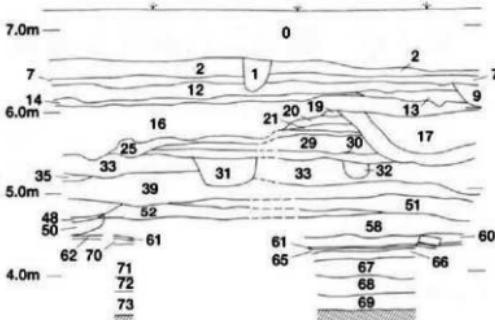
## 第3節 堆積土層 (Fig.4)

調査地は逆川が北上し、西へと流れを変える舌状に突出した右岸に立地している。魚町橋、逆川橋周辺は、国道134号線の大町四ツ角辺りから、南に向かい急激に低くなり、山麓平野から砂質低湿地へと移行する地形の変換点となっている。遺跡地の現地表は海拔7.3m前後を測り、逆川を挟んだ南、西隣と比較すると2.0m前後高くなっている。現地表下0.3～0.7mは現代の盛土で、その下には約0.3mの厚さで宝永四年（1707）噴出の富士山火山灰が堆積する。以下、遺構面として把握したのはFig.4に示した12層、16層、24・29層、33層、51層、58層、65層、66層の上面であり、8時期の遺構群を検出し、トレーニング調査により海拔3.45～3.58mで岩盤を確認している。

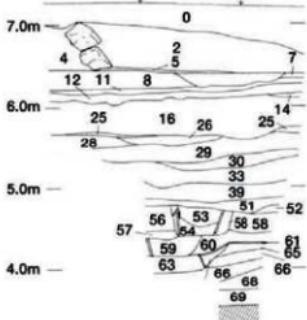
東区 東壁セクション



南壁セクション



西区 東壁セクション



0. 表土。現代盛土。

1. 褐色粘質土。ピット1覆土。

2. 宝永スコリア

3. 宝永スコリア(軽石)

4. 土丹層

5. 褐色粘質土。少量の土丹粒を含む。練り良好。

6. 褐色粘質土。少量の土丹粒を含む。

7. 灰褐色粘質土。1~2cmの大さの土丹粒を含む。

8. 褐色粘質土。1~5cmの大さの土丹粒を含む。土丹地業。

9. 褐色粘質土。少量の土丹粒を含む。

10. 褐色粘質土。土丹粒を全体に含み、下部に暗灰色砂が堆積。

11. 暗褐色粘質土。

12. 褐色粘質土。2~3cmの土丹粒を含む。第1面地業。

13. 灰褐色粘質土。シルト質。

14. 褐色粘質土。かわらけ粒子。土丹粒子を含む。

15. 褐色粘質土。少量の土丹粒を含む。

16. 暗褐色粘質土。多量のかわらけ、及び破片を含む。第2面。

17. 暗褐色粘質土。かわらけ片。土丹粒を含む。

18. 暗褐色粘質土。17層に比べ土丹粒混入多い。

19. 暗褐色粘質土。土丹粒、かわらけ粒を含む。

20. 暗褐色粘質土。1~5cmの大さの土丹粒混入少ない。

21. 暗褐色粘質土。15層に比べ土丹粒混入少ない。

22. 褐色粘質土。土丹粒を含む。

23. 褐色粘質土。褐色砂質土。土丹粒混入。

24. 褐色粘質土。2~5cmの大さの土丹粒混入。第3面。

25. 灰層。

26. 暗褐色粘質土。かわらけ片含む。土坑1。
27. 褐色粘質土。練り不易い。ピット17。
28. 暗褐色粘質土。1~3cmの大さの土丹粒を含む。
29. 暗褐色粘質土。炭粒、土丹粒を全体に含む。第3面。
30. 暗褐色粘質土。29層に比べ土丹粒混入多い。
31. 暗褐色粘質土。多量の土丹粒を含む。ピット14。
32. 暗褐色粘質土。多量の土丹粒を含む。ピット7。
33. 暗褐色粘質土。2~15cmの大さの土丹を含む。練り良好。第4面。
34. 褐色粘質土。土丹粒を含む。
35. 暗褐色粘質土。多量の炭を含み、全体に土丹粒を含む。
36. 灰褐色粘質土。有機物腐殖土。少量の土丹粒含む。
37. 明褐色粘質土。有機物腐殖土。
38. 暗褐色粘質土。土丹粒混入。
39. 暗褐色粘質土。1~5cmの大さの土丹を含む。
40. 黒褐色粘質土。5~15cmの大さの土丹混入。
41. 青黒褐色粘質土。全体に貝殻粒子を含む。
42. 青黒褐色粘質土。土丹粒を含み、練り良好。貝殻粒子含む。
43. 青黒褐色粘質土。42層に比べ土丹粒混入少ない。
44. 青黒褐色粘質土。
45. 明褐色粘質土。有機物腐殖土。
46. 青黒褐色粘質土。多量の炭を含み、練り不易い。
47. 青黒褐色粘質土。46層に比べの混入少ない。
48. 明褐色粘質土。有機物腐殖土。
49. 青黒褐色粘質土。少量の土丹を含み、練り不易い。
50. 青黒褐色粘質土。土丹を多量に含む。
51. 暗褐色粘質土。39層に比べ土丹粒混入少ない。第5面。
52. 暗褐色粘質土。少量の土丹粒を含み、練り良好。
53. 黑褐色粘質土。土丹粒を全体に含む。
54. 青黒褐色粘質土。全体に木片を含む。
55. 青黒褐色粘質土。少量の土丹粒を含む。
56. 青黒褐色粘質土。多量の土丹粒を含む。
57. 青黒褐色粘質土。多量の木片、土丹粒を含む。
58. 青黒褐色粘質土。2~10cmの大さの土丹を全体に含む。練り良好。第6面。
59. 青黒褐色粘質土。全体に土丹粒木片を含む。
60. 青黒褐色粘質土。58層に比べ土丹粒混入多い。
61. 灰層。
62. 青黒褐色粘質土。土丹粒混入。
63. 青黒褐色粘質土。ごく少量の土丹粒を含む。
64. 暗褐色粘質土。
65. 青黒褐色粘質土。若干の木片を含み、練りなし。第7面。
66. 青黒褐色粘質土。黒褐色砂質土混入。部分的に炭を含む。第8面。
67. 青黒褐色砂質土。貝殻片、木片を含む。
68. 青黒褐色砂質土。少量ではあるが、土丹粒、木片、土部片を含む。
69. 青黒褐色砂質土。
70. 暗褐色粘質土。
71. 暗褐色粘質土。有機物腐殖土。
72. 暗褐色粘質土。
73. 灰褐色粘質土。

図4 堆積土層図

## 第2章 検出した遺構と遺物

今回の調査では廃土処理等の関係から、調査範囲を東西に分割している。それを西区、東区と呼称し、逆川側の西区から調査を行い、現地調査終了後、整理作業の段階で両調査区の資料を合成している。本章では検出された遺構を第1面～第8面の8時期の遺構群としてまとめ、さらに岩盤面確認トレンドにおける調査結果を記載していく。尚、各面で検出されたピット、土坑の規模・覆土注記等は一覧表に示したので参照されたい。

### 第1節 第1面

#### a. 検出遺構

第1面の遺構は現地表下約0.8m、海拔6.40m前後で検出される2～3cm大の土丹粒子を含む暗褐色粘質土(12層)の上面において確認している。検出された遺構は2口のピット(ピット1・9)のみであり、開散とした検出状況といえる。B-2グリット検出のピット9覆土には宝永四年(1707)噴出の富士山火山灰が混入している。

#### b. 出土遺物

第1面からは14点の遺物が出土している。その内訳は肥前窯系の磁器染付け碗口縁部1点、瀬戸古窯の灰釉鉢口縁部1点、常滑窯の壺胴部4点、ロクロ成形かわらけ大皿の底部8点である。遺構からの出土遺物はない。

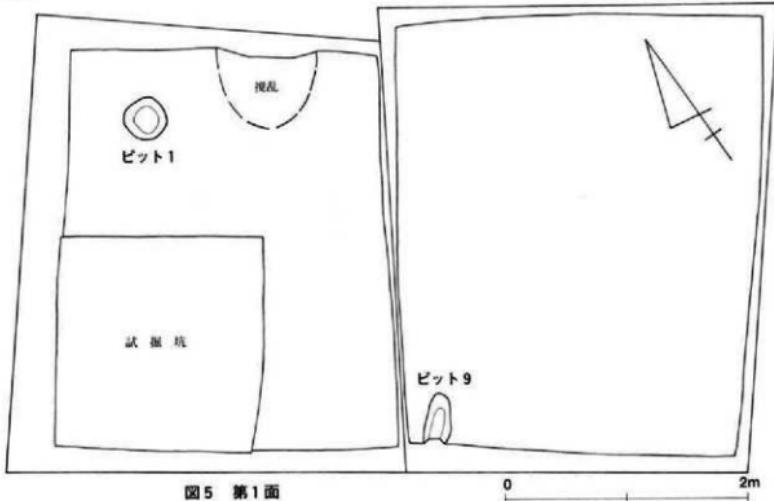


図5 第1面

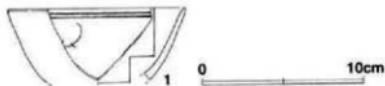


図6 第3面出土遺物

実測し得たのはFig.6-1に示した肥前窯系の磁器染付け碗口縁部である。復元口径10.9cmを測り、口縁外面に二重の圓線、体部に雪輪梅樹文を配する。

## 第2節 第2面

### a. 検出遺構

第2面の遺構は現地表下約1.2m、海拔6.00m前後で検出される多量のかわらけ、及びかわらけの破片を含むを含む暗褐色粘質土(16層)の上面において確認している。検出されたのはピット1口(ピット10)のみであり、第1面と同様に閑散とした検出状況といえる。

第2面の基盤層である16層は10~60cmの厚さで堆積し、多量のかわらけを含んでいる。調査区壁の土層観察によると、16層下面是南西部と北東部に緩い立ち上がりが確認されており、池のような大きな窪地をいっきに埋め立てたものであろうか。

### b. 出土遺物

第2面からは182点の遺物が出土している。その内訳は近代肥前窯系の磁器染付け碗口縁部2点、近世瀬戸・美濃窯の志野丸皿口縁部1点、近世美濃窯の灰釉丸皿口縁部1点、瀬戸古窯の灰釉器種不明製品口縁部1点、舶載品では龍泉窯系青磁鎮蓮弁文碗の口縁部1点、底部1点、白磁口兀皿の底部1点、常滑窯では斐の口縁部1点、胴部22点、底部1点、片口鉢の口縁部2点、山茶碗窯系の片口鉢口縁部1点、備前窯の插鉢口縁部1点、底部1点、ロクロ成形かわらけでは大皿の口縁部27点、底部76点、小皿の口縁部14点、底部28点である。遺構からの出土遺物はない。

実測し得たものはFig.8-1~3に示した。1は近世瀬戸・美濃窯の志野丸皿である。復元口径11.5cm、

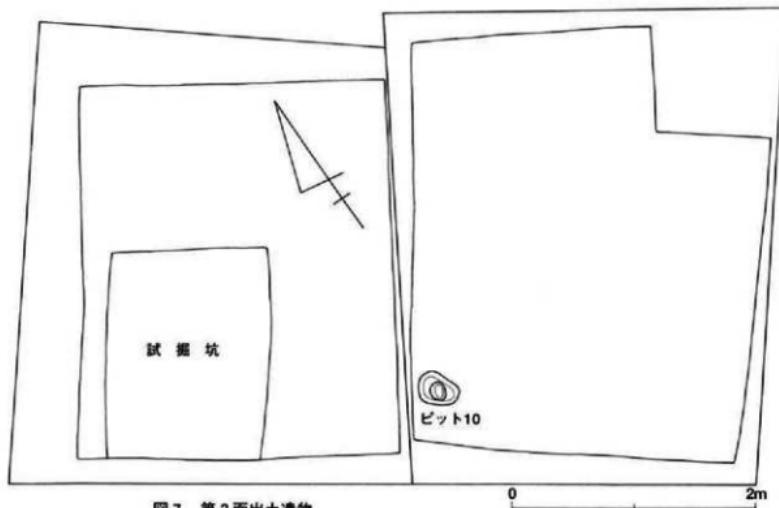


図7 第2面出土遺物

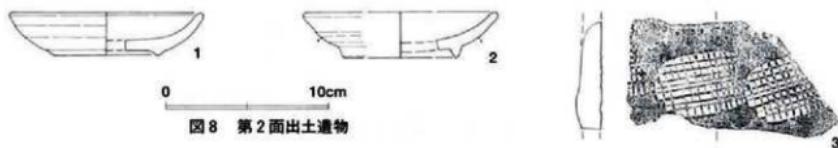


図8 第2面出土遺物

高台径6.4cm、器高2.6cmを測る。軸は長石軸で貫入多く、胎土は灰黒色を呈し、白色粒子を含む。2は近世美濃窯の灰釉丸皿である。復元口徑11.5cm、高台形6.8cm、器高2.8cmを測る。胎土は灰白色を呈し、白色粒子を含む。3は常滑窑の斐部である。外面に格子叩きの押印文を有する。器表は暗褐色、胎土は灰色を呈し、白色粒子に富む。

### 第3節 第3面

#### a. 検出遺構

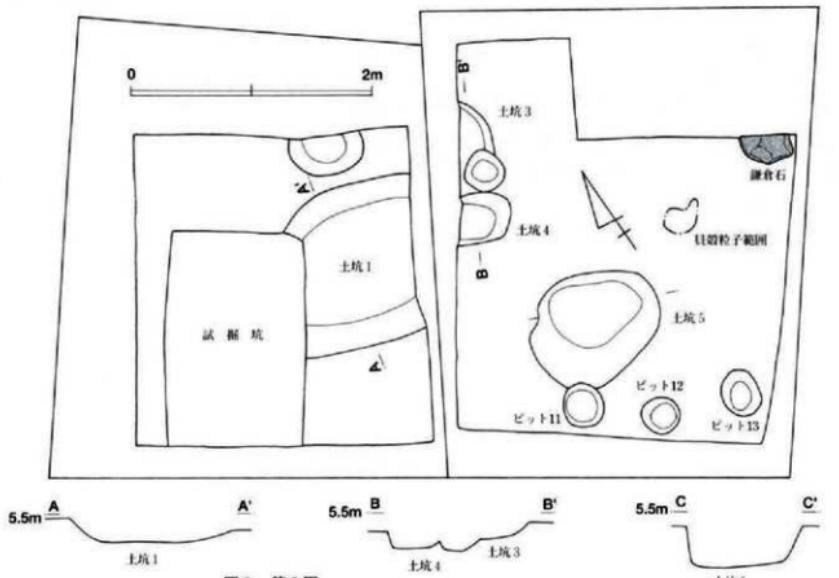


図9 第3面

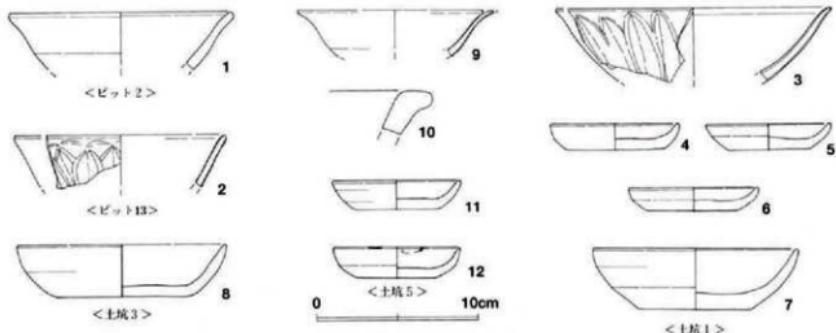


図10 第3面遺構出土遺物

第3面の遺構は現地表下約1.5m、海拔5.70m前後で検出される土丹粒子を含む褐色、或いは暗褐色粘質土(24層、29層)の上面において確認している。検出されたのはピット4口(ピット2・11・12・13)、土坑4基(土坑1・3・4・5)、礎石と考えられる鎌倉石1個、及び貝殻粒子の集中した範囲である。いずれも部分的な検出であり、性格等は不明である。A-1グリッドから検出された鎌倉石の上面は平坦で、海拔5.85mを測る。調査区の北、東外に展開する礎石建物の一部となろうか。第1面、第2面と比較すると遺構の濃密な展開が推測される。

#### b. 出土遺物

第3面からは1266点の遺物が出土しており、そのうち1189点は面出土、77点は遺構からの出土である。面出土遺物の内訳をみると、舶載品では龍泉窯系青磁蓮弁文碗の口縁部6点、体部7点、底部1点、龍泉窯系青磁無文碗の口縁部2点、底部1点、白磁碗の底部2点、白磁口元皿の口縁部6点、底部2点、白磁壺の胴部1点、青白磁梅瓶の底部1点、瀬戸古窯では灰釉四耳壺類の胴部10点、灰釉鉢皿の口縁部1点、灰釉折筋深皿の底部1点、入子の口縁部1点、常滑窯では甕の口縁部5点、胴部106点、底部1点、壺の口縁部1点、底部2点、片口鉢の口縁部6点、底部1点、山茶碗窯系の片口鉢では口縁部6点、体部3点、底部1点、土器質火鉢の底部1点、ロクロ成形かわらけでは大皿の口縁部318点、底部289点、小皿の口縁部266点、底部125点、フイゴの羽口3点、周縁に研磨痕を有する山茶碗窯系捏鉢の体部片1点、石製品では砥石1点、滑石製石鍋の口縁部1点、金属製品では銅錢1点、自然遺物ではイスの肋骨2点、ウシ・ウマの肋骨7点である。尚、ウシ・ウマの肋骨には刃物等による解体痕が認められる。

面出土遺物のうち、実測し得たものはFig.11-1~50に示した。1は龍泉窯系青磁蓮弁文碗で、復元口径16.8cmを測る。2は瀬戸古窯の灰釉鉢皿で、復元口径11.2cmを測る。体部内面上位には2条の沈線を有する。3は瀬戸古窯の入子である。口径4.9cm、底径3.6cm器高1.1cmを測り、外底面はヘラケヅリである。4~8は常滑窯の製品で、4・5が甕口縁部、6が甕胴部、7・8が片口鉢口縁部である。4・5ともにN字状の口縁を有し、縁帯幅は2.2cmを測る。6は外面に格子叩きの押印文を有する。7・8の口縁端部は角張り、中央部は小さく窪んでいる。9・10は山茶碗窯系の片口鉢口縁部である。10は周縁に研磨痕を有している。11~47はロクロ成形のかわらけである。11~18は大皿、19~42は小皿、43~45は極小皿であり、46~47は小皿の体部を意識的に打ち欠いたものと考えられる。以下、かわらけの法量を口径・底径・器高の順に記す。単位はcmである。11は11.7-7.3-3.1、12は11.7-7.0-3.4、13は12.0-7.7-2.8、14は12.2-7-0-3.5、15は12.7-8.0-3.3、16は12.6-8.3-3.7、17は13.1-7.6-3.9、18は12.7-7.6-4.1、19は7.2-5.8-1.6、20は8.4-6.0-1.7、21は7.1-5.3-1.9、22は6.8-4.8-1.6、23は6.8-5.1-1.6、24は7.2-5.0-1.4、25は7.6-5.3-1.6、26は7.6-5.3-1.6、27は7.7-5.4-1.6、28は7.4-5.3-1.8、29は7.4-5.0-1.9、30は7.6-5.2-1.7、31は7.5-4.8-1.8、32は7.7-4.6-1.8、33は7.8-5.3-1.8、34は7.8-5.7-1.8、35は7.8-5.3-2.0、36は7.8-5.5-1.9、37は7.2-4.3-2.2、38は7.2-4.6-2.2、39は7.2-4.6-2.0、40は7.4-4.3-2.4、41は7.4-4.5-2.4、42は7.7-4.6-2.3、43は3.3-2.8-0.8、44は3.8-2.9-0.8、45は3.8-2.6-1.1であり、46・47の底径は4.7cmを測る。48・49はフイゴの羽口である。48は残存長15.5cm、直径6.0~6.5cm、孔の径は2.0~2.5cmを測る。49は残存長16.0cm、直径5.5~6.5cm、孔の径は2.0~2.8cmを測る。50は北宋錢で真書の「皇宋通寶」である。直径2.4cm。1038年初鑄である。

遺構別に出土遺物の内訳をみると、ピット2からは常滑窯の甕胴部1点、山茶碗窯系の片口鉢底部1点、山茶碗の口縁部1点、ロクロ成形かわらけの大皿口縁部1点、底部3点が出土している。実測し得たのはFig.10-1の山茶碗である。胎土は灰色を呈し、長石、白色粒子を含む。復元口径13.6cmを測る。ピット11からは舶載の白磁口元皿口縁部1点、ロクロ成形かわらけの小皿底部2点が出土しているが、図

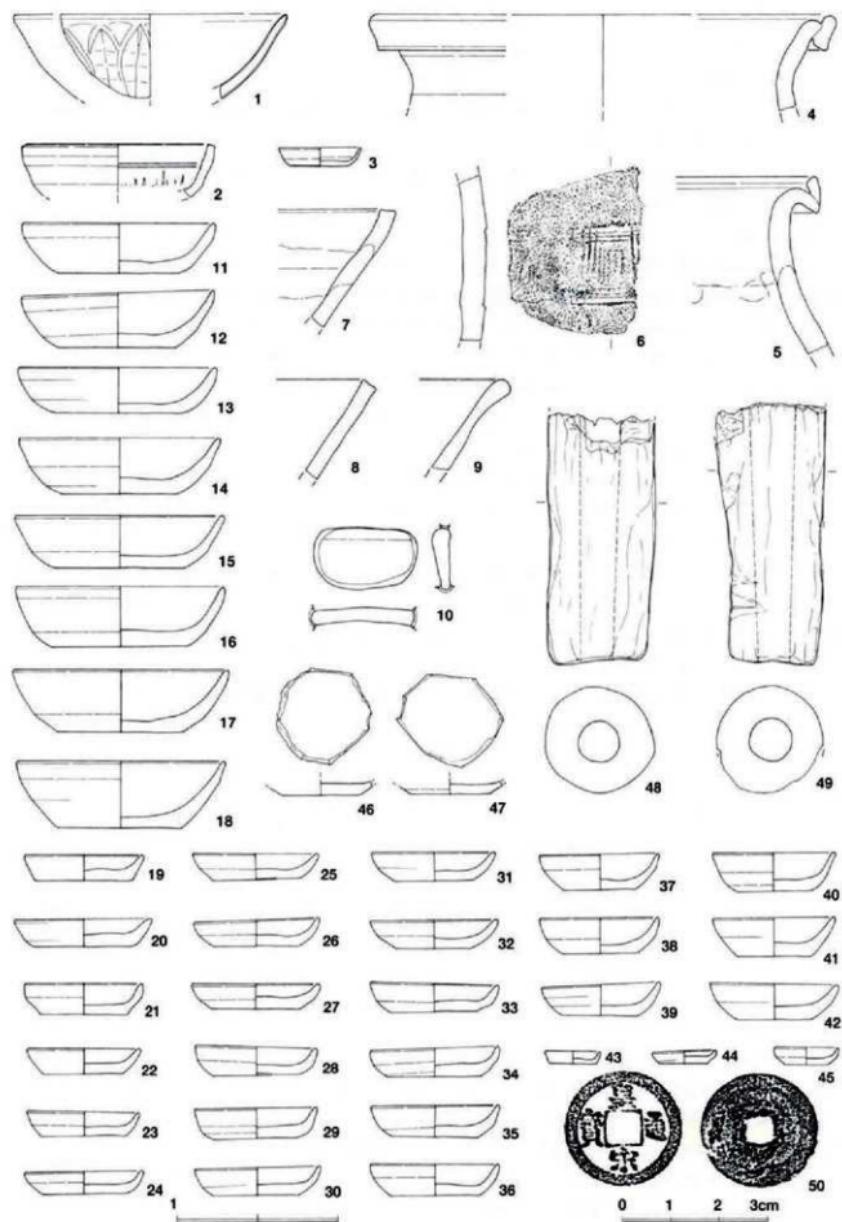


图11 第3面出土遗物

示できるものはない。ピット12からはロクロ成形かわらけの大皿底部4点が出土しているが、図示不可能である。ピット13からは龍泉窯系青磁蓮弁文碗の口縁部1点、常滑窯の壺胴部1点、ロクロ成形かわらけの大皿口縁部2点が出土している。実測し得たのはFig.10-2の示した龍泉窯系青磁蓮弁文碗で、復元口径12.9cmを測る。土坑1からは龍泉窯系青磁蓮弁文碗の口縁部1点、常滑窯では壺の胴部9点、壺の底部1点、ロクロ成形かわらけの大皿口縁部4点、底部1点、小皿口縁部5点、底部1点、自然遺物では鯨類の下顎骨4点が出土している。実測し得たものはFig.10-3~7に示した。3は龍泉窯系青磁蓮弁文碗で、復元口径16.8cmを測る。4~7はロクロ成形かわらけで、4~6は小皿、7は大皿である。法量は4が口径7.8cm、底径5.9cm、器高1.6cm、5が口径7.6cm、底径4.9cm、器高1.6cm、6が口径7.9cm、底径5.5cm、器高1.5cm、7が口径12.5cm、底径7.0cm、器高3.8cmを測る。土坑3からは常滑窯の壺胴部2点、ロクロ成形かわらけの大皿口縁部1点、底部3点、小皿の底部1点が出土している。図示可能なものはFig.10-8に示したロクロ成形かわらけの大皿である。口径12.8cm、底径7.9cm、器高3.2cmを測る。土坑4からは龍泉窯系青磁蓮弁文碗の口縁部1点、常滑窯の壺口縁部1点、胴部2点が出土しているが、図示できるものはない。土坑5からは舶載の白磁口元皿口縁部1点、底部1点、常滑窯の壺胴部6点、土器質火鉢の口縁部1点、ロクロ成形かわらけの大皿口縁部5点、底部2点、小皿の口縁部4点が出土している。実測し得たものはFig.10-9~12である。9は白磁口元皿で復元口径11.9cmを測る。10は土器質火鉢の口縁部である。胎土は暗灰橙色を呈し、白色粒子、白色針状物質を含む。11~12はロクロ成形かわらけの小皿である。11は口径7.8cm、底径5.1cm、器高1.9cm、12は口径7.6cm、底径4.9cm、器高1.9cmを測る。

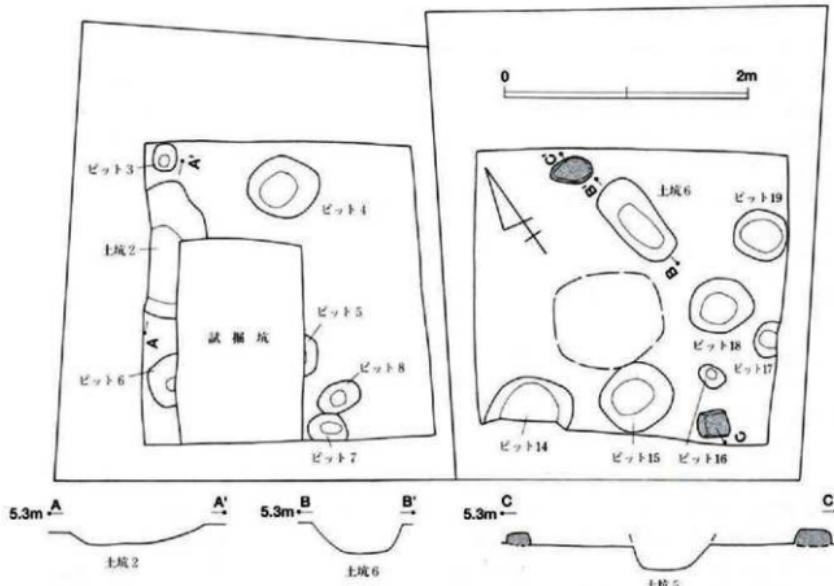


図12 第4面

## 第4節 第4面

### a. 検出遺構

第4面の遺構は現地表下約2.0m、海拔5.25m前後で検出される2~10cm大の土丹を含む締まり良好な暗褐色粘質土(33層)の上面において確認している。検出されたのはピット12口(ピット3・4・5・6・7・8・14・15・16・17・18・19)、土坑2基(土坑2・6)、及び、礎石と考えられる鎌倉石2個である。A・B・1・2グリットから検出された鎌倉石上面の海拔は2個ともに5.35mを測り、ほぼ平坦で、芯~芯距離は2.40mを測る。南北の軸方位はN-6°-Eを測る。調査区の北、東外に展開する礎石建物の一部となろうか。第3面と同様に遺構が濃密に展開することが想定されるがいずれも部分的な検出であり、性格等は不明である。各遺構は時期差を有するものと考えられる。

### b. 出土遺物

第4面からは308点の遺物が出土しており、そのうち245点は面出土、63点は遺構からの出土である。面出土遺物の内訳は龍泉窯系青磁では鎌蓮弁文碗の口縁部5点、体部10点、底部2点、無文碗の口縁部2点、体部1点、船載の白磁では口兀皿の口縁部4点、底部3点、壺の胴部2点、瀬戸古窯では灰釉水注の底部1点、常滑窯では壺の口縁部5点、胴部31点、底部3点、壺の底部1点、片口鉢の口縁部3点、山茶碗窯系片口鉢の口縁部6点、体部2点、底部1点、山茶碗の口縁部1点、産地不詳の鉢口縁部1点、土器質火鉢の口縁部1点、ロクロ成形かわらけでは大皿の口縁部53点、底部66点、小皿の口縁部31点、底部7点、手づくり成形かわらけの大皿口縁部1点、石製品では滑石製の石鍋口縁部1点、金属製品では鉄製の刀子1点が出土している。

面出土遺物のうち実測し得たものはFig.13-1~13・15~29に示した。1~8は船載品である。1~4は龍泉窯系青磁鎌蓮弁文碗で、復元口径は1が16.8cm、2が14.0cm、3が11.8cm、4が13.8cmである。5~8は白磁口兀皿である。以下、法量を記していく。5は復元口径11.6cm、6は復元口径9.9cm、復元底径5.4cm、器高2.7cm、7は口径10.8cm、底径6.2cm、器高2.9cm、8は復元口径10.0cm、底径5.3cm、器高3.0cmを測る。9は瀬戸古窯の灰釉水注底部である。高台径8.3cmを測る。10は山茶碗の口縁部小片である。胎土は灰色を呈し、白色粒子を含む。復元口径13.6cmを測る。11~13は常滑窯の壺である。11は頸部~口縁部でT字状の縁帯を有する。縁帯幅1.7cmを測る。12・13は胴部片で、外面に格子を主体とした押印文を有する。15~17は山茶碗窯系の片口鉢である。体部外面下位はヘラケズリされ、砂底の外底面には高台を貼りつけている。15は復元口径29.3cm、16は口径21.7cm、高台径9.9cm、器高7.8cm、17は口径22.0cm、高台径12.1cm、器高9.4cmを測る。18は産地不詳の製品で、鉢形を呈するものである。内外面ともにヨコナデされ、口縁部のナデは強く、内側は大きく窪んでいる。内面下半は磨滅し、胎土は灰色を呈し、長石、白色粒子に富む。常滑窯の製品であろうか。復元口径は27.0cmを測る。19~29はロクロ成形かわらけである。19~24は小皿、25~29は大皿である。以下、口径-底径-器高の順に法量を記していく。単位はcmである。19は7.7-5.0-2.2、20は7.7-5.0-2.1、21は7.7-5.2-1.9、22は8.1-5.8-1.8、23は8.3-6.1-1.9、24は8.4-6.0-1.9、25は11.8-7.4-3.7、26は12.0-7.4-3.2、27は11.8-7.1-3.4、28は13.0-8.4-3.2、29は13.0-7.7-3.5である。

遺構別に出土遺物の内訳をみると、ピット3からはロクロ成形かわらけの大皿底部3点、ピット4からは龍泉窯系青磁鎌蓮弁文碗の口縁部1点、体部2点、ロクロ成形かわらけの大皿口縁部1点、底部2点、ピット5からはロクロ成形かわらけの大皿底部5点、ピット14からはロクロ成形かわらけの大皿口縁部1点、ピット15からは龍泉窯系青磁鎌蓮弁文碗の口縁部1点、ロクロ成形かわらけの小皿底部1点、ピット17か

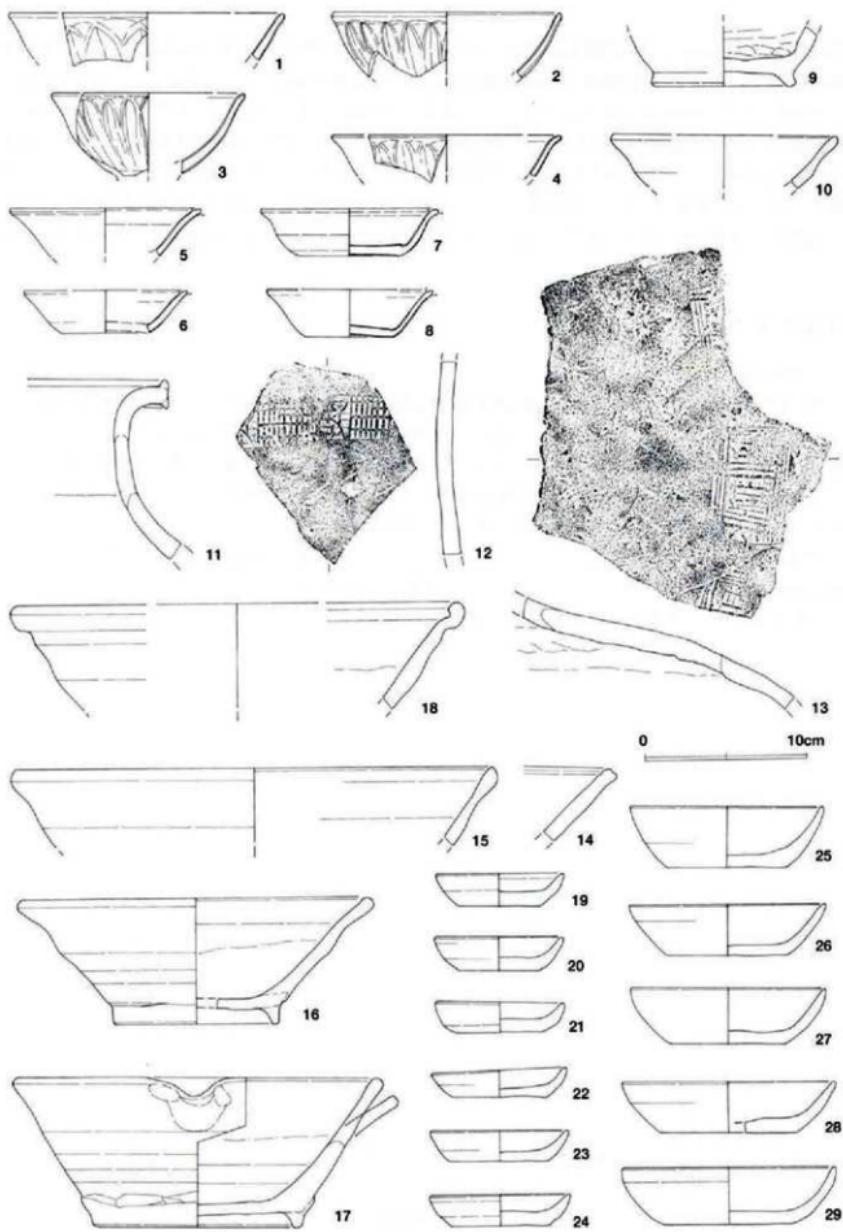


図13 第4面出土遺物

らはロクロ成形かわらけの大皿口縁部1点、ピット18からは龍泉窯系青磁の無文碗口縁部1点、白磁口兀皿口縁部1点、常滑窯の甕胴部3点、ロクロ成形かわらけの大皿口縁部2点、底部1点、ピット19からはロクロ成形かわらけの大皿底部2点、土坑2からは常滑窯の製品では甕の底部1点、壺の底部1点、片口鉢の口縁部2点、ロクロ成形かわらけの大皿口縁部1点、底部4点、土坑6からは白磁口兀皿の底部2点、常滑窯の甕胴部11点、ロクロ成形かわらけの大皿口縁部3点、底部9点、小皿の底部1点が出土している。遺構から出土した遺物のうち、実測し得たものはFig.13-14に示した土坑2出土の常滑窯片口鉢である。口縁端部には沈線状の窪みを有する。器表は灰黒色、胎芯は暗褐色を呈し、白色粒子、長石を多量に含む。

## 第5節 第5面

### a. 検出遺構

第5面の遺構は現地表下約2.3m、海拔4.90m前後で検出される1~5cm大の土丹を含む暗褐色粘質土(51層)の上面において確認している。検出されたのは木組みを有する東西方向の溝が1条(溝5)、南北方向の杭列(杭①、②、③、④、⑤、⑥)、及び数本の杭、礎板、柱である。溝5は南側を検出するにとどまり、規模・構造について不明な点が多い。東区のみからの検出で、西区では本址の延長と考えられる遺構が確認されていないため、3ライン辺りで収束するものと考えられる。溝の土留めは幅24.0cm、厚さ1.2cm程の横板を杭により支える構造である。横板最上位の海拔は4.96m、溝底は4.75m前後である。軸方位はN-68°—Wを測り、覆土は貝殻粒子を含む青黒褐色粘質土である。溝5は水路的なものではなく、区画地業の土留め的な性格を有するものではなかろうか。杭列は溝5の南側、B-1グ

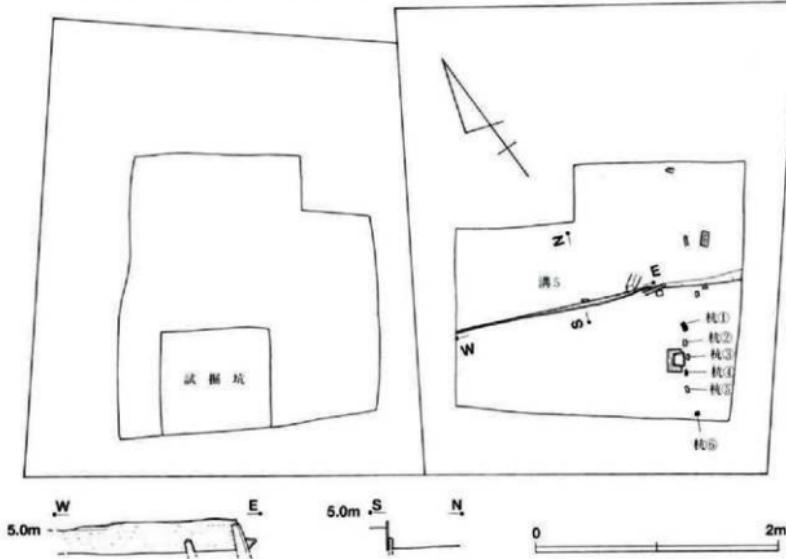


図14 第5面

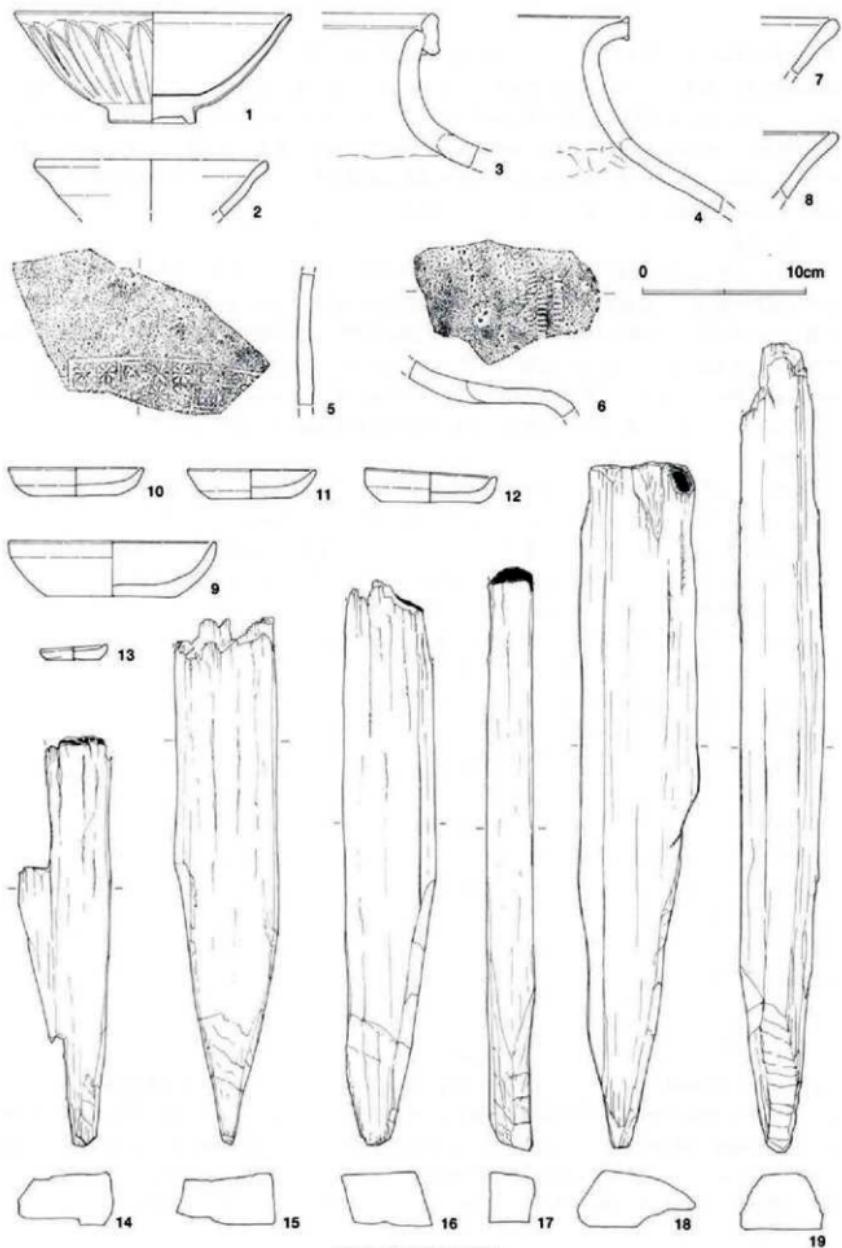


图15 第5面出土遗物

リットから検出された南北に並ぶ $3.0 \times 6.0\text{cm}$ 角前後の6本の杭（杭①～⑥）である。杭頭の海拔は4.84～4.90mを測り、杭①、④、⑥の杭頭は焦げている。杭①～⑤は直線上に並び、その間隔は北から15cm、10cm、13cm、15cmを測り、南北の軸方位はN-26°-Eである。杭⑤～⑥間は20cmである。この杭列の西隣からは礎板に据えられた $9.0 \times 9.0\text{cm}$ 角の柱が検出された。柱頭、及び礎板上面の海拔はそれぞれ4.90m、4.83mを測る。第3面、第4面とは検出遺構の様相が異なり、ピット、土坑等は確認されていない。屋敷等の区画における縁辺部の様相となろうか。

#### b. 出土遺物

第5面からは190点の遺物が出土しており、そのうち170点が面出土、20点が遺構からの出土である。面出土遺物の内訳は、龍泉窯系青磁では割花文碗底部1点、鎌井文碗口縁部1点、盤底部1点、白磁では皿の口縁部1点、口兀皿の口縁部3点、体部3点、瀬戸古窯の灰釉壺胴部2点、常滑窯の甕口縁部3点、胴部42点、山茶碗窯系の片口鉢口縁部2点、底部1点、山茶碗の口縁部2点、ロクロ成形かわらけでは大皿の口縁部20点、底部18点、小皿の口縁部32点、底部3点、手づくね成形かわらけでは大皿の口縁部10点、底部6点、小皿の口縁部4点、石製品では滑石製の石鍋口縁部2点、木製品では杭6点、柱1点、礎板1点が出土している。

第5面からの出土遺物のうち、実測し得たものはFig.15-1～19に示した。1は龍泉窯系の青磁鎌井文碗である。口径16.9cm、高台径5.3cm、器高6.7cmを測る。2は山茶碗の口縁部小片である。復元口径14.1cmを測る。3～6は常滑窯の甕で、3・4は口縁部～頸部、5は胴部、6は肩部である。3・4の縁帯幅はそれぞれ2.5cm、1.5cmを測る。5の外面には菊花、6の外面には格子の押印文を有する。7・8は山茶碗窯系の片口鉢口縁部小片である。9～13はロクロ成形かわらけで、9が大皿、10～12が小皿、13が極小皿である。以下、口径～底径～器高の順に法量を記していく。単位はcmである。9は12.6-7.8-3.4、10は8.2-5.1-1.8、11は7.8-4.9-1.8、12は7.9-6.0-1.8、13は4.0-3.3-0.8である。14～19は杭である。平面図との対応は①が18、②が16、③が19、④が14、⑤が15、⑥が17である。断面は方形状を呈しているが、かなり雑な作りであり、14は転用材である。14・16・17・18の杭頭は焼けている。以下、残存長-最大幅を記していく。単位はcmである。14は25.5-5.5、15は32.5-6.3、16は35.0-5.7、17は36.2-2.9、18は42.5-7.3、19は50.2-5.0である。

遺構出土の遺物としては、溝5から常滑窯の甕胴部3点、山茶碗の口縁部1点、ロクロ成形かわらけでは大皿の口縁部2点、小皿の口縁部2点、底部1点、手づくね成形かわらけでは大皿の口縁部2点、底部4点、小皿の口縁部1点、木製品では欠損した箸3点、板材1点が出土している。いずれも小片のため図示できるものはない。

## 第6節 第6面

#### a. 検出遺構

第6面の遺構は現地表下約2.5m、海拔4.70m前後で検出される2～10cm大の土丹を全体に含む、締まり良好な青黒褐色粘質土（58層）の上面において確認している。検出された遺構は西区では東西方向の溝1条（溝1）、東区では東西方向の溝2条（溝6、溝7）、及び、南北方向の溝1条（溝8）であり、他には数枚の礎板を検出している。尚、東区は廃土処理等の関係から、鎌倉市教育委員会の指導により、第6面までの調査とし、以下は岩盤面の確認を目的とする部分的なトレント調査とした。この為、溝6、溝7の関係等については不明な点を多く残す結果となった。溝1は溝6と同一の遺構と考えられ、溝7

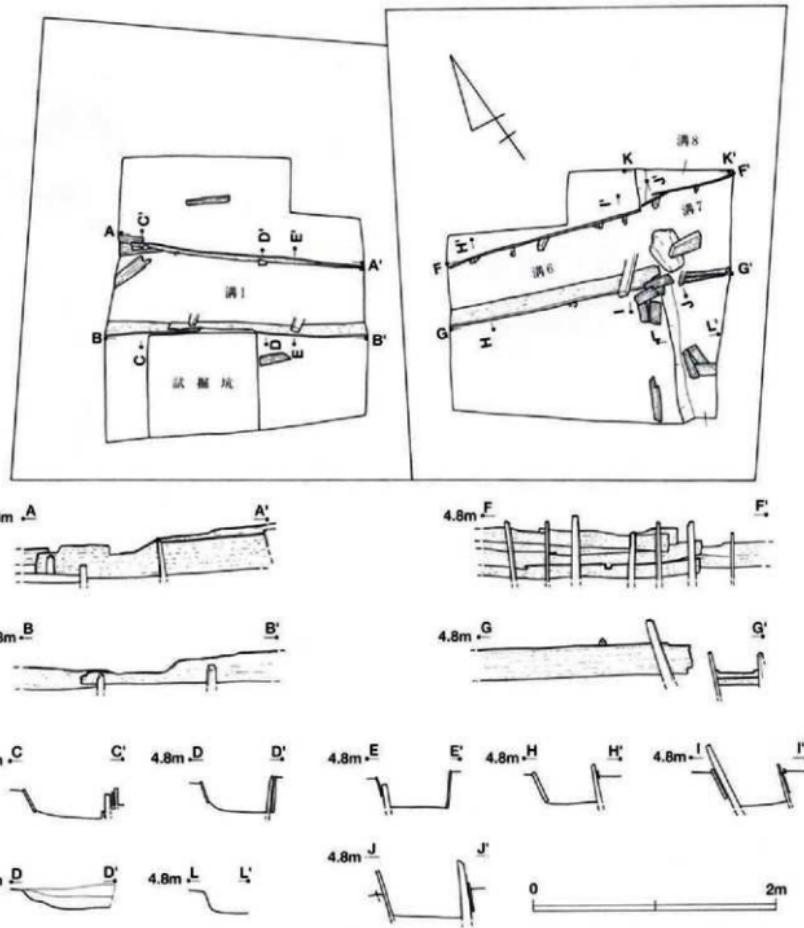


図16 第6面

はこれよりも古く、溝8は更に先行するものである。

溝1、溝6はほぼBライン沿いに、東西約5.1mにわたり検出された。側板と杭による土留め構造を有し、南側板は1段のみ遺存し、最大のもので幅29.0cm、厚さ2.0~3.0cmを測る。北側板は最大4段が遺存し、幅12.0~21.0cm、厚さ0.5~1.0cm程度である。北側板、及び北側杭の最上位の海拔はそれぞれ4.7m、4.8m、南側板、及び南側杭は4.76m、4.92mを測る。溝の幅は50~80cm、確認面からの深さは30~50cmを測り、溝底の海拔は4.30~4.40mである。やや差も生じているが主軸方位はN-53°—W-N-68°—Wを測る。覆土は多量の木片、及び箸状木製品を含む青黒褐色粘質土である。

溝7は溝6東端の南側壁から部分的に検出された木組みのことを呼称した。側板、及び杭の最上位の海拔は4.50m、及び4.70mである。

溝8は2ライン沿いに検出された南北方向の溝である。西壁のみの検出であり、規模等の詳細は不明である。溝1、溝6に先行するものであり、木組みは伴っていない。断面の立ち上がりは緩やかで、確認か

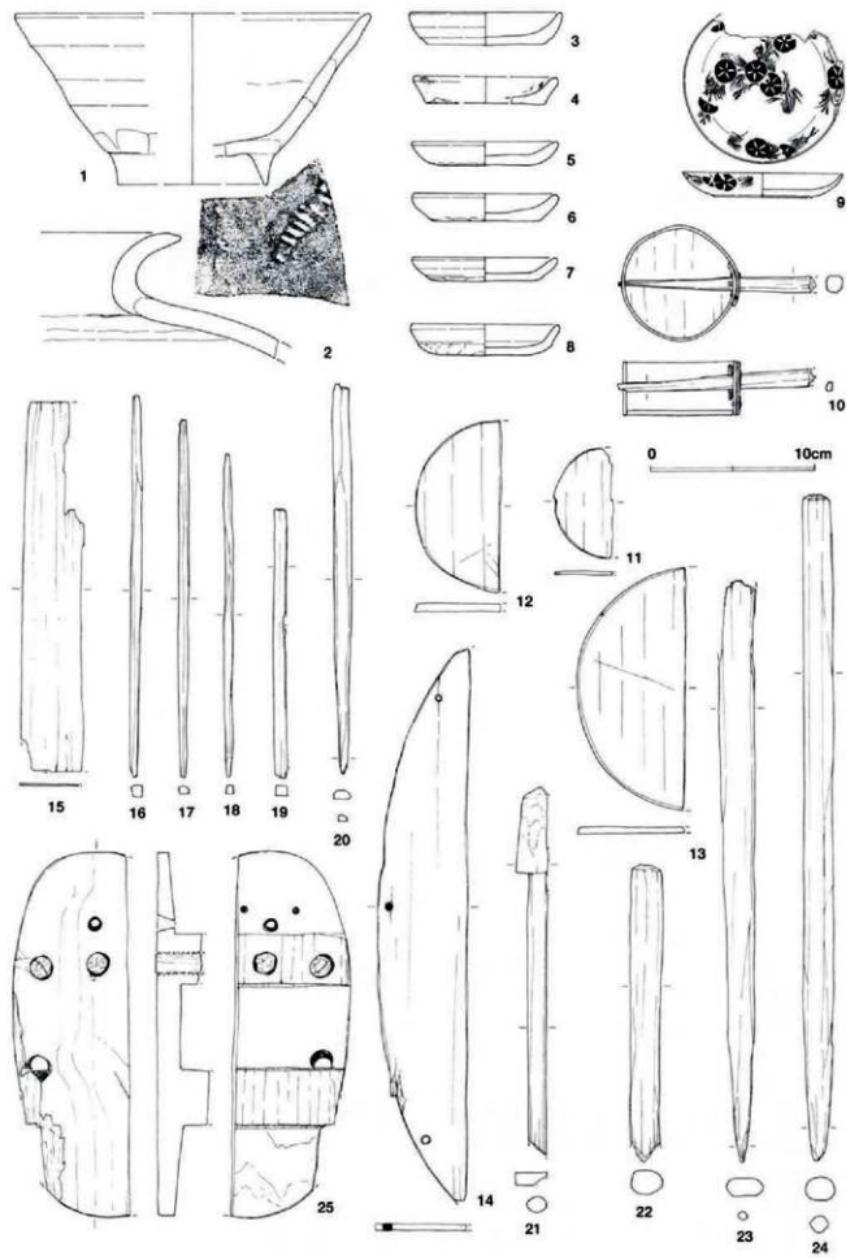


圖17 第7面出土遺物

らの深さは20cm前後である。溝底の海拔は北部で4.6m、南部で4.52mを測る。主軸方位はN-68°-W。覆土は木片を多量に含む青黒褐色粘質土である。

溝8周辺からは礎板の出土が目立つ。溝8が埋められた段階（機能しなくなった段階）で、掘立柱構造の建物址が構築されたようである。

#### b. 出土遺物

第6面からは1047点の遺物が出土しており、そのうち429点が面出土、618点が遺構からの出土である。面出土遺物の内訳は、龍泉窯系青磁蓮弁文碗の口縁部1点、体部1点、渥美窯の甕口縁部1点、胴部1点、常滑窯では甕の口縁部5点、胴部136点、底部5点、片口鉢の口縁部1点、山茶碗窯系の片口鉢口縁部1点、ロクロ成形かわらけの大皿口縁部8点、底部6点、小皿口縁部12点、底部4点、手づくね成形かわらけの大皿口縁部20点、底部7点、小皿の口縁部11点、底部1点、金属製品では銅鏡4点、木製品では黒色漆塗り無文皿の口縁部1点、黒色漆塗り絵皿1点、完形の箸38点、欠損した箸122点、折敷1点、円板4点、柄杓1点、草履1点、下駄1点、箆1点、串状の製品3点、齊串状の製品1点、ちゅう木状の製品9点、板材4点、杭4点、杭状の製品1点、樹皮7点、自然遺物ではアカニシ2点、イスの右肩甲骨1点、イスの右脛骨1点が出土している。

第6面出土の遺物のうち、実測を得たものはFig.17-1~25、Fig.18-1~4に示した。1は山茶碗窯系の片口鉢である。体部外面下位はヘラケズリされ、砂底の外底面には高台を貼りつけている。2は渥美窯の甕口縁部である。肩部外面には平行叩きの押印文を有している。3~8はかわらけで3・4がロクロ成形の小皿、5~8が手づくね成形の小皿である。3は口径9.2cm、底径7.1cm、器高2.0cm、

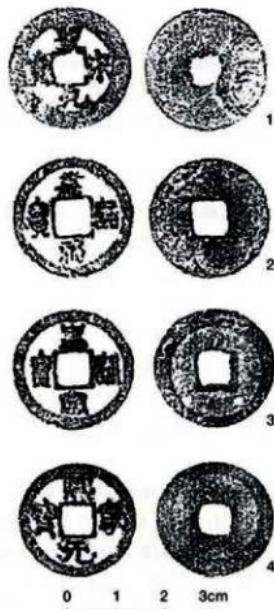


図18 第6面出土遺物(2)

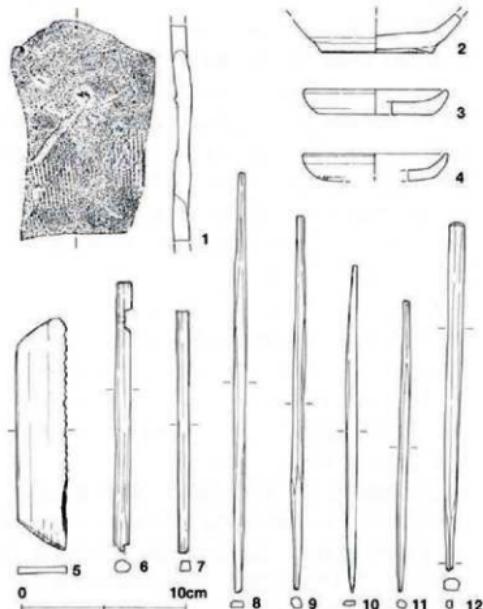


図19 溝1出土遺物

4は復元口径8.7cm、底径7.3cm、器高1.6cm、5は口径8.8cm、器高1.4cm、6は口径8.7cm、器高1.7cm、7は口径8.8cm、器高1.5cm、8は口径8.8cm、器高1.9cmを測る。9は黒色漆塗りの皿で、外面には赤色漆による草花文を手描き、及び印判により配している。外底には輪高台を有し、口径9.7cm、高台径6.0cm、器高1.5cmを測る。10は柄杓である。底板の直径6.5cm、側板の幅3.3cm、柄部は残存長で12.2cmを測る。外面には黒色漆が部分的に遺存している。11～14は円板である。11は10に近接した位置から出土しており、10の蓋板として使われた可能性がある。復元直径9.7cmを測り、外周の1箇所に抉りが認められる。おそらく4箇所に抉りを有するものと考えられる。12は復元直径10.7cmである。13は復元直径15.0cmを測り、外周の1箇所に木釘穴が認められる。14は周縁に直径0.5cm程の穿孔が3箇所に認められる。15は折敷である。長さ22.7cmを測る。16～18は箸である。長さは16が23.5cm、17が22.0cm、18が19.8cmを測る。19はちゅう木状の製品で、断面は $0.6 \times 0.7$ cmの方形を呈し、長さ16.5cmを測る。20は鏡で、幅1.1cm、厚さ0.5cm、残存長24.0cmを測る。21は齐串であろうか。将棋駒状の先端部を有し、断面楕円形状の軸を有する。残存長22.8cmを測る。22～24は串状のものであり、片端は尖らせている。22は断面 $1.5 \times 1.9$ cmの楕円形状を呈し、残存長18.3cmを測る。23は断面 $2.3 \times 1.1$ cmの楕円形状を呈し、残長35.8cmを測る。24は完形で、断面 $1.8 \times 1.4$ cmの楕円形を呈し、長さ41.0cmを測る。25は連歯下駄であり、ほぼ $1/2$ が遺存する。前歯部には1.3～1.5cm程の孔を穿ち、補修した痕跡が認められ、前緒は2孔で一組となる可能性がある。前緒孔の上方には直径0.4cm程の焼痕が2箇所に認められる。全長22.5cm、残存幅7.1cmを測る。Fig.18-1～4は銅錢で、いずれも北宋錢である。1は行書の「聖宋元寶」である。初鑄1101年で、直径2.5cmを測る。2は篆書の「嘉祐通寶」である。初鑄1056年で、直径2.4cmを測る。3は篆書の「皇宋通寶」である。初鑄1038年で、直径2.4cmである。4は真書の「熙寧元寶」である。初鑄1068年で、直径2.4cmを測る。

造構出土の遺物としては、溝1からは57点が出土している。内訳は山茶碗の底部1点、常滑窯の壺胴部1点、ロクロ成形かわらけの大皿口縁部1点、底部1点、小皿の口縁部2点、底部2点、手づくね成形かわらけの口縁部1点、木製品では黒色漆塗り無文皿底部1点、黒色漆塗り絵皿口縁部1点、箸の完形品15点、箸の欠損品19点、折敷2点、灰搔き状の製品1点、ちゅう木状の製品3点、棒状の製品3点、串状の製品1点、杭1点、樹皮1点が出土している。実測し得たものはFig.19-1～12に示した。1は常滑窯の壺胴部である。外面には格子の押印文を有している。2は山茶碗の底部である。復元高台径6.6cmを測る。3はロクロ成形かわらけの小皿である。口径8.7cm、底径7.0cm、器高1.5cmを測る。4は手づくね成形かわらけの小皿である。口径8.8cm、器高1.7cmを測る。5～12は木製品である。5は灰搔き状を呈するもので、長さ14.3cm、幅3.2cm、厚さ0.4cmを測る。6は棒状を呈する組物部材であり、端部の抉りには直径0.3cmの孔を有している。断面は $0.7 \times 0.9$ cmの楕円形状を呈し、残存長16.7cmを測る。7はちゅう木状の製品である。断面は $0.6 \times 0.6$ cmの方形を呈し、長さ15.0cmを測る。8～11は箸である。長さは8が25.8cm、9が23.0cm、10が20.2cm、11が18.0cmである。12は串状を呈するもので、片口箸の可能性もある。断面は $0.9 \times 0.7$ cmの隅丸方形を呈し、長さ21.5cmを測る。

溝6からの遺物は、覆土上層、覆土下層、そして裏込め出土に区分している。溝6覆土上層からは414点の遺物が出土しており、内訳は常滑窯の壺胴部1点、山茶碗窯系の片口鉢口縁部3点、体部2点、ロクロ成形かわらけの大皿口縁部4点、底部5点、小皿の口縁部2点、手づくね成形かわらけの大皿口縁部4点、小皿の口縁部1点、木製品では黒色漆塗り無文皿の口縁部3点、黒色漆塗り絵椀の体部1点、箸の完形品135点、箸の欠損品223点、曲物の側板1点、草履1点、陽物1点、鏡6点、串状の製品8点、杭1点、自然遺物では魚類のウロコ6点、ハマグリ3点、ツメタガイ1点、不詳の動物骨2点である。溝6覆土

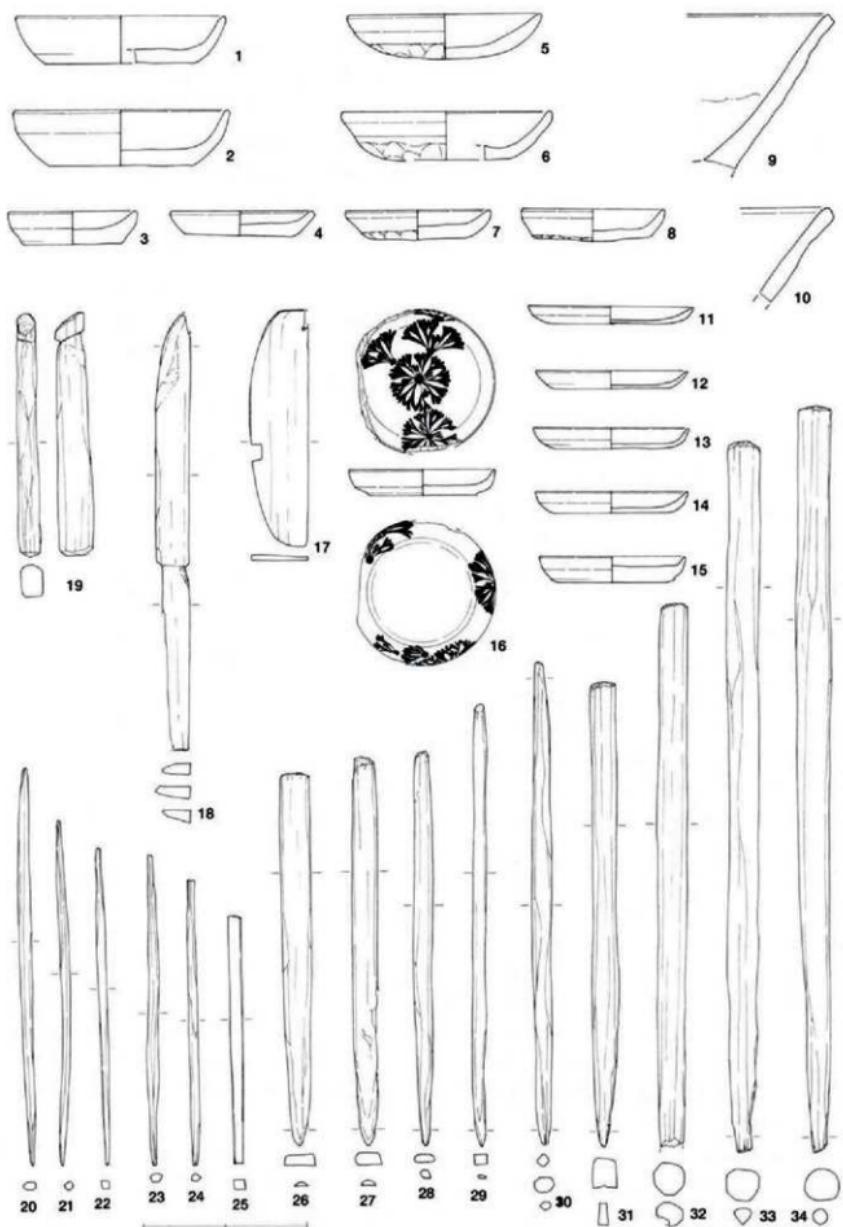


图20 满6出土遗物

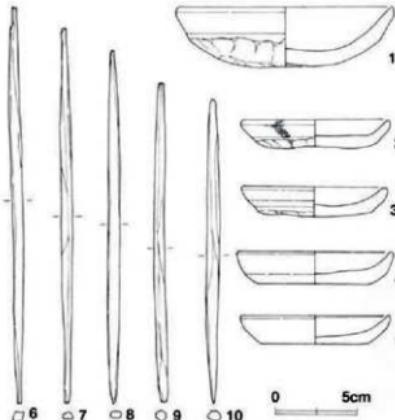


図21 溝8出土遺物

下層からは48点の遺物がしている。内訳は龍泉窯系青磁無文碗底部1点、青白磁合子蓋1点、ロクロ成形かわらけの小皿口縁部2点、手づくね成形かわらけの大皿口縁部6点、底部2点、小皿口縁部1点、木製品では黒色漆塗り絵皿1点、箸の完形品15点、箸の欠損品10点、刀形1点、ちゅう木状の製品1点、串状の製品3点、自然遺物ではハマグリ3点、ダンベイキサゴ1点が出土している。溝6裏込めからは16点の遺物が出土している。内訳は常滑窯系の胸部3点、山茶窯系の片口鉢口縁部1点、ロクロ成形かわらけの大皿口縁部3点、底部2点、木製品では黒色漆塗り無文皿3点、箸の欠損品3点、自然遺物ではハマグリ1点が出土している。

#### 溝6出土の遺物のうち、実測し得たものは

Fig.20-1~34に示した。5・11・12・15は裏込め出土、3・7・16・18・20・21・22・25・32・33・34は覆土下層出土で、他は覆土上層出土である。1~4はロクロ成形かわらけで、1・2が大皿、3・4が小皿である。1は口径12.7cm、底径9.2cm、器高2.9cm、2は口径13.1cm、底径8.8cm、器高3.4cm、3は口径7.7cm、底径6.0cm、器高2.0cm、4は口径8.6cm、底径6.5cm、器高1.5cmを測る。5~8は手づくね成形かわらけで、5・6が大皿、7・8が小皿である。5は口径11.7cm、器高2.8cm、6は口径12.7cm、器高2.9cm、7は口径8.8cm、器高1.9cm、8は口径8.6cm、器高2.0cmを測る。9・10は山茶窯系の片口鉢口縁部である。口縁部は肥厚し、端部は沈線状の窪みを有する。11~15は黒色漆塗り無文皿である。15は厚手で、外底は板高台状を呈している。外底にはロクロ挽きの目痕が残る。11は口径10.0cm、底径7.0cm、器高1.1cm、12は口径9.2、底径7.1cm、器高1.1cm、13は口径9.4cm、底径7.0cm、器高1.3cm、14は口径9.2cm、底径7.0cm、器高1.3cm、15は口径8.8cm、底径6.6cm、器高1.6cmを測る。16は黒色漆塗り絵皿。内外面に赤色漆による手描きの花文を有する。外底は板高台である。口径8.8cm、底径6.6cm、器高1.6cmを測る。17は草履芯である。長さ14.6cm、幅3.6cm、厚さ0.3cmを測る。18は刀形である。残存長26.9cm、幅2.1cm、厚さ0.8cmを測る。19は陽物である。長さ15.0cm、幅1.3cm、厚さ2.2cmを測る。20~24は箸である。長さは20が24.7cm、21が21.4cm、22が19.7cm、23が19.2cm、24が17.7cmを測る。25はちゅう木状の製品である。断面は $0.6 \times 0.7$ cmの方形を呈し、長さ15.4cmを測る。26~28は籠である。26は長さ23.1cm、幅1.8cm、厚さ0.7cm、27は長さ24.1cm、幅1.6cm、厚さ0.8cm、28は長さ24.4cm、幅1.2cm、厚さ0.5cmを測る。29~34は串状を呈するものであり、29・30は両端を、31~34は片端を尖らせている。29の断面は $0.6 \times 0.7$ cmの方形を呈し、長さ27.3cmを測る。30の断面は $0.9 \times 1.2$ cmの楕円形状を呈し、長さ30.0cmを測る。31の断面は $1.7 \times 1.5$ cmの方形を呈し、長さ28.7cmを測る。32~34の断面は直径2.0cm程の楕円形状を呈し、32は残存長33.5cm、33は長さ43.9cm、34は長さ46.1cmを測る。

溝8からは83点の遺物が出土している。内訳は常滑窯の甕底部1点、ロクロ成形かわらけの小皿口縁部2点、手づくね成形かわらけの大皿口縁部1点、底部1点、小皿の口縁部2点、木製品では黒色漆塗り絵皿口縁部1点、箸の完形品25点、箸の欠損品47点、板材1点、自然遺物ではサザエ1点、ヒトの右橈骨1点

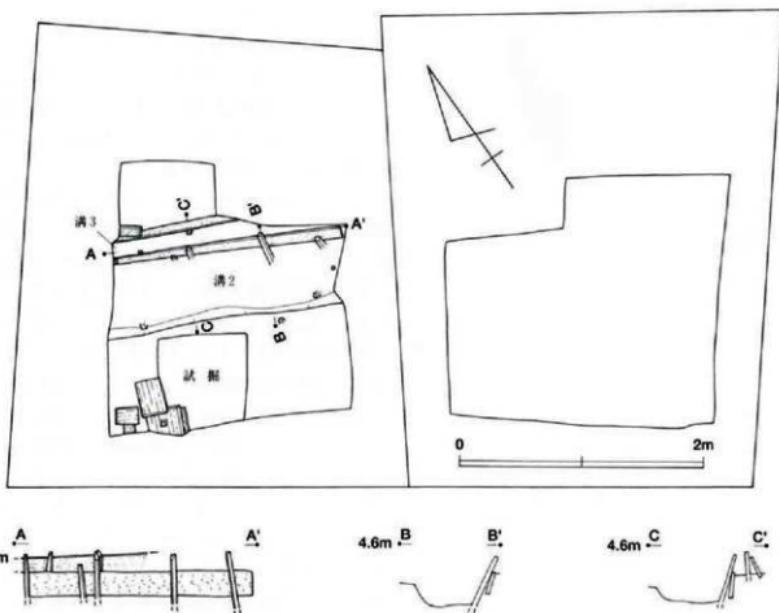


図22 第7面

が出土している。実測し得たものはFig21-1~10である。1~3は手づくね成形かわらけで1が大皿、2・3が小皿である。1は口径13.0cm、器高3.7cm、2は口径8.8cm、器高1.7cm、3は口径8.7cm、器高1.8cmを測る。4・5はロクロ成形かわらけの小皿である。4は口径9.3cm、底径6.6cm、器高2.0cm、5は口径9.0cm、底径6.5cm、器高1.7cmを測る。6~10は箸である。長さは6が24.3cm、7が22.9cm、8が21.6cm、9が19.5cm、10が18.6cmを測る。

## 第7節 第7面

### a. 検出遺構

現地表下約3.0m、海拔4.30m前後で検出される炭層(61層)を除去すると、若干の木片を含む青黒褐色粘土(65層)が検出される。本層の上面において第7面の遺構を確認している。検出されたのは東西方向の溝2条(溝2、溝3)と、数枚の縦板と数本の杭である。

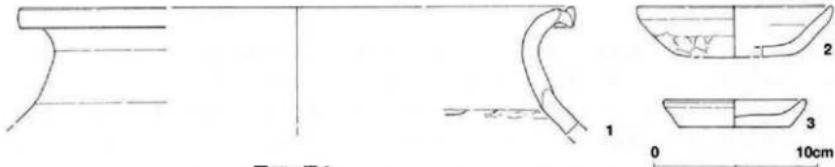


図23 溝2

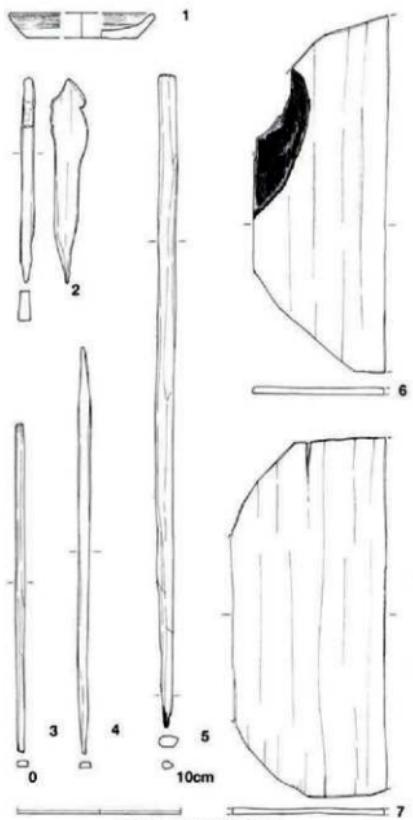


図24 第7面出土遺物

品1点、箸の完形品6点、箸の欠損品7点、人形1点、串状の製品1点、板材1点、樹皮4点、自然遺物ではアカニシ1点、アワビ1点、ハマグリ2点が出土している。実測し得たものはFig.24-1~7に示した。1はロクロ成形かわらけの小皿である。復元口径8.8cm、底径6.7cm、器高1.6cmを測る。2は人形。長さ12.5cm、幅0.7cm、厚さ2.2cmを測る。3・4は箸である。長さは3が20.3cm、4が25.2cmを測る。5は串状のもので断面は $1.2 \times 0.7\text{cm}$ の楕円形状を呈する。片端は焦げており、残存長40.2cmを測る。6・7は接合するもので、八角形を呈する折敷状の板材である。縦22.0cm、横17.4cm以上、厚さ0.4cmを測る。

遺構からの出土遺物としては溝2から24点が出土している。内訳は龍泉窯系青磁割花文碗の体部1点、常滑窯の製品では壺の口縁部1点、胴部7点、片口鉢の口縁部1点、ロクロ成形かわらけの小皿口縁部2点、手づくね成形かわらけの大皿口縁部5点、底部2点。本製品では箸の完形品1点、樹皮4点が出土している。実測し得たものはFig.23-1~3に示した。1は常滑窯の壺口縁部である。N字状の縁帶を有し、縁帶幅は1.3cmを測る。復元口径34.0cm。2は手づくね成形かわらけの大皿である。口径11.8cm、器高3.3cmを測る。3はロクロ成形かわらけの小皿である。口径8.6cm、底径6.8cm、器高1.7cmを測る。

溝2はBライン沿いに、東西約1.9mにわたり検出された。第6面の溝1に先行するものと考えられる。幅60~70cm、確認面からの深さ40cm前後、溝底の海拔は4.1m前後である。北壁に1段の側板と杭による土留めが遺存し、幅21.0cm、厚さ3.0cmを測り、最上位の海拔は4.40mである。本址に伴う5本の杭のうち、2本の杭頭は焦げており、杭の最上位の海拔は4.54mである。軸方位はN-62°-W。覆土は土丹粒子、木片を含む青黒褐色粘質土である。

溝3は溝2の北側から検出された。溝2の木組みを重複して使用するものであろうか。部分的な検出であり不明な点が多い。側板は幅13.0cm、厚さ1.0cm、最上位の海拔は4.54mである。杭の最上位の海拔は4.56mで、側板の上部、及び杭頭は焦げている。確認面からの深さは20cm前後、溝底の海拔は4.35mである。軸方位はN-65°-W。覆土は青黒褐色粘質土である。尚、本址の南西側からは礎板が重なり合った状態で検出されている。

#### b. 出土遺物

第7面からは95点の遺物が出土しており、そのうち71点が面出土、24点が遺構からの出土である。面出土遺物の内訳は常滑窯の壺胴部3点、山茶碗窯系の片口鉢体部1点、底部1点、ロクロ成形かわらけの大皿口縁部2点、小皿口縁部4点、底部1点、手づくね成形かわらけの大皿口縁部15点、底部10点、小皿口縁部7点、底部2点、木製品では折敷状の製

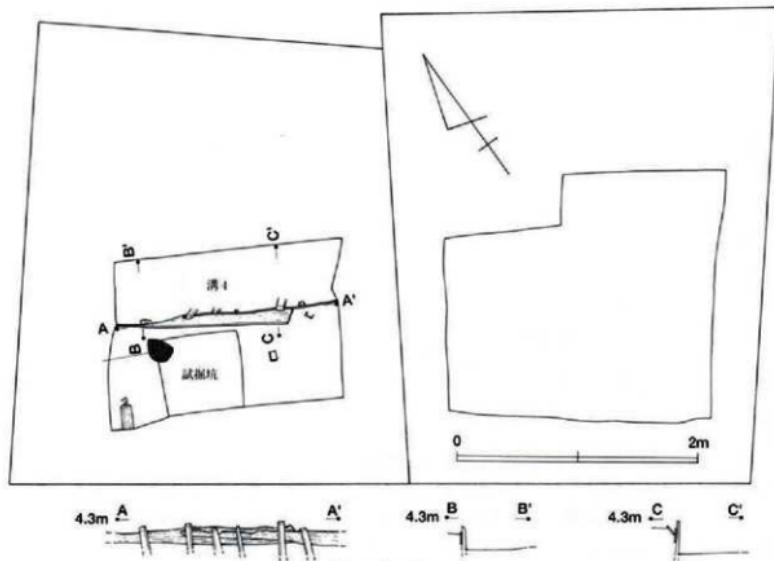


図25 第8面  
第8節 第8面

a. 検出遺構

現地表下約3.1m、海拔4.20m前後で、黒褐色砂質土、炭粒を混入する青黒褐色粘質土(66層)が検出される。本層の上面において第8面の遺構を確認している。検出されたのは第7面の溝2に先行する東西方向の溝1条(溝4)と、伊豆石、柱、杭、礎板である。

溝4は南壁の木組みのみの確認である。東西約1.9mにわたり検出され、確認面からの深さは15cm前後、溝底の海拔は4.10mである。側板は最大幅12.0cm、厚さ1.0cm、最上位の海拔は4.22mを測る。杭は6本検出しており、いずれの杭頭も焦げている。杭頭の海拔は4.22~4.28mである。軸方位はN-59°-W。覆土はごく少量の土丹粒子を含む青黒褐色粘質土である。

b. 出土遺物

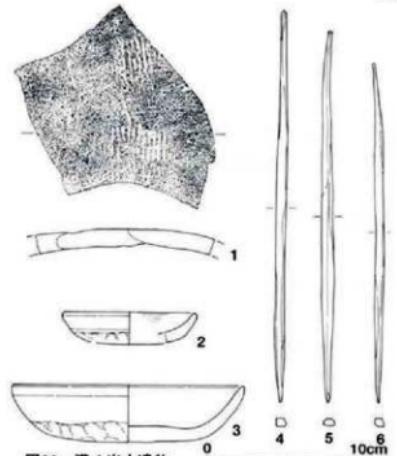


図26 溝4出土遺物

第8面の遺物としては、溝4から83点が出土している。内訳は船載の白磁壺胴部1点、渥美窯の壺胴部1点、常滑窯の壺胴部9点、底部1点、ロクロ成形かわらけの大皿底部3点、手づくね成形かわらけの大皿口縁部22点、底部14点、小皿の口縁部3点、底部4点、木製品では黒色漆塗りの無文椀底部1点、箸の完形品8点、箸の欠損品12点、自然遺物ではアカニシ2点、ハマグリ2点が出土している。

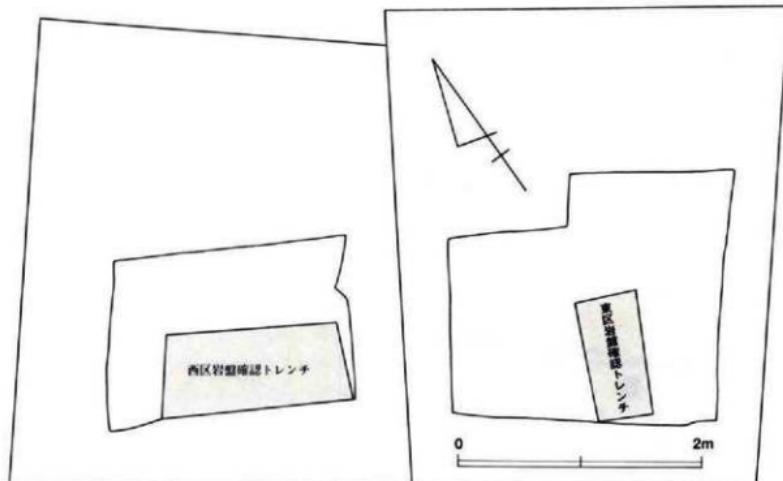


図27 岩盤面確認トレンチ

実測し得たものはFig.26-1~6に示した。1は常滑窯の壺肩部である。外面には格子の押印文を有する。2・3は手づくね成形のかわらけで、2は大皿、3は小皿である。2は口径8.0cm、器高2.0cm、3は口径14.2cm、器高3.5cmを測る。4~6は木製品で箸である。長さは4が24.2cm、5が23.0cm、6が21.0cmを測る。

## 第9節 岩盤確認トレンチ

### a. 検出遺構

西区、及び東区の調査掘削深度が現地表下2.5~2.9mを超える、狭い調査区内での作業は危険を伴うものと判断された。この為、調査区の全体を掘削することは断念し、第8面以下はトレンチを設定し、土層断面、及び地山の確認に調査主眼を置くこととした。

西区では $1.5 \times 0.7\text{m}$ の東西に長いトレンチを設定した。第8面以下は青黒褐色砂質土を主体とした堆積土であり(67、68、69層)、少量ではあるが土丹粒、木片、土器片等を含んでいる。現地表下3.65m前後、海拔3.53~3.58mで岩盤が検出された。東区では $0.5 \times 1.0\text{m}$ の南北に長いトレンチを設定した。第6面以下は有機物腐植土(71層)、暗褐色粘質土(72層)、灰青色砂(73層)が堆積し、現地表下3.70m前後、海拔3.45~3.50mで岩盤を検出した。確認された岩盤の上面はいずれも波触台を形成している。

尚、参考までに本遺跡周辺の調査地点である大町二丁目933番地點(第1章 地点2)で確認された波触台岩盤上の海拔は井戸6で1.9m、井戸5で2.0mを、大町二丁目2315番外地點(第1章 地点3)では井戸5で3.68m前後を測り、西、もしくは南西に向かい傾斜を示している。

### b. 出土遺物

岩盤トレンチからは95点の遺物が出土している。内訳は龍泉窯系青磁では割花文碗の体部1点、龍泉窯系青磁鏡蓮弁文碗の口縁部1点、渥美窯の壺口縁部1点、胴部6点、常滑窯の壺口縁部1点、胴部24点、底部1点、ロクロ成形かわらけでは小皿の口縁部2点、底部1点、手づくね成形かわらけでは大皿の口縁部12点、底部12点、小皿の口縁部6点、底部2点、木製品では黒色塗りの木葉型を呈する匙状製品1

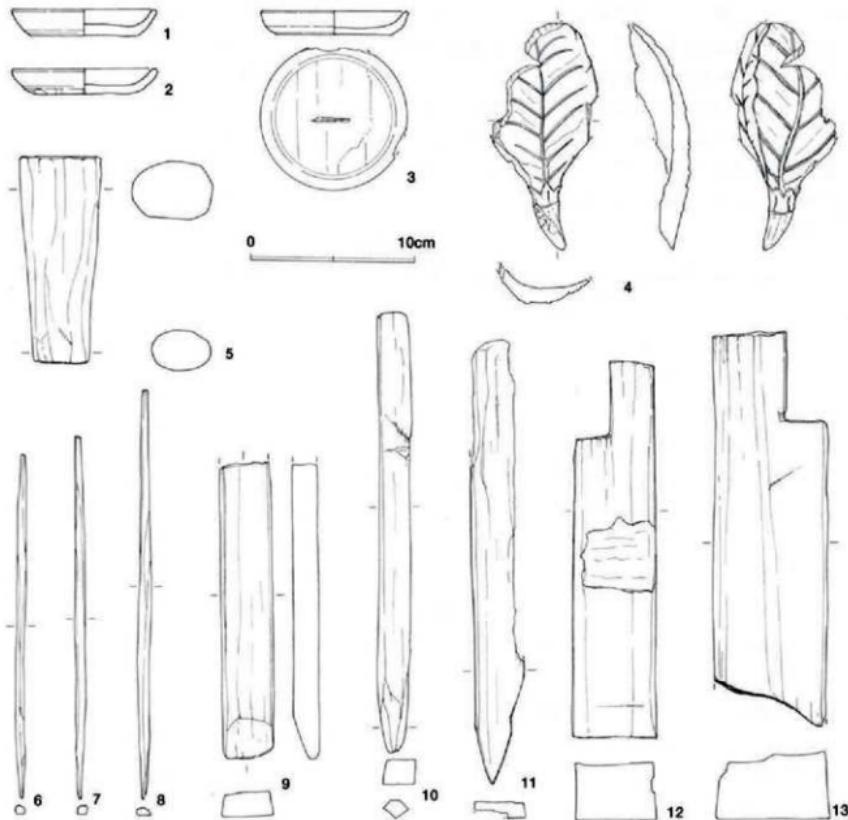


図28 第8面～岩盤面確認トレンチ

点、黒色漆塗り無文椀口縁部1点、黒色漆塗り無文皿2点、箸の完形品3点、箸の欠損品5点、栓状の製品1点、杭3点、加工材2点、自然遺物は貝類のみでアカニシ5点、ダンベイキサゴ1点、バティラ1点が出土している。

実測し得たものはFig.28-1～13に示した。1はロクロ成形かわらけの小皿である。口径8.6cm、底径6.5cm、器高1.6cmを測る。2は手づくね成形かわらけの小皿である。口径8.6cm、器高1.5cmを測る。3～13は木製品である。3は黒色漆塗り無文碗である。外底には板高台を有し、3箇所にロクロ挽きの目痕を残し、中央に「-」状の刻みを有する。口径8.8cm、底径7.1cm、器高1.4cmを測る。4は黒色漆塗りの木葉型を呈する匙状製品である。匙部の残存長10.5cm、残存最大幅6.5cm、推定最大高3.3cm、深さ2.3cmを測る。表裏には葉脈をリアルに削り出し、周縁は輪花状に仕上げている。柏葉を表現したものであろうか。柄部は長さ2.9cmを測り、匙部と接する部分はヘタ状を呈している。柄部端面は斜めに切断され、接着用と考えられる漆が付着している。類例は若宮大路周辺遺跡群（小町一丁目106番他

地点) から1点出土し、「木葉形匙」とされ、「柄部は竹を表現し黒漆を塗る。匙部は柏葉を表現し、表には朱漆を、裏には黒漆を塗っている。」と報告されている(註8)。5は栓状を呈するもので、断面は $3.7 \times 2.5 \sim 5.0 \times 3.5$ cmの楕円形状を呈し、長さ12.7cmを測る。6~8は箸である。長さは6が21.6cm、7が22.2cm、8が25.0cmを測る。9~11は杭である。9の断面は $1.4 \times 3.2$ cmの長方形を呈し、端部の削りは一方向からである。残存長18.2cm。10は断面 $1.5 \times 2.0$ cmの長方形状を呈し、長さ27.0cmを測る。11は断面 $3.2 \times 1.0$ cmの板状を呈し、残存長27.2cmを測る。12・13は加工材。12は長さ23.1cm、幅5.0cm、厚さ3.6cm、13は長さ24.2cm、幅7.1cm、厚さ4.2cmを測る。13は杭として転用されたもので、片端面が焦げている。

表1 ピット一覧表

No.	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面海拔(m)	覆土注記	面
1	34.0	32.0	8.0	6.32	褐色粘質土。	1
2	60.0	(33.0)	12.0	5.44	暗褐色粘質土。	3
3	22.0	19.0	11.0	5.23	褐色粘質土。少量の土丹粒。	4
4	54.0	49.0	17.0	5.01	黒褐色粘質土。炭粒多し。	4
5	(33.0)	(11.0)	17.0	5.02	暗褐色粘質土。土丹粒多し。	4
6	(40.0)	(33.0)	22.0	5.00	暗褐色粘質土。土丹粒少量。	4
7	32.0	(22.0)	13.0	5.13	暗褐色粘質土。	4
8	37.0	22.0	10.0	5.15	暗褐色粘質土。	4
9	(40.0)	24.0	12.0	6.23	宝永スコリア	1
10	34.0	28.0	20.0	5.80	灰褐色粘質土。	2
11	36.0	32.0	10.0	5.60	褐色粘質土。少量の土丹粒。	3
12	32.0	31.0	14.0	5.31	褐色粘質土。少量の土丹粒。	3
13	40.0	31.0	11.0	5.33	褐色粘質土。少量の土丹粒。	3
14	65.0	(40.0)	19.0	5.05	暗褐色粘質土。土丹粒多量。	4
15	57.0	52.0	14.0	5.07	暗褐色粘質土。土丹粒多量。	4
16	21.0	16.0	30.0	4.89	暗褐色粘質土。	4
17	30.0	(20.0)	17.0	5.09	暗褐色粘質土。土丹粒少量。	4
18	52.0	45.0	18.0	5.07	暗褐色粘質土。炭粒・土丹粒少量。	4
19	44.0	40.0	5.0	5.20	暗褐色粘質土。炭粒・土丹粒少量。	4

表2 土坑一覧表

No.	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面海拔(m)	覆土注記	面
1	(95.0)	135.0	14.0	5.48	暗褐色粘質土。	3
2	110.0	(90.0)	13.0	5.05	暗褐色粘質土。炭粒含む。	4
3	(75.0)	(30.0)	10.0	5.60	炭層。土坑4を切る。	3
4	(40.0)	40.0	17.0	5.51	灰褐色粘質土。少量の土丹粒。	3
5	112.0	90.0	34.0	5.06	黒褐色粘質土。土丹粒含む。	3
6	77.0	35.0	25.0	5.00	灰褐色粘質土。黒褐色粘質土混入。	4

## 第3章 出土遺物

今回は狭い調査面積にも関わらず、第1面から第8面にわたる遺構群が検出され、また、コンテナ11箱分の出土遺物をみた。詳細については不明な点もあるが、多くの成果が得られたことと考えている。本章では検出遺構の年代と出土遺物の構成について、若干の考察を加えまとめてみたい。

### ・検出遺構と年代

本調査地点は逆川が北上し、西へと流れを変える舌状に突出した右岸に立地している。魚町橋、逆川橋周辺は、国道134号線の大町四ツ角辺りから、南に向かい急激に低くなり、地質的には山麓平野から砂質低湿地へと移行する地形の変換点となっている。本遺跡地の現地表は海拔7.3m前後を測り、逆川を挟んだ南、西隣と比較すると20m前後高くなっている。

今回の調査で検出されたのは、鎌倉時代から近世にわたる8時期の遺構群であり、中世期のものは6時期を数える。最終的にはトレンチ調査により波打台を形成する岩盤面を検出しているが、確認できた最古の遺構は、13世紀中葉を中心とする遺物を含む第8面検出の東西方向の溝4である。この溝は14世紀初頭頃と考えられる第5面までのあいだに溝2、溝3、溝1、溝6、溝7、溝5へと掘り直されたようで、主軸方位はN-53°—N-68°—Wの範囲内である。その後、14世紀中葉を中心とした時期と考えられる第4面、第3面では柱穴、土坑等を主体とした遺構が検出され、掘立柱や礎石を用いた構造物の展開が推測されるが、14世紀後葉頃に多量のかわらけ等により埋め立てられている。第2面、第1面は15世紀以降から近世初頭頃を考えているが、不明な点が多い。遺構数は激減し、検出されたのは数口のピットだけとなり、宝永四年（1707）噴出の富士山火山灰により覆われる。因みに第2面出土遺物としてFig.8-1、2に示した近世瀬戸・美濃窯志野丸皿と近世美濃窯灰釉丸皿は17世紀後半の製品である。そして、駐車場造成の盛土が施され現在に至る。

### ・出土遺物の構成

今回の調査では3280点（100%）の遺物が出土し、そのうち53点（1.62%）が、動物骨、貝類等の自然遺物で、残り3227点（98.38%）が土器、陶磁器等の製品である。最も多く出土したのはかわらけで1735点（52.90%）出土し、ついで木製品である箸が697点（21.25%）、常滑窯の甕、壺類が469点（14.30%）である。第6面以下ではかわらけは手づくね成形が主体で、瀬戸古窯の製品はみられなくなり、渥美窯の甕、貿易陶磁では龍泉窯系青磁の割花文碗が目立ち始める。また、第5面以下では地下水位の関係から多種・多量の木製品が出土している。その内訳は漆塗りの椀・皿や箸等の飲食器類、曲物、柄杓等の容器・調理具類、下駄、草履等の履物類、籠等の工具類、人形、刀形、陽物形等の形代類、杭、柱、礎板の建築部材等が出土している。出土遺物の中でも注目されるのは曲物等の縦じに使われる樹皮の多さと、フィゴの羽口の出土であり、生産・工房址の存在を示唆するものと考える。

### 【註】

1. 馬淵和雄 1995 「3.米町遺跡（No131）大町二丁目2315番外地点」 「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11」 鎌倉市教育委員会 59~60頁
2. 田代郁夫・原広志 1990 「4.米町遺跡 大町二丁目933番他」 「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6」 鎌倉市教育委員会
3. 註1と同じ。

## 全体構成(総数3280点)

	貿易陶磁	国産陶磁	火鉢	かわらけ	金属	石製品	木製品	土製品	骨・貝	近世
点数(点)	98	556	3	1735	6	5	816	3	53	5
構成比(%)	2.99	16.95	0.09	52.90	0.18	0.15	24.88	0.09	1.62	0.15

## 面別構成(総数3280点)

	貿易陶磁	国産陶磁	火鉢	かわらけ	金属	石製品	木製品	土製品	骨・貝	近世
第1面	0	5	0	8	0	0	0	0	0	1
第2面	3	30	0	145	0	0	0	0	0	4
第3面	35	171	2	1037	1	2	0	3	15	0
第4面	37	73	1	195	1	1	0	0	0	0
第5面	15	56	0	105	0	2	12	0	0	0
第6面	4	163	0	114	4	0	739	0	23	0
第7面	1	14	0	50	0	0	26	0	4	0
第8面	1	11	0	46	0	0	21	0	4	0
岩盤面	2	33	0	35	0	0	18	0	7	0

## かわらけ構成(総数1735点)

	ロクロ大皿		ロクロ小皿		手づくね大皿		手づくね小皿	
	点数(点)	重量(g)	点数(点)	重量(g)	点数(点)	重量(g)	点数(点)	重量(g)
第1面	8	50	0	0	0	0	0	0
第2面	103	1230	42	390	0	0	0	0
第3面	633	18590	404	15830	0	0	0	0
第4面	154	3390	40	1290	1	50	0	0
第5面	40	840	38	570	22	430	5	110
第6面	25	740	26	720	46	1230	17	620
第7面	2	40	7	230	32	520	9	130
第8面	3	50	0	0	36	800	7	60
岩盤面	0	0	3	50	24	360	8	150
合計	968	24930	560	19080	161	3390	46	1070

4. 田代郁夫・宗台富貴子 1998 「米町遺跡(No.245) 大町二丁目931番」 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14』 鎌倉市教育委員会
5. 宮田真他 1999 「神奈川県・鎌倉市 米町遺跡発掘調査報告書」 米町遺跡発掘調査団
6. 降矢順子 1999 「米町遺跡の調査」 『鎌倉考古No.41』 鎌倉考古学研究所
7. 濱田哲夫 2000 「米町遺跡の調査」 『鎌倉考古No.44』 鎌倉考古学研究所
8. 手塚直樹他 1999 「若宮大路周辺遺跡群〈小町一丁目106番他地点—第1次〉〈小町一丁目116番4他地点—第2次〉」 若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 25頁

# 写 真 図 版



▲1. 西区 第1面（北から）



▲2. 東区 第1面（北から）



▲3. 西区 第2面（北から）



▲4. 東区 第2面（北から）



▲5. 西区 第3面（北から）



▲6. 東区 第3面（東から）

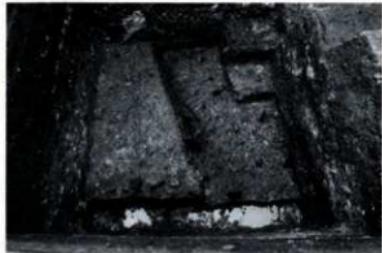


▲7. 西区 第4面（北から）



▲8. 東区 第4面（東から）

図版 2



▲1. 東区 第5面 溝5 (東から)



▲2. 東区 第5面 溝5 (北東から)



▲3. 東区 第6面 溝6.7.8 (東から)



▲4. 東区 第6面 溝6.7.8 (北から)



▲5. 東区 第6面 溝6.7 (南から)



▲6. 西区 第6面 溝1 (西から)



▲7. 東区 第6面 溝1 (北から)



▲8. 西区 第6面 溝1 (南から)



▲1. 西区 第7面 溝2.3（西から）



▲2. 西区 第7面 溝2.3（南から）



▲3. 西区 第8面 溝4（西から）



▲4. 西区 第8面 溝4（北から）



▲5. 西区 岩盤確認トレンチ（南から）



▲6. 東区 東壁セクション（西から）



▲7. 東区 調査終了状況（南から）



▲8. 東区 岩盤確認トレンチ（西から）

図版 4



Fig.15-1



Fig.10-3



Fig.11-1



Fig.13-7



Fig.13-5



Fig.13-6



Fig.10-9



Fig.8-2



Fig.11-2



Fig.13-18



Fig.13-17



Fig.17-1



Fig.11-5



Fig.23-1



Fig.11-8



Fig.11-7



Fig.11-10



Fig.13-14



—



—



Fig.11-12



Fig.11-48



Fig.11-49



Fig.11-16



Fig.26-3



Fig.11-40



Fig.11-29



Fig.10-12



Fig.21-4



Fig.21-2



Fig.23-3



Fig.20-4



Fig.20-8



Fig.20-7

図版 6



Fig.28-3

Fig.20-15

Fig.20-13



Fig.20-14

Fig.17-9

Fig.20-16



Fig.28-4



Fig.24-2



Fig.17-25

Fig.20-18



Fig.20-19



Fig.19-5

# 報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成12年度発掘調査報告							
卷次	17							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	瀬田哲夫							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 神奈川県鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2001年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村	遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
このまちいせき 米町遺跡	神奈川県鎌倉市 大町二丁目	204	245	北 緯 35°45'20"	東 経 139°45'20"	19990906 ～ 19991023	43.0	個人専用住宅 建設
取容遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
米町遺跡	中世都市遺跡	13世紀 ～ 14世紀	土坑 ピット 溝	中世陶磁器 かわらけ 石製品 木製品				

り ち こう じ あと  
理智光寺跡 (No.265)

二階堂字理智光寺750番1地点

## 例　　言

1. 本報は鎌倉市二階堂字理智光寺谷750番1地点における住宅建設に伴う発掘調査報告である。
2. 調査は平成11年10月21日から12月3日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査体制は以下のとおりである。

担当者 手塚直樹

調査員 野本賢二

調査補助員 渡辺美佐子

作業員 大戸追猛、河原龍雄、多田徳藏、星富蔵 ((社) 鎌倉市シルバー人材センター)

4. 本報の執筆は野本が行い、これを手塚、野本が編集した。
5. 資料整理は手塚、野本、渡辺と兼任佐枝、山上玉恵が行った。
6. 写真は、2面全景（ポール式高所撮影）を木村美代治が、その他の遺構を野本が、遺物を兼任が撮影した。
7. 本報に掲載した地形図は鎌倉市都市基本図1:2500、1:500を縮小して使用した。
8. 本報中の挿図縮尺は1:60である。
9. 報文中のPは柱穴を表す。
10. 遺物実測図の縮尺は基本的に3分の1である。それ以外は各々に縮尺を付した。
11. 出土遺物の情報は遺物観察表に記した。遺物実測図番号、遺物観察表番号、遺物写真番号はそれぞれ一致する。
12. 遺物写真の縮尺は不同である。
13. 図版1-1の古写真は鎌倉市立中央図書館所蔵のものを借用し、掲載した。
14. 図面、写真、遺物等の資料はすべて鎌倉市教育委員会が保管している。
15. 発掘調査及び出土品整理にあたっては、以下の諸氏・諸機関に御教示・御協力を賜った。(順不同・敬称略)

鈴木次郎 (神奈川県教育庁)、宮田真・馬淵和雄・福田誠・原廣志・菊川英政・瀬田哲夫・菊川泉・汐見一夫・川又隆央 (鎌倉考古学研究所)、岡陽一郎 (青山学院大学講師)、諸星真澄・佐藤仁彦 (逗子市教育委員会)、鎌倉市中央図書館、(社) 鎌倉市シルバー人材センター、(株) 高橋組、(株) 大国工務店

## 本文目次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	286
第2章 調査の経過	291
第3章 発見された遺構と遺物	292
第1節 1面	292
第2節 2面	295
第3節 3面	297
第4節 中世基盤層上面	299
第5節 中世以前の遺物	299
第4章 まとめ	300

## 挿図目次

図1 調査地点と周辺の遺跡（1）	287
図2 調査地点と周辺の遺跡（2）	288
図3 グリッド設定図	291
図4 1面遺構全図	292
図5 1面遺構	293
図6 1面出土遺物	294
図7 2面遺構全図	295
図8 2面出土遺物	296
図9 3面遺構全図	297
図10 3面出土遺物	298
図11 中世基盤層上面図	299
図12 中世基盤層上面遺物、中世以前遺物	300
図13 調査区壁土層堆積図	301

## 表目次

表1 周辺の遺跡一覧表	288	表2 遺物観察表	302
-------------	-----	----------	-----

## 図版目次

図版1 1. 遺跡周辺古写真	305	図版3 1. 2面泥岩列（西から）	307
2. 1面遺構確認状況（東から）	305	2. 3面全景（南から）	307
図版2 1. 1面P1確認状況（北東から）	306	3. 中世基盤層上面全景（南から）	307
2. 1面全景（南から）	306	図版4 遺物写真	308
3. 2面全景（東から）	306		

# 第1章 遺跡の位置と歴史的環境

遺跡は鎌倉市の北東部、鶴岡八幡宮から東に約1km行ったところにある。遺跡地一帯は、西に向けて大きく開折する谷の総称である大倉<sup>(註1)</sup>の内、二階堂の地にあり、古代においては鎌倉郡内の荏原郷<sup>(註2)</sup>に属していたと考えられる。

遺跡地周辺では中世以前の遺構、遺物の発見がわずかにある。縄文時代の遺物は、荏柄天神社前遺跡で諸磯b式・阿玉台式の土器片や打製石斧等が発見されている。弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺物は他地点でも若干量出土しているが<sup>(註3)</sup>、遺構は発見されていない。奈良・平安時代は、向佐柄遺跡（図1-9）<sup>(註4)</sup>で住居址が発見されたほか、他地点でも若干量であるが土師器や須恵器の破片が出土している<sup>(註5)</sup>。

本調査地点（図1-1）は二階堂字理智光寺谷に所在し、理智光寺が存在していたと伝える。周辺には理智光寺谷、二階堂川に架かる「理智光寺橋」というように、寺に関する地名が残っている<sup>(註6)</sup>。また、紅葉谷に入る通玄橋の辺りから護良親王墓のある崖際に「理智光寺道」があつたらしい<sup>(註7)</sup>。

理智光寺（院）は五峰山という山号で、真言密教系の寺院と伝えられる。理智光寺開山は泉涌寺第六世願行房憲静<sup>(註8)</sup>。「北条九代記」には延慶三年（1310）11月16日に延焼したという記事がみえる<sup>(註9)</sup>。淨光明寺には戦国期鎌倉代官であった大道寺氏が理智光寺を安堵した文書が残っている<sup>(註10)</sup>。また、延宝二年（1674）徳川光圀によって作成された「鎌倉日記」<sup>(註11)</sup>の「精阿弥陀」の項には以下の記述がなされている。

「五峰山理致光寺ト額アリ。覺園寺ノ未也。今ハ道心者ノ僧居之。（中略）願行ノ開基也。願行ノ大山ノ不動ヲ銘タル踏躡高ト云ハ、理致光寺ヨリ西ノ土手ノ内也ト云。」

ここで云う「精阿弥陀」とは堂のことだとわかる。日記が書かれた時期に、理智光寺関係の堂は「精阿弥陀」堂のみと考えられ、明治四年（1871）に廃絶、覺園寺に合併され<sup>(註12)</sup>、本尊と考えられる阿弥陀如来像と位牌が移されたと考えられる<sup>(註13)</sup>。寺域は理智光寺谷一帯と伝えられるが不明と言わざるを得ない。

近世において調査地周辺は田畠であったようでこの状況は近代まで続く<sup>(註14)</sup>。明治十五年作成の地図<sup>(註15)</sup>と現在の地図を比べると、二階堂川は現在よりも蛇行はしているものの流路の大幅な変更は無い。なお、二階堂大路は鎌倉宮の東で二階堂川方面に大きく膨らんでいたが、鎌倉宮脇から理智光寺橋付近まで真っ直ぐに変更されている。

昭和三十年代後半になると、調査地点南の理智光寺谷奥は大規模な宅地造成により地形が大きく改変され、現在の状況に至っている<sup>(註16)</sup>。

神奈川県遺跡台帳で指定される「理智光寺跡」内では今まで2ヵ所の調査が行われている。図1-2地点の理智光寺橋遺跡では2間四方の礎石列が発見されており、二階堂川を挟んだ北の永福寺に関連する遺構（鐘楼跡）との見解が示されている<sup>(註17)</sup>。図1-3地点は理智光寺谷開口部西の丘陵先端下にある。生活面は尾根先端をカットした上に築かれているようで、調査区南では岩盤面が発見されている。遺構は希薄で、石列遺構が発見されている<sup>(註18)</sup>。以上のほかに、調査地点東の山上に「理致光院」の長老が葬ったという「護良親王墓」があり<sup>(註19)</sup>、その麓に「理智光寺谷やぐら」があったが切り崩されたらしい<sup>(註20)</sup>。

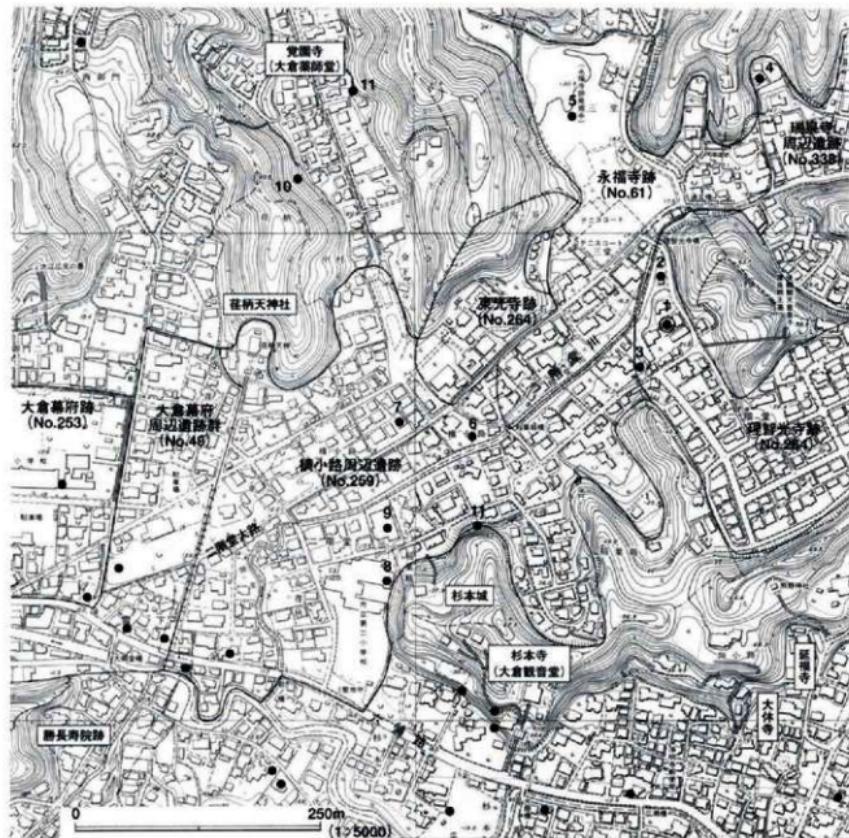
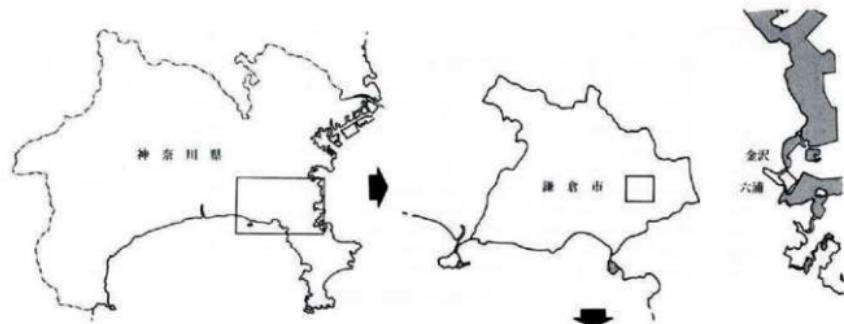


図1 調査地点と周辺の遺跡（1）

番号	神奈川県遺跡台帳番	遺跡名	所在地	種別	時代	調査年度	文献
1	265	理智光寺跡（本調査地点）	二階堂字理智光寺谷750番1	寺院	中世	1999年	
2	265	理智光寺跡（理智光寺橋遺跡）	二階堂字理智光寺谷749番1	寺院	中世	1973年	a
3	265	理智光寺跡	二階堂字稻葉越802番7	寺院	中世	1990年	b
4	338	瑞泉寺周辺遺跡	二階堂字紅葉ヶ谷653番3	寺院	中世	1998年	c
5	61	永福寺跡	二階堂字三堂	寺院	中世	1981年-1996年	d
6	259	横小路周辺遺跡	二階堂字横小路110番	都市	中世・近代	1994年	e
7	259	横小路周辺遺跡	二階堂字横小路93番11	都市	中世	1998年	f
8	259	横小路周辺遺跡（向佐柄遺跡）	二階堂字向佐柄880番	都市	中世	1982年	g
9	259	横小路周辺遺跡（向佐柄遺跡）	二階堂字向佐柄874番	都市	古代・中世	1982年	h
10	443	天王寺跡やぐら	二階堂字中村384番1	「やぐら」(1基)	中世	1994年	i
11	331	会下山西やぐら群	二階堂字会下312番	「やぐら」(2基)	中世	1986年	j

表1 周辺の遺跡一覧表

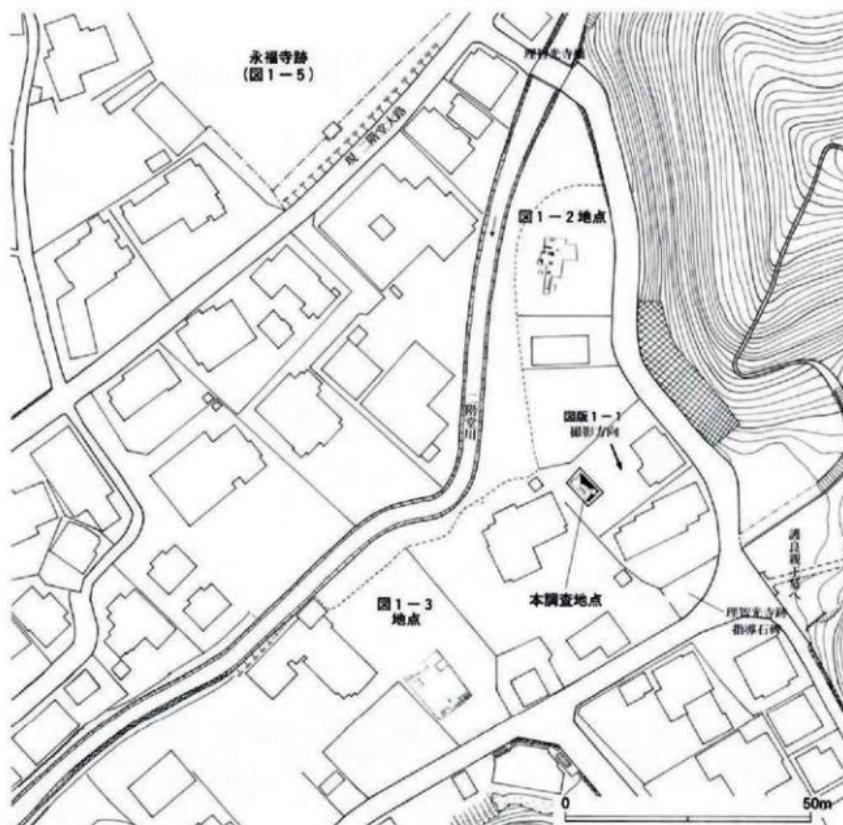


図2 調査地点と周辺の遺跡（2）

## 註

- 東は十二所、西は鶴岡八幡宮、北は瑞泉寺・覺園寺、南は滑川辺りが範囲とされる。鎌倉時代前期に御所があったと推定される地の北の山と杉本寺の山は大倉山とされ、薬師堂谷には覺園寺の前身である大倉薬師堂があつたとされる。また、杉本寺は大倉觀音堂、大慈寺は大倉新御堂と称し、「吾妻鏡」貞永元年(1232)10月22日条には五大尊堂(明王院)の地を「大倉奥地」と称している。現在地域名としてはほとんど使われていない。
  - この時期、鎌倉郡は現在の鎌倉市、横浜市栄区と戸塚区、泉区、金沢区、藤沢市、逗子市の一部が含まれる。鎌倉郡には『和名類聚抄』にみえる鎌倉郷、沼浜郷、埼立郷、佐草郷、大島郷のはか、正倉院御物の調査布図書にみえる方潮郷が存在した。
- 高柳光寿『鎌倉市史』總説編 吉川弘文館 1959年
- 横小路周辺遺跡(図1-7)で特異な形態の高坏の脚部が発見されている。
- 岡陽一郎・野本賢二『横小路周辺遺跡 二階堂字横小路地93番11地点』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15(第2分冊)鎌倉市教育委員会 1999年
- 9~10世紀の住居址7軒が発見されている。
- 馬淵和雄ほか『向佐柄遺跡発掘調査報告書』向佐柄遺跡発掘調査団編、鎌倉市教育委員会 1985年
- 菊川英政『古代鎌倉の様相—奈良・平安期における鎌倉郷中心城の変化—』『考古論叢神奈川』第6集 神奈川県考古学会 1997年
  - 昭和7年に鎌倉町青年団によって史跡指導碑が建てられたが、現在まで3回の移動を繰り返している。図版1-1の古写真を見ると、碑は最初に設置された場所にある。
- 『鎌倉の今昔』東地区篇(鎌倉中央図書館 1998年)理智光寺址の項参照。
- 南北の道は現在東に付け替えられている。
- 「としよりのなはなし」(鎌倉市教育委員会 1990年)二階堂の項参照。
- 順行は鎌倉において理智光寺のほか、大乗寺、安養院を開いたと伝えている。湖桃山大乗寺は文保元年(1317)に伽藍が興隆されたとみられ、永享元年(1429)頃まで淨明寺の湖桃谷にあったとされる。その後覺園寺境内に移り、明治四年(1871)庵寺となり覺園寺と合併した。安養院は祇園山長乗寺と号し、初め律宗。嘉禄元年(1225)北条政子が能日谷に建立したとされるが福瀬川の辺りという説もある。鎌倉幕府滅亡後、名越の普尊寺跡とされる現在の地に移り、淨土宗に改められたとい。
- 大森順雄『順行人伝—続元翁宗師の周辺—』『覺園寺と鎌倉律宗の研究』有隣堂 1991年
- 貫遂人・川端武風編『鎌倉廢寺事典』有隣堂 1980年
- 橋本初子『順行人上人憲靜について』『金澤文庫研究』第275号 神奈川県立金沢文庫 1986年
- 『自安養院失火、焼失所の、勝長寿院、法花堂、神官寺、淨光明寺、多宝寺、理智光院、相木、田代、二階堂、大門、花柄社、其外堂社不其数(後略)』
  - この当時は淨光明寺慈恩院持だったようである。
- 『淨光明寺文書』581・582『鎌倉市史』史料編第1 吉川弘文館 1958年
- 『鎌倉日記』『鎌倉市史』近世近代・紀行地誌編 吉川弘文館 1985年
  - 『國説鎌倉年表』鎌倉市 1989年
  - 阿弥陀如来像の制作年代は鎌倉時代末から南北朝時代で、表面には鎌倉地方独特の土紋装飾が施されている。位牌は順行と護良親王のものがあり、順行の牌面には「當寺開山勤鑑宗燈憲靜宗師」、裏面には「永仁三年(1295)乙未四月十七日示寂、字順行房諱憲靜」と書かれ、護良親王の牌面には「沒故兵部卿親王尊雲、建武二年七月廿三日」と書かれている。「新編鎌倉志」には、淨光明寺慈恩院にあったものを理智光寺にあらるべきものとして移したとの記述がある。
- 『新編鎌倉志・鎌倉攬勝考』大日本地誌大系21 雄山閣 1958年
- 山田泰弘『覺園寺の影刻(二)』『覺園寺』覺園寺 1975年
- 『鎌倉市文化財総合目録』書跡・絵画・彫刻・工芸編 鎌倉市教育委員会 1986年
- 白住軒一器子は『鎌倉記』(延宝八年(1680)成立)の中で「(前略)頭部が御首をひっさげて明き所へはしり出で見たりといふも思ひ合されき。打捨せし蔽とおぼしき所は見えずして皆由也。」と記述している。図版1-1の古写真は昭和初期頃、調査地点付近から南の理智光寺奥壁を望んだところであるが、谷口部は田畠であることがわかる。
- 『鎌倉記』『鎌倉市史』近世近代・紀行地誌編 吉川弘文館 1985年
- 『鎌倉の今昔』東地区篇(鎌倉中央図書館 1998年)理智光寺址の項参照。

15. 「雪ノ下」「明治十五年測量迅速 図」參謀本部陸軍部測量部、株式会社日本測量調査部複製 1974年
16. 開発前の写真が「鎌倉の今昔」東地区篇に載っている。
17. 松尾宣方「理智光寺橋遺跡」「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報」鎌倉市教育委員会 1983年
18. 大河内勉・瀬田哲夫「理智光寺跡」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」7 鎌倉市教育委員会 1991年
19. 「鎌倉日記」(延宝二年(1974)作成)には「此山上ニ大塔ノ宮ノ石塔有。」との記述があるが、現在の石塔と同じものは不明である。護良親王墓と伝えるものは鎌倉市内に本地点と妙本寺裏山上の2ヶ所ある。どちらも宝篋印塔を寄せ集めたものである。なお明治十一年に、二階堂のものが陵墓と定められた。現在、宮内庁の管轄である。「遂ニ有テ理致光院ノ長老、斯ル御事ト承及候。トテ葬禮ノ御事取扱ミ給ヘリ。」「太平記」(巻13 日本書紀文学大系 1961年)
- 「建武二年七月二十二日・竺仙和尚語録」「大日本史料」六ノ二 東京帝国大学 1901年
20. 報告は1穴のみである。「やぐら」は幅215cmで、玄室中央に直径100cm、深さ70cmの丸穴が穿たれ、その中に凝灰岩切石で蓋をされた常滑窯の大甕が発見されている。その直上には室町時代前半期の五輪塔が置かれ、大甕内には土葬人骨と水晶製舍利瓶が納まっていたという。

赤星直忠「室町中期に於ける一帯法に就いて」『考古学雑誌』第33卷第4号 1944年

#### 参考文献

白井水二編『鎌倉事典』東京堂出版 1992年

『鎌倉市史』社寺編 吉川弘文館 1959年

一覧表文献

- a. 訂17文献
- b. 訂18文献
- c. 福田誠・神山晶子「瑞泉寺周辺遺跡」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」15(第2分冊)鎌倉市教育委員会 1999年
- d. 福田誠ほか「史跡永福寺跡－昭和56年度－」～「永福寺跡－平成8年度－」鎌倉市教育委員会 1982年～1997年
- e. 宗臺秀明「横小路周辺遺跡 二階堂字横小路110番3地点－永福寺周辺遺跡の調査－」横小路周辺遺跡発掘調査団 1996年
- f. 訂3文献
- g. h. 訂4文献
- i. 田代郁夫・細実「天王寺跡やぐら」「中世石窟造構の調査Ⅱ－鎌倉・六浦所在の「やぐら」群」東国歴史考古学研究所 1998年
- j. 田代郁夫「会山西やぐら発掘調査報告書」二階堂会山西やぐら発掘調査団 1987年

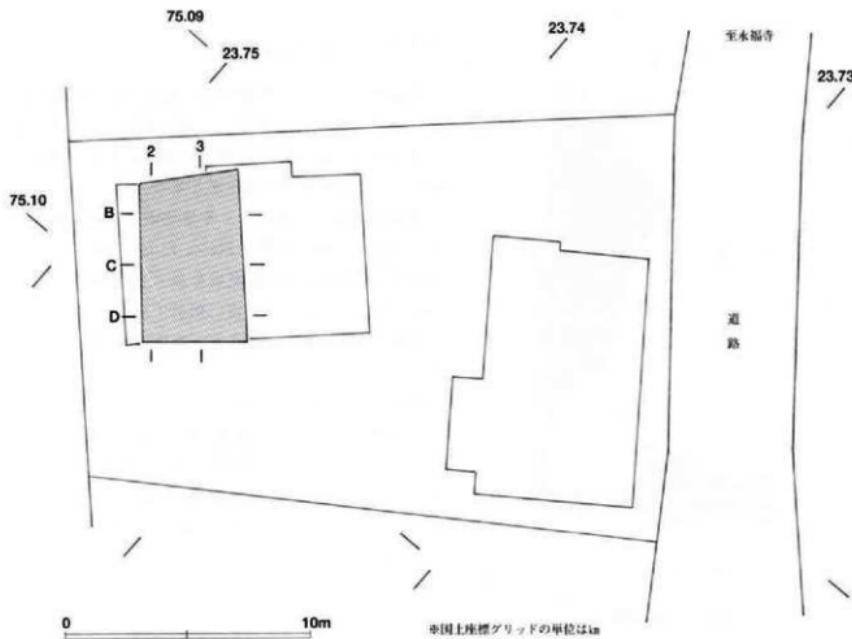


図3 グリッド設定図

## 第2章 調査の経過

平成11年7月に鎌倉市教育委員会による試掘調査の後、平成11年10月21日から発掘調査が行われた。試掘の結果から遺構面5枚が確認されたが、調査期間の関係上、上から2枚目の遺構面（調査時1面）以下の調査となった。また、調査区は残土を場内処理をする関係上、図3のように狭めた。なお、調査は地表下約140cmまでを重機で除去した以降、ベルトコンベアを使用せず、すべて人力によった。調査面積は約24m<sup>2</sup>。以下、調査の過程を記す。

10月20日	機材搬入	11月15日	2 b面全景写真撮影
10月21日	表土掘削	11月17日	3面精査
10月22日	調査開始、グリッド設定、1面精査	11月22日	3面全景写真撮影、平面実測
10月26日	1面平面実測	11月26日	中世基盤層上面全景写真撮影
10月29日	1面全景写真撮影	11月30日	調査区壁土層堆積図作成
11月5日	2 a面全景写真撮影	12月3日	撤収
11月11日	井戸（1面）掘り下げ		

### 第3章 発見された遺構と遺物

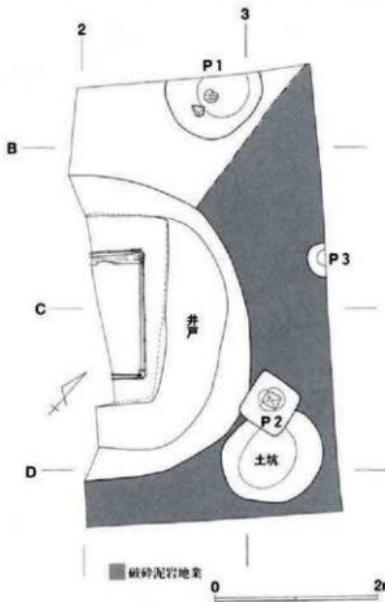


図4 1面遺構全図

北160cm、横桟の間隔（横桟水平中心）は50cmを測る<sup>(注2)</sup>。井側は隅柱横桟構造で、隅柱に納穴が穿たれる。隅柱の上面は鋸で切断されているようである。側板である縦板の一部が横桟の中心（水平）で別れているのを確認しており、おそらくすべて同じと思われる。遺構（井戸枠）主軸方位はN-34°Wである。覆土の上層（第1・2層）には大型（40cm前後）の泥岩塊が充填され、最大で60cm大のものがあった。下層（第3層）も上層に比べ、密ではないが中型（20cm前後）の泥岩塊が含まれていた。

遺物は計153点出土しており、内訳はかわらけ100点（手づくね成形2、ロクロ成形98）、舶載陶磁器4点（青磁蓮弁文碗1、白磁口兀皿1、白磁皿1、青白磁皿1）、常滑窯製品21点（I類鉢1、II類鉢1、甕19）、产地不明小壺1点、瓦類19点（軒平瓦1、軒丸瓦2、平瓦10、丸瓦6）、スラグ1点、銅錢2点、木製品3点（箸1、不明2）と種子（胡桃）1点、獸骨1点である。

図6-1はロクロ成形の小型かわらけ。2・3は軒丸瓦。2は複弁八蓮華文で永福寺Ⅰ期のY A I 01類に分類される<sup>(注3)</sup>。3は右廻りの三巴文で珠文を伴わない。外縁は丁寧なハラケズリがなされている。永福寺Ⅰ期のY A II 01類に分類される<sup>(注4)</sup>。4は銅錢で、初鑄年が北宋1107年の大觀通寶。

#### 柱穴（図5）

##### P 1

井戸の北東（A-2グリッド）に位置し、調査区外北に広がるため全容不明である。平面形は梢円を呈する。規模は長軸118cm、遺構面からの深さ106cmを測る。1面精査時、掘り方中央の柱部分上は空洞化しており、その直下に柱が残っていた。柱は高さ43cm、径21cmを測り、平面形はやや梢円である。

#### 第1節 1面（図4）

調査地点における実際の第1面は地表下120cmの面（海拔19.20m）であるが、調査期間の関係上、地表下160cmの面（海拔18.70～18.80m）以下を調査対象とし、これを本報では1面とする。

1面は破碎した泥岩による地業面である。地業は泥岩を細かく碎いて粘土状にした土（図13第4層）を敷き、その上に破碎泥岩を載せ突き固めている（図13第4層）。面はやや南に傾斜する。

遺構は井戸1基、土坑1基、柱穴3口を発見した。  
井戸（図5）

調査区中央西壁際（B・C-2グリッド）に位置し、遺構の半分以上は調査区外の西に広がる。調査区壁の崩落の危険性から完掘はしていないため全容は不明である。調査区西壁の堆積状況を見ると、1面より上の海拔19.0mの面から掘りこまれている。1面遺構精査時、一つの遺構として捉えたが、図5第7～11層は別遺構の可能性がある。規模は南北の掘り方幅290cm、深さは240cm以上<sup>(注1)</sup>、木枠幅は南北

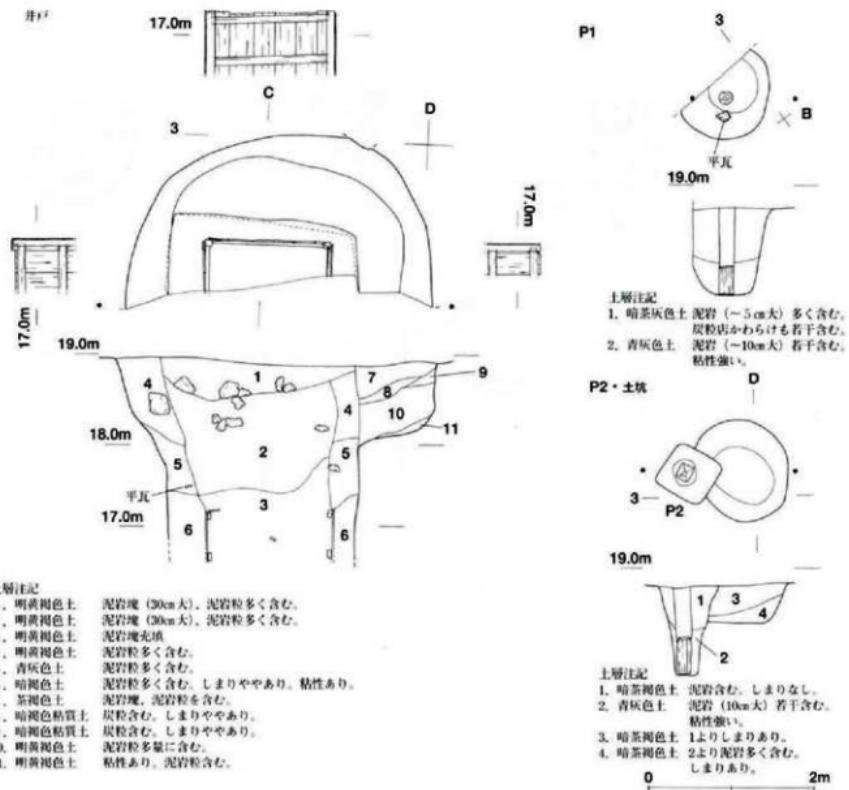


図5 1面造構

柱の表面には樹皮がそのまま残っており、接地面をやや斜めにカットしている。樹種は同定分析していないものの表面観察からおそらくマツ属と思われる。

遺物は計76点出土しており、内訳はかわらけ64点（手づくね成形3、ロクロ成形61）、白磁口元皿1点、青白磁梅瓶1点、常滑窯製品3点（鉢1、甕2）、瓦類（平瓦）6点、釘1点である。

図6-5はロクロ成形の小型かわらけ。6は白磁口元皿の口縁部。7は青白磁梅瓶の底部。8は常滑窯片口鉢（I類）の底部。9は平瓦で四面縦横のハケ目、凸面縫目が顕著に残る。側面は丁寧なヘラケズリである。

#### P 2

井戸の南東付近（C-D-3グリッド）に位置し、井戸・土坑1を切る。平面形は隅丸方形を呈する。規模は一边63cm、造構面からの深さ108cmを測る。P1同様、1面造構精査時に掘り方中央の柱部分上方は空洞化しており、その直下に柱が残っていた。柱は断面角型で、長さ19×16cmで、高さ30cmを測る。柱下部は角を斜めにカットしている。

遺物は計2点出土しており、内訳はかわらけ（手づくね成形）1点、瓦類（丸瓦）2点である。

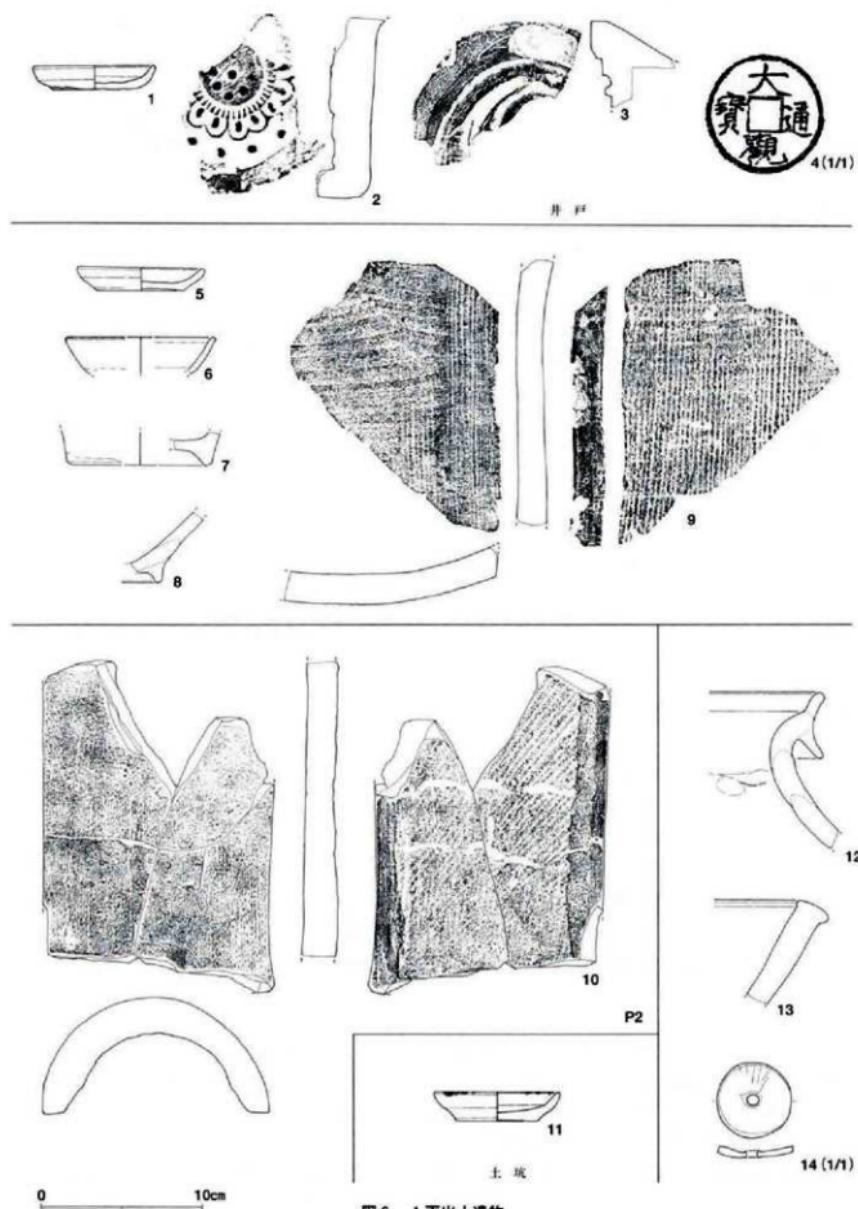


図6 1面出土遺物

図6-10は丸瓦で、1面上にあった破片と接合した。凸面は繩目叩きの後、ヘラナデ調整がなされ、凹面はハケ目調整が施され、模骨痕が顕著である。

### P 3

調査区東壁際（B-3グリッド）に位置する。半分検出したのみで全容不明である。平面形は梢円を呈する。規模径42cm、遺構面からの深さ15cmを測る。遺物は出土しなかった。

### 土坑（図5）

井戸の南東付近（C-D-2・3グリッド）に位置し、P2に切られる。平面形は梢円を呈する。規模は長軸128cm、短軸113cm、遺構面からの深さ47cmを測る。性格は不明である。

遺物は計34点出土しており、内訳はかわらけ28点（手づくね成形21、ロクロ成形7）、常滑窯甕3点、瓦器碗1点、瓦類2点（平瓦1、丸瓦1）である。

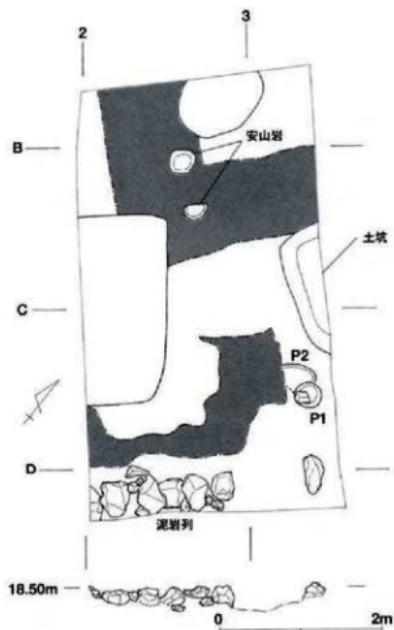
図6-11はロクロ成形の小型かわらけ。灯明皿として使われたらしく、口縁部に煤が付着する。

### 1面上出土遺物

遺物は計119点出土しており、内訳はかわらけ75点（手づくね成形1、ロクロ成形74）、青磁碗2点、常滑窯甕21点、瓦質火鉢1点、瓦類14点（軒丸1、平瓦11、丸瓦2）、釘2点、用途不明石製品1点、用途不明骨製品1点、壁土2点である。

図6-12は常滑窯甕の口縁部片。13は土器質火鉢の口縁部片。14は骨製品で径1.5cm、厚さ0.5cmを測り、中央に0.2cmの孔を空ける。用途は不明である。

## 第2節 2面（図7）



1面を掘り下げるに約20~60cm下（海拔18.10~18.70m）で2面を検出する。

2面は部分的にではあるが破碎泥岩による地業がなされているが、調査区南半分のものは強固なものであるのに対し、調査区北半分のものは疎らで弱い。

遺構は柱穴基、土坑1基、泥岩列1列のほか安山岩2個を見た。

### 泥岩列（図8）

調査区南側で、泥岩塊を東西方向に並べた石列が発見された。泥岩塊は大きさ40~50cmを測る。1面土坑に一部壊されている。この泥岩列を介して北に落ち、泥岩地業面に続くようである。

### 土坑

調査区東（B-C-3グリッド）に位置する。遺構面からの深さ20cmを測る。半分検出したのみで全容不明である。

遺物は平瓦（凸面繩目叩き）が出土したが、図示し得るものではない。

### 柱穴

### P 1

図7 2面遺構全図

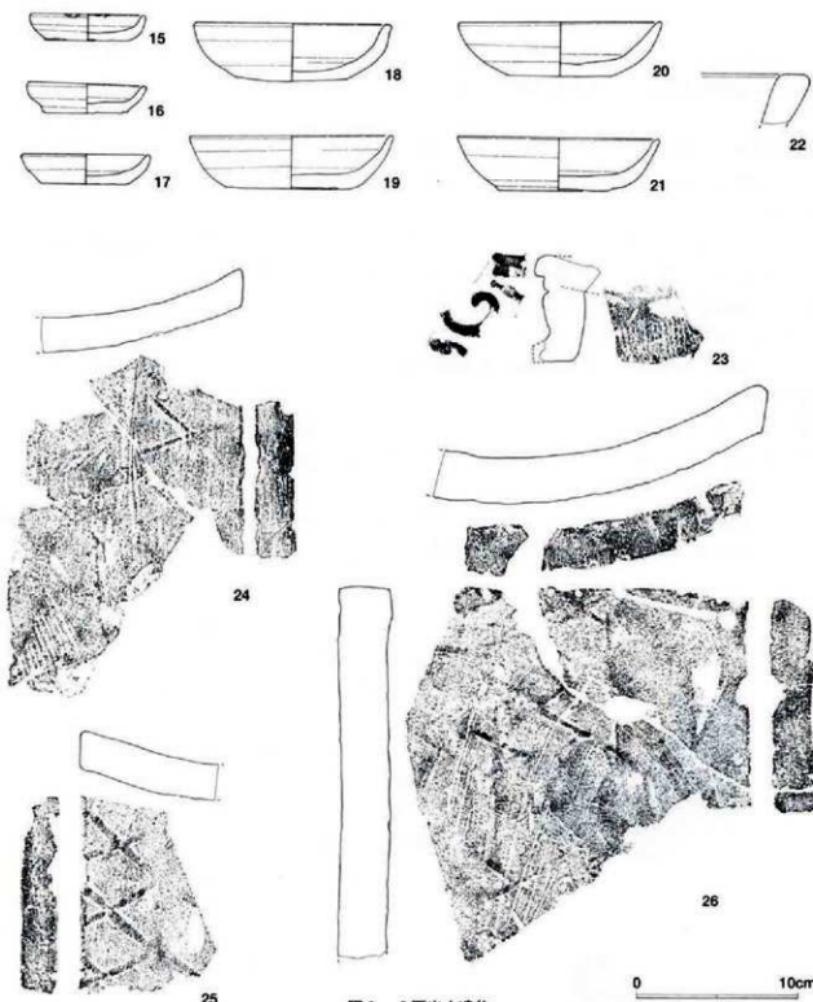


図8 2面出土遺物

調査区東（C-3グリッド）に位置する。P2を切る。平面形は円形を呈する。規模は径32cm、遺構面からの深さ20cmを測る。遺構内には20cm大の泥岩が据えられていた。出土遺物は皆無である。

P2

調査区東（C-3グリッド）に位置する。P1を切られる。平面形は梢円形を呈する。規模径60cm、遺構面からの深さ4cmを測る。出土遺物は皆無である。

#### 2面上出土遺物（図8）

遺物は944点出土した。内訳はかわらけ885点（手づくね成形9、ロクロ成形876）青磁2点（蓮弁文

碗1、鉢1)、青白磁皿3点、緑釉盤1点、褐釉壺1点、瀬戸窯瓶子1点、常滑窯甕23点、产地不明白鉢2点、白かわらけ1点、土器質火鉢1点、瓦21点(軒平1、軒丸1、平14、丸5)、釘2点のほかスラグ1点である。15~21はロクロ成形のかわらけ。22は土器質火鉢の口縁部片。23~26は瓦類。23は軒平瓦の瓦当部片で蓮華文。永福寺YN I-01類に相当する。24~26は平瓦。凸面格子叩きが施される。

### 第3節 3面(図9)

2面から20~30cm掘り下げる、3面を検出する(海拔18.0~18.50m)。

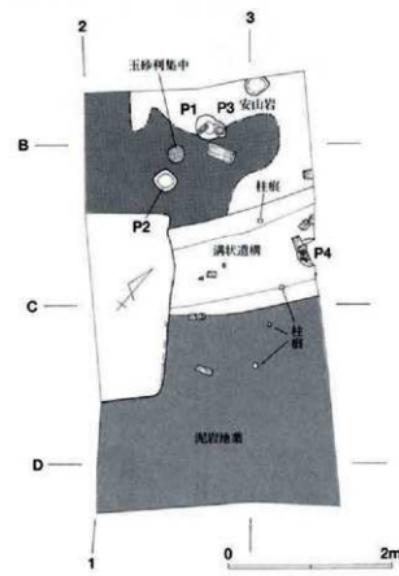
調査区全体に地業面が確認できた。調査区中央を東西に走る溝状構が分断し、溝の南は中世基盤層(図13-27層)を掘りくぼめ、大型の泥岩塊(60cm前後)で地業したあと(図13-25・26層)、さらに明黄褐色粘土による地業(図13-13層)をしている。

溝の北は、中世基盤層を若干掘りくぼめ、破碎泥岩地業面を造っている。間層には腐植土層と砂まりの青灰色土があり、この中に、かわらけ、木製品等多量の遺物が含まれていた。

遺構は溝状遺構、柱穴4口のほか、杭、礎板、安山岩、玉砂利集中部が発見された。

#### 溝状遺構

調査区中央(B-2・3グリッド)に位置する。溝状遺構は上幅136cm、下幅76cm、深さ58cmを測る。調査区東壁際の遺構内に1ヶ所柱穴が掘り込まれる。柱穴は上場径50cm、下場径36cm、深さ64cmを測る。柱穴内には礎板が敷かれ、その上に柱状の部材が置かれていた。部材は高60cm、幅9cm×7.5cmを数え、上端23cmを二股に加工している。この柱穴は溝に伴うものと考えらるが性格は不明である。



遺物はかわらけ162点(手づくね成形31、ロクロ成形131)、常滑窯甕3点、土器質火鉢1点、瓦類14点(軒丸瓦2、平瓦6点、丸瓦6点)、釘1点、箸8点と壁土1点が出土したが、図示し得るものはない。

#### 玉砂利集中部

調査区中央(B-2グリッド)に位置する。1~3cm大の玉砂利が径20cmの広さで集中していた。性格は不明である。

以上のほか柱穴3口、礎石と考えられる安山岩(径30cm)、礎板、柱痕が発見されたが、規格性は見出せなかった。

P1からロクロ成形のかわらけ5点が出土している。図11-27はP1出土のロクロ成形かわらけ。

#### 3面出土遺物(図11)

遺物は789点出土した。内訳はかわらけ656点(手づくね成形33、ロクロ成形623)、青磁蓮弁文碗4点、白磁皿1点、青白磁皿4点(梅瓶1、皿3)、褐釉2点(壺1、瓶子1)、瀬戸窯皿1点、常滑窯製品39点

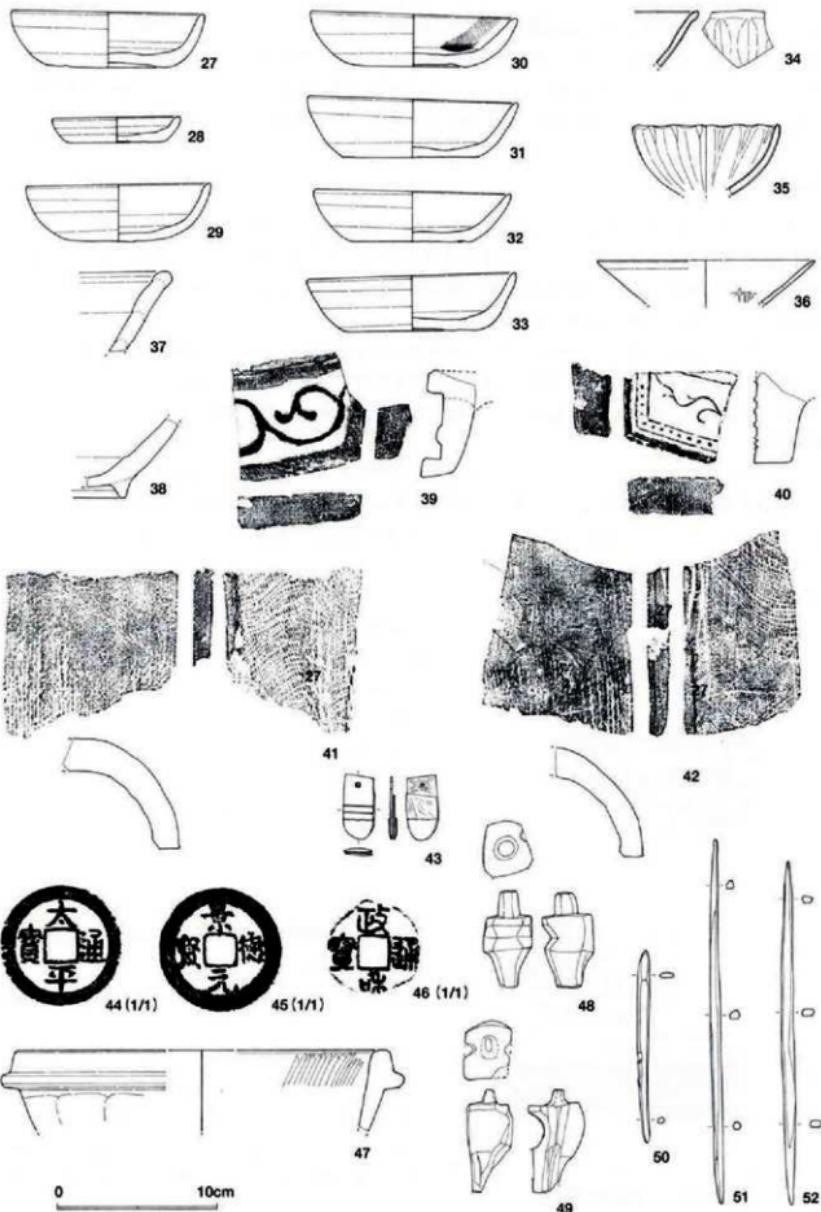


図10 3面出土遺物

(I類鉢12、II類鉢1、甕26点)、白かわらけ2点、土器質火鉢1点、瓦類59点(軒平2、軒丸1、平35、丸20、鬼1)、銅鏡3点、釘1点、仕上砥1点のほかスラグ1点である。

28~33はロクロ成形のかわらけ。34・35は青磁。34は蓮弁文碗の口縁部片。35は百合口小碗で、割れ口には補修痕と考えられる黄漆が付着する。36は白磁碗で内底面に雷文が型押しされる。37・38は常滑窯片口鉢(I類)で、37は口縁部片、38は底部片。39~42は瓦類。39・40は軒平瓦の瓦当部片で蓮華文をもつ。39は永福手背YNI-01C、40は永福寺YNI-04と同范である。41・42は丸瓦。43は骨製の刀の柄で、黒漆が塗られている。44~46は銅鏡。44は太平通寶、45は景德元寶、46は政和通寶。47は滑石製鍋。48・49は黒漆塗り木胎の膳脚である。48は角状、49は弧状の抉りが入る。50~52は木製品で、50はへら、51・52は箸である。

#### 第4節 中世基盤層上面(図11)

第3面を構成する泥岩地業層を取り除くと中世基盤層が表れる。上面は東西溝や、第3面によって削られており、最大高低差は60cmを測る。調査区南の暗褐色粘質土層(図13-26)から厚手の手づくね成形のかわらけが若干量出土した。

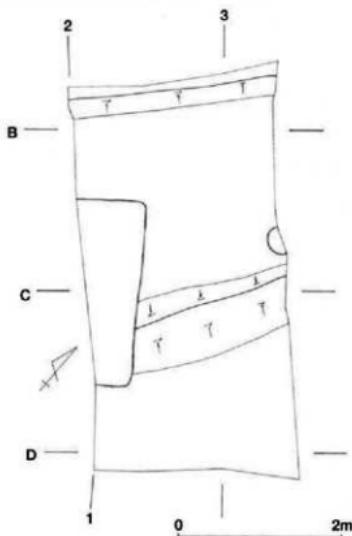


図11 中世基盤層上面図

#### 中世基盤層上出土遺物(図12)

中世基盤層上出土の遺物は274点である。内訳はかわらけ265点(手づくね成形227、ロクロ成形5、不明33)、白かわらけ1点、平瓦(凸連繩目叩き)5点、輪羽口1点、木製品(箸)2点である。かわらけは手づくね成形のものがほとんどを占める。手づくね成形のものはすべて器肉が厚く、薄手のものは1点も出土していない。

53~60は手づくね成形のかわらけ。61・62は箸。

#### 第5節 中世以前の遺物(図12)

中世基盤層上面を精査中、若干量の土師器の破片が出土した。また、中世基盤層(暗褐色粘質土)中に、細かいながらも土師器の破片が含まれていた。総計50点で、内訳は甕49点、罐1点である。ほとんどは古墳時代前期の所産と考えられる。

図13-63・64は土師器の甕の口縁部片。両方ともに内面ハケ調整がなされている。多量の石粒を含む。63は

国示した以外に同一個体と考えられる破片があり、輪積みが顕著である。本地点において遺構は確認できなかったが、本地点周辺に当該期の遺構が存在する可能性は高い。

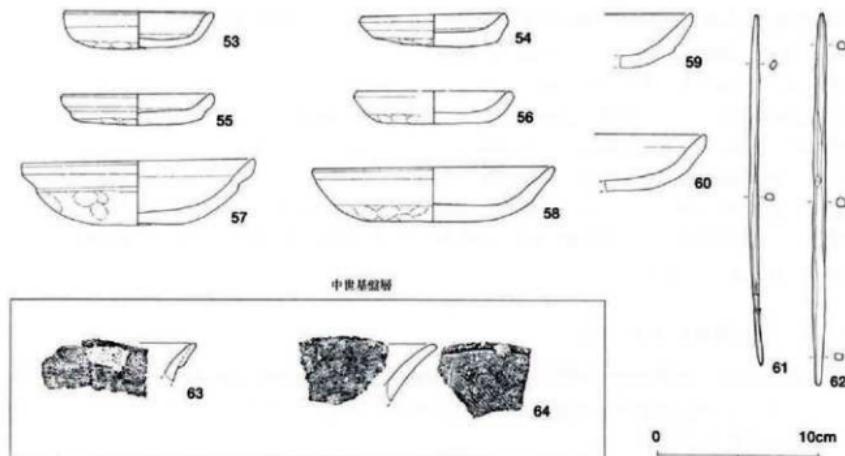


図12 中世基盤層上面遺物、中世以前遺物

註

1. 井戸底は、ピンホールで突いた感触で深さ330cm（海拔15.70m）となる。
2. 井筒構造が多少違うものの、「永福寺跡（二階堂字獅子舞603番1地点）」で一边160cmを測る井筒を持つ井戸が発見されており、本調査地点と併せて鎌倉市内において当該期の隅柱横桟型の井枡では最大である。
3. 福田誠・菊川泉・神山晶子「永福寺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13（第1分冊）鎌倉市教育委員会 1997年
4. 註3と同じ。

#### 参考文献

細川「鎌倉市内検出の井戸－基礎資料として－」『中世都市研究』第2号 中世都市研究同人会 1992年

## 第4章 まとめ

本調査は「理智光寺跡」（神奈川県遺跡台帳No.265の範囲内）における3次目の調査となった。調査区は狭いながらも、「理智光寺跡」内において初めて中世基盤層までの調査が及んだことは、理智光寺の寺域が依然として不明である現状において、当該地域の歴史研究に寄与するものであった。

前章において調査成果を述べたが、中世の生活面3面が確認された。が、遺物を見ると時期に大きな差はなく、概ね鎌倉時代中期から後期にかけての時期と考えられる。

なお、3面下の遺構は3面造成時に破壊されたためか不明である。

本調査地点から仏具等寺院の存在を示す遺物は発見されなかったが、多くの瓦類が発見されたことから、本地点が寺院の境内である可能性は高いと言える。やはり、理智光寺の境内になるのであろうか。地形からみると理智光寺の北限は二階堂川と考えられる。本地点と図1-2地点の遺構軸にかなりのズレが生じている。これは地形（東側の尾根及び二階堂川）に起因するものと考えたい。

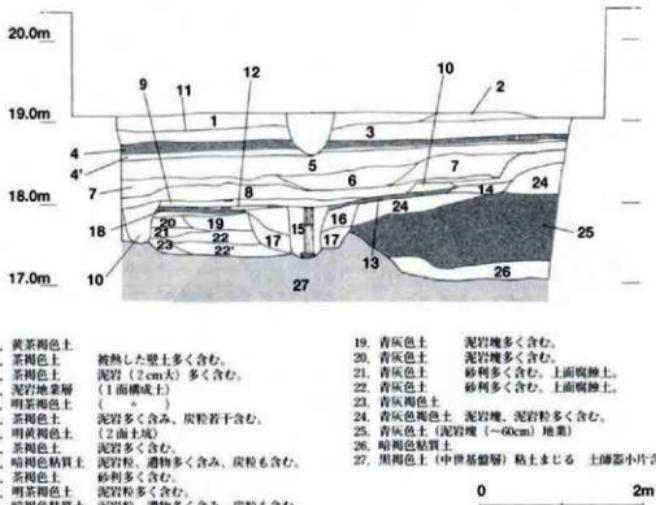


図13 調査区壁土層堆積図

団体番号	遺物番号	種 別	計測値(単位はcm・基盤は復元値)	観察事項
団6	1	かわらけ	口径7.4 底径5.2 器高1.45	成形:ロクロ 外底:回転糸切り、スノコ痕 色調:淡褐色 胎土:灰白色 色調:黒灰色 遷文の回りに珠文を施す
	2	軒丸瓦	-	胎土:灰白色 色調:黒灰色 三巴文
	3	軒丸瓦	-	補年:北宋1107年 書体:楷書
	4	銅鏡(大鏡通寶)	-	-
	5	かわらけ	口径7.6 底径5.1 器高1.4	成形:ロクロ 外底:回転糸切り、スノコ痕 色調:淡褐色 素地色調:灰白色 色調:青灰色 半透明 外面下部から外底面は 露む
	6	白磁 口丸瓶	口径(8.9)	素地色調:灰白色 色調:青灰色 半透明 外面下部から外底面は 露む
	7	青白磁 梅瓶	底径(8.3)	胎土色調:灰白色 色調:水色透明
	8	青白磁 方瓶(1個)	-	胎土色調:灰褐色 内底面に降灰釉 内面は削減
	9	平瓦	厚さ1.8	胎土色調:黒灰色 開口部横のハケ目、凸面側叩き目、側面ヘラ ケズリ
	10	丸瓦	筒部厚140 筒部厚3.21	胎土色調:灰白色 西面布目、ハケ目、凸面側叩き目後へラナデ
	11	かわらけ 灯明皿	口径7.8 底径5.0 器高1.8	成形:ロクロ 外底:回転糸切り、スノコ痕 色調:淡褐色 口縁部にテー ル痕 内外面とも剥離
	12	青白窓 瓦	-	胎土色調:暗灰色 窓表色調:茶褐色 縁帯から底部まで降灰釉
	13	瓦質大鉢	-	胎土色調:暗灰色
	14	骨製品 用途不明	径1.5 孔径0.2 高さ1.5	発見:中央穿孔
団8	15	かわらけ 灯明皿	口径7.2 底径5.2 器高1.6	成形:ロクロ 外底:回転糸切り、スノコ痕 色調:赤褐色 口縁部にテー ル痕
	16	かわらけ	口径7.1 底径5.2 器高1.8	成形:ロクロ 外底:回転糸切り、スノコ痕 色調:淡褐色
	17	かわらけ	口径7.8 底径5.2 器高1.85	成形:ロクロ 外底:回転糸切り、スノコ痕 色調:淡赤褐色
	18	かわらけ	口径11.9 底径6.8 器高3.55	成形:ロクロ 外底:回転糸切り、スノコ痕 色調:褐色
	19	かわらけ	口径12.3 底径7.6 器高3.3	成形:ロクロ 外底:回転糸切り、スノコ痕 色調:褐色
	20	かわらけ	口径12.6 底径6.4 器高3.3	成形:ロクロ 外底:回転糸切り、スノコ痕 色調:褐色
	21	かわらけ	口径12.2 底径6.9 器高3.3	成形:ロクロ 外底:回転糸切り、スノコ痕 色調:褐色
	22	土器質 大鉢	-	胎土色調:灰色
	23	軒丸瓦	-	胎土色調:暗灰色 瓦当部は唐草文 瓦当裏は叩き目
	24	平瓦	厚さ1.8	胎土色調:灰色 西面はハラナデ後ナデ 凸面は斜め格子叩き目 幢面はヘラケ ズリ
	25	平瓦	厚さ2.4	胎土色調:暗灰色 西面はヘラナデ 収面は斜め格子叩き目 幢面はヘラケ ズリ
	26	平瓦	厚さ3.0	胎土色調:灰色 西面はヘラナデ ナデ 収面は斜め格子叩き目 幢面はヘ ラケズリ
団10	27	かわらけ	口径7.7 底径5.8 器高1.5	成形:ロクロ 外底:回転糸切り、スノコ痕 色調:淡茶褐色
	28	かわらけ	口径11.2 底径6.2 器高3.5	成形:ロクロ 外底:回転糸切り、スノコ痕 色調:淡褐色
	29	かわらけ	口径11.8 底径7.4 器高3.45	成形:ロクロ 外底:回転糸切り、スノコ痕 色調:淡赤褐色
	30	かわらけ	口径12.5 底径6.4 器高3.3	成形:ロクロ 外底:回転糸切り、スノコ痕 色調:茶褐色 口縁部にテー ル痕(灯明皿として使用)
	31	かわらけ	口径11.9 底径7.2 器高3.15	成形:ロクロ 外底:回転糸切り、スノコ痕 色調:褐色
	32	かわらけ	口径12.8 底径8.2 器高3.5	成形:ロクロ 外底:回転糸切り、スノコ痕 色調:褐色
	33	かわらけ	口径12.6 底径7.7 器高3.4	成形:ロクロ 外底:回転糸切り、スノコ痕 色調:褐色
	34	青磁 薄井文鏡	-	素地色調:灰色 色調:褐色
	35	青磁 百合口小瓶	口径(9.0)	素地色調:暗灰色 色調:灰褐色 不透明 割れ口に漆による補修痕
	36	白磁 瓶	口径(13.2)	素地色調:灰白色 色調:水色透明 内底面に雷文壓印し
	37	青白磁 方瓶(1個)	-	胎土色調:灰色
	38	青白磁 方瓶(1個)	-	胎土色調:暗灰色
	39	軒平瓦	-	胎土:灰色 色調:黑灰色
	40	軒平瓦	-	胎土色調:黑灰色
団12	41	丸瓦	厚さ2.0	胎土色調:暗褐色 凸面側叩き目後ナデ 四面布目 幢面ヘラケズリ
	42	丸瓦	厚さ1.75	胎土色調:灰色 凸面側叩き目後ナデ 四面布目 幢面ヘラケズリ
	43	骨製品 刀柄	長4.0 幅1.9 最大厚0.3	径0.2cmの目釘穴1個 柄端3本両面とも里塗り
	44	銅鏡(太平通寶)	-	補年:北宋976年 書体:楷書
	45	銅鏡(景祐元宝)	-	補年:北宋1001年 書体:楷書
	46	銅鏡(政和通寶)	-	補年:北宋1111年 書体:篆書
	47	滑石器 瓶	口径(22.6) 瓶部厚(24.7)	-
	48	漆塗木製品 瓶	-	-
	49	漆塗木製品 瓶	-	-
	50	木製品 へら	長11.9 最大幅0.8	-
	51	木製品 署	長22.5 最大幅0.6	-
	52	木製品 署	長21.3 最大幅0.7	-
	53	かわらけ	口径8.8 器高2.25	成形:手づくね 色調:褐色
	54	かわらけ	口径8.7 器高1.9	成形:手づくね 色調:褐色
	55	かわらけ	口径9.1 器高1.9	成形:手づくね 色調:淡茶褐色
	56	かわらけ	口径9.3 器高2.0	成形:手づくね 色調:褐色
	57	かわらけ	口径14.0 器高3.9	成形:手づくね 色調:淡茶褐色
	58	かわらけ	口径14.5 器高3.3	成形:手づくね 色調:淡茶褐色
	59	かわらけ	-	成形:手づくね 色調:褐色
	60	かわらけ	-	成形:手づくね 色調:褐色
	61	木製品 署	長21.2 最大幅0.53	-
	62	木製品 署	長22.6 最大幅0.73	輪郭板 口縁内面ハケ目調整 色調:淡褐色
	63	土師器 瓶	-	口縁部内面ハケ目調整 色調:淡褐色
	64	土師器 瓶	-	口縁部内面ハケ目調整 色調:淡褐色

表2 遺物観察表

# 写 真 図 版



▲1. 遺跡周辺古写真

(昭和初期頃、調査地点付近から理智光寺谷方面を撮影したもの。左手に護良親王墓入口の門、中央に指導石碑がある。)



▲2. 1面遺構確認状況（東から）

図版2



▲1. 1面P1確認状況（北東から）



▲2. 1面全景（南から）



▲3. 2面全景（東から）



▲1. 2面泥岩列（西から）

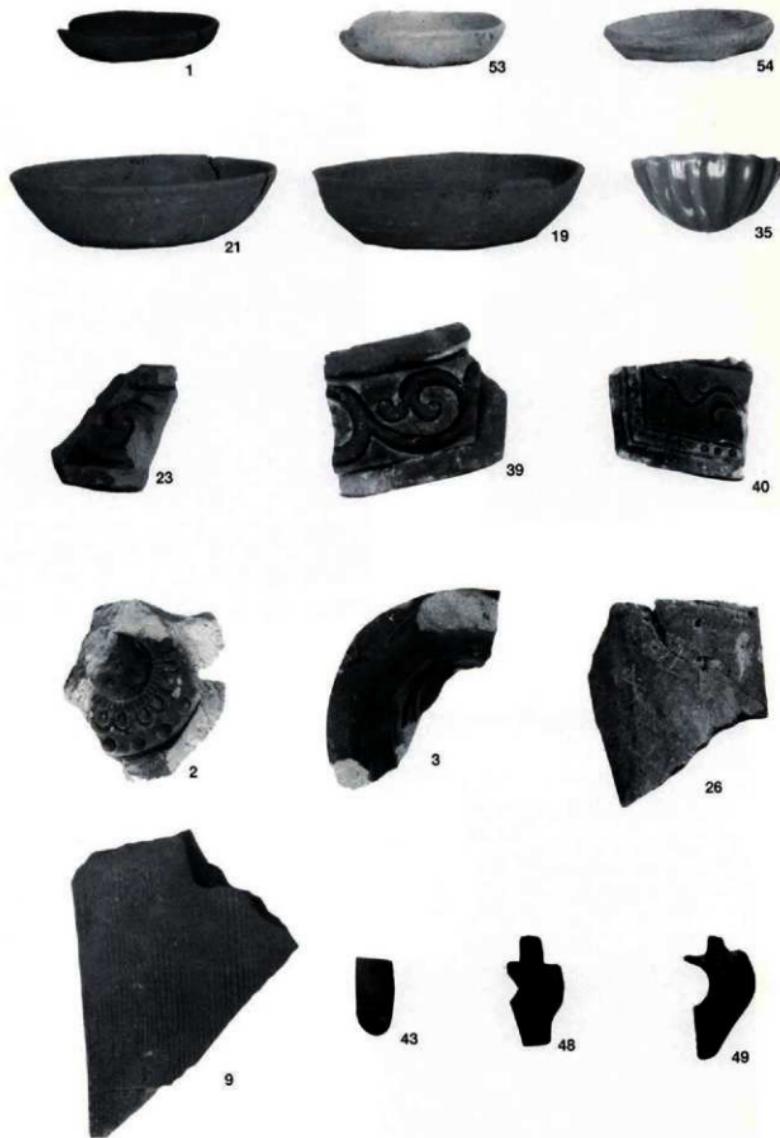
▼2. 3面全景（南から）



▼3. 中世基盤上面全景（南から）



図版 4



# 報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成12年度発掘調査報告							
卷次	17							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	手塚直樹 野本賢二							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 神奈川県鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2001年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド 市町村	北 緯 遺跡番号	東 經	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因	
りちこうじあと 理智光寺跡	神奈川県鎌倉市 三階堂字理智光 寺750番1地点	204	265	° ° ° ° ° ° ° °	19991021 19991203	24.0	個人専用住宅	
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
理智光寺跡	寺院	鎌倉時代 室町時代	井戸 泥岩列	かわらけ 船載陶磁器 国産陶器 金属製品 石製品 土師器				

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17

平成12年度 発掘調査報告(第1分冊)

発行日 平成13年3月31日

編集発行 鎌倉市教育委員会

印刷 神奈川印刷株式会社